
虹の見える場所、空に架かる橋

デン助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虹の見える場所、空に架かる橋

【Nコード】

N0502W

【作者名】

デン助

【あらすじ】

剣の家系に生まれた西村誠はある日、凶悪殺人事件の片鱗を目の当たりにする。アルバイト先が襲われた時、ジャック・ハンターが何であるのかを理解する。頻発する突然死現象 変質していく自分の体。日常から非日常へと変わっていく中で、彼は大切な人を守るのか この作品はArcadiaサイト様にも投稿しております

O v e r t u r e

探し物の途中で、それを見た。

雨が降る中、アスファルトに倒れる女子高生の姿だ。突然の事だったので周囲を通りがかる人達も驚き、彼女に眼を向ける。そうして悲鳴があがった。その女子高生は眼を見開いて 恐らくは、死んでいるのだろう。横断歩道の途中、人の行き交う中に投げ出された姿は、糸の切れた操り人形を連想させた。

俺はしばらくその姿を、離れた場所で見っていた。降り続ける雨も気にせず、野次馬が集まってきては口々に勝手な事を話している。なかでも特に耳に残ったのは、これで六人目か、という言葉だった。散発的に起こる怪奇事件だ。突発的に人を襲う、原因不明の発作とも言われる。

以前に警察が発表したところでは、遺体からウイルスなどの類は検知されていないという。また、病気やそれに類するものでもないようだ。

では何故、突然、こんな往来で死に至るような現象が起きるのか。それも六人とは、悠長にしていられる数ではない。

誰もが心の隅に抱く、次は自分かも知れない、という恐怖から逃れたい為に、市民は一刻も早い原因の解明を求めている。

或いは。

求められているのは、仮初^{かりそめ}の安心を抱けるカバーストーリーなのかも知れなかった。

探し物は猫だった。

あまり失せ物探しは得意ではないが、アルバイト先の店主はなかなか無茶を言う中年で、こうして迷惑を被っている。俺が来る前まではどうしていたのか尋ねてみたいところだ。

とにかく、猫である。雨が上がった地方都市の片隅。この一角に

も猫は数え切れない程いる。現に今、俺の視界を横切った茶と白のブチ柄模様だって、似たようなのは数え切れない。

その数え切れない中から、手に持つ写真と同じ毛並みをした一匹を探し出せというのはかなりの無理難題と俺は思う。

当てずっぽうに捜し歩いても、見つかる道理はない。高校の鞆を提げる右手も疲れてきた。肩に担ぐようにして、負担を減らした。

季節は夏の気配が近付いてきた五月末である。今日は特に日照りが強く、白いワイシャツに汗が滲んでいる。頭髮が太陽に熱せられて、時折吹く風が芳うようにその隙間を縫っていくのだが、雨開あまあけと
いうのもあつて湿気を大量に含んでおり、不快感に追い討ちをかけてきていた。

賑わう商店街を歩いていると、また猫に出遭った。

黒い。金色の瞳が俺を見る。思わず立ち止まってしまったのは、その眼が嫌に敵意に満ちていたからだろう。俺は、そういったものに敏感なのだ。

さつと脇道に姿を隠す猫は、眼の前を横切る形だった。

不吉である。どうにも嫌な予感がしてならない。そういった迷信を信じるほうではないが、やはり気分が良いはずもない。

黒猫が横切ると、不幸に遭う、なんて迷信。

信じて迷うのか。迷うから信じるのか。

迷わず不幸に出遭ってしまうから、人を迷わせる言、なんて書くのだろうか。

そんな中だった。虹を見たのは。

行き過ぎるだけの通過点に。近道の為に經由する道程に、それはあった。白いタイルが規則正しく折り目正しく敷かれている、自然公園の中心には石膏で作られたような噴水がある。方眼上のタイル地帯周辺には眩しい緑として、新緑を体現する芝生と、その噴水広場を囲む形で杉の樹が立ち並んでいる。燦々と降り注ぐ太陽光の熱さも、ここでは少し弱く感じられる。

少し涼んでいこうと、噴水の縁に腰を下ろす。水滴が水面を叩く心地よい音と、それに感じる風の僅かな流れに、今だけは暑さを少し、忘れる事が出来た。

胸を反らして、空気を胸いっぱい吸い込む。ゆっくり吐く。緑の青臭い匂い、水の気配には落ち着かせてくれるものがある。

見回してみると、離れた場所に親子連れやカップル、婦人の集まり等が眼に入った。近所の人だろうか。広場のすぐ隣を走る道路は車がひっきりなしに行き交っている。まだこの街に喧騒が満ちている事に、俺は安堵した。

夜になれば、この街は静まり返る。昨今噂になっている怪奇事件を恐れて、誰も出歩かなくなるのだ。

曰く、人が変死を遂げるのはこの街に 吸血鬼 が潜んでいるからだ、という。俺がその噂を耳にしたのは随分前だが、今もって有力な犯人像すら出てきてないという事実が、街の住民が恐れる 怖さ なのだろう。

解らない事が怖い。それは当然の反応だ。未知を恐れるのは既に本能のレベルで仕組まれた反応なのだ。

日差しが強くなってきた事に眼を細める。

そろそろ行こう、と腰をあげると、少しふらついた。もしかしたら気付かないうちに長い時間、この日差しを浴びていたのだろうか。だとしたら熱射病の心配がある。その位に強烈な、夏の日差しだった。

しかし、だからか、それでなのか。

噴水広場の入り口に。自然公園の、その片隅に。

白い、女の姿を視た。

それは陽炎のようにユラリと揺れて、蜃気楼の如くフツと消えた。真っ白な着物姿。帯だけが真紅色だったのは、見間違いでは、恐らく無い。それは眩暈の見せた幻覚だったのか。見間違いでは無いにしても、あまりに現実離れしていて。或いは幻の見えそうなこ

の暑さに、あまりにも似合い過ぎていて……強く脳裏に焼き付いた。白い着物と、同じ色で揃えた日傘は、これまた同じ色の、腰より長く下ろした真っ直ぐな髪の毛、その半ばまで影を落としていた。女物の下駄がアスファルトを叩いて鳴らす、からんという音も聞こえた気がする。チリンというのは鈴の音だったろうか。

スツと音もなく消えていった事に、思わず眼を瞬^{しばた}く。気のせいだったのか。

俺は、後に残された一匹の白猫の、その後ろ姿を追いかけた。

雨上がり。蝉達がまたうるさく鳴き出し始めた。

第一章 発端

もうずっと雨の日が続いており、晴れた空をどのくらい見ていないだろう、とふと思った。数えてみると、探し物を頼まれた日から一週間程になる。その間の進捗状況も、変わりない。しかしあの白昼夢にも似た白い女の幻影は、強烈に焼きついている。追いかけていったはずの白い猫も見失った。制服の胸ポケットから写真を一枚取り出してみると、やはりよく似ている。あの猫で間違いないだろうとは思うのだが、やはり相手が猫では行くアテなど見当もつかない。例え街の人に聞き込んで、目当ての猫らしき目撃情報があっても実際は別の猫だったりする、なんていうのはこれまでに何回あったか知れない話。

俺が必死に歩き回り、そして途方にくれながら、この一週間を過ごしたのは当然だった。

そうして。行き詰った俺は、空を見た。もう見慣れた曇り空だ。

あらゆる出来事は過去になる。時間は止まらない。こうして現在が思い出に変わっていきこうとする中で、俺はふいに「自分は何をしているのだろう」と自分を省みたのである。

バイト先の店長から頼まれた猫探し。実際こういうものは探偵や興信所なんかに頼んだりするものではないのだろうか。俺はその方面詳しくはないが、下手をしたらもう保健所の人に捕まっているのかも、という事ぐらいは考えられる。

少なくとも、素人の高校二年生に丸投げして一週間放置するような問題ではないのだ。飼い主の定めた期限や支払いの問題も考えると、今まで放置されているのはおかしいのである。飼い主への定期報告さえ求められていない。そもそも、そんな人がいるのかどうかさえ……

「……ダメだ、さっぱり解らん」

完全に行き詰ったようだ。俺の頭では猫を探す事さえ満足に出来

ないらしい。とても残念な頭だった。泣けてくる。

もう、俺一人ではどうしようもない。一度、俺に依頼してきたバイト先の店長に確認して来るべきだろう。腑に落ちない点も色々がある。

その男は、一見すると熊を連想させる強面であつた。作務衣の下に覗く四肢は毛深く、髭も伸び放題でボサボサの無造作ヘアに手拭を巻いている。

薄暗い骨董屋の奥に、暗々裏とそんな大男がいては鬼も逃げ出すというものだ。

この店主、しかし人は良いので店の評判はそう悪くない。と言っても骨董屋自体そう繁盛するものではないが

店先の窓に並べた目玉の品は、この店主が眼を利かせて買った自慢の品々だ。特に備前焼が眼を惹くが、俺個人としてはその隣、一振りの日本刀に眼を惹かれる。

江戸後期の一品、井上真改が弟子、二代目春光だ。にだめはるみつ

刀掛けに置かれて鎮座する姿からは、その美しい刀身を拝む事は出来ない。俺のように齧った程度の刀剣ファンでも、齒軋りする位には見たくなるもの。

まあ、これが贋作だったりする可能性もなくはないのだが、一体いくらで買ってきたのだろう、あの店主は。これ程になるとウン百万はするというのに。

店内を進んで、店番をしている店主へと声を掛けた。

「この一週間、探し回ったけどさ。一回見かけたつきりだ。とても捕まえられそうにない。なあ、いい加減教えてくれよ。何で俺に猫探しを頼んだんだ？」

新聞を読んでいた熊のような男は、それを四つ折りに畳んで横に置く。野太い声は四十を過ぎた店主の貫禄を一層強くする。

「見たのか。一回でも」

まるでそれそのものが重要な事のように、店主は呟いた。

「ああ、白い猫だろ。写真と同じ、赤い首輪に鈴をつけたやつ。あ

あ、それと何だか不思議な感じだったな。白い女がいたけど、すぐに見えなくなった。

まるで、その女が猫に化けたみたいだった、なんてな」

冗談めかしてみたが、店主はそう受け取らなかった。顎の髭を撫でると、神妙に頷く。僅かだが眼が一度、驚いたように見開かれたのは見逃さなかった。

「おめえ……まさか」

店主が顔をあげて、俺の眼を見る。

「今まで一回でも、そんな感じの　妙な体験をした事があるか？」
「妙な？　まるで心霊現象を信じるか否か、みたいな質問の仕方だな」

意外な返しに、俺も少しの興味と好奇心を掻き立てられる。

「そんなもんだ。大丈夫だ、頭がイカれてるかどうかを疑おうって訳じゃねえ。包み隠さず答える。今までそんな体験は、したか」

店主は真剣な様子だ。眼に力がある。これからウソをつこうという態度には思えないし、担ごうという訳でもなさそうである。

珍しい。こういう話を真に受ける人には思えない俺は、奇妙に感じて、そして。

何かを予感させるのである。この店主には裏の顔がありそうだというのを、バイトし続けて一年目の今日、初めて思った。

言ってみてもいいかも知れない。そういう興味が持たされる態度だった。

そうして口をついて出たのは、昔から変わらず俺を悩ませる一種の幻視　についてだ。

「　偶に、影が視える。と言っても光に対して出来る影じゃないぞ。そういうものじゃなくて、何というかこう、影が、一人で動いているっていうか。意志を持ったように動いてるんだ。アレは周囲に光源があっても、真っ黒いんだよ。黒くてのっぺりしてて、まるで影絵みたいなんだ。けれど、それを俺以外が視る事は出来ないらしくて。ずっとおかしいと思ってたけど、言ったら俺がおかしいと

思われるし。

詩音 しおん 幼馴染みも、そんなのは視えないって」

時に霞のような不定形であったり、人の姿に似た何かであったり。しかしそれを俺以外の誰かが視る事はない。

これではまるきり、妄言だ。妄想癖のある精神病患者と思われるも仕方がない。だがこの話に食いついてきたのなら、店主はこれについて何かを知っている事になる。それに。

こういう話を、この店主は求めているに違いないのだ。

「やっぱりな」

そう言った。予感確信に変わる。この店主は何かを知っていて、俺に隠している。白い女と猫 きつと何か、関係があるのだ。

続く言葉は、見事にそれを裏切ってくれたが。

「もう猫は探さなくていい。それとその影についても、お前は見ないフリをしろ。いいな、間違っても変な氣起こすなよ。

ハッ、どうせ影なんて幽霊か何か、氣の迷いだよ。忘れる。精神病院いくようになったらちまうぞ。

この問答は終いだ。帰れ」

その言葉は、おかしい。拒絶というよりも、事実を無理やり捻じ曲げて伝えたような違和感がある。いや、実際そうなのだろう。それに依頼の撤回も突然過ぎるのだ。俺は先走る感情を押さえ込む。今は、そんな下らない怒りを感じている場合ではない。

俺だって、この幻視を特別、解明したいと思っていた訳ではない。ただ氣にはなっていた。何故俺にだけこんなモノが視えるのか。声が聞こえるのか。

あの白い猫も その影と同じモノなのか。

何より、あの女は。もしかしたら、どこかで会った事があるのだ。俺の氣の所為でなければ 見覚えが、ある。

そして俺は、こういった事態の見通しが不明瞭な場合には、特に自分の直感を信じるようにしている。

「待ってくれ、いきなり過ぎる。何でだ？ 人から聞くだけ聞いて

おいて、何の説明もナシに自分だけ納得されても、俺は領けない。
せめて説明を」

「子供には関係ねえ」

店主はぴしゃりと言いつた。だが俺もここで食い下がれない。
あの女は何者なのか。あの猫は一体何なのか。あの影は、聴こえる声は、本当に幻なのか。

俺だけが視えている。俺だけが知っている。何故、何故、何故。

違う。俺だけじゃないのかも知れない。だって、あの猫が幻視の影と同類であるとするならば この写真 はどう説明する？ 何時、誰が、どこでどうやって撮った？ 何故写真に残っている？ もしかしたら視えているのは、俺だけではないと考えられる。

白い女。化け猫。影 姿の視えない、吸血鬼。

……………やっぱりな。

この店主、どこかで俺が そういうモノだ とアタリを付けていたに違いない。

「じゃあ大人って何だよ。一人で解ってるフリして、自分は特別なつもりか？ おっさん、アンタ何か知ってるんだろ。

いや、解ってる。こういう場合、大人は自分からは絶対に喋らないんだよ。自分に都合の悪い事は、絶対な。だから交換条件にしよう。俺は一つだけ尋ねる。アンタはそれに答える。嘘偽りなく。そうしたら俺はこの件から手をひく。もうアンタに迷惑はかけない。

どうだい？ 一方的に会話を終わらせようとしたんだ、この位は妥協してくれよ」

店主は、髭を一つ撫でた。呆れた調子の溜息が耳に痛い。結局これは俺の我侫なのだ。良心は痛むが今更退けなくなり、構わず疑問をぶつける。腹は決まっているのだ。

「俺が視る影は、本当に存在するのか」

彼が続けた言葉を、この時、俺は本当に聞くべきだったのだろうか。

怪異は実在する という、その真実^{こたえ}を。

あらゆる出来事は未来へと向かう。

俺は猫の搜索という立ち止まって足踏みしていた場所から、少しだけ前に進めた気がしていた。あの影は実在する……店主は怪異と呼んでいた。

もしかして怪異を視えるのは俺だけではないのかも、という可能性もある。何かが変わり始めている予感、果たして吉兆なのか凶兆なのか。

そんな甘い認識も、すぐに吹き飛ばされる事となった。

翌日の話である。登校途中の道程に、虎縞のテープが張られていたのだ。危険を知らす信号として広く認知されている、黄色と黒の縞模様だ。

幼馴染みの詩音は俺の数歩後を付いてきていた為に、背後から顔を覗かせて。

「わあ、もしかしてジャック・ハンター事件!？」

それとも停死病かな、最近多いよね……」

独特の緩い声音、柔らかい調子で喋るクセがあるコイツが言っても、緊迫感はありませんのが少し残念だった。しかし本人は情の深い性格なので、こういう事には純粹に悲しんでしまう。十字を切るのは宗教柄である。

生命活動が突然停止するような、先日見た女子高生の突然死を停死病と呼んでいるのは、実は一般的ではない。俺達が通う高校で知らず知らず広まった通称のようなものだ。停止と怪死をかけているのかも知れない。そもそも病でさえないかも知れないのだが。

「ジャック・ハンターの方だな。そのブロック塀から臭いがする。今はブルーシートで隠されてるが」

現場では数人の警察官が立ち回っている。私服のものもいれば藍色のスラックスと水色のシャツという夏服警官もいた。迂回するよう誘導している。

後ろから詩音の、何で解るの、という問い掛けにはさも当然のよ

うに答えておいた。

「臭いだ。血液は鉄の臭いを出すだろ。洗浄したのか拡散したのか、少ししか臭わないけど」

これは赤血球に含まれるヘモグロビンが鉄を含む為だと言われている。消化器官が傷ついた際はこの限りではない。

俺は鼻をひくつかせ、僅かに残る残り香を嗅いだ。血は雨の日の鉄棒の臭いに似ている。やはり、少し鼻をつく。よく吟味したところ、空気に触れて鮮度が落ち、変質していく過程の中途半端な臭いのようだ。犯行時刻からそう時間は経っていないのかも。

詩音に聞いたところ、時刻は朝の七時半過ぎであるという。出勤する会社員や登校途中の学生達は興味深そうに現場を眺めていくが中には携帯電話で写真を撮る者もいたが、警官に注意されているやがてすぐに迂回路へと流れていった。

俺もそれにならおうと足を迂回路に向けて　そして、視界の隅に映ったソレへと眼を向けた。

影である。店主が言うところの怪異であるそれは、霞か霧のように蟠り、犯行現場、ブロック塀のブルーシートが隠す場所から少し離れた場所に漂っていた。

幻視。俺だけが視えている。俺だけが知っている。何かが、繋が

る。件の殺人事件、ジャック・ハンターとあだ名される連続殺人は、既に十二人を超える被害者を出している。

犯人はまだ捕まらない。どこるか犯人像さえも明確ではない。新聞もテレビも、市民に不審な人物がいたら通報するようにと呼びかけている。

迷宮入りする捜査に不安を抱く市民は、夜に出歩く事を止めた。

正体不明の犯人は、もしかしたら吸血鬼ではないか　そんな根も葉もない噂が流れる位には、関心と恐怖を集めていた。

これは、この影は、まさかそれに関係しているのでは……？

「誠君、早く行こうよ。遅刻しちゃうよ」

俺だけが、視えている。あそこに何かがあるという事を。誰もが通り過ぎる光景の中に、俺だけが異質なものを感知している。

思い切って、尋ねる事にした。

「詩音。あそこに黒い霧のようなものが、視えないか？」

案の定いつも通りに、彼女は首を傾げる。その際に眼鏡がズレた。スクエアレンズの細いものだ。位置を直す彼女は現場に眼をやり、そんなの見えないと答えた。

やはり、そうなのだ。怪異は実在する。しかしそれは俺にしか視えない。これは何故なのだろう。理由が解れば腑に落ちないこのモヤモヤも解消するだろうか。

しかし唯一の手がかりである店主は、もう答えてくれそうにないし……

ぞくり、と。首筋に悪寒が走った。誰かが俺を見ている。現場から少し離れた場所、通りの向こうから、鋭い視線を向ける、銀色の眼があつた。

西村誠は、敵意に敏感である。俺を害そうとする意識から身を守る術として、それは当然のように身に付いたものだ。例え一欠片、糸屑のように僅かなものでも、敵意が混じっていれば感じ取れる。そう育てられた。

あの銀色の眼は、しかし曖昧な敵意を俺に向けている。成人女性、下をスラックスにしたスーツ姿という飾り気のないものだが、銀色の長い髪が風に靡き、女性のシルエットを印象付けた。

恐ろしく浮世離れた空気だった。周囲の人間とは違う何かを身に纏っている気さえする。世間の俗臭や生身の俗っぽさなど微塵もない。例えるなら彫刻や人形だ。完成された美というものを、俺はこの時始めて見たのだ。気後れするくらいに。

銀色の髪と眼を見るに、外国の出身だろうか。しかし宿す眼光は揺れている。

不定形の敵意。疑問。彼女からはそういうのはつきりしないものが

見え隠れしている。明確に敵対するという態度には、あまり見えない。こうして 眼に視えないモノを視る のは俺のちょっとした特別であるのだろう。

どうやら、彼女は俺の指を注視しているようだった。ブロック塀から少し離れた場所 霞の影が在る場所を差す、俺の手を。

（まさか）

指先へと向けられた視線である。曖昧な意志を持っていた筈のそれは、すぐに明確な形を持って俺へと向けられた。

視えているのか。そんなメッセージを、俺は受け取った、ように思えた。

（お前も視えるのか）

内心で呟いても、相手に伝わる訳がない。だが、言葉にするには些か常識を逸脱しているし、周囲に妙な誤解を生みかねない。だが彼女が俺に何かを期待しているように思えるのは、恐らく間違いがないと思うのだ。

だから、俺は 頷いた。

はつきりと。会釈ではなく、是であると。

「誠君、行くよ！」

痺れを切らした詩音に腕を引かれ、俺はその場を立ち去った。

彼女と話してみたいという興味はあったが、今は止めておく事にする。

また会えるような気がしていたのだ。

第一章 発端（2）

その日は曇り空で、最近こんなばかりだな、と何の気なしに思った。バスに乗り三十分かけて学校前停留所に着くと、校門の前で風紀委員が頭髪と服装のチェックをしている。既に何人か呼び止められて端に集まっている様子が見られた。

俺は自分の制服を見下ろし、念のために確認していく事にした。

下をスニーカーからグレーのスラックス、ベルトまでにし、上をワイシャツ、紺のブレザーに青のネクタイである。ボタンの掛け忘れや長すぎる頭髪という事もなく、アクセサリの類も無論、ない。

「詩音、変なところないか」

歩きながらそう言い、俺は次に詩音の服装を見る事にした。二人いると自分で気付けないところに気付けるので、これを習慣付けている。

「うん、今日もぴしつとしてるよ」

彼女は優等生であるので、服装の乱れ等は今まで一度も見事はない。学校指定の革靴に黒のオーバーニーで、紺色のスカート丈も膝下までであるという今時珍しいぐらいの規則正しい格好だった。上を同じ色のブレザーに、男子よりも印象の細い青ネクタイが締められている。生来小柄で細身な事もあり、あまり目立たない。どちらかと言えば地味な印象は拭えない、というのが彼女に対する友人その他の見解であるが、俺はそうは思わない。

「ふむ……」

例えるなら原石である。魅力というものは隠れていても滲み出てくるのだ。磨けば確かに光るのだが、磨かないままでの良さというものも確かにあるのである。シックな、或いはクラシックな魅力と言つべきであろう。現に背中の中ほどまである一つの癖も見られないストリートな黒髪は日本美人としての色香がある。これを否定するなど、野暮であろう。

「あれ、そんなに見るって珍しいね。私どこがおかしい？」

途端に自分の体を見下ろすと、細いレンズの眼鏡がずり落ちた。

先日新調したノンフレームなのだが、一度螺子を締め直すよう忠告すべきだろう。

「どこがおかしいかというと、お前は頭がおかしいと言っしかないな」

「ひどい！」

成績も良く品行方正で知られる二年の藤崎詩音が、実は天然であるという事実を知っているのは俺ともう一人、朝霧時雨あさぎり・しぐれがいの一
番に挙げられるだろう。同クラスにも当然のように知れ渡っているが、やはり地味な眼鏡っ娘なのであまりイジられないのが勿体無いと思う。元々大人しく、温厚であるのも拍車をかけているだろうが。

さておき、校門の風紀委員である。

そこには俺のイトコにあたる朝霧時雨あさぎり・しぐれがいる。朝霧神社の巫女というのもあり自分に厳しく他人に厳しく、勉強運動にも妥協をせず教師の言う事が間違っていたら物怖じせずに意見するという、言っ
てしまえば女丈夫か女傑という評価である。

背は俺より数センチ低い程度だが、それを歯牙にもかけず睨ま
れと疎みあがってしまう程に切れ長の眼は迫力がある。気が強く、
年上の男を相手取って威勢よく啖呵を切る様には以前、惚れ惚れと
したものだった。

古式ゆかしいものを好む為か、髪型は後頭部の高い位置で縛った
ポニーテールというものである。あれを下ろせば肩よりはあるだろ
うか。薙刀なぎなたでもやっていそうな風貌であるが、実際には武道を嗜ん
だりはしていない。

ともあれ、気丈夫過ぎる所為か教師達にも手を焼かれていますら
いはある。生まれ付き素直ではないので、なかなか場に馴染めない
時も多いのを気にしていたりもする。

校門を通り過ぎる生徒達に混じり、身内のよしみもあって声をか
けようとした。のだが、先を制された。朝霧時雨の通りの良い声

が耳に届く。

「今日は珍しくちゃんとしてるわね。しーちゃんのおかげでしょうけど」

「え、ああ、そうだな」

「あつさり認めるなんて情けないわね。男でしょうが」

お前はどんな男性像を俺に求めているのか、と口に出したかったが登校矢先に喧嘩しては周囲に何を思われるか解らないので、ぐつと堪える事にする。

「別に隠す事でもないし」

「自立出来ないアంతの未来が見えたわ」

ああ言えばこう言う、とはこの事だろう。俺は潔く負けを認めると手をひらひらさせ、教室へと向かった。後ろでは詩音が呑気に挨拶している。見れば時雨の方はほんわかした空気に感化されてか、普段の剣呑さがとれて柔らかい笑顔を作っていた。天然と意地っ張り、良い対比である。二人とも　こう言うては何だが　素材が良いのであしていれば俺としても心癒されるのである。笑った顔は実に良い。こっちまで心地良い気分になる。

友人曰く、俺は両手に華らしいのだがそれについては余り真に受けない事になっている。というのも天然と意地っ張りの二人だけなら良いのだが、そこに俺が入ると途端にバランスが崩れる。俺と時雨で口喧嘩が始まり、終いには詩音が泣き出す始末だ。

総括として、扱いづらい、としておく事にする。

教室に入り、席に鞆を置く。教科書類を取り出すと机に仕舞い、その作業を終えて横に掛けた。頃合を見計らっていたのか、隣の席の男子　みなみ・せいじ　南清二が話しかけてきた。

「ねえ、西村んちの近くじゃないの？　今朝の事件って」

眼の高さで切り揃えられた髪はそのまま耳にかかる程度、襟首も邪魔にならないくらいにした彼は学年でもトップに位置する成績優秀者だ。パツと見は地味だが中身は色々やバイ人物である。パソ

コンを使ってアングラのサイトを見て回ったり、手短に済む程度のハッキングをしてみたり、時にサバイバルゲームに使うエアガン等も収集して裏山に籠ったりと奇特な事この上ない。今でこれでは将来どうなるか解らない。未恐ろしいというものである。更にはスプラッターな漫画や映画、ホラー系の小説等も好む為、あまり話についていく事は出来ず、追隨は諦めている。

今回も例によって「ジャック・ハンター事件」が彼のアンテナにヒットしたらしく、毎回何時、どこで事件が起きたかをチェックしているらしい。停死病を最初に言い出したのも彼であつたりする。

「ああ、そうだけど。朝イチで殺人現場なんてツイてないよな」

「何言ってるんだよ！ ツイてる、の間違いだろ！ 望んでもそんなの出くわさないって、きつとアレだよ、西村の家系には不幸を呼び寄せる力があるとか！」

そんなワケはない。なんとも御免被る話であるが、清二は興奮気味にまくしたてた。

「でも凄いよね、ジャック・ハンター。今まで一度も姿を見せていない、成功率百パーセントの殺人犯。ネットじゃプロの殺し屋じゃないかって噂も出てる。幾らなんでも殺し屋はねーよって言われてたけど」

そのまた一説では、吸血鬼であるとも言われている犯人だ。まだ誰にも見つかっていないという話は正直眉唾であるが、テレビの報道はかなり偏向されているのでアテにしないほうがいいと以前彼に言われた事もあり、鵜呑みにはしないようにしている。

果たして犯人は何が目的なのだろう。そもそも警察の眼から二週間もの間逃げ続けるというのは現実に可能なのか。街に居座り続けて十二人を殺害。関係者と疑われる不審者は何人も捕まっているが、その全てが無関係な口になっている上、証拠もない。

そろそろ軍隊が動くのではないか、と南清二が語る内容に、俺は頷けるのである。

「街中で突然殺されたってのが一番解らない。相手は何か不思議な

道具でも持つてるんじゃないかな。風景と同化するマントとかさ」

「それはどこの猫型ロボットだ」

「まだしも殺し屋とか暗殺者のが現実的である。」

「だいたいさあ、殺人現場にアレはないよね。何で出てくるんだろ、うちの親父も言ってたけど」

「アレって？」

「外事課だよ。親父の知り合いに警察の人いてさ。殺人って普通は刑事部が担当するんだけど、何で外国のスパイやテロ防止に努める外事課が出てくるんだって話」

「不穏な言葉に、少し緊張する。」

「……テロ？」

「いや、実際にジャック・ハンターがそうってワケじゃないだろうけど。もつと解らないのは、アレかなあ」

清二が腕組みをしたところで、もう一人のクラスメイトが近寄ってきた。桐谷凍也という名の彼は、教師連中にも眼をつけられている問題児である。

「よう、清二と西村。今日は早いじゃねーか」

脱色した髪に着崩した制服である。校門で注意されなかったはずがないのだが、彼の場合は秘密経路があるらしく、風紀委員のチェックが厳しい今朝のような場合はそこを利用するらしい。清二が言った。

「おはよ。今日もバイクできたの？」

「もちろん！ 朝の澄んだ空気の中をかつ飛ばす感覚はやっぱり止められねえぜ」

そう息巻く彼とは入学時からの付き合いだ。コミュニケーション能力の低い俺に難癖をつけては突っかかってきて以来の仲である。誤解が解けてからは友人として付き合っている。

「そんな理由で校則違反をするな。リスクしかないだろう」

「解ってねえな西村。スリルと解放感がビンビン来るんだよ、学校って檻から抜け出したような感覚がたまらねえのさ」

清二が同意するように頷いた。

「確かに、学校が檻っていうのは解りやすい例えだ。けどこの檻があるから僕達は将来への建設的な行程を考え、組み立て、実践する事が出来る、と考えるととても有意義なものに思えるけどね。多少、悪い事やつても学生だから、で済むし」

「おま、最後のほう本音だろ！」

桐谷の言葉に続いて、俺も一つ言っておこうと思った。コイツは一度ブレーキが外れると常軌を逸した行動を取る。どんな人脈を持っているのか知らないが、本物のサバイバルナイフ等も持っていたりするのだ。中学の時に飼っていた鶏を生け絞めにしたと聞いた時はゾワリと来たものだ。

「清二、お前また何か良からぬ事を考えてるんじゃないだろうな！」

「何だよ二人共。僕は悪いスラムじゃないよ。イジめないでよ」

俺と桐谷の声が重なった。

「白々しい！」

「そつえば知ってる？」

強引な話題転換である。清二はしかし、自分の立場が悪くなったら話題を変えろというような保身的行動にはなかなか出ない性格だ。これは単に、話題に飽きたし僕は今この話がしたい、というサインである。かなり自己中心的であるが、清二の話は実際、実が多い。こちらとしても為になるようなものが多くあるのだ。然して悪感情を抱くような話題転換でもないので付き合う事にする。

「また外事課が出てきたって話したけどさ。何で出てきてるのかって話。実はあれ、なんか調べてるらしいって話もあるんだよね。信頼のおけるソースではないんだけど。西村、現場にブルーシートで隠したような、広い面積を隠蔽するようなのは無かった？」

「え、シート？ あったけど、それが？」

あれは血痕を市井の人の目から隠す為のものであるう事は想像に難くない。不気味な霞の影ならまだしも、ブルーシートがどうしたというのだろう。

「チャンスがあつたらひつpegして裏を見てみなよ。きつと面白いものが見れるよ」

そう言う清二の顔は、悪戯をしてそれを隠している子供のようにも見えた。

「早いほうがいい。じゃないと多分すぐに消されちゃう」

「何だそれ。何を隠してるって？」

「スクラッチ
爪痕だよ」

昼休みになった。俺は詩音から弁当を受け取ると、そのまま席に戻って用意をする。清二がちょっかいをかけてきた。

「今日も愛妻弁当ですか？」

「ああ」

購買から戻ってきたばかりの桐谷が前の席に座る。四時限目の終わりにダッシュを決めていたので間に合つたらしい。

「コイツ、開き直りやがった！一年の時は真っ赤になつて反論してきてたつてのに、人間も変わるもんだぜ」

「年中言われてりや慣れもする」

小学校の時分から両親のいない俺としては、毎日朝食を作りに来てくれる彼女をありがたく思っている。何よりも尊重したいと思っているが、それは異性や恋人としてのそれとは違う、と思うのだ。俺の抱いている感情は妹や肉親のそれに近いだろう。

それを解っているからか、詩音も俺から離れないのだ。俺を独りぼっちにしないように気を使っている。使わせている……それを、重荷だろう、と聞いた事もあつた。

アイツは言った。私の役目だから、と。そんな事を頼んだ覚えはないのだが、そう言ってきたのは、もしかしたら両親が何か言っていたのかも知れない。

十年前である。俺の両親がいなくなり、祖母が死に、祖父は人が変わったようになってから、それだけ経つ。

天之御柱 アマノミハシラ と文献には残っている。当時騒

がれた、天変地異を差す言葉だ。かつてこの街の中心、八尋殿自然やひろのとの公園で起こった、今では隔離領域として封鎖指定されている場所で、それは発生した。

実際に何が起こったかは、居合わせた俺にも解らない。ただ、光の柱が空へと向かって伸びたのは覚えている。警察の事情聴取にもそう答えたが、何故か騒ぎにもならず、その事件はすぐに沈静化した。映像データもどうしてか残っておらず、関連した文献もアングラのものが少数残るだけとなった。

俺の持っている文献は、西村家の古い倉から見つけたものだ。長い歴史を持つ剣の一族であるからだろう、当時の情報規制から逃れられたのだ。

古い家柄の家系が持つ、倉のような一種の封鎖領域染みた場所を探るのは警察といえど咎められるのであろう。

政府は世間への公表に、アレは大規模な雷であるとした。未曾有の大電圧を有した天変地異が中央モニメント、天之岩戸 アマノイワト に落ちた。事態はそれを押し通す事で一応の解決を見たのである。それが十年前。俺の中でも、とりあえずはそれで決着させている。

とにかく、である。そんな事件の折に両親と祖母を亡くした俺は、以来を彼女の世話になりつつ過ごしてきたという経緯である。

それにしても父と母は、詩音に何を言ったのだろう。おおよその考えでは、誠を頼む、とかそんなところであろうと睨んでいるが、真相は解らない。

けど、解らないままでも良い、と思う。きっとアイツも俺から離れる時が来ると思うのだ。優秀なピアノ奏者として、何度もコンクールで賞を戴いている事からも将来は有望であると期待されている俺も、アイツがどこまで羽ばたけるのか見てみたいのだ。

だから、俺もアイツも、そろそろ将来の為に決心をするべきなのではないか。

そんな事を思う、蒸し暑い夏の日であった。

学校が終わると、俺は急いで帰宅の路についた。途中で詩音をピアノ教室に送ってきたので、少し時間が経っている。急いで走り息を切らせる。

そして、目的の場所に着いた。運良く誰もいない。こんな僥倖は有り得るのか。もしかしたら二度とないチャンスかも知れない、と考えて、神の思し召しという言葉が脳裏を過ぎった事に苦笑した。詩音ならば確実に神様はいると答えるだろうが、俺は信じていないのだ。

閑話休題、ブルーシートである。現場には虎縞のテープが張られているが、見回しても人影はない。恐らく今を逃したら現場を改めるのは二度と無理であろう。

幸いにもまだシートはかけられている。俺はその裏を見る為、コンクリートのブロック塀に掛けられたそれを、めくった。

清二は、爪痕と言った。信頼の置けないソースであると言った。半信半疑であったのは間違いない。興味本位の好奇心に突き動かされて、もしかしたら事件の手がかりが、という高校生探偵染みた自己陶醉も、あったかもしれない。

俺は後悔した。

何故こんなものがあるのか。これは一体何なのか。こんな事を行える生物が、この世に。この街にいるのか。不可視の吸血鬼、その実在を鼻で笑い飛ばす事が、もう俺には出来そうにない。

恐らく、間違いなく、爪痕である。五本の爪が塀を引っ掻いたような痕だ。しかしその一つ一つが五センチ程の横幅であり、それと同じくらいの間隔で存在している。縦は一メートルにも至る裂創だ。奥行きを確かめてみる。血の臭いはもうあまりしないが、ここであつたかを想像して吐き気がした。

一番深いところでは、向こう側が見えている。ブロック塀を貫通する程の長さを持った爪。それを持つ犯人は、もう人間ではアリエナイ。

何かがおかしい。俺がおかしいのか、これを隠す警察がおかしいのか。否。霞の影が視える時点で、それを周囲が認めない時点で、俺は自分を疑うしかなくなるのである。

「これは、一体何なんだ」

俺の正気を、果たして何が証明してくれるのか。だが俺は俺の主観によってのみ成り立つこの現実を、受け止める以外にないのである。

怪異は実在する。

間違はなく、この街に。

第二章 人と鬼

巨大な爪痕をブルーシートで隠し、市民の眼から隠蔽するという行為には、どのような意図が隠されているのだろう、とこの時の俺は考えずにいられない。

混乱を避ける為というのはまずあるだろう。しかし情報統制した結果じわじわと被害が広がっているのも事実だ。市民は緩やかな危険に晒されている、という自覚がない為、状況は徐々に悪くなっていく一方となる。

人目に付く事を避けたいので、場所を離れて状況を整理する。

正体不明の殺人犯による惨殺事件は、怪異染みた爪のようなもので殺されるというものだった。被害者はこれで十三人。加えて、原因不明の突然死である停死病が蔓延っている。こちらは被害者が六人である。

この二つの事件が、ここ高倉市で起きている怪奇事件の全てだ。

今は停死病について何の手がかりもないのでさておく事にし、ジャック・ハンター事件の考察に戻りたい。

あの獣の爪痕のようなものは一体何だろうか。ブロック塀まで切り裂くとなると恐ろしいまでの腕力である。アレは爪の切れ味というだけでは説明が付かない。優れた膂力がなければ無理だ。

(もしかして)

南清二が言っていた事は本当だった。ネットの書き込みが情報のソースであるなら、それについて書き込んだ人間に尋ねる事で更なる情報も集まるのではないだろうか。

何故なら、俺の頭に閃いた一つの答えとして、こういった爪痕が他の十二人の被害者が殺された犯行現場にも残っている。残されていたのではないか、というものがあるのだ。

(しかし、早くしないとすぐに消される、とも言ってたな)

恐らく、こういうモノの処理を担当しているのが外事課というも

のではないのか。そう考えると辻褄が合う。警察の刑事部と何ら業務の重ならない外事課が出てくる理由。清二の言っていた内容にも整合性が取れてくる。

符合する。これは怪異である。

俺はすぐに駆け出した。ここからバイト先の骨董屋　翠湖堂は近い。あの店主なら何か知っているかも知れない、と。

結論として、その目論見は甘かった。

店内には、濃密な　嗅いだ事のある臭いが充満している。ぐりと見回すまでもなく、並べられていたはずの商品は粉々にされていた。年季入りの裸電球が虚しく揺れている。何があったのか、店内のあらゆる場所に夥しい量の切創が刻まれているのだ。これもジャック・ハンター事件の被害なのだろうか。だとしたら先程の考察はあっけなく瓦解する。

俺は店の奥へと、恐る恐る進んでいく。商品の並ぶ土間から、畳張りの居間へと近付く。

「おっさん……？　いるのか、返事を」

時刻は夕方。一寸先は闇のように暗い。眼が慣れてきた頃、臭いの元が何なのか理解した。熊のような大男。いつも作務衣を纏っている大柄な、しかし人は悪くないあの店主が、四肢を無残に裂かれて絶命していた。畳敷きの居間が真っ赤に染まって、商品が並んでいる土間のほうにまで流れてきていた。

「はっ……！　おい、おっさん……？」

返事など、出来よう筈もない。途端にこみあげてきた吐き気をどうにか堪えられたのはまだ店内に蟠る暗闇に、もしかしたら殺人犯が潜んでいるのではないか　という恐怖があったからである。

じつとりと肌が汗ばんでくる。蝉とヒグラシが鳴いている。店内の埃臭さが鼻につく。血液の脂が空気に拡散して呼吸がしづらい。蔓延する血の臭い　少しづつ周囲と自分がズレていく感覚さえした。

例えるなら、異界のような。ここだけ現実から切り離された、俺を囲う檻にも思えた。

深呼吸して落ち着こうにも、噎せ返るような鉄の臭いにままならない。逆に焦ってくる。俺はふと視線を感じて、そちらに振り返る。店主の遺骸を挟んで、向かい。

「誰だ！」

答えはない。暗がりな為に姿も見えない。だが、俺には視えるのである。西村誠は敵意に敏感で、視えないものを視るのが特技であるのだ。

かちん、と音がした。何の音かはすぐには解らない。しかし足音がする。どうやら離れていくようだった。

「……………」

殺人犯なのだろうか。もし俺がその姿を見ていれば、何か変わるだろうか。正体不明という謎のヴェールも引っぺがせるだろうか。吸血鬼だとかいう噂もなくなるだろうか。

そしてその姿を見た場合、俺はここから生きて帰れるのだろうか

異音が混じる。殺人犯と思われる人物が出していたものとは違う。明らかにそれより重い音だ。重厚な、或いは本能的に身構えてしまふような、相当の体重を持つ生物が畳の上に降り立った音である。暗がりの中、光る二つの眼は 赤よりも紅い。

異質。未知。殺人現場。ここにはいけないと直感する。

俺は、こういった事態の見通しが不明瞭な場合、直感に従う事になっている。

距離を取ろうと後ろに数歩下がった。その紅い二つの眼は、それを見て位置を下げた。

（身を、屈めたのか？）

だとしたらバネを作っているのか。肉食獣のような。もしかして走ってくる気か、と。

横っ飛びに近い形で、並んでいる商品棚の合間に入るようにした。

予想通り、その紅い眼を持った影は身を縮めた反動で、恐るべき突進を仕掛けてきたのだ。

間一髪のところでは避けられた。圧倒的なスピードである。背後では様々なものを破壊して立ち止まる音がした。商品棚と小物が並ぶ土間に姿を晒したその影は、まるで見た事もない巨躯だった。先に考えていたあの爪痕を残した犯人像からそう外れてはいない、二メートルに届くような 影。

紅い眼を持つ頭部は狼。首からは人間と狼の複合的なシルエットに見える。先程の瞬発力の根拠はこれだろうか。

のっぺりとした体軀はまるで質感というものが感じられない。夕陽の日差しを吸収しているかのように、そこに居るという事が曖昧に見えた。繰り抜かれた景色、切り取られ、貼り付けられた影の獣というような。

影絵の狼。俺の中の認識はそれで固まった。

「何だ、お前……事件の犯人、なのか？」

だとしたら納得がいく。肉食獣の姿形は本来、狩りの為に特化された性能を持つフォルムだ。それが人間大のサイズを持てば、貧弱な人類など簡単に淘汰されるだろう。

例えるならライオンや虎がそうだ。体積が同じ程度の人間とやり合わせた場合、勝てる道理がないのである。そんな危険生物が街の中に放たれている。そう考えると、十三人という被害者の数にも頷けるといふもの。

影は俺の言葉に答えない。人語を解するというような知性はないようである。もしそんな知性があれば事は容易ではなかっただろう。俺は、未知への恐怖と生命の危険を感じて身を強張らせた。

（まずい、まずいよな、これ。ちよつと洒落にならないんだが）

アレは何なのか。やはり先程の物音はこれなのだろうか。店の奥に消えていったのはフェイントだったのか。十三人もの被害者を出した凶悪殺人犯に、今、俺は狙われている？

あの爪が、俺の肉を裂くのだろう。喉元をあの鋭い牙が食い千切

るのだろう。そのつもりで来るのだろう。あの影絵の獣は。

全身に浴びせられる敵意に身震いする。やばい。奴は様子を伺っている。獣らしく吐息を吐いて、身を屈ませる

獣の吐息が止まる一瞬。

（来る！）

反射的に横へと踏み出したのは、体に染み付いた鍛錬あつてのものだろう。すぐ横を通り抜ける、爪の纏った暴風が髪を靡かせた。

獣が一息吸って、止めた。追撃が来る予兆だ。大きく口を開けて腕に噛み付こうとしてくる。体勢を崩しているので回避は難しい。食われた。左の下腕に激痛が走る。引き千切ろうと左右に振られる。まずい、まずい。致命的で絶望的。どうする、どうすればいい。

そんな状況は、しかし思考の逆転を促す場合が多々ある。距離が近い。塗り絵のような体が眼の前にある。反撃しろ、という直感に従い、俺は眼の前にある狼の頭を横から殴りつけた。次に、人間ならば鳩尾のある胴体中央に蹴りをいれる。コイツに急所があるのかどうかは解らないが、恐らくは反撃されたという驚きからだろう、口を離した。

「クソッ、こいつ」

左の腕が痛い。熱で焼かれているような錯覚さえ覚える。血が止まらない。心なしか間接も痛む気がする。

そして、俺は獣の様子に疑問を覚えた。

吐き出している。何かを。口の中のもの あれは俺の血、だろうか。

苦しんでいる様子にさえ見える。どういう事だろう、噛み付いてきたという事は人を食う化物であるはずだ。それがどうして、ああも苦しむのか。

しかし考え込んでいる暇はない。俺は破壊された店内を見回し、武器になりそうなものを探した。あの化物相手に素手では無理だ。肉食獣というフォルムの特性から逃走も不可能、簡単に追い付かれる様が容易に想像出来る。それに腕の怪我也有。

出血は止まらないが応急処置をしている時間もない。俺は見回した店内に ソレ を認めた。痛みを堪えて駆け寄り、右手で掴む。二代目春光。真贋はこれ際どうでも良い。武器があれば、という望みをかける。

それに、俺は刀を扱う事に関しては専門家である。

西村は古式ゆかしき剣術の家系だ。今ではもう廃れてその地位を失い、歴史を残すだけとなったが、受け継がれてきた技がある。ここに刀があつた事は、こうして今を見ると運命でさえあつたように思えた。

左腕の痛みには歯を食い縛り、鞘を抜く。二代目春光の特徴である金に近い色をした刀身は、窓から差し込む夕陽を照り返し。俺に勇氣と自信を与えてくれる。

たかが刀一振り、されど刀一振り。

俺は刀を扱う技術の習得に、この十年をかけたのだ。使い方も体の動かし方も染み付いている。思えばあの化物の動きを呼吸のタイミングや前動作で読み取っていたのもその経験あつてこそだろう。思わぬところで役に立つものである。

俺により一層の敵意を向けてくる化物は、こちらが武器を持った事を意に介さず、爪を開いて横薙ぎにしてきた。

こちらは防御重視としての下段構えから、刀身を跳ね上げてその腕を落とす。血が出ない。手応えがない。皮膚どころか筋肉、骨も存在しない中身だ。

化物は次に逆となる左手を突き出してくるが、向かつて左に踏み込んで右足を引きつけ、切り落とす事でそれを制した。両手を失った化物は、それでも混乱せず牙を剥き出すと、再び噛み付こうと首を伸ばしてくる。俺は二度の攻防でこの化物に痛みや急所というものがない事に気付いていたので、その首目掛けて切り抜けた。刎ねた頭部が地面に転がる。ぴくぴくとだらしなく伸びた舌が動いている。紅い眼が、俺を視る。

突き刺した。切り裂いた。背後に案山子かかしの如く突つ立つ胴体もま

だ動く。唐竹割りにして何とか止めると、ようやく化物が死んだのを実感する。

吐く息が荒い。殺されそうになったから殺したという現実を思い知ると、それは罪悪感なのか良心の呵責なのか、人でないものだから殺せた、という独善があった事に、俺は血を凍らせたのだった。

俺は自分の体に教えられたのである。こんな事が平気で出来る人でなしなのだ。もしかしたら相手が人であっても、俺は殺せるのかも知れないという悲観さえ覚える。

体は殺す為に動いた。殺す為に考えた。俺の全てが殺すという目的の為に動いていた。最後のあたり、いよいよ命を奪うという段階にあっても俺は何の躊躇いもなかった。

おかしい。こんなのはおかしいと。

そう自分に言い聞かせる俺に、女性の声が掛かった。

「まさか人外を相手に出来る一般人がいるなんてね。世の中って面白いわ」

振り返れば、あの銀髪があった。以前より近いせいでその美貌がよく解る。特別な人間のみが持つような、周囲を置き去りにして異彩を放っている印象を受けるのだ。

下をスラックスにしたスーツ姿は以前と同じだが、後頭部の低い位置に束ねている一条縛りだけが違っていた。年齢は、一つか二つ年上なくらいだろうか。それにしてもスタイルが完成され過ぎている。

「警察です。署で話を聞かせてもらうわね。いえ、それよりも先に病院かしら」

腕の怪我の事を言っているのだろう。戦っている時はアドレナリンが出ていたからか、あまり痛みを感じなかったが。

「それと、気付いてる？ 君の眼。その窓を見てご覧なさい」

銀髪の言う通りにすると、俺は更に深く、絶望する事となった。

何故こんな事になっているのか。俺はどうしてしまったのか。

今まで自分だったものが、唐突にあやふやになっていく感覚さえ

した。

赤よりも紅い眼がある。あの化物と、同じ、眼。

「私はヴィクトリア・ディアモンテ。もしかしたら君も、私と同じなのかも知れないわね」

第二章 人と鬼（２）

病院での治療後、連れて行かれたのは警察署の取調べ室だった。俺自身混乱していたが、聞かれた事には全て正直に答えていった。ブルーシートの爪痕から殺害された骨董屋の店主、そして突然現れた化物とやりあった事まで。あの店にアルバイトとして雇ってもらっていたのもあり疑われはしなかったものの、やはりあの化物とやりあった、というのが信じられないらしかった。

部屋には俺以外、眼の前に座る銀髪一人だ。まさかこんな形で再開する事になるとは思わなかったが、縁は異なるもの味なもの。しかも外事課とは、天の巡り合せだろうか。整った顔の造形に見蕩れてしまいそうになりつつ、その言葉に耳を傾ける。

後頭部で一条縛りにした髪は、腰に届く程長い。嫌でも眼を惹かれた。

「学校の帰りに殺人現場を改めたというのは、何故なのかしら。それに誰もいなかったというのはおかしいわね、常に誰かいるように指示されていた筈なのだけれど」

心地良いソプラノだ。ずっと聞いていたくなるが質問には答えなければならぬ。

「実際誰もいなかったけど。そこを俺に言われても困るんだが」

「それに、あのモデル・ウルフを倒すなんて。アウトキャストの中でも下位なのだけれど、間違っても一般人の身体能力で適うようなレベルじゃないわよ。君の眼の事もあるし、少しの間監視を付けさせてもらうわね。それと今回見聞きした事はその全てを秘匿する義務が課せられます。無用な混乱を生み出すべきではないからね」

驚いた際、両手にかけられている手錠が鳴った。

「ま、待った、ちょっと、何だつて？ 監視？ 俺監視されんの？」
銀髪は頷いて、書類を差し出してきた。何やら難しい事が書いてある。読む気はない。

「ええ、今後事件に近付かないでいれば、もうこういう事もないでしょうし。特に危険な事はない筈だからね。行動の制限は色々つくけれど、それも事件が終わるまでよ」

この銀髪　ヴィクトリア・ディアモンテは俺を解放するつもりであるようだ。それ自体は特に問題ないのだが、俺としても尋ねた事は多くあったので、腹を決めて挑んだ。

「幾つか聞きたい事がある」

「いいわよ、消化不良でまた無茶されても適わないし。貴方のようなタイプは知りたい事があると身の危険も顧みずに余計嗅ぎ回るのよね。ただその分、行動の制限が厳しくなるけれど、よろしいかしら？」

構わない、と答えて。

「俺の眼が、あの時赤くなっていた。あれはあの化物と同じものに見えた。そしてアンタは自分と同じかも知れないと言ったよな。どいういう事なんだ？」

銀髪は、溜息を吐いた。

「極稀にいるのよ、そういう特殊な眼を持った人間がね。才能と言いつてもいいかしら。霊を知り、霊を見る眼よ。眼に視えないものと交信出来る眼。本来受動機能である筈の眼球が能動的機能を持つてしまった例。意識のチャンネルを複数持つ事が出来るの。」

そうね、解りやすく言うのなら　アウトキャスト　人外と呼ばれる敵を倒せる人かしらね」

よくは理解出来なかったが、掻い摘むとこの眼は才能の類であるらしい。そんなものがどうして俺にあるのかは疑問だが、生まれ持ったものに関しての答えが果たしてこの場で出るとは思えない。

ただ、視えるというだけなら。それだけなら、それで良いのだろう。生まれ付き動体視力が良い人間がいるのと同じようなレベルで、俺はこの問題を認めた。

まだ、他にも気になる事がある。

「人外とは？　あの影の化物の事か」

「ええ、人外とは人より霊的な存在概念であり、自然と交信するものよ。環境にとっても敏感で、本来は強靱な生命力を持つんだけど一度住処が汚染されると酷く脆い側面を持つ」

「……環境が悪くなると、死ぬのか？」

銀髪は頷いた。意志の強そうな瞳である。

「環境破壊や汚染によつて、彼らは年々住処を追われていつている。それが今回の暴走であると私達は見ているわ」

住処を追われ、食べ物を奪われたから、人を襲う、という事か。

それではあまりにも、生き物臭いというもの。

「それじゃ、ただの生物みたいだ」

「そうね、彼らも生物かも知れない。自然と調和して生きる、人間よりももっと純粋な共存者として」

まるで、人間が悪者のようにさえ聞こえてくるのは、俺の気のせいではないと思う。

「……人間が悪いみたいだ」

「客観的に見た場合、人間は地球を壊しているだけだものね。生物の頂点に立ったような勘違いをして、我が物顔で環境を破壊し、自分たちの住処を広げる。どころか、環境問題としての温暖化や森林の伐採、土壌や海洋の汚染もしている。

天罰が落ちたのではなくて？」

他人事のようにそう言う銀髪言葉は、解らないでもない。もしかして皮肉を交えたつもりなのだろうか。

「アンタ達は、それと戦つてる？」

頷き、自分を誇示するかの如く胸元に手を当てた。

「外事課は本来、三課までしかない。けれど私達はそれ以外の業務を請け負う外事四課という組織よ。通常の警察機構では対応出来ない、今回のような事件を解決する役目を持つてるの。私達は、人外の脅威から人を守る為に戦っている」

臆面も無くそう言える人間を初めて見た。これを大法螺と鼻で笑う事は出来ない。アニメやゲームのようだと茶化す事も出来そうに

ない。何故なら俺は現場を見ている。実物とやりあったのだ。それを主観において考えた場合、彼女の言葉はウソや妄言でなく、義務や責任を負う大人の姿だというのが解る。

自分の役目と真摯に向き合っている。それが俺には眩しく見えた。確かにこれなら、信じてみたくなる。この人なら任せられると安心したくなる。けれどそれは仮初で、逃避でさえあるのだろう。自分が何もなくても、誰かが何とかしてくれる、というような。そういうのは、好きじゃない。

「互いが生きていく為に、相容れる事が出来ない。そういう関係なんだな、人間と人外つてのは。よく解った、よく解ったよ。アンタ達が戦わなければ、人間が淘汰されていくつてのも」

それが戦いの火種となり、やがては戦争になる可能性さえ、あるのかも知れない。人語を解せない生き物とは解り合う事が出来ないから、武力をもって戦うしかないのだろう。

では、ならば意志を疎通させる為の戦いというのは、存在しないのだろうか。なんて事を考えた俺は、やはり子供で素人で、どうしようもない甘ったれなのかも知れない。

「だが、それだけじゃないよな。店内に残っていた切創は、あの化物の爪によるものではなかった」

銀髪は眉を顰める。痛いところを突かれた、という様子だ。

「あれは刀傷だ。間違いないな。おっさんの手足を切断したのも、店内を滅茶苦茶にしたのも、全て。ああいう使われ方は本来の用途とは違う。刀は人体を斬る事にのみ特化されてるからな。物を壊す事には向いてないんだよ。つまりおっさんを斬った切り口から察するに、相手はかなり腕が立つと見ていい。綺麗に骨ごと斬るのがどれ程難しいか知ってるか？　そして店内の破壊　熟練者がわざわざそれを行うという事は、恐らくそこにこそ意味があったんじゃないのか？」

黙っているので、言葉を続ける。恐らくこれは核心だ。ここから先が、本題である。

「そしてあの時、光の差さない暗闇の向こうにいた誰か…… ちん、という物音は多分納刀時の鐔鳴りだろうな。俺がそれを聞き間違える筈がない。だから、ジャック・ハンター事件の犯人は、二種類であると言える。あの刀使いと、狼のような人外だ。どうだ？ この予想、案外的を得ていると思うんだが」

だからこそ十二人という多数をこの短期間で殺せた。彼女は、呆れた、と零す。

「それ以上踏み込むべきではないわ。君、危険ね」

一気に剣呑さが増した。空気が張り詰める。

「それ以上言ったら、拘束するわ。いいわね」

これは黙るしかない、と言い聞かせて、俺は言葉を飲み込んだ。流石に警察にそんな事を言われては、一市民として退かざるを得ないのだ。

保護者を呼んだ、と言われて戸惑った。俺は祖父とは壊滅的に仲が悪い。口よりも手が出る方が早いぐらいだ。俺を十年もの間、剣の道に縛り付けた事は家のしきたりもあって仕方ないと思っているが、奴は俺の体に一生消えない程の傷を幾つも残した。今でも許せない。実の親でなければ児童虐待で訴えたっていい程である。ほんの僅かに残る情が邪魔をする。過去に藤崎詩音のご両親がいなければ俺は病院行きにされていたであろう事態が何度もあった。そうして何度もお世話になったので、おじさんとおばさんには頭が上がらないのだ。

かくして迎えにきてくれたのは詩音の母親 おばさんだった。

そして何故か詩音もいる。二人に頭を下げて謝罪した。また迷惑をかけてしまつて申し訳ない気分である。

「誠君、警察にお世話になるって一体何をやったの？」

詩音が尋ねてくる。あまり答えたくない質問であつたが、あの店主の事もあつて正直に話す事にした。

「俺がバイトしてた骨董屋あるだろ。あそこで殺人事件が起きてな

ジャック・ハンター事件だ。俺が第一発見者だったから色々聞かれた。そんだけだよ」

「さ、殺人事件？　どうして、あのお店で」

それがまだ解らない。あの店主は何かを知っているようだった。

怪異は実在する。その言葉が何度も甦る。詩音の曇りのない眼が、伏せられた。

「さあな。解らない。あの人、家族はいたのかな」

藤崎のおばさんがそれに答えた。どうやら身寄りはいなかったらしい。いれば連絡して警察署に来ているはずなのだ。確かに、血縁らしき人は見えなかった。

天涯孤独の身の上のようだ。心から悲しむ人がいないのではないかと下衆の勘繰りをしてしまう。例えばどちらであっても、せめて俺だけは忘れないようにしなくては。

「……………」

帰りの車内で、詩音が泣いていた。胸元で十字を切っている。俺は少し驚いた。俺よりもあの店主に会った時間は少ないはずなのに、心から涙を流せる人間なのだ、彼女は。

肉親でもないのに、人の死を純粹に悲しめる。俺には出来ない事だ。だから、あんな事が出来るのだから、全く救えない人間であるだろう。

俺は歪である。その事実を、思い知る。

時雨がいた。ポニーテールがトレードマークのイトコである。こいつが俺の家にあがりこんでいるというのは、高校に入ってからめつきり少なくなったので少々驚いた。学校の制服にエプロンという格好である。食事を作っていたのだろうか。スカート丈を詩音のものより少し短くしているので、どうにも足に眼がいくのは悲しき男の性であろう。

「お帰り。後で藤崎さんにお礼言っておきなさいよ。仕事の途中に抜けてきたって言うんだから、土下座ものじゃない？」

重い話である。罪悪感に苛まれてしまうので、いつもの調子を取り戻すべく軽口を叩く事にした。

「マジか、そいつはまずいな、じゃあ一緒に行ってくれ時雨」

「じゃあ、の意味が解んない。アンタの責任なんだから一人でいきなさいよ。まあ、どうしてもって言うんなら行つてやつてもいいけど。貸しイチよ?」

悪戯っぽく笑ってそう言う。いい性格をしている女である。そんな事でいちいち貸しを作つてはいられない。

「それよりもアンタ、その腕は何よ。怪我したの?」

「ああ、少し引つ掛けた」

「嘘ね」

これには肝を潰した。嘘をついた矢先にバレては自信をなくすというものだ。しかし時雨にバレなかった嘘というのもないので、久しぶりに思い知ったところである。

「アンタ、嘘をつく時には必ずする癖があるのよ。馬鹿みたい、怪我したのを隠して格好つけてるつもり? 男らしくも何ともないわよ、そんなの」

白状しなさい、と詰め寄ってくる。あまり追求されたくないので、強引に切り上げた。

「別にいいだろ、何だって。病院いつてきたし放っておけよ、こんなのですぐ治る」

化物に噛み付かれた痕 知られてはいけない。こんなのを見ては何を言われるか解らない。ただでさえ監視がつくという環境下なのだ。二人まで巻き込んで、ご両親に申し訳が立たない。

そんな事を思つるのは、俺に両親がいらないからだろう。親の愛というものを十年前に置いてきてしまったから、二人にはそれを大事にしてほしい なんて。自分勝手な押し付けも甚だしいが、これだけは譲れないのだ。俺がどうやっても手に入れないものを持っているから。

「そんなに包帯グルグル巻いて、放っておけて無理じゃない!」

時雨はいつになく真剣だ。食いがつてくる。普段は厳しい癖にどうしたのか。けれどそれを嬉しく思うのは、俺の歪んだ自己陶醉なのだろう。心配されて満たされるなんて、なんて意地汚い精神である事だろう。けれど確かに居心地の良さを感じもするのだ。必要とされる事の優越感。誰だってそんなものだろう。

それに、甘える事は許されない。俺自身が許さない。

「どうしたんだ時雨、このくらいの怪我したからって、そう騒ぐ程のもんでもないだろ。あの爺の頃なんかもつと酷かった。それこそ何度死にかけたか。お前だって知ってるよな」

どうせ元から傷だらけの体である。一つや二つ増えたところで何という事もない。時雨がどうしてここまで気にするのか、俺には解らなかった。しかし。

じりじり、と時雨の後ろに近付いた詩音が、ワキワキと手を動かしているのは何なのだろう。

「そ、それは、アンタが何か危ない事に巻き込まれてないか不安で

……」

「とあー！」

時雨の悲鳴があがった。流石詩音、空気の読めない女である。だが今、時雨を羽交い絞めにする必要はあったのだろうか。

「さあ誠君、私が捕まえてる間に着替えるんだあ！」

「え？ ああ、ありがとう詩音、でも先に手洗いとうがいするけどな」

「ちよつとしーちゃん！ ふざけないでよ！」

「時には明らかな嘘にも知らないフリをしてあげるのが優しさだよ！」

酷い言われようである。お前には車の中で同じような嘘をついたけどそんな事を思っていたんだな、と少しヘコんだ。

とりあえず廊下の突き当たりから左に曲がったところにある洗面所へと入る。何やらヒソヒソと声が聞こえるが、あまり内容は聞き取れない。

「……匂いが。女物の……」

「……え？」

「多分……かな」

「あの子、長い髪がタイプだし……」

「うーん……」

何だろう。何か不穏な会話に思えてならない。俺としては普段通りを装っているはずなのだが、何かおかしかったのだろうか。もう少し人当たりを良くしろ、とは常日頃から言われている俺の問題点であるが、やはりまだ解決されていないのかも知れない。

特に、年上にも平気でタメ口というのが非常識らしい。いや、これに関しては必要に迫られなければそういう意識が働かないのである。世の中を舐めてる、と難癖を付けられるのは既に日常茶飯事だ。何とか、何とかしなくては。

そんな事を考え、二階の自室で着替えた。

問題は、そんな事ではないらしかった。

眼の前には時雨特製レシピの肉じゃがを筆頭に、白飯と味噌汁がある。これは詩音が拘って選び抜いた白味噌を使っている。果たしてこの湯気を燻らせる飯を前に、何の話だろうかと身構えていると、対面に座る時雨が言った。

「アンタ、今日、髪の長い女と会ったでしょう」

どきりとする。何故そんなのが解るのか。否、これは当てずっぽうである。俺が妙な事を言わなければあの警察の事がバレる事はない。

「女物のシャンプーの匂いがしました！ アレはかなり高いやつです、髪に気を使っている人が使うような！」

詩音はエスパーか何かだろう。俺はそう認識を改める事にする。そういえば、あの狭い取調べ室に結構長い時間二人きりだったように思う。確かに移り香として服に匂いがついたというのも理解出来る。

「いや、そんな事はない」

途端に白い眼を向けられた。何故だ。大体会ったというか取調べを受けたぐらいでどうしてここまで詰問されなければいけないのか。はっ、そうか、これは取り調べを受けた事を取り調べられているという状況なのか。全く解らない！

「隠すって事は、な、何かやましい事があるんでしょ！」

時雨がテーブルを叩いて身を乗り出した。程良い大きさの胸に眼がいくのは男としての悲しい性である。詩音も、控えめに身を乗り出してきた。コイツは体の割りに大きい。眼福であると言わざるを得ない。

「いや、しかし。それが何か関係あるのか？」

時雨は、うつと怯んだ。特に何か考えがあつたわけではないようだ。成る程、弟を取られそうな姉の心境というものだろう。全く昔から心配性な、

「時雨ちゃん、さつきみたいに言つてあげなよ。誠君の貞操の危機だつて」

「貞操！？ おいちよつと詩音さん、お前何の心配してんの！？」

「あ、あたしそんな事言つてないし！」

「ええ〜？ さつき言つてたよ。ズルいなあ、また私のせいにするの？」

「つーか年頃の女が貞操とか軽く口にするな！ この馬鹿！」

詩音に向けた俺の言葉に何か引つ掛かったのか、時雨が勢いをつけて立つた。

「アンタだつて筆笥の裏に卑猥なピンク雑誌隠してる癖に、生意気よ！」

「なっ……！ どうしてそれを！？」

詩音が小さく手を挙げた。

「こないだ掃除したら出てきたよ。三冊くらい」

「くっ……！ 馬鹿な、こんな事なら場所を変えておくんだつた！」
「そこを悔やむな！ 持つてる事自体反省しなさい！」

「いや、だがな時雨。思春期の高校生にそれは無理だぜ。どうやっ

たつて異性に興味を持つ年頃じゃんか。お前だつて好きな男くらいいるだろ？」

途端に顔を真っ赤にした。何かまずい話題に触れたらしい。慌てて転換を図る。

「いや、まあ本題はそこじゃなくて、ほら、異性を好きになる過程というか、そういうものだ。つまりは性欲だな。恋というのも異性を持つ魅力に性欲が刺激されて喚起されるものじゃないか。性欲なくして恋は成り立たないんじゃないかい？」

またも白い眼を向けられた。

「恋をした事もない朴念仁が恋を語るな」

打ちのめされた。がくりと膝を折る。俺はここまでのようだと思いはしたが一瞬で立ち直った。

「じゃあお前はあるのか！ 恋をした事が！」

「あ……あるわよ！」

「色気付きやがって小娘が！」

「アンタだつて同い年だろうが！」

言ってみたかっただけです。

「じゃあ答える、恋とは何だ！」

「それは、相手を尊重して、思いやつたり、一緒にデートしたり、手を繋いだりとかよ」

「それをすれば恋なのか？ 例え表面だけを取り繕っても？」

「違うわ、装った関係なんて恋なんかじゃない。もっとロマンチックなものよ」

乙女な発言である。実はコイツもよく解っていないのではないかと思っていると、詩音が割って入った。

「よし、私が答えましょう！」

「え、お前知ってんの！？」

「何を隠そう、私は恋の伝道者ですから！」

胡散臭え。だがここは一つ言わせてみる事にする。

「私がピアノをやってるのは知ってるよね」

俺と時雨は頷く。ピアノに関係するエピソードのようだ。

「私、子供の頃に参加したコンクールでがちがちに緊張してたの。覚えてる？ 初めて参加したコンクールだよ」

忘れるわけがない。俺がまだ常識やマナーに疎く、ヤンチャだった頃だ。そして、詩音が藤崎家へ養子にきて、そう経っていない頃である。

「お母さんにやらされてたピアノが、本当は嫌いだったの。こんな続けて何になるんだろうって、毎日思ってた」

だが、悲しい事に詩音には才能があった。天性のものだ。当時は今でもあるが 同年代の子供よりずば抜けていて、天使の再来と言われたりもしていた。その才能を埋もれさせないよう、おばさんも必死だったのだ。

「着たくもないドレスを着て、ステージの上にあがって、挨拶して本当は怖くて逃げ出したかったその時に、ね。皆が私を見ている中で、一人だけ手を振ってくれたの。笑って私を見てくれた。その人だけが笑いかけてくれた。私は、もう怖くなくなった」

……それは。昔の思い出で、色褪せてしまった風景だ。

「それ、誰だったの？」

「ん？ ふふ、内緒」

解っている。その手を振った一人というのは俺だ。一緒に来た筈の時雨とはぐれてしまい、大人達に紛れ込んでしまった俺なのだ。それを恋というのか。お前にひと時の安心を与えた程度の俺が、お前の恋であっていいのだろうか。

少し、心が和らいだ。時雨も毒気が抜かれたらしく、落ち着いている。

「さあ、ご飯にしよう！ もう冷めちゃったかなー？」

詩音はいつも通りだ。時雨も苦笑している。

そう、これがいつも通りの風景だ。時雨と喧嘩して、詩音が泣いて 今ほもう、泣かずに俺達を諭すようになってしまったけれど、少しずつ変わってきたのを感じる。けれど俺達は、まだ、いつも

通り

「あ、そうだ誠君」

「ん？」

「あれを見て思ったんだけど」

「あれ？ って何だよ」

「女の人の胸が見たいなら、見せてあげようか？」
味噌汁を吹きだした。

第二章 人と鬼（3）

翌日になった。昨夜はもう遅いという事で二人を泊ませたのだが、それが良くなかった。俗に言う「お約束」というものである。朝の洗面所で詩音が着替えているところに誤って入ってしまい、小さく悲鳴をあげられてしまった。

謝罪を口にするものの、実際そういう色っぽい展開であるかという、個人的にはそうでもないのだ。

何故なら、詩音の背中には酷い火傷の痕がある。藤崎家に養子として来る以前、住んでいた場所が火事で焼けてしまい、実の家族を失った過去があるのだ。

それを知っていて、その傷痕を目にしてしまつては、肌が見えたからと浮かれてはいられないのである。そんな無神経、畜生にも劣る。

彼女の傷痕は一生消えないと宣告された。肌を晒す事を極端に恐れるのはそのコンプレックスがあるからだろう。病弱なのもあつて深窓の令嬢といった風体であるが 詩音の家は父が議員、母がピアノ奏者というのもあつて裕福である そんなものは表面だけだ。内面は人一倍傷つきやすく、脆い。けれどそれでも人に手を差し伸べる事の出来る優しさを持つ。俺はそれを自己犠牲と見ている。誰かの為なら強くなれる、という危うい芯の強さであるからだ。詩音にはもう少し、自分を省みてほしいと思う事がある。

そんな事を思えるのは、伊達に長く見てきていないという証明であつてくれたらいいのだが。

彼女を幼馴染みとしてでなく、実の妹のように接してきたというもある。今更その感情が変わる事は、恐らくないだろう。

だが、それでいいとも思うのだ。恋人ではいつか離れていつてしまつかも知れないから。けれど友達や妹のような存在となれば、一生傍にいられる。見守っていける。

俺はそれでいい。俺は、アイツの恋になっではいけない。剣術し
かり取り得のない俺なんかでは幸せに出来ないのが解っているから。
やがてピアノ奏者として世界に羽ばたいていく彼女の止まり木には、
なれないのが解っているから。

だから俺は、彼女が休む時に日差しを遮る柴であろうと思うのだ。

「悪かった、わざとじゃないんだ」

扉一枚を隔てた向こうで、恐らくまだ恥ずかしさに蹲っているだ
ろう彼女へ声をかける。

「え？ あ、うん、解ってる。こっちこそゴメン、いきなり叫んじ
やって」

「お前は悪くないけどさ。なんか、いつも通りに行動してしまった
自分の無神経さが憎いよ。いつも、この家には俺一人しかないか
ら」

いつも誰かに気を使う習慣がない。だから、俺は敬語の一つさえ
満足に扱えないのだ。詩音は黙っている。俺は少し、気になった事
を聞いてみた。

「なあ。まだその火傷の痕は、傷むのか？」

詩音の火傷の痕は、少し変わっている。まるで羽根を耨られた痕
のようなのだ。神話に出てくる天使のように、その背中には大きな
傷痕が左右に大きく、二つ。

「……うん、たまにね。寒い時とか、雨の日とか。後は、悲しい時
とか」

「そうか。でも悲しい時に傷が痛むって、他じゃあんま聞かないな」

「そうかな。でも、心だって悲しい時に痛むでしょ。痛んで、涙を
流すでしょ。それと同じじゃないかな。心と体は繋がってる。傷が
痛かったら心も痛い。だから涙が溢れる。

他でもない誠君なら、それが解る筈だよ」

詩音の言葉が、胸に痛いのは何故だろう。心当たりがあるとすれ
ば、一つだけ。

「それはもしかしてあの時の事を言ってるのか。俺が」

忌み子であると。鬼子であると後ろ指差されていた頃である。西村の家系には、それが運命であるかのように連綿と続く一つの決まりがある。

「本来生まれなかった筈の子供だって、言われてた頃の話」

曰く。西村一族には「女しか生まれない」呪いがかけられているという。四百年もの昔から続くそれが、俺の代で効力を失ったと解釈され、誕生時の親族会議で通達されたのだ。それ一つ取っても、やれ隠し子だの連れ子だのと騒がれたものだったが、そうして嫌悪の視線を浴び、後ろ指差されて敬遠されながら育った俺は当然のように人間不信となった。心に傷を負ったのだ。

多分、詩音はその時の事を言っている。

「そんなふうに言わないでよ。桔梗さんが悲しむよ」

詩音が母の名前を出した事に、言葉を飲み込んだ。

「いつも行ってる教会の神父様が言ってたんだ。呪いはいつか解かれる為にあるって。傷はいつか癒されるものだって。人はそうやって生きていくんだって」

俺にはよく解らない言葉だ。呪いで人が死ぬ事もある。傷で人が死ぬ事もある。彼女はそういった側面を見ずに都合よく解釈している。これは詭弁だ。

だけど。俺は思うのだ。呪いをかけた人がその呪いで人を殺し、いつか自分を愚かだと思ふ事はあるかも知れない。傷を受けて死んだ人を想う心の傷が、いつか癒される事があるかも知れない。だとしたら。全てを含んで言っているのだとしたら、俺は詩音の言う言葉に頷く事が出来る。人はそうやって生きていく。成る程、然りである。

「知ってるか。人生って言葉の意味。人として生まれる。人として生きる。人として生かす。そして人を生む。それが人生だ……って、どっかの偉い人が言ってた」

詩音が笑った。俺も笑った。全く、様にならないのは性分であるうか。

「最後ので台無し。なければ格好良かったのに」

「俺はいつもカッコいいだろ」

冗談交じりに。それをキツカケにいつかの約束を思い出した。昨夜のセンチメンタルな感傷が尾を引いているのかも知れない。子供の時分に、お前のカッコいいヒーローになってやると言ったのだ。子供の頃というのもあり恥ずかしい言葉を吐いたものだが、今でもそれを続けられているだろうか、とふと思う。

でも、まあ、俺はヒーローではないだろう。そんなカッコいいものにはなれやしない。俺になれるのは、日陰を作る柴である。

「そうだね」

案外あっさりと認められて拍子抜けだった。冗談に冗談で返されているのかと疑ったがそういう訳でもないらしい。現に衣擦れの音がする。着替えを再開したようだった。単に流しただけか？ それはそれで虚しい話である。

「……………ところで詩音。何でお前、着替えなんか持ってるんだ？ 昨夜は家に帰ってないよな」

幾ら隣同士とは言え、一度帰っているのなら気付く筈である。疑問に思っていると驚きの答えが返って来た。

「私と時雨ちゃんの着替えとか歯ブラシはちゃんとこの家に置いてあるから」

「エ！？ 何それ知らないんだけど！ つか聞いてねえぞ！」

そんなのどこに隠してあったのだろう。普段生活していて全く気付かないという事は俺の知らない収納棚とかにあるのだろうか。

「教えたら探すじゃん」

「探さねえよ！ いいから教えろ、どこに置いてあった！？」

「嘘だ、絶対探す気だ！」

「そんな訳ねえだろ、お前のDカップになんぞ興味はない。いいからどこに着替えを隠してるのか白状しまえ」

「何で知ってるの！？ ていうか探す気満々ですよねえ！」

「あんま抵抗するなら頭に被って猫型ロボットの真似するぞ」

「もう見つけた後の事を考えてるの！？ あと未来の猫型ロボットは耳ないからね！ ネズミに齧られちゃったんだから！」

「そうか、齧るのか」

「えっ！？ 何、何しようとしてるの！？」

冗談はさておき。早く着替えるように言い残してその場を去る事にした。朝食の時間がなくなってしまうては適わない。

その後、俺を見る詩音の視線に疑うものが含まれていたのは言うまでもない。

詩音が足しげく通う教会は街の中心に近い場所だ。見上げる程の扉を開けて中に入るとパイプオルガンの音色が耳に届いてくる。入り口から礼拝堂までの間に左右へと分かれる通路があり、どうやら屋根裏までの階段と修道者用の部屋や懺悔室があるようだ。

よくここに来ては祈りを捧げるのが詩音の習慣である。おかげで俺も時雨もこの神父とは顔なじみとなった。身廊に突っ立ってステンドグラスを見上げる。大きな十字架が聖壇にある。荘厳な空気が厳粛な場の装いというものが身に染みてきた頃、後ろから声がかけられた。穏やかな男性のものである。

「おや、西村君。君が礼拝とは珍しいですね。それともマリア・藤崎詩音の帰りをお待ちですか？」

マリアとは詩音の洗礼名である。俺としては宗教に興味がないので、何故そんな呼び方を改めて付けるのか解らず、正直抵抗があった。詩音という綺麗な響きに余計な言葉を付け足す事に、である。

「ハイド神父。ご無沙汰、してます」

この人に慣れない敬語を使わざるを得ないのは、詩音が世話になっっている手前、付き添いの俺が無様を晒すワケにはいけないからだ。「貴方が今日も健やかな一日を過ごせた事、主に感謝します」

そう言って十字を切る。聖職者とは視えない神というものを信じるものだ。そこに信仰があるかどうかの違いはあるが、俺には人外のように普通は視えない筈のものが見える。互いに常識外のものを

知っているという意味で、俺はこの人に親近感を覚えていた。

パイプオルガンの壮大な音楽がうるさくない位に響き渡る中、俺は尋ねた。

「ハイド神父、お尋ねしたい事があります」

「何でしょうか」

「あなたは、眼に視えないものを信じますか？」

柔和な表情をした初老の男性は、穏やかな笑みを崩して真摯に俺を見た。

「それは主の事を言っておられるのかな？」

「それに限りません。例えば、巷で噂になっているジャック・ハンター事件がありますね。あれの犯人が、もし眼に見えないものが行っている殺人事件だとしたら、どうします？」

「ふむ……変わった質問ですね。人以外の何か、という事でしょうか？」

「その解釈で構いません。ここの修道会に、そんな体験をしたような人はいませんか？　そう、例えば、黒い影が悪さをしていた、とか」

ハイド神父は薄い顎鬚を撫でると、俺を教会から出るように促した。

「こちらへ。シスター・アウレリアに会うといいでしょう」

唐突だ。俺の質問に答えず、会わせたい人がいるというのはどうにも悪い予感がしてならなかった。

教会の近くに一軒の小屋がある。小さな水車が回る、大人が三人も入ればそれで満員になりそうな大きさだ。中に通されると、一人の修道女が俺をもてなした。

彼女は自分をシスター・アウレリアと名乗った。三十を過ぎた女性だ。数年前にここでハイド神父に受けた教えに感銘を受け、入会したという。

俺が問題を切り出すと、彼女は静かに語り出した。

「実は夜中、家に帰る途中だったんですけど」

「シスター、家に帰るんですか」

てつきりここが教会に住んでると思っていたが、違うようだ。

「そりやそうですよ、持病あるからお医者さんにもいかなきゃいけないですし、子供の世話も……いえね、夫が病気で早くに亡くなっちゃって」

驚いた。シスター子持ちなのか。なんだか子持ちシスターっていけない言葉のように思えるのは俺の気のせいだろう。

「いや、世間話になってます。俺が聞きたいのは」

「あらいけない、ウッフ、若いつていいわね元気で」

何だか妖しい魅力がある。やり込められそうで怖いのは何故だ。年上の余裕というやつだろうか。

シスターの話では、深夜に家路を急ぐ途中、背後から足音が聞こえたというのだ。まるで自分を追ってきているように。怖くなったシスターは足を急がせたが、やがて違う足音も聞こえは締め、複数の人が追いかけてくるようだったと話すのだ。けれど、背後には誰もいない。正体不明の殺人犯、ジャック・ハンター事件が頭を過ぎってシスターは怖くなった。けれど途中で 白い猫 が現れ、シスターの服を引っ張り、導くように裏道へと連れ込んだ。不思議な強制力だったと語る。逆らってはいけないような感覚さえ覚えたというのだから驚きだ。以降、足音は追ってこなくなったらしい。

俺としては、その足音というのは黒い影 恐らくあのヴィクトリアという警官が呼んでいたモデル・ウルフというものだろうが複数いるという事と、それから逃げる人を守ったらしい白い猫の話に、驚愕を隠せないのである。

足音だけなら誰にでも聞こえるのか？ それとも、この人がその方向に関して 例えば俺が眼なら、この人は耳である等 優れた感知力を持っているのかも知れない。

「白い猫。それ、赤い首輪に鈴を付けた？」

「ええそう、何だか不思議だったわ。赤い眼をしてたわね。まあ眼

の色素が薄くなるとそうやって血の色が浮かんでくるらしいけれど」

何かが繋がりがける。恐らくは写真の猫と同じやつだろう。だとしたら、あの白い女も近くにいますはずだ。夜の街に現れるという情報も掴んだ。一度探してみたほうがよさそうである。

ドアがノックされた。ハイド神父が応対し、次に俺を見た。

「マリア・藤崎の礼拝が終わったようです。お話がお済みなら、今日はこのあたりにしてはどうです？」

頷き、シスターに礼を言っただけでその場を後にした。

気になる事が多い。けれど全てを同時に追うのは不可能だとして、俺は最初に幾つか優先順位をつけた。目下のところ、どうにかしなければならぬと思うのは殺人事件の犯人である。あの時、骨董屋から姿を消した人物が何者なのか。これさえ解れば警察の力で解決に向かうだろう。

そして人外が人を襲うという事。俺の眼が人外と同じ赤いものに変わった事。そして俺の血を吐き出していた事だ。

あれは何だろうか。更には俺と同じというあの銀髪の女。今でこそ思うが、今まで会ったどんな女性よりも美しかったかも知れない。グラビアやテレビで見るとようなものとも違う、周囲から一種浮いたような空気を纏っていたのはアイツが類稀な美貌を持っていたのもあり、またそういう隠し切れない魅力が滲み出していたからであろう。

詩音とは違う。磨かれない故の原石が持つ魅力ではない。磨かずとも溢れる魅力と言えるものだった。だが、気になったのはそれだけでなくだ。アイツはもしかしたら、俺と同じで剣を使うのかも知れない。立ち居振る舞いからそんな匂いがした。武道を歩む者が持つ精錬さとも言つべきものを垣間見た。機会があれば、もう一度話してみたいと思う。

ともあれ、深夜である。人通りのなくなる午後零時以降に繰り出そうと用意を始めた。今日は詩音も時雨もない。この広い武家屋

敷に俺一人、これでいつも通りであるのだから、傍から見れば無駄に広いだけ物悲しい様であるだろう。

さてどうやって監視の眼を欺くか、と思っていたところ、音が聞こえた。

カラン。音は外から聞こえる。二階の自室から砂砂利が敷き詰められ、外塀の門まで石畳の敷かれている中庭を見下ろすと　居た。

白い、女。今日も日傘を差している。月光を遮り俺の視線も妨げ、悠然と　微笑む女。一気に階段を駆け下りて、玄関を飛び出す。

居る。俺のところへ来た。ようやく会えたのだ。あの女に。やはり見覚えがある。どこか懐かしい空気を纏うソイツは、日傘を閉じて、血色の薄い唇で言った。

「久しいな、西村の。息災で何よりじゃ」

古い言葉遣い。でもどこことなく現代語寄りのようなのは、そちらの方が一般に聞き取りやすく、人に通じやすいからだろう。

「お前は、誰だ」

白い女は答える。張りがあり、一句一句が聞き取りやすい声だ。

女性らしいというよりは武家の娘のような、といった感じで自信を感じる、そんな声。

「僕は真白^{ましろ}という。そう睨むな、お主を害そうという訳ではないよ西村の」

女の眼が、赤く、光る。場の空気が一転して強張った。コイツは俺と同じ眼を持っている　しかも、任意に使えるのか。

「何、お主が色々と知りたいようにしておったからな。少し手助けしてやるうと思うたのじゃ。先々代の雅久とは旧知であるからの、そう可笑しな事でもあるまい？」

口元に手を当て、袖で隠す所作は古式ゆかしい作法だ。斜に構えてコロコロと笑う様に少し見蕩れる。

「何故お主が人外の眼、赤紅^{じくこう}を持っているのか。西村の血が持つ意味、そして翠湖堂の男を殺した　盲目のブラインドネス。それだけでなく、このままでは人食いの結界によって街が滅ぶかも知れん

しの。儂を手伝うのなら、お主の知りたい事に答えてやつても良いぞ」

白い女は、探るような、けれど鋭い視線で俺を見る。細められた眼にはどこか、親しげなものさえ感じられた。その感情に疑問が浮かぶ。コイツは何だ。俺の何を、知っているのだろう。

雪のように純白の髪は腰よりも長い。緩い夜風にさわさわと揺れる。俺が知る中で一番の長髪だ。けれどそれが不自然ではない。ともすれば色素欠乏症と見える容貌が、逆に眼に焼き付けられる。ちりん、という音に足元を見れば、白い猫がすり寄ってきていた。

「返答は如何に」

真白 見たところ二十歳そこそこであろう女は、人を食ったような態度を崩さない。俺に意志の是非を問うておきながら、主導権は自分にあるとしているのだ。

だから、俺は言った。

「俺は誠だ。西村の、で済ませるな。雅久って言ったな。爺が世話になったようだが、あんな死に損ない、俺には関係ないからな。それよりアンタこそ良いのか。こんな意味の解らない殺人事件だとか突然死現象だとかで、自分が危ない目に会うとは思わないのかよ」
くっ、と笑い出した。

「フッフ、そうか、お主は誠というのか。そうじゃな、名を呼ばぬのは礼を失している。それについては詫びよう。しかし 似ておるの」

真白は俺を見る。赤い眼が、朧月夜に一段と映える。

「誰に似てるって？」

「それは、此处に聞け」

そう言つて俺の心臓があるところを、指で差し示した。

「儂を気遣ってくれた事、嬉しく思うよ」

その手で俺の頬を撫でる。その仕草に愛しさのようなものが感じられるのは、恐らく気のせいではない。何だろう、不思議な安心がある。胸に去来する懐かしさは、前世の因縁か何かだろうか。

「返答は、如何に」

俺は、間近にある真紅色の瞳を、じっと見つめた。

第三章 銀髪姫

懐中電灯の光が、暗闇を円錐型に切り抜いた。倉の中には夜が凝っている。埃の舞う様が光に透ける。雑多な倉の中を恐る恐る歩き、一番奥に仕舞われていた目的のものを回収する。

入り口の人影　月光を浴びているソイツに向けて。

「おい、本当にこれ使うのか？　俺としては、職務質問されてまた警察のお世話になったりしたら目も当てられないんだが」

その人影、真白という女は白い着物の袖で口元を覆い、埃を嫌うように眼を細めた。暗闇なので赤い眼の動きがよく解る。

「いいから早くせんか。全く、雅久め。少しは掃除くらいせんのか？」

「あの爺にそんな甲斐性求めるな。まあ、どうせもうすぐ死ぬだろうけど」

かくいう俺も掃除が出来ないのだが、とりあえず棚に上げて悪態をついた。さつさと戻ろうと真白のいる方に向かう。途中で猫の鳴き声が聞こえたのでそちらに眼をやるのだが、暗闇の中に二つの赤い眼があつた。どうもこの赤眼というのは心臓に悪い。明かりがないと本当に気味が悪く見える。

戸棚の上にちょこんと座るその白い猫へ手をやると、案外素直に抱かれてくれた。

真白の飼う猫であろう、と俺は見ている。好奇心旺盛なのか、入ってきてしまったようだ。

「よしよし、ここにいと独りぼちになっちゃうからな」

うにやうにや、とむずがるように鳴くが構わず小脇に抱えるようにして外へと出た。真白が驚いたように見ているが、そう驚かせるような心当たりもないので気に留めなかった。

猫を下ろして、右手に持っていたもの　刀袋を改める。

「三代春光作の新刀。確かに昔からうちにあつたものだが、これ相

当手入れしてないぞ。本来なら半年に一回はやらなきゃなのに、しかもこれ、使おうっていうんだろ？ 気が進まないなあ」

無論、値打ち物というのもあるのだが、これは色々と言ひ付きの刀だ。倉の奥に仕舞われていた理由……というのも、なかなか眉唾物なのだが。

「抜いてみる」

言われた通り、紫の刀袋を取り出した。黒糸黒柄巻、これまた夜色の鍔に鞘である。刀としてはよく見る形のポピュラーな拵えである。余計な装飾が一つもない。

金色の鯉口が最初に覗き、次に白刃が姿を現す。清涼な地鉄に穏やかな刃文、月光を反射して青白くさえ映る刀身。長い年月を経てさえ、一片たりとも衰えはないようだ。

俺は阿呆のように口を開けて見蕩れた。

「ほお……二代目春光よりも普通の刀だな。意外。春光一派は奇刀を打つて話だったのに」

以前、骨董屋で使った二代目春光は金色に近い色をした刀身だったのを思い出す。アレもアレでただの成金趣味などではなく、呪術的な意味を持った作刀法で打たれた結果、ああいうふうに変色してしまったらしい。そのおかげで数は少なく、希少価値がついて値段も高騰している。そういった傾向の刀ばかり打っていたせい、奇抜な気概を持つ刀鍛冶であつたらしい。

この三代春光も、同じであると真白が言った。

「これも霊的な作法を取り入れた作刀法で打たれたものじゃ。刀身そのものに魔を祓う力が宿っている。魔剣 と言ったところかの妖刀だろ。そう聞かない話じゃない。村正妖刀伝説なんてのもあるくらいだ」

「ああ、徳川に仇をなして忌避されたという。フフ、そうか、お主は刀に詳しいのか」

「齧った程度だ。猫の耳じゃないが」

首を傾げられた。あまり面白い冗談ではないらしい。真白は知ら

ない話だ、それもそうである。ふと、あるものが付いてなかったの
で再び刀袋を改めた。

「ええと、あった、刀剣類登録証……って、俺の名前になってる？」
登録証は、これを持ち歩いても良いと警察に許可してもらった証
の書類だ。現代なら店舗で売り出している刀剣類には予め付いてく
るものだが、こういう古いものであると申請にいかねばならな
い手間が生じる。

ちなみに、年齢制限はない。

「いつのまに。爺かな、警察に知り合いいるって言ってたし。くそ、
どうせ最初から譲るつもりならそう言っておけつての」

大体本人差し置いてどうやって取った、と一人ボヤいていると、
横合いから。

「何故それを持ち出すか、解るか？ 先日のお主があの人外を
斬った時、持っていた刀も春光であつた。そして春光は呪術を刀に
埋め込んだ奇刀」

「何だよ。まさか春光一派の刀じゃなきゃ斬れないってのか？」

「近いな。春光でなくとも斬れはするが、じきに傷が癒され、再び
万全の状態に戻ってしまう。その間およそ、現代の時間の概念にし
て十秒程じゃろうか」

眉を顰めてしまいそうになる。そんなすぐに傷を治してしまう生
物など存在しない。その話に思い出さざるを得なくなる。あの人外
は首を切断した後も、生きていた。胴体はふらふらと、しかし自ら
倒れる事なく。

そして、あの赤い眼で、俺を見たのだ。それから導き出される結
論は、怖気をふるうものだった。

「……再生、する？」

「そうじゃ。しかし春光の刀ならば 特にその傑作刀、桜吹雪春
光四言四枷るみつ・しげんしかせならば、一撃で息の根を止める事が出来よう」

「傑作刀？ 妖刀の、間違いだろ」

俺は知っているのだ。この刀が持つ、呪いの物語を。昔から刀が

好きという手前、それを知らずにはいらなかった。本当に、これを俺が使ってもいいのだろうか。そもそも街に持ち出すなんて、幾ら夜中といえど正気の沙汰ではない。いや、既に正気の沙汰で済まない出来事を経験しているのだ。このくらいのものがなければ、次に襲われた時に対処出来ないのではないか？ そう考えると、真白の言い分にも納得出来る。些か突飛ではあったが、既に常識の枠の中から飛び出したような事件が起きているのだ。備えがあっても悪い事はない。そう認識する事にした。

「かも知れぬ。呪いを与え、自身も呪われる妖刀か。歪な刀を打つたものじゃな、あの男も」

「ん？ おい、お前知ってるのか？ 三代目春光を」

さあ、と曖昧に答えて真白が踵を返した。

「往こうか、見張りの連中は眠らせてきた。早くせぬと起き出してしまふぞ」

長い時間を経る程、呪いというのは強くなるらしい。真白の言う事が本当なら、死病の呪いというものも、確かに呪いをかけてからすぐではなく、時間を経てから死に至る。最もポピュラーな藁人形に五寸釘を刺すものは、と尋ねてみたが、そういう子供騙しのまやかしが世に現れるようになったのも、長い時間をかけて人の世に広まった源流があるからだ、という。例えるなら山麓から湧き出る清水であろうか。湧き出す勢いが強ければ強い程、その流れは速く多く裾野に染み渡る。

元から完成されていた呪いが、形を変え名前を変えて広まっている。機械技術のように少しずつ発展してくるのとは違う、というのが技術体系の進歩として少し頷けないが、何やらそれにも理由があるようだ。

「呪いは成長する。長い時間をかけて漂う思念想波を喰らい、己を強化していくのじゃ。人間としてそうであろう。糧を喰らって生き延びるのじゃからな」

まるで生きているもののように。だが考えてみると解らないでもない。生き霊という概念を例にあげると、呪いを構築する怨念や思念の大本は人間、その精神なのではないだろうか。その怨念思念が糧を必要として、成長していくのであれば 成る程、呪いが成長するとされても頷ける。

それは人間の持った別の可能性ではないだろうか。肉体という枠組みから解き放たれた、精神として生きる人間、というような。けれどそれが生きた人間に害を及ぼすというのはいただけない。

「西村にかけられた呪いも、そうして内包概念を強化していった。人の生きた精神を飛び移り時に喰らう事で、やがて最高の肉体と巡り合った」

「え……？」

真白の話は、西村のそれに飛んだ。だから呪いの話をしていたのか、とこの時納得したが、語る内容は到底受け入れられない。

「人でありながら、ジンガイの力を行使出来る器 先祖帰りとな」
夜道を背景に、彼女の眼が赤く輝く。俺を見るそれは尾を引いて、今までで最も強く印象に残るものだった。

「人と人の間で生き、また人から外れ往く者。それは果たしてどちらになるのじやろうな。もし人間と人外が手を取り合ったら、お主のようなものが生まれるのかも知れんな」

頭痛がした。何かが記憶に引っ掛かる。今のは知っているようで知らない言葉だ。頭が理解を拒む。

「下らない話してんなよ。どうせ西村が呪われてるのに関係してるんだろうが。俺には、関係ないだろ」

嗤う。真白が踵を返して歩き出したのに合わせ、俺の頭痛も引いていった。

「人外が視えるのも、お主の眼が赤いのも、それ故あつてのものじや。関係なくはない」

「お前の話はどうも胡散臭い。鵜呑みにしたり真に受けたり、していいものか解らないんだよ。説得力がそんなに感じられないしな。」

そもそも昔がどうだったからって、何で俺までそんなのに影響されなきゃいけないんだ」

然り、と。彼女は頷いた。

「そういう意味では、お主には関係ないのかも知れん。全て先達が勝手にやった事、現代を生きる若人が背負うべき咎ではない。だがそうした過去もまた、先達の呪いとしてお主に振りかかっておるのじゃろう。」

その魔剣とて、先達の遺した呪いであろうよ」

「回りくどい話だなあ。ていうか、刀の呪いなんてどうせ迷信だよ。俺んちにそんな大層なもんあるものか。刀は道具　凶器だ。人を傷つける事しか出来ない。けれど使い方、使う人によって正邪一体の面を併せ持つ。活人と殺人　いや、そんな概念さえないかも知れない。だって、そんなのは全て人の解釈に寄って生まれる観念だ」
「ほう。哲学的じゃな」

「どこが。客観的に見た場合の話をしてるんだ」

「それでも、それをそうと捉える者はそういない。刀に命を救う側面を見る事自体、達観しておるようでいてお主は情に厚いのかも知れぬな。普通、刀は凶器として見られる。史実が示す通り、人殺しの道具であるからそれを見れば本能的な恐怖を覚える者も多いじゃろう。だがお主は、物に価値を与えるのは人の解釈であると語る。善悪二元論を別の視点から見たようなものじゃな。面白い」

世の中は善と悪に分けられる。けれどどちらが上かは解らない。

確か、そんな内容だった気がする。

「それよりも。そんな話をしたい訳じゃないんだよ。ここまで付き合ったんだ、そろそろ教えてくれたっていいだろ」

俺は本題を切り出す。そうだ、知りたい事は他にもある。

「連続殺人！　ジャック・ハンターの正体は、一体誰なんだ！」

真白は立ち止まり、俺を見た。いよいよ解るのか、と身構える。

これから斬り合うかも知れない相手の事だ、情報をよく吟味して噛み砕く必要がある。人体を難なく、四度も断ち切る腕の持ち主は相

当な難敵であると予想される。一体、何者なのか。

「十円、貸してくれ」

真白は喜々として公衆電話ボックスに駆け込んだ。既に何度かやっていると公言し、自信ありげな様子にアングリと口を開けてしまった。一体何がしたいのだろう。先程の無心にはずっこけそうになった。何やら電話の相手と一言二言交わすと、ボックスから出てきた。俺は俺で喉を潤そうと 夏の、少し蒸し暑い夜である すぐ近くの自動販売機に硬貨を投入し、缶のお茶を買った。下の取り出し口に手をつ突っ込んでいると、真白がさも驚いたように。

「何じゃそれは!？」

俺がギョツとしたのは、その声の本気で 驚いているというよりは詰問しているような調子だったからだだろう。興味深そうに眺めている。ジュースがどうかしたのだろうか。

「え? いや、喉渴いたから」

「違う! その奇怪な白いのは何じゃと聞いておる!」

「……………自販機?」

「ジハン・キというのか。成る程、儼にも同じものを一つ」

違和感。もしかしてこの女、電話ボックスは知ってても自販機を知らないのだろうか。何でそんな偏った知識を持っているのかでんで解らないが、ともあれ俺も人の子、解らない人に物を教える程度の良識は持っている。

「これは、こういう飲み物を買う機械で」

「それは飲み物なのか!？」

「そこからかよ! ていうか人が説明してんだから最後まで聞け!」

子供のように眼を輝かせている 今は赤い光もナリを潜めている 様子に無邪気なものを認め、俺は思わず頬が緩んでしまった。「た、確かに以前から誰もがその面妖なものを持ち歩いては口に運んでいる様子を見ていたが、成る程、飲み物じゃったとは。然りである」

「お前、もしかしくなくても馬鹿だろう」

「無礼な！ この儂をして馬鹿などと、ならばお主はどれ程利口だ
というのじゃ！」

少なくとも電話ボックスの使い方が解るからと喜んで駆け寄るよ
うな真似はしない。

ふむ、と頷く。ここは実践ありきでの説明のほうで、この頭デッ
カチにもよく理解出来るだろう。俺は何となくそう思った。

「解った 買ってみるか？」

はっ、と一気に緊張し、しかし好奇心がありありと浮かぶ顔が、
慎重に頷いた。

「ほら、百円。ここのは古いやつで、丁度百円ポッキリなんだよな。
他じゃ百二十円とかだ」

子供の頃からよくお世話になっている、それなりに付き合いの長
いやつである。寒い日も暑い日もよく助けられた。今も近所の子供
達に硬貨一枚で素早くジュースを提供する、この界隈の水分提供源
であり続けている。向かいの駄菓子屋とのコンボは、子供に対して
もはや最強の誘引力を誇るだろう。嗚呼、万有引力とはこういうも
のかと悟ったあの夏の日を思い出す

「成る程、懐が広い大物なのじゃな。下々の者に対する配慮を忘れ
ぬとは、出来るやつじゃ」

もはや何に感心しているのか解らないが、とりあえず真白は硬貨
を投入する。

「む？ 全身が光っておる……面妖な」

「全身。そうか、お前の認識ではこれは体なのか」

「して、何をすれば」

「とりあえず、飲みたいやつの下にあるボタンを押すんだ。光つて
ないやつは金額が足りてないやつだから、押しても反応しないぞ」

押すのか、と。人指し指をさも突き刺す凶器であるかのように伸
ばし、そろそろと近づける。

ピッ、という音がして、取り出し口に落ちてきたのは「おしるこ」

「夏なのか」

言わずにはいられなかった。隣の真白は頬を紅潮させて喜んでい

る。
「こ、こやつ面白いぞ！ もっとやりたい！」

金を強請られ、もつと、もつと、と続けた結果が両手にもてない程の缶ジュースであるのは容易に想像出来るだろう。

「どうすんだよコレ」

「遠慮なく戴け。ジハン・キ殿のありがたい施しじゃ」

「俺の金じゃねーか！ やっぱお前馬鹿だろ！」

「ええい、さつきから人を馬鹿呼ばわりしおつて！ お主とて馬鹿ではないか、人を馬鹿と蔑むほうこそ真の馬鹿であると格調高い諺があるぞ！」

「それ格調高くねえから！ ドングリの背比べぐらいに低レベルな内容を差す言葉だから！」

まるで子供の喧嘩である。先行きが不安になってきたところで、俺の足元に猫がすり寄ってきた。

「ん？ あれ、ついてきたのか」

どうする、と真白に眼で伺うと、顔を背けた。

「僕以外には懐かない」

頭を撫でる。ふわふわしていた。気持ち良さそうに眼を細める。

ちりん、と鈴の音がした。

「おーよしよし、かわいいなー」

素直である。倉の中の事もあるし、真白の言う事はあまり真に受けなくて良さそうだ。

「……………やはり」

「なあコイツ、名前なんていうんだ？」

「名前はない。コイツの言いたい事は全て頭に入ってくるからの」

「電波か、そうか。お前は馬鹿だと思っていたが只の馬鹿じゃなかったんだな」

特殊な馬鹿である。ごろごろと喉を鳴らし始めた猫の様子に。

「やっぱり、コイツも人外……というか、この場合は化生になる、のか？ 俺やお前と、同じ眼をしている」

俺の眼は真白やこの猫のように常時赤いという訳ではないが、それでも、あの時にそう変わってしまったのは只の誤認ではないと断言出来る。

俺ももしかしたら人外なのかも　そう認識を改めざるを得ない時が来るのを、心のどこかで予感していたのだ。それが今までかかったのは、やはり最初にこの猫が視えた　という事実が非常識であると認めなくなかったからかも知れない。

現実には則した非現実のような。常識の形をした非常識のような。

「人に悪さをする人外もいれば、人に善くする人外もいるという事じゃよ。そして人間と人外の間を取り持つ混血もいれば。或いは、両者を天秤にかけ、裁くべきを裁く審判者がいる」

足音がした。誰かが駆け寄ってくるような感覚で、音の調子は軽い。女性である、とすぐに解った。

やがて街灯の下に姿を現したその女性に、俺は思わず立ち上がった。息を切らせて現れたのは、あの時の警官だ。俺と取り調べ室で言葉を交わした、長い銀髪をした絶世の美女。今日は髪を下ろし、腰まである長いそれを靡かせるままにしている。白のシャツに対して黒のボータイト、腰が強調されて細く見える　ハイウエストというらしい　スカート姿だった。シックな装いに、まるでロンドンガールのような雰囲気醸している。

成る程、スーツを着ているよりも断然映える。素が良いからであろう、特に黒のストッキングが淑女らしさを強めていた。足音の軽さは、ローファーというのも一因にあったようだ。

「真白、いきなり呼び出して何の用事なの　あら？　そちらは」

先程の言葉は彼女へのものだったようだ真白が頷く。

「ヴィクトリア、済まぬが力を貸してくれ。お主も知っての通り、人食いの結界は巧妙に隠された八つの基点から成っている。そこま

ではいい。そこまでは解ったが、どうやってそれを見つけるのか？
問題じゃった。

そこで、こやつじゃ。誠。お主は 視えないものを見る 眼を持
っているじゃろう」

視線が俺に集まった。戸惑いを隠せないのは、真白が俺に言った
人外の眼 赤紅という赤く光るそれは、元々そういうモノではな
かったのか、という認識があつた為だ。

「俺の眼は、アンタらと同じものじゃないのか？ 俺だけじゃない
んだろ、視えないものを見るってのは」

最初に頷いたのは、真白だ。

「違わぬが、この中で 否、世界中を捜し歩いて、お主程 呪
いに長く触れ、それを無意識に理解し、そして眼に見えぬものを
見るようになってしまふ程、常識として取り込んでしまっているの
は、いい」

ヴィクトリアが言葉を繋げる。

「私達には、そういう 認識の隙間 に入り込むよう隠された基点
を見つける事は難しい。常識と非常識の間というような、とても曖
昧なものなの。言い方があやふやで申し訳ないけれど、私達には簡
単に理解出来ないものだから、そうとしか言えないのよ」

二人の言葉で、何故俺が手伝うよう誘われたかの根拠は解った。
つまるところアンテナだろう。俺は高感度でその目的を見つけれ
る。二人は俺より感度が落ちるアンテナを持っている。そして隠さ
れている基点……恐らくその基点とやらをどうにかする為に、同じ
く呪いを内包したこの刀が必要なのだろう。

呪いを斬る刀。或いは凶を抜う式刀として。

「なんか上手い事ノせられてるようにも思えるが」

うんうん、と頷いている白い方の女。お前のせいで俺が夜中出歩
かなければならない迷惑を被っているのだ。少しは責任を感じても
らいたいところである。明日以降の勉学に支障が出なければいいの
だが。

「成る程、お主からすればそう思えるか。じゃが、こちらら一大事じゃ。この儂とて誰かの掌の上で踊らされているだけの役者かも知れぬよ。疑心に囚われると全てが疑わしく見えるものじゃ。自身の目的を見失うな。」

ときに先刻、ジャック・ハンターの正体を尋ねたな。あの翠湖堂の主を殺した下手人とそやつが放ったモデル・ウルフ。後者はお主の手で殺せたが、下手人の方はそう簡単にはいかぬと思え。儂の予測が当たっていれば、恐らく、傭兵じゃ」

傭兵という言葉に、だんだん空気が怪しくなってくる。またも真白の言葉をヴィクトリアが継いだ。この二人、もしかすると息が合うのかも知れない。

「PMCランツクネヒトの兵士ね。超能力や術式に関する研究に精力的な、一風変わった性質を持つてる組織よ」

PMCという単語には、覚えがある。あの変人、南清二が俺に吹聴してくる豆知識の中にそんなものがあつたはずである。

記憶の底を探ると、浮かんできた。確かPMCとはプライベート・ミリタリー・カンパニーの略である。これは民間軍事企業の事を指す。その業務は軍隊や特定の武装勢力、組織、国に対して武装した戦闘員を派遣しての警備、戦闘業務に加え、兵站、整備、訓練など、多岐に渡る。新手の軍需産業として昨今、定義されつつあるものだった。

キナ臭くなってきた。銃や大砲なんかが持ち出される気配さえしてくるようである。だが、銀髪　ヴィクトリアは　超能力や術式　と言った。それについての説明を求めると、痺れを切らしたらしい真白が割り込んでくる。

「歩きながら話せ。儂が基点のありそうな場所へ向かうから、誠は何か妙なものが見えたら教える事。いいな」

二人、頷く。先を進む背中にもたも質問を浴びせる。

「だけど、真白。何故この人を呼んだんだ。いや不満なワケじゃないが。何か今までの話からすると、只のお手伝いにも思えなくてな。」

そう例えば、この刀と同じものを持つてゐる、とか」

ふっとヴィクトリアが笑った。苦笑に近いものだ。

「この間も思つたけど。君は勘が良いのね」

「まあな。事態の見通しが不明瞭な場合、俺は自分の直感に従う事にしている」

「良い事だわ。無我の精神で物事を判断するようなものだものね。けれど減点よ。女性の扱いには慣れていないみたい」

年上ぶった物言いに、少しかちんときた。

「アンタこそ、男に慣れているようにには見えないな。そんな離れて小さくなつてると、ウブな少女みたいだ」

途端、真っ赤になつた。凶星なのだろうか。真白が声をあげて笑う。心底おかしいからか、袖で口元を隠さずに腹から笑っている。

「はっはっは！ 痛いところを突かれたな、ヴィクトリア！ 男性恐怖症という欠点をこうも早く見抜かれるとは、相手のが一枚上手じゃ、諦める。どうも誠は洞察力に長けているようじゃ。これは先行きが楽しみになつてきたぞ」

顔を赤くしているヴィクトリアは必死に抗議の声をあげる。

「ち、違つわ、恐怖症じゃなくて苦手なだけよ！ それに今のは別に、仕事柄接するのには慣れているけど、それは何というか、事務的なもので今のとは関係がなく本当の私じゃないというか………ああ違う、そうじゃなくて」

だんだん声が小さくなつていく。俺は堪えていた忍び笑いが漏れた。成る程、コイツは自滅するタイプか。面白い。見た目は完璧なのに中身がこれでは、放つておくのが難しい程である。さっきまでの毅然とした態度は、もしかや仕事上で被る仮人格ペルソナなのかも知れない。「ヴィクトリアさん、夜の街は危険がいっぱいです。転ぶといけなし、手を繋ぎませんか？」

思い切つて年下らしく下手に出たら、走つて逃げられた。生理的に受け付けないのかと思つて一瞬へこんだが耳まで赤いところを見るに恥ずかしいだけのようである。成る程苦手というのをも領ける。

コイツ、絶対いじられキャラである。

「手、手なんて、嫌あゝ！」

「え、何だかどちらとも取れる捨て台詞だぞ！ 手だけでは物足りないのか手すらも嫌なのかどちらなのか俺に小一時間程かけてじっくり説明しろ！」

「はっはっは、愉快愉快！」

「真白、お前まさかこの為にあの人呼んだんじゃないだろうな！」

何時の間にか追い越されていた真白が焦って追いかけてくるまで、少しの間楽しい鬼ごっこに興じてしまったのも、蛸舞う夏の夜の肴としては、上出来であっただろう。

第三章 銀髪姫（2）

最初に街の中心である、八尋殿自然公園やひろののしぜんこうえんに向かった。ここは日本神話に縁のある場所らしく、あの世との境界 黄泉比良坂よみつひらしかを通つて根堅州国ねのかたすくに、そして高天原タカマガハラへと至る道であるとされる。これらへの入り口とされる黄泉比良坂を、天之岩戸あまのいわいという大きな岩が塞いでいる。 そんな言い伝えが昔の文献にも載っている。

だが現実^ににそれを信じている人は少ない。神道などの宗教、神話に關与する機会がなければ耳にする事さえないだろう。一般市民へ流布されたり、ここぞ神のおわす場所などと宣伝されたりもしない、人の関心が失われた言い伝えだ。

黄泉の国への入り口 そう言われても、はいそうですかとは頷けない。だがこれの解釈を試みるならば 西村家の倉にはこういつた神話関連の書物も多い 黄泉とはつまり夜見よみ、昔でいう夢の事である。または闇ヤミから派生した夢とも言われ、その夢とは非現実で、常世と繋がるもの……つまりあの世を差す言葉とされている。

これだけでなく、日本神話に出てくる月読ツクヨミをして黄詠こよみとし、現代の正月を既定した日数演算法……とも伝え聞く。

正直こうした日本神話ゆかりの構造体や伝承は日本各地に存在するので、どれが本物か解らず信憑性にも疑心が生じる。熊本や鳥取、島根あたりの観光名所として結構耳にもする。なのでこの高倉市にある伝承も同じものだとして認識される。

そして高倉市は先の三県ほど観光経済に力をいれていない。既に埋もれて廃れた伝承が残るだけとなったのである。時代に取り残された遺物だ。

話は戻るが、街の中心に位置する八尋殿自然公園は広大な坪数を誇る。一説ではここに野球のスタジアムが隣り合わせで二つほど建設される予定だったという事からも、その規模は驚くばかりだ。外周をフェンスに囲われ、緑が生い茂っている事からも市民の憩いの

場、手軽にテニスやサッカー等のスポーツが出来るレジャー施設もあって人の出入りは多くある。夜間は七時以降閉めきってしまうのだが、真白曰くパワースポットとして存在するここが怪しいらしいので、どうにか侵入する経路を探す為、外周を囲うフェンスをぐるりと見て歩いた。

俺はその途中、幾つか気になった点を挙げる。

「まだ施設を閉めてそう時間が経ってないからだろうな、警備員が多い。これじゃ中に入るのは無理だ。しかも調べたいのは中央モニメントのある閉鎖された中心部だろ？ 少し時間をずらした方がいいと思うんだが」

ちらちらと樹木の枝葉から覗く懐中電灯の明かりは、まだかなり多い。居残っている人がいないか、落とし物がないか、道端に植えられた植物に損害が出ていないか等の点検もあるだろう。現在時刻を尋ねると、ヴィクトリアがスカートのポケットから懐中時計を取り出した。クラシッくな趣味である。銀細工というのも雰囲気似合っていて思わず眼を奪われた。

「今は丁度九時ね。閉園して二時間か。まだ警戒の意識が強い時間帯でしょうね」

だが隙もある。警戒意識の緩みや注意力の乱れ、また日頃の慣れからくる油断も見え隠れするようなライトの動きだ。昼間から交代なしなら、疲労もあるかも知れない。もう少しすれば待機所に引っ込む可能性もあるだろう。慎重を期して一時間はずらしたところである。見れば真白は我慢弱いらしく、歯軋りしていた。

「むう、歯痒いの。こう、一気にバーっと行って攪乱すれば中心部くらいすぐにいけそうではないか？ 儂ならすぐに蹴散らせるぞ」
「お前はテレビや新聞に載りたいのか？ ここは市民が日常的に利用する施設だぞ、そういう騒ぎなんかの情報への注目度はかなり高い。一端ニュースになったら街を歩けなくなる。誰がヘマをしないと限らないんだ、ここは一度退くべきだよ」

監視カメラや警備会社への通報の可能性も考えると、防犯設備の

詳細も知りたいところではある。しかしそういった情報を今手に入るのは難しい。

「出直そう。ここに長く留まるメリットもないし」

俺の言葉に、二人は頷いた。

だがその直後、油断したのか誰かの腹の虫が鳴った。咄嗟に腹部を押さえたのはヴィクトリアだ。みるみるうちに顔が赤くなる。俺が得心顔でニヤニヤと笑うと、キツと睨まれた。

「飯食ってないのか」

「……くう、仕方ないのよ、電話でいきなり呼び出されたから、夕飯も済ませてなくて」

「そういえば僕も腹が減ったな。戦の前の腹ごしらえといくか」

「時間を潰すにも丁度いいだろう。ああ、そういやこの近くで友達がバイトしてるんだよな。そこなら安く済むけど、どうする？」

正直、先に真白に強請られて使い込んでしまった損失が痛いのである。バイト先の友人 桐谷凍也ならば少しくらいまけてくれるかも知れない、という浅はかな考えもあった。安くて速くてうまいと三拍子揃った、牛井屋のチェーン店である。頭に疑問符を浮かべたヴィクトリアが尋ねる。

「牛丼？ どんな食べ物かしら」

食べた事がないようだ。意外である。牛井屋をチェーン展開している三大トップは実際テレビでも宣伝されていて誰でも知っているものと思っていた。時間に余裕がないような社会人なら財布に優しい事もあり、尚更であろう。

説明しようか迷っていると、真白がそれを察してか。

「ヴィクトリアはな、ビルの階層一つを貸しきって生活しているよ。うなヤツじゃぞ。あまり下手なものを食わせると何を言うか解らんよ」

二の足を踏んだのは言うまでもない。金持ちだったようだ。だがすかさず本人が抗議の声をあげる。

「あれは課長が勝手にやった事よ。私の意志じゃないわ。戦力にな

る人間を優遇するのは解るけれど、やりすぎよね。おかげで皆、私を遠巻きにするわ」

本人、呆れたように溜息をつく。自分が優れているという事を事実として認める自信があるようだ。それはいいのだが、その環境を嘆くというのは贅沢なものである。

「フフ、良いではないか、銀髪姫^{ぎんぱつき}。力のある者が認められる組織、そう悪いものではない。ふむ、それとも祭り上げられ、象徴として扱われる事が嫌なのか？」

聞き慣れないフレーズに興味が湧く。銀髪姫と言ったのだろうか、だとしたら成る程、ヴィクトリアを言い表すのにピッタリの言葉である。しかし彼女は、あまり良い顔をしていなかった。というよりも、憂鬱そうにしているのだ。

「銀髪姫、なんて綺麗な言葉で飾らないで欲しいわ。私は　　たくさんの人を殺してきた、殺人鬼なのだから」

俺は、思わず足が止まった。今、コイツは自分を殺人鬼と言ったのか。たくさんの人を殺してきたと、言ったのか？ いやそうは見えない、今だってそんな事が出来るような、恐ろしい人間にはまるで、見えないのに。

「ヴィクトリア、そう言うな。お主はやるべき事をやっておるだけじゃ。お主が戦わねば、この街はとうに滅びておつたろうよ」

真白の言葉が、どこか遠くに聞こえる。だけど重要な事を言っているのは解る。

「どういう事だ、お前、只の警察じゃないのか。いや、そうだよな。俺と同じ眼を持ってるんだもん。けど今のはおかしいだろ。何で警官が、殺人鬼を自称する」

先に答えたのは、真白。

「落ち着け、そう氣を立てるな。こやつが戦っているのは只の人間ではない。人外が化けて人の皮を被っているものじゃ。ヴィクトリアが戦わねば、そやつらに襲われる人々の被害が増えていく。ジャック・ハンターが今まで水面下で活動していた以外にも、同じよう

な事件は数え切れない程多く起きていたのじゃ。それをこやつが食い止めていた。独り、人知れず、血を流しておったのじゃぞ」

ヴィクトリアが、口を挟む。

「いいのよ、真白。やっている事は変わらないもの。人の怨念が集まった存在とは言え、人を殺している事には変わらない。こんなの、誰が知っても、人殺しって思うわ」

そうか。人外とは、そういうものだったのか。アレ自体が 呪いのようなものなのか。それを殺人と定義出来るのかどうか、すぐには判断出来ないが 少なくともこの銀髪は、そう言って自分を責めているのだろう。

解らなくはない。解らなくはないが。そうやって人を、街を守っている事が誰にも知られていないというのは、何なのだろう。只の警官というだけでないのは解った。外事四課としてジャック・ハンターを追っているのも解る。

「ごめんなさい、西村君。私は、そういう人間だから。人を殺す人間だから。君も私が怖かったり、気味が悪かったら言っただけ。私は消えるから」

何だ、その言葉は。自分が殺人鬼だと告げたと思ったら、今度はいかにも善人面して。お前が警官として市民を守っている事は善行なのか？ やっている事は悪行じゃないのか？ 解らなくなる、お前の本当の顔が、どっちなのか。

お前は、そうやって自分が傷ついているのを、殺人の罪過に心を痛めているのを、誰にも言おうとしないのか。そうやって人を遠ざける事でしか生きられないのか。

その表情が。悲しみや苦しみを抱えて尚、形作られた空虚な苦笑が、今の俺には酷く痛々しく見える。

胸のあたりに、気持ち悪いモヤモヤが蟠る。はつきりしない。

ヴィクトリア・ディアモンテは、一体何者なのだろう。

どこに向かって歩いているのか、自分でも解らなかった。今どこ

にいるのかも、どのくらい歩いたのかも解らない。一つはつきりしているのは、俺の後ろに二人ぶんの足音が付いてきている、という事だった。

考える時間が必要だったのは、言うまでもない。いきなり殺人鬼と言われれば誰だって驚く。けれど殺している相手が人でなく化物だったら、と言われたら　そのラインは途端に曖昧になる。セーファか、アウトか、善行か悪行か、判断基準はどこに置くか。これは非常に繊細な問題であろう。だって、その行動理念が市民を守る為なのだ。無論その理念があれば何をしていい、という訳でもないが、おおよそのところ、倫理には反していない……　ように俺には思えた。初めて会った時は、遠巻きにだったが登校途中での殺人現場。次に骨董屋だった。その二つに関して言えば、事後の検分に来ていたと見るのが妥当だろう。けれど思うのだ。

彼女が人知れず戦って、ああいう事件を未然に防げる立場にいるのだとしたら、その行為は肯定されるべきではないのだろうか、と。呪いは命を害するものだ。同じものとされる人外も然りである。

けれど彼女がそれを抜うというのなら、それは人の命を守る行為であり、鼻にもかけず、人知れず傷ついている事を、誰かが認めてあげべきなのではないのだろうか。でなければ、報われない。

「ヴィクトリア。お前に一つ、聞きたい」

物事には常に善悪の二面が内包される。誰かの為に、というお題目は結局のところ、責任をそれに転化して動いているだけである。善くある為に。悪しくある為に。そんな言い訳は通じないのだ。

俺は問う。年下だが偉そうに。世の中を舐めた姿勢で、けれど今の自分には是であると力強く頷ける、そういう在り方を貫きたい為に

「止めたいと、思った事は？」

視線は上、夜空の星に注いでいる。夏の空は星が綺麗だというが、こつも街の明かりが強くては、それを微かにしか見る事が出来ない。そんな中、返ってきたのは強い言葉だった。

「いいえ。私は一度も止めようと思った事はない。そこには義務も

責任もないわ。だってそれを私に強制する人も、出来る人もいないもの。だけど、止めようとは思わない。

私は、守りたいから守っているだけ。自分がそうしたいと思っ
ているから、そうしているだけ。我侭だと、物好きだと、狂っている
と思われても構わない。例え後ろ指を差されて迫害されようが、石
を投げつけられようが、私は躊躇わない。自分が傷つく事を厭わ
ない。

私は殺人鬼よ。私は私の意志で、人に害^{ウイ}為すものを倒すだけ」

思わず振り返った。その時の俺は、多分眼を見開いていただろう。
俺の考えが読めた筈はない。解る筈がないのだ。それなのにコイツ
は、一言も、誰かの、何かの為にとは言わなかった。責任を全て自
分のものにした。負うべき咎から逃げなかったのだ。

不退転の決意を覗かせ、俺を見る、銀色の眼があった。

「けれどね。人から責められるだけの事をしている罪の意識もある。
もしこの先、人外が人間を襲わない世の中が来たら、そんな平和が
訪れたら、私は私の意志で、この命を絶つつもりよ」

彼女の眼が、閉じられる。

「全部理解してもらおうとは思わないわ。ただ、さつきは君に伝え
るのが、少し気が重かっただけ。ああ、また嫌われるんだなって

同じ経験を何度もしてきてるけど、やっぱり辛いものは辛いから」
殺人鬼。お前は人外だけを殺す殺人鬼を名乗るのか。だとしても
人間と人外の違いとは何だ。人の怨念が人外の正体だとするなら、
呪いとして間接的に、人間を殺している事になる。けれどこの場合、
生は正、死は邪であると容易に当てはめる事は出来ない。

邪によって生まれる正がある。正によって生まれる邪があるのだ。
生かすは殺す。その清濁を合わせ飲んでこそ、人の間で生きる術
であると俺は思いたい。

芯の強い女なのだろう、コイツは。見上げた気概である。俺は、
もう少し彼女を見ていたい欲求に駆られた。

「俺は、お前を信じたいと思う」

呆氣に取られる答えだったのだろう。仰天を通り越して硬直している。当たり前だ、殺人鬼を肯定するような馬鹿、俺以外にそうはいない。

だが 二律背反を抱えて、罪の意識に苛まれて、人の環から外れ、独りぼっちでいる殺人鬼に手を差し伸べる馬鹿が、一人くらいは居てもいい。

「お前は真っ直ぐだ。俺がこう在りたいと願い、それでもまだそこに辿り着けない理想像だ。人間だから、人外だからと小さく考える俺には、そこまでの答えに至れない」

自分の信念を貫く。そこにはきつと、俺なんかでは超えられない壁が多くあるのだろう。これからきつと、俺もコイツも様々な障害にぶつかる事だろう。それを彼女がどう乗り越えていくのか、見てみたいと思うのだ。

「済まなかった。少しでも疑った俺を、許してくれ」

正義の殺人鬼。お前のように矛盾した存在、世の中に認められる筈がない。それでも俺だけは、お前の味方でいようと思う。いたいと思うのだ。

「い、いいえ、いいのよ。そんな、頭なんか下げないで。私、どう答えたら……どうしたらいいか解らないわ。今までそんな事を言ってくれた人はいなかったから」

それ以上は聞かずに、頭を上げて、真っ直ぐに瞳を見る。

「許してくれるか？」

「え、ええ、勿論。というか、許すも許さないもないのではないかしら。私、意地を通していただけなもの」

「ならいいんだ。それなら、仲直りの握手をしよう」

俺が差し出す手を、戸惑い一つも見つめる。

「仲直り……？」

「俺はお前を疑った。お前は俺の疑心を許してくれた。だから、喧嘩の後は仲直りだ。ごめんなさい、これからよろしく そんな意味だ。やった事ないか？」

「やった事ない。でも、やってみたいと思う」

恐る恐る右手を伸ばす。俺から掴むような乱暴はしない。そんなのは野暮である。指先が少し触れた。驚いたように引つ込められた。でもまた少しずつ近づけて、そつと、そつと触れていく。掌までそれが来た時、俺は優しく掴まえた。

小さい手だった。化物と戦えるようには到底思えない。けれどこの手が、この街を守っているのだと思うと……俺は、この手を好きになった。

「ファーツハツハ！ 一件落着のようじゃの、善き哉善き哉！ まあ、儂には最初からお主ら二人は気が合うと解っておったがな！ 仲良き事は美しき哉！ ハーツハツハ！」

突然真白が笑い出した。気でも狂ったのかと一瞬本気で思ってしまった位に奇妙な笑い方だった。まるで昔見た特撮ヒーローに出てくる悪役幹部のようでさえある。道行く人々の視線を独り占めにして、それら全てを観客に高笑いするような。

無理をしているようでいて、堂に入っていて、俺達は思わず苦笑してしまうのである。

「さあ、腹拵えと行こう！ 牛井は儂の好物の一つじゃ、楽しみじやの！」

いや、引き金になった最初の一言はお前が言ったんだぞ、とは思ったが、言わぬが華の結果オーライであろう。

真白が歩き出す。反対方向だ、というとターンしてまた先を行った。その際に見えた横顔の視線が、俺とヴィクトリアの繋いでいる手に注がれていたのは多分、見間違いはきつとないだろう。今まで独りぼっちであつただろう彼女の手を離す事が、今の俺には躊躇われた。

目的地についた。店内は空いていたのでカウンターに三人並ぶ。俺、ヴィクトリア、真白の順である。ちなみに、もう手は繋いでいない。

「すみません、店員さん。バイトの桐谷君呼んでもらえます?」

一言目にこれでは迷惑な客であろう事は百も承知だが、背に腹は変えられない。俺の金銭面を助成してもらわなければならないのである。

すぐにスタッフの制服に身を包んだ桐谷凍也が現れた。

「なんだよ、西村か……え、女連れ、だと……?」

ぺこり、と頭を下げる銀髪に、どうやら眼を奪われているようだ。解る、解るぞその気持ち。

「あ、どうも、桐谷です」

すぐさま俺に顔を寄せ、耳打ちしてきた。

「どういう事だ、お前、藤崎はどうした!? こんな美人でしかも巨乳、どこでどうやってつかまえた!?」

「詩音? 誰だそれは」

「存在すら!? おま、最低だな!」

「そんな事より、牛井奢つてくれ。俺の財布では三人分はきつい」
「お前何しにきたんだよ! たかりにきただけじゃねーか! ますます最低だ!」

「頼む、後で何か奢るから! 今回だけ!」

拜むように手を合わせると、渋々承諾してくれた。流石、空気の読める男である。

「後でいろいろ聞くからな」

「オーケー、了解した」

ご注文は、とすぐに営業スタイルに戻るところに慣れを感じる。

二年の頭に始めてから

もう半年近くになるだろうか。サマになっている。

袖を引かれ、そちらを見るとメニュー表を見せてくるヴィクトリア。
ア。

「ねえ、どれが美味しいのかしら。見ただけではちょっと解らないのだけど」

「トッピング無しの並盛りだな。俺としてはそれが一番うまく感じ

る」

「そう……じゃあそれにしましょう」

微笑が零れている。良い感じである。信頼の第一歩が上手く踏めた手応えに小さくガッツポーズなどしてみると、桐谷が言った。

「女たらしめ。死ね」

「ち、違うんだ……」

割と最近そうなっているような心当たりが多いので 俺はモチないので女性と接する機会が増えただけで、そう思ってしまうのかも知れないが 強く言い返せない。

「違わないだろ。携帯で写真撮って藤崎に送るわ」

「ま、待て、話せば解る！」

詩音がヘソを曲げたら、おじさんとおばさんからも酷いブーイングを受け、尚且つ隣近所からも村八分を受けかねない可能性が生まれてくる。あいつがマスコットキャラ的な人気を誇っているのは一体どういう理屈でなのか。

まあ、こんな一幕も、過ぎればいつか笑い話になるといいのだが。

食後の感想を尋ねると、概ね好評であった。心配のタネだったヴィクトリアの舌もセーフラインを超えた判定だったのでひとまず胸を撫で下ろす。店を出て歩道を歩きつつ、さつきから思っていた事を思い切って口に出した。

「なあ、ヴィクトリア。お前の名前って、長いよな」

「そうかしら。初めて言われたわね。ねえ真白、長いかしら」

「ん？ んー、どうでもいいな。ハッハッハ」

もう見慣れた真白の後姿、その肩が笑い声に揺れている。どうやら先頭を行かないと気が済まない性格のようだ。それにしても他人事である。

「どうでもいいって……酷い」

「だから、あだ名を付けたいと思うのだが」

これは俺の言い訳だ。名前を直接呼ぶのが気恥ずかしくなってきた

たのである。自分としても意外なのだ。少し強引でも、愛称を呼びたいところである。

ファーストネームなんて、恋人でもあるまいし、と。

「あだ名？ ニックネームの事？」

「そう、愛称。どうだ？」

美人というのも拍車をかける。構え過ぎだろうか。けれど銀髪姫よりは親しみやすいのを付けられると思うのだ。

「じゃあ、可否は私が決める」

「否決されても断る。否決を否決する的な」

「あ、不公平だね。減点ね。公正なジャッジを求めます！」

冗談交じりの軽い空気である。これなら楽に切り出せる気がした。
「勝利というのは、どうだ」

「シヨウリ？」

「ヴィクトリアとはローマ神話に出てくる勝利の女神だ。そのものが勝利を意味する言葉でもある。翼を持った女性の姿で、無敵のローマ帝国の象徴だった、らしいな」

「あら、詳しいわね」

「俺、さっきの友人から電話借りてた。その時にちょっとな」
事実、桐谷から借りた携帯電話で南清二と連絡を取るのが目的だったのもある。これはその時に教えてもらったのだ。流石、学校とは関係ない知識に豊富な友人であった。

勝利。変じてシヨウリである。こちらのが呼びやすいと思ったのだ。

「そもそも、ヴィクトリアを日本語にするだけで勝利と訳されるかな。特に変なニックネームでもないだろ？」

「うーん、そう言われると納得出来るけれど。でも、何だか恥ずかしいわ。その、二人だけの呼び名、みたいで……」

顔を紅潮させて俯かれると、こっちも恥ずかしくなってくるのは何かの連鎖反応なのか。

「くっ、そうか、これは思わぬ落とし穴……！」

ファーストネームを呼び合う親密さを軽減しようと工夫したら、更にダメージが加算される現象が起こった。これでは女たらしの汚名は返上出来ない。今すぐ濯^{すす}ぎたいというのに。だが一度言った手前、やっぱり今のナシと伝えてはこの顔を曇らせる事になるに違いないのだ。罪作りの女である。

「そうしていると、まるで恋人同士じゃな」
俺は叫び出したくなった。

そうこうしているうちに腹も落ち着き、ついに一時間後を迎える事となった。先に桐谷の携帯経由で南清二に訪ねたところ、この自然公園は監視カメラの配置が甘いのだという。死角が幾つか生まれているらしいので、それをポイントに侵入ルートを割り出す事にした。

途中、本職の刑事である銀髪 ショーリから何度か疑われたが華麗にスルーさせてもらった。違法な手段など使っていない。少なくとも俺は。

「入り口は丁度南の方角にあるとして。北西にスポーツ用設備、北東に観葉植物の保管された温室がある。このうち監視カメラの配置が甘いのは、北東から中心部に向かうルートらしい」

ガリガリと地面を小石で抉って、図を描いていく。

「しかし、中央モニュメントの天之岩戸は噴水から流れ出した水路に囲まれている。そこに並んだ花壇が、監視カメラの主な警戒ポイントのようだ。ここが問題。中央モニュメントへ近づく手段が、ない」

中心部の外周までは近づけても、それ以上近付くと発見されてしまうというのだ。赤外線センサー類もあるらしく、ここだけが異常に厳戒である。段差の高低も少なく障害物もない為、どうしようもない。

「^{ドラゴンズ・ホール}龍穴の中心部だからじゃろう。術式の基点にするには絶好のポイントじゃ」

「それ、前にうちの庭でも言ってたよな。人喰いの術がどうか、
こうとか」

それにはシヨリーが答えた。

「人喰い マンイーターの術式ね。最初こそ規模は小さかったの
だけど、それを見逃していたうちの部署も悪いのよ。私達の眼、霊
障眼でも見つけにくい、認識を逸らす術式を絡めた基点の生成によ
って秘密裏に拡大していったの」

霊障眼というのが、俺や二人の持つ人外の眼の正式名称なのか。

そしてその人喰いの術式というのが、あの停死病の正しい名前。

「術式ってのは？」

「俺が答えよう。呪いを構成するものについては先に伝えたな」

「ああ、人の精神だろ」

「そう。それを専門用語で ゴースト と呼ぶ」

幽霊の日本語訳ではないのかと思っただが、心理学の広義では精神
も入るらしい。

「精神は誰でも持っている。その精神を励起させ、大気中の霊子と
呼ばれる仮想物質を呼び起こす」

「霊子。途端にオカルト臭くなったな」

「然り。これは呪術の類じゃ。式とは元来そういうものである。こ
の霊子というのは世界中どこにでもある。地球の生命力が地表に満
ちている限りの場所ではな。ガイア仮説を知っておるか？ これは
な、地球が持つ生命力に我らが形を持たせるものじゃ」

「は、話が一気に壮大になったな」

少し急加速しているようである。仮想物質とは恐らく眼に見えな
い物質の総称であろう。そういったものに分類される精神が、霊子
を呼び出す。

ここまでではいい。

「そして精神と霊子が化合され、^{エーテル}霊子放射光が生み出される。この
合成過程で霊子放射光に指向性を持たせると、式は完成する。超常
の現象を引き起こす、言わば魔法じゃよ」

魔法という言葉に合点がいった。解りやすい単語に置き換えれば、その難解な言い回しも然程ではないと解る。

シヨールが口を挟む。

「化合過程で式が作用し始めると、仮想物質の持つ虚数言語が翻訳されて実数に変換されるわ。つまり仮想物質ではなくなり、誰にでも見える 現象 となる」

術式というものの概要は以上のようだ。話題は、それがどのように運用出来るのかというものに変遷していく。

「規模はどのぐらいなんだ、あと連発とか出来るのか？ 凄いオカルトチックで眉唾だが、実際に見せてもらう事は可能か？ 真白、お前は使えるのか？」

「うむ。しかし、問題があるぞ」
神妙に顔を澄ませて。

「人外の体は、精神で構成されている。そして奴らは滅び往く自らのそれを補完する為に、霊子を糧とするのじゃ。場を乱すとされる術式を使えば、それが呼び鈴となって奴らが現れる」

「な、わざわざ呼び寄せちまうのか！？ 敵を倒す為に使っても、それじゃ意味がないんじゃないか」

「然り。じゃが何も直ぐに集まってくる訳でも、大量の軍勢が現れる訳でもない。使いどころを誤らなければ、我らの強い手助けとなるじゃろうよ。」

さて、そこでヴィクトリアじゃ。いや、今はシヨールじゃったか？」

からかうように言うと、彼女は首を振った。

「貴女には呼ばれたくない」

「フフ、そうかそうか。解った、そう呼ぶのは誠だけ。そうじゃない？」

止めてくれ。話がおかしい方向に飛んでしまう。

「それで。ヴィクトリアの扱う術式は特別製でな。何が違うかというと、その精神^{ゴースト}じゃ。生まれ持った性質として、深層心理 心象風

景が魔を祓う破邪性を持つ。これはお主の近くによくいる、朝霧の巫女よりも強いぞ」

「あ、朝霧？ 時雨が、どうしたって？」

「あの者は破邪の血族でな。純粹な真血として恵まれた体を持つておる。並の人外では近付く事も出来んよ。」

話を戻そう。ヴィクトリアだけは、術式を使っても魔を祓う性質により、人外を呼び寄せる事はない。銀は魔を祓う色じゃからの。あの髪も眼も、そこから来るものじゃ」

では、あれは。生まれた時に親から受け継いだものではなく、術式の使用によつて変色した色だというのは？ であれば、確かに、それは俺の赤い眼 変色する眼と同義であろう。

いくつかの言葉を思い出す。怪異は実在する。だがそれに対抗する術も、また確かに在るのだった。

考えてみれば当然であつた。監視カメラの配置が甘いとされた北東からの侵入ルートは、自然公園の周囲を囲うフェンスではなく、周囲一帯が高い外壁だったのだ。恐らくスタジアム建造の名残であろう、野球のボールが外へと出ないようにぐるりと配置されていた。これでは侵入出来ない。到底人が登つていけるような高さではない。見上げる程である。落ちたら骨折、打ち所が悪ければ即死であろう。

「ふうん。そういうばこだけ高いのは何でだろうって思つてたけど。そんな理由があつたの」

シヨリーは得心がいった様子でウンウンと頷いている。事はそんなに軽くないと思うのだが、どこか余裕さえ覗いている。

「まさかシヨリー、これをどうにかするつもりか？ さっきの術式とかいふので」

「まさか。こんなのをどうにかしたら始末書で済まないレベルよ。そもそも発想が乱暴ね。こういうのはね、飛び越えるに限るの」

空を指差す。簡単に言ってくれるが、人間には到底無理であろう。

目測で二十メートルはありそうな高さである。

「飛ぶのか。そうか。よし、話は解った。お前が出来るっていうならそうなんだろう。それで。俺はどうしたらいい？」

まさかまさかのまさかで、俺にもそんな隠れた才能があつて靈障眼の力でどうにかこうにか出来ちゃつて、まさかにも飛べてしまつたりするのではないか

そんな都合の良い話を、シヨリーは粉々に打ち砕いた。

「私が抱えていくわ。真白は、まあ、自分で何とか出来るわよね」

「応とも。こんなもの、ひとつ飛びじゃ」

しかし、抱えるという言葉に疑問が湧く。俺と手を触れるだけであんなに戸惑つていたシヨリーが、そう簡単に男である俺に触れるのか？

「大丈夫、不安だろうけれど私を信じて。すぐに済むから」

そう言つて近付いてくる。

「待て、お前、どういう事が解つてるのか？ 今度は面積が違うぞ、あんなちよつとした接触どころでは済まない話なんだぞ！？」

「え？ 大丈夫よ、連続跳躍による短距離移動だから。飛翔ではなく跳躍なの。フライではなくジャンプ。解るかしら」

「解つてないのはお前だ！ だから、真白！ ちよつと助けてくれ！」

真白は、もういなかった。悪役幹部のような笑い声に見上げれば、遙か空高く舞い上がっている。

「フハハハ！ 若人の戸惑う姿ほど面白いものはないからの！ さあ早くこい、恋人のように抱き合つて！」

え、という戸惑いの声に、俺は視線を下ろした。真つ赤に染まる顔はもしかして今まで気付いていなかったのか。成る程、自分の提案で自滅した形である。

「い、いや、これは、必要な事なので、何というか、」

「ああ解つてる。いいのかどうかはともかくとして、これは必要な事だ。それは俺にも理解出来る。で、だ。どうやって俺を抱えるつ

もりなのかを尋ねたいのだが」

あわあわ、という様子で慌てふためく様子に、思わず微笑みが零れた。だが笑ってばかりもいられない。コイツもコイツなりに、苦しんでいるのだらう。例を出すならば、詩音の背中に残る火傷のよう。本人が望まない形で持ってしまった欠点。それを笑うなど、男として恥じる行為である。

「済まん。お前がどうしても出来ないというなら、真白に頼む。でも多分、アイツなりにお前を思いやっての事かも知れないっていうのは忘れないでくれ」

シヨールは、真剣に言葉を続ける俺を見て次第に落ち着いていった。

「欠点というのは自分が望まない形で存在するものなんだろう。真白や俺は、お前にそれを持ち越えて欲しいと思っている、んだよ。別に、男を好きになれとは言わないけどさ。手を握れたら、次は腕次は肩を貸すくらいには、って感じで、ゆっくりステップアップしていけば、何とかなるんじゃないか？

どうだろう。それでも無理そうなら、今回はやっぱり真白に頭を下げて、」

真摯に俺を見ていたシヨールは、その言葉を遮った。

「待つて。君の言葉は納得出来る。私、やってみたいと思うの。だからお願い、協力して欲しい」

「いやいや、お願いするのは俺の方なんだけどね」

互いに苦笑して。どちらともなく、手を差し出した。

「肩を、私に預けて」

ゆっくり触れていく。肩に手を回す。シャンプーの良い匂いが鼻に届いた。頭がクラリとする。女性特有の細い肩。折れてしまいそうな錯覚さえする。

「……大丈夫そうか？」

こくこく、と頷く顔は真っ赤だ。それに触れてみたくなるのは、男として刺激されるからだらう。流石にこれで長い時間いられると、

色々まずい。そのスタイルの良さも相俟って、バストの膨らみに嫌でも眼が行く。詩音よりも一回り大きいだろう。豊かである。

そろそろ、と俺の腰に手を回してくる。こんな小さな手で、折れそうな腕で俺の体が固定出来るのか、と不安になったが、次の瞬間、不思議な光を視界に認めた。

銀色に光る文字が、シヨリーと俺を中心に描かれていき、やがて二人を囲む円環となる。透明な文字盤　腰の高さに浮遊するそれは、半径にして一メートル程であろうか。

「これは……？」

「シャンデリア。私の精神と^{ゴースト}霊子の化合効率と、それらが^{マナ}霊子放射光へ変換される時の効率を高めてくれる、オールド・ミスティクよ。この中にいれば安全だから」

よく解らない。テンパっているのもあって頭に入ってこないのもあり、そうか、と生返事をして視線を戻す。視線同士がぶつかった。逸らす。戸惑いがちに、また交わる。どうしたらいいか解らずにいと、優しく微笑んでくれた。

「す、済まん」

「いいえ。良かったわ、君が誠実な人で」

「な、名は体を表すからな！」

どうにかそう返し、しゃちほこばって声を上げる。

「じゃあ、頼む！　俺をあそこまで連れていってくれ！」

「ええ。喜んで」

途端、今まで味わった事のない、急激な加速が体にかかった。エレベーターの浮上感など比べ物にならない程の、内臓が下にもって行かれて体の上半分に隙間が出来るんじゃないか、等という下らない危険意識さえ抱く。

「あ、わっ　！」

おかしい。人間では不可能な、ジャンプだ。空が一気に近付いた。高い壁を飛び越え、上を見れば星がよく見える。綺麗な夏の、澄んだ空だ。視線を下ろすと、街の明かりが見下ろせた。宝石箱が輝い

ているような夜の風景である。風が強い。耳元でびゅうびゅうとうるさいのだ。それに、何故だか思ってしまう。

こんな事が出来る。人間だって、こんな事が出来るのだと。鋼鉄の翼をジェットで吹かして強引に空を飛ぶよりも、ずっと何倍も素晴らしい感覚。恐怖は勿論、ある。けれどこんな事が出来るなら、人はこの先もつとずつと進化していけるような そんな感慨さえ抱ける光景なのである。

空を跳ぶ。その感覚は、しかし落下と共にあった。

「う、うわあああ ！」

ジェットコースターの急降下。あんな感覚で一気に地面が近付いてくるのは恐ろしいと言えない。もしこのままいったら、自分の体はトマトのようにぺしゃんこになってしまうのではないか。恐れと戸惑いに、掴む力が強くなる。どうしたらいいのか解らない。

そんな俺の耳元に、声が届く。

「大丈夫。私を信じて」

恐らくは俺を安心させる為に言ったのだろう。それでも、それを冷静に受け止めるだけの余裕は俺にない。掴む力は増し、ついに右手も使つてしがみ付いてしまったのは意識が恐怖で埋め尽くされ、助かりたいという本能的な行動だったのだろう。

それでも、背中に回された両手を温かいと思ったのは、錯覚ではなかったように思う。

着地の衝撃は、殆どなかった。気付いたら地面に立っていた、くらいのものである。一体何がどうなったのか解らないが、とにかく足が地面に付いている。まだ浮いているような感覚があるが、多分ジェットコースターと同じで、しばらくすれば治るだろう。

「はっ、はっ、」

息が荒い。硬直していた全身が一気に弛緩する事による脱力感が尋常ではない。俺は思わず尻餅をついた。弁明の為に言わせてもらえば、命綱も何もない状況でビルから飛び降りるようなものである

う。こうならないほうがおかしいのである。

「し、死ぬかと、思った」

「あら、心外だわ。私が制御を誤ると思ったのかしら。減点ね」

腰に手をあてて憤りを露わに　否、憤りのポーズを取っている
シヨリーは平然としていた。顔には微笑が浮かんでいる。あれで何
ともないとは、豪胆な女である。

「あんなの、怖がらない方がおかしいぞ！　全く、足が竦んじまっ
た」

傍観していたであろう真白が、降りてきた。というのも二十メー
トルの高さからのそれが、すた、というような軽いものであるのは
一体どういう原理なのか。もはや驚く気力もない。これが全部術式
のおかげだというなら、もう機械文明を一蹴出来そうである。

「さて、行くぞ。誠はまだ動けなさそうか？　ならヴィクトリアに
肩を貸してもらえ、ここは既に敵地である。あの男　　レイスの手
がかり、必ず掴むぞ」

聞き覚えのない名前に、言葉を返した。シヨリーの手を借りて、
立ち上がる。

「レイス？　そいつは誰だ、前にお前が言ってたブラインドネスつ
てのと関係あるのか？」

「ブラインドネスか、ジャック・ハンター事件の犯人に最も近いと
言われる人物でな。そやつが最有力候補なのじゃ。しかし巷で頻発
している突然死現象を起こしている人喰いの結界は、その施術を担
当したのはレイスじゃとされている。

異なる二つの事件、二人の犯人。どちらもPMCランツクネヒト
が関わっておる。

そして、もう一人」

照明のない暗闇の中、せめて肩を借りているシヨリーの足を踏ま
ないよう、気をつけて進み出した。

「もう一人？」

「そう、ランツクネヒトの傭兵は三人一組を基本体系とする。
スリーマンセル

レース、ブラインドネス、そしてラーク。この三人の暗号を忘れるな。そして何よりも、一筋縄ではいかぬと思え」

先に行く真白の言葉に、俺は緊張と恐怖を唾ごと飲み込んだ。

第三章 銀髪姫（3）

以前、シヨーリに取調べを受けていた時に言われた事がある。それは、人外は環境が悪くなると消滅する、という内容だ。そして今日また言われたのが、人外は人間の精神が生み出す怨念だ　　というもの。

整理しよう。人の精神から生み出た呪いとして存在する人外は、時間を経る毎にその存在強度を増していく。では、環境が悪くなると　つまり糧とする霊子というのがなくなると、彼らはその存在強度を保てなくなり、呪いとしての構成を維持出来ず、自然消滅する。ここまでは問題ない。

新しく判明した要素　人に化ける　というのがなければ、だ。

何故、天敵とも言える程に敵対している人外が、わざわざ人間に擬態しなければならないのだろ。そこまでして人間に近づく真意が見えないのだ。

無論、人間を観察しているという可能性もある。何時、どんな時、どのように隙を晒すかというのを虎視眈々と見つめているのかも知れない。

だが人外に、そんな知能はないと俺は思う。何故なら彼らは人語を解せない。本能のレベルで擬態を生態の一部として組み込んでいる生物は確かに多い。カメレオンを代表に蝶の羽根、蛸や鮫鰐も風景の一部に擬態する。それらを念頭に置いて考えれば、それは生態系として何らおかしくはない。俺が知る限りは、であるが。

人間への擬態。社会人や学生への擬態。言葉や精神活動はどうなっているのか。それまでその人間が行ってきた行動アルゴリズムを観察して表面上だけ模倣しているのか。この時はこう受け答える。こういう表情筋の動かし方をする。そういう観察を、あの霞の影のような状態でしているとしたら。確かに、そこには人間社会へと入り込む擬態の方法として頷ける。

俺がどうしても領けないのは、霊子というものを糧とする、という点について。人の精神にそれが含まれている等という説明は、今まで一度も為されていない。では何故、人外は人間を襲うのだろうか？ 怨念だから、呪いそのものだから。それだけでは説明がつかないだろう。何故、あの人外　モデル・ウルフと呼ばれる影絵の狼は、ジャック・ハンター事件の元凶の一因として挙げられているのか？

「使役されているのよ。人の手によってね。それを行っているのが、レイスという人物、その人がこの街に張った、マンイーターの術式なの」

人に、操作されている？ そんな事が出来るのか。ではそれは同じ人間を、人間が操っているという事にもなるのではないか。

「厳密に言えば、あのモデル・ウルフは自然から生まれたものじゃない。人の精神を強引に寄せ集めて造られた、人工的なモデル・ウルフ」

繋がる。だからこそその人喰いの術式だというのか。あの停死病は、そうやって人から精神を抜き取っていたから、ああも不自然に、病気や怪我の兆候もなく死に至るものだったのか。

「自然から生まれたモデル・ウルフは本来人の集まる場所に寄って来ないのよ。私があの時暴走と言ったのは、その説明を省いて便宜的に伝える為。ごめんなさいね、詳細を誰にでも伝える訳にはいかなかったから」

「気にするな、お前の判断は正しいと思う」

「ありがとう。それで、寄せ集めとして造られたモデル・ウルフを触媒とする方式を用いる事で、彼らは自然体であるモデル・ウルフを街の外から引き寄せ、戦力として操っている。そんなところかしらね」

先頭を歩いていた真白が立ち止まった。

「触媒。つまりは使い魔じゃ。こやつと同じ、な」

足元にはあの白い猫。チリン、と首輪の鈴が鳴った。猫が使い魔

というのは、どういう事なのだろう。

「切り取られた儂の無意識じゃがな。形が猫なのは故あつてのものじゃ。それで、使い魔を触媒とする事で儂自身にもこの猫の見たもの、聞いたものを感じる事が出来るのじゃよ。一心同体と言ったところかの。じゃがレイスの行っている遠隔操作系統の術式はそうではない。触媒とされる人工型モデル・ウルフがある意図性を持ったゴースト精神を送信し、一方的に受信させる事で周囲の自然型モデル・ウルフへの救難信号としておる。

そして仲間を助けようと集まった人外が、人間へと攻撃する。レイスを司令塔とするなら人工型が中継塔じゃな。そして下働きする端末が自然型」

なんて事だ。仲間を助けようとする想いを利用して、戦わせているという事ではないか。

「そんな、じゃあ、自然タイプの人外って、ただ仲間を助けようとしてるだけじゃないのか？」

シヨリが、俺を見た。銀色の眼が、樹海の暗闇に光る。

「そう、彼らにも集団意識がある。けれど自分から群れようとする習性ではない。必要であると全体に、無意識に統一されなければその行動しない」

「仲間を助ける。その行動を利用するなんて、外道だな」

「同感だわ。けれど敵に情けをかけてはダメよ。司令塔と中継塔が存在する限り、彼らはずっと戦わされ続ける。これからもそれが続いてしまう。だから、一刻も早くこの事件を終わらせなくちゃいけないの。それが一番良い方法。でしよう？」

確かにそれが最良となる方法だ。だから真白はレイスという男の手がかりを探そうと言ったのか。単純な馬鹿のようできて、実は全体を考えていたのか。

「俺だって、敵に情けをかけるような馬鹿じゃない。そんな余分な感情は持っていないよ」

敵なら倒す。以前も一度やったのだ。そこに迷いはない。けれど

人外にも情があるかと思うと、胸にスツと降りていかない、気持ち悪いものが残るのは何故だ

真白の猫がすり寄ってくる。足の竦みも取れてシヨリから離れていた俺は、そいつをそつと抱き上げた。

「よ、どこ行つてたんだ。暗いからな、お前みたいなチビは誰かに踏まれちまうぞ」

何故か、真白が震えている。心なしか声もだ。

「……抱き上げるな」

何がダメなのだろう。猫自身にも自我があつて、こんなに俺に懐いているというのに。

「ええい、さつさと離さんか！」

赤面して地団駄を踏んだ。もしかして触られている事も真白に伝わっているのだろうか。そうやってフィードバックされているというのなら、俺にはやるべき事が出来た。

猫の頭に顔を寄せる。ふっと息を吹きかけると、やはりというか猫と真白は同じタイミングで眼を閉じた。ぴくぴく、と動くその耳に齧りつく。

「ふあっ!？」

とは言つても甘噛みである。唇で食むような程度だ。嫌がる猫に笑いかけて、地面へと下ろした。

「どうした真白、しゃがみこんで耳を押さえて。ハハン、さてはお前、耳が弱いな？」

変態の所業である事は認める。しかし猫好きであるところの俺は平気でこんな事も出来る重度の猫ラーだ。いずれは猫型ロボットの耳も齧りたいところである。

「いや、しかしそんなんでは大変じゃないか、四月とか。猫は発情期」

「ええい黙れ！ 破廉恥な真似をしおつて、殺すぞ！ それと使い魔は発情せんし、いつもは感覚の繋がりを切っておるわ、妙な想像をするな！」

文字通り眼を光らせる真白は鬼気迫る様子である。俺は諸手をあげて降参した。怒って先に行ってしまう真白に続く、俺とシヨール。「西村君って、もしかしてヘンタイなの……？」

「いや、猫が好きな猫ラーだ。やがては俺も猫になりたいと思っている」

「変態だ！」

「うるさいな。いいからお前も猫になれよ。きっと素晴らしい世界が待っているぜ」

もはや願望どころかそれを押し付けるはた迷惑な妄想である。俺の前世はきつと猫だったに違いない。何で人間などという不便な生命に生まれ変わったのか、神様がいるのだとしたら尋ねたい。かくも世界とは不条理なものである。

すると、シヨールは俺に聞こえないようにであろう、小さな声でぼそぼそと言った。

「……にゃんにゃん」

「今なんて」

「いえ、何も」

「いいから答えろ！ 今なんつった！？」

怒髪、天を衝く勢いで凄む俺にシヨールはドン引きなようだった。

真白が猫を出したのは この使い魔というのは術式の中でも常駐型という派生種のようなのだ。出現、消失は任意らしく、あの神出鬼没性にも納得が行く。その動物としての嗅覚や聴覚を利用する為という。監視カメラの動作音や赤外線センサーの熱を、猫の耳や髭で感じ取るという目論見のようだ。

成程、流石は猫、伊達にかわいいだけではない。

「今、何か不穏な思念を感じたな。欲に塗れた危険なものが」

「気のせいじゃないか」

「お主な……これから一戦交えるかも知れぬというのに、何故そうもいつも通りなのじゃ」

道なき道から遊歩道に出た。細かい砂利が敷かれた観光用の道だろう。湖の傍を通る為、たまに何かの跳ねる水音がした。それらに餌をやる為のものだろうか、木組みの小屋が湖の中心近く、棧橋の先に位置している。

この遊歩道はレクリエーション森林内に設置されている歩道のうち、専ら森林浴、自然観察等を主目的とした、自然観察路、或いは自然研究路である。

この先に、あの閉鎖領域　十年前から閉ざされたままの中央モニュメント、天之岩戸がある中央広場に辿り着く。

俺は真白の言う通り、これから何かが起こるという緊張は感じている。恐らく戦う事になるだろう。左手に握る刀袋　その日の本刀、桜吹雪を使うのだ。

「俺は流れに逆らわないからな。自然体が一番、力を発揮出来ると知っている。少なくとも俺の体がそうだから」

不自然な力みは、力の伝達を妨げる。最初、足の指から生まれた力が足首を通り、脛脛を通って大腿、腰、背中に至りて肩を過ぎ、腕を手を指を、そして刀へと到達して剣とする。それが西村の剣、ひゃくしきかつせんほう百試合戦法が旨とする剣技である。

余計な堅さ、不自然な力の入りはその力の流れ　勁けいを滞らせてしまうのだ。それは普段の生活の中から心がける事で、より一層の洗練がされていくものでもある。重心移動や単なる屈伸、どこるか普段の歩行でさえも俺には鍛錬となる。本来なら勁とは拳法に使われるべき、発生させた運動エネルギーを接触面まで導き、作用させる技術だ。つまり西村の、それを剣技に取り込んだ先々代、西村雅久が　ヤツの頭が狂っているだけである。

俺の体そのものを一振りの刀とする　その為だけに、俺を生かしてきたのだから。

「そういえば、その手に持っているのは刀なのよね。君も剣を使うのは、あの日に見ているけれど、刀には少し興味あるなあ」

「お前ほどの腕じゃないが」

「あら、お上手」

故に、ちよつとした動作の機微で解るものだ、相手も剣を使うかどうかというのは。それから言えば、このシヨールも剣士であろう。だが、日本のもののような柔を由とするものとは、少し趣が違うように思える。恐らくは、一撃必殺の剛剣だ。

途中、遊歩道の脇に植えられている植物に南国産らしきものを見かけたり、野鳥の羽ばたきや梟の鳴き声、樹木が造る緑の洞窟など、シヨールはしきりに興味を惹かれていた。

このシヨール、もしかやと思ったがやはり世間知らずのようである。牛井の件から鑑みても、偏った一般常識のみしか持っていない。何かがおかしい、ズレていると思っていたのだが原因はそれのようだ。恐らくこういった場にも来た事がないのだろう。

アンバランスでミステリアスな女は、どうにも放っておけない魅力を持つ。先を行く真白にも、それは言えるのかも知れないが。

やがて、広場に出た。ここまで難く来れたのも、やはり桐谷と清二の協力あってこそだったろう。心の中で感謝を述べると、噴水の音に眼をやった。足元から円状、外回りをぐるりと囲む水路から水が湧き出し、窪んだ中央へと流れ込む細い水路が四つ。その傍ら、彩りを添える花壇の花は水が起す僅かな風にその花卉を揺らしている。

そして 巨大な岩塊が、中央にあつた。全体は灰色で、しかしどこにも岩らしいところのない、石のようでもない 構造物。

元来モニュメントとは個人、事件、思想などを顕彰し、記念して、永久に残すことを目的とする作品のことを言う。すなわち記念的造形物一般を指す語だ。今回のこれも神話を今に伝える、歴史的価値を持った記念碑としてある。

だが、この天之岩戸にはおかしな話も多い。本来ならばここまで侵入出来ない現在だから 天之岩戸は普段、市民の眼に触れる事はない 解る事がある。

何故ここまで巨大な物体が記念碑としてあるのに、それを一般公

開していないのか。公式見解ではまだ未完成だと言っていた気がする。そこでショリーに聞いた。

「外事四課の情報規制よ。これには膨大な霊子が内包されているの。それだけじゃない。物質なのに、精神ゴーストを含んでいるとも言われるわ」
「これ、岩だよな。石のようでもあるけど……それなのに、精神がある？　生きているって事か？」

「解らない。これが何なのか、研究していた人は皆、変死してしまったわ。或いはジャック・ハンターの犠牲者、或いは人喰いの結果、そして或いは、違法な薬物に手を染めて」

「何だよ、それ。つまり、ランツクネヒトだったか、そいつらに殺されたも同然じゃないのか？」

「そうね、だからこれは彼らに何らかのメリットを齎すのだわ。例えば、術式の基点として」

そうか、傭兵達の目的に、これは必要なものなのだ。だったら壊してしまえば、その目的も途絶える事になるんじゃないのだろうか。「妙な事は考えるなよ、誠。膨大な霊子と聞いたじやろう。これをどうにかしてしまえば、場を乱すものを攻撃する人外が現れる。それに、龍穴の中心部　これがなくなれば、この直下数十メートルにある龍脈の分岐点が、そこに蓄えられた霊子の流れが、あふれ出してくる。そうなれば　人外のステージ？　が黙っておらんぞ」

何だろう、真白の言葉は切羽詰っているように聞こえる。龍穴、龍脈、分岐点そして人外のステージ？。何かがまずい事になるというのだろうか。なら、壊すというのは　そもそも壊せるのか、その方法も浮かんでいなかったが　止めておこう。

疑問はそれだけではない。外周部の水路から中央へ流れている水は　外周部からおよその目測で直径四十メートルの噴水広場である　中心部の天之岩戸へ集まっている。水の中に浸されている形だ。だが、一向に水嵩みずかさが増す様子はない。これはそういうふうに機材が調整しているのだろうか。

そうしていると、真白が急かした。

「どうじゃ、誠。何かおかしなものは見えるか。術式の基点というのは円にしてメートル程のものが一般的じゃ、先も見たであろう、ヴィクトリアの術式。あの文字盤のようなものじゃよ」

あれと同じ見た目を探せ、という事か。なら、まず一番怪しいあの岩を見てみよう……………特におかしなところはない。月光降り注ぐ庭園の象徴として、静かに鎮座しているだけだ。外見に妙な瑕きずがないかを探す。距離があるので本当に細かいところまでは解らないが、そこに一定の意図性を持たせたもの。例えば円状であるとか、があれば見てとる事が出来るくらいの明度だ。角度が悪いのかと外周を回る。そのついでに水路の位置、花壇にも目をやったが、どうも見つからない。

白い煉瓦を並べ、積み上げた花壇と石膏が使われている水路、まるでギリシャの神殿にも通じる装いを、堪能しただけだった。

その時だった。背後に視線を感じたのである。

西村誠は、敵意に敏感だ。それが敵意の最も濃厚な形、先鋭化されて尖った意志を持つていれば、それは既に敵意ではなく殺意である。であれば、俺が気付かない道理はない。

ガサツと音がする。葉を踏んだのか。音の高低、地面を踏む音から体重を導き出す。成人男性のようだ。レイスというやつか。警備員がこれ程まで強い殺意を持っている筈がない。敵である、と判断し、膝を少しだけ曲げて腰を落とす。左手に握る刀袋を腰溜めに右手を添える。まだ封は解いていないが、何やら殺意の規模が尋常ではないのだ。僅かな違和感、冷や汗。これはまさか、相手の姿が見えないこの距離で、既に。俺は。

敵の射程距離まあいに、踏み込んでいるのでは？

樹木が造る緑のトンネル。そこに佇む人影。そこまでは見える。だが、ソイツがあゝの影絵の獣と同じように見えるのは、何故だ。トンネルの暗がりだからか。それにしても異質さが覗く。影や暗闇とは違う、切り取られた風景の穴。

人影が屈んだ。俺のほうへと一直線に 跳んだ。

「なっ、」

ジャンプである。あのショーリの大ジャンプを、そのまま突進力へと使ったようなものだ。たった数歩で数十メートルの距離を潰すその勢い、人が為し得るものではない！

閃いたのは白刃一振り。刀使いだ。その切っ先を俺に向けて、突きだしてくる。俺は膝の力を抜く。決定的に変わる、意識の流れ。集中力が増し、反対に眼の焦点は合わなくなっていく。諦めたのではない。足の裏に体重を偏在させ、均等にする事でどの方向への移動も行え、且つ瞬間的に体重が消える事で、刹那、足が浮く感覚が起こる。体重が擬似的に消えていると言い換えてもいい。これが起こる一瞬に体重移動を行うのだ。

この人影がやったのは、地面を蹴って、速く移動する。跳ぶ、というものだ。だがそんなものは反対側の足に体重をかけ、重心を移動した時点で読める手の内である。行動の起点が存在する以上、そこには先が読める理合いが存在するという摂理だ。

無論、移動途中での速度ならばあちらが圧倒的に速いだろう。だが、初動に限ればこちらの方が段違いに速い。そして行動の起点が存在しない事により、動きが読めない。

しかし相手も然るもので、この技術、膝抜きを使っても、掠らせてきた。だが制動に苦労するようで、地面をガリガリと削ってようやく止まる。ここは遊歩道、下は細かく敷き詰められた砂利だ。アスファルトよりは接地圧が逃げやすい。対してこちらの膝抜き、制動に必要な力は極端に少ない。当然である。余分な力などどこにもいれていない。自然体の回避だ。

相手が立て直すまでの間に刀袋の封を開け、柄を取り出した。一息に抜刀し、ズボンのベルトに刀袋ごと、鞘を差し込む。後々の事を考えると、投げ捨てる訳にもいかないのだ。

人影は静かにこちらを見ている。やはり、人外の体を持ち、それでいて人間の形をしたもの。真白の声が響く。噴水広場を挟んで丁度反対側だ。

「逃げる！ そやつはPMCの傭兵、ブラインドネスじゃ！ ええ
い馬鹿者が、一人でやりあう気でいよる。ヴィクトリア、お主は反
対側から回りこめ！」

それに眼をやった異質の人影　ブラインドネスと呼ばれたソイ
ツは、左手を動かした。途端にザワザワと森が騒ぎ出す。感覚で解
る。眠っていた自然が起きたのだ。

夜の気配が、滲み出す。人外　モデル・ウルフの群れが、どこ
からともなく現れては二人を取り囲んだ。

「邪魔をするなよ　真白」

そう、言った。俺ではない。この眼の前にいる人影が言ったのだ。
真白を知っている。

「お主、まだ　まだ、このような事を続けておるのか」

ブラインドネスの表情は見えない。全身が黒い。何故かロングコ
ートを着ているらしく、裾がはためくのが解る。季節に合っていな
い。だが暑そうにもしていない。あれは、まさか、温度が解らない
のか？　暑さに耐えている様子がない。今が暑いという事も、今が
夏だという事も理解していないのではないのか。

真白が何かを手に持ったらしい。それを見るブラインドネスの視
線を追うと、真白は右手に小太刀を、順手　刃が親指より上にな
る、本来の持ち方に持っている。ただし左手が逆の手で、刃が小指
よりも下にあつた。

「白雨と鳴神、二刀一対の四季刀、五月雨入道か。お前もようやく
その気になつたみたいだな」

小太刀を二刀流として両手に持つ真白は、忌々しげに口を歪ませ
た。

「狂ったお主を救うには、もうこれしか残されておらぬからの。誠、
そやつの動きには警戒しろ。ブラインドネスとは己が盲目なのでは
ない。相手の眼を騙し、己を視せない事にあるから来る名じゃ」

合点がいく。だから表情までも見えない黒さなのか。人外の性質
を纏っているのか。それなら頷ける。人外が人間の皮を被って擬態

出来るなら、逆も然りであろうという事だ。

「まこと……マコト」

ブラインドネスが、ゆらりと動いた。俺の眼を、視ているのが解る。

「忌むべき鬼子、先祖帰り。お前は殺す、今、ここで」

ぶつけられる殺意。飛び出してくる人影。上段からの力任せな一撃に、俺は眼の焦点を合わせず、刀身で剣筋を逸らそうと

「受けるなあっ！」

直前で止め、右足を引く。半身になる形で斬撃を避けたのだ。地面へと刺さる剣は、到底人の力とは思えない程に軽々、砂利を引き裂いていた。重機で上から踏み締めた、遊歩道をだ。

物理的なパワーが桁違いだと解る。コイツは俺とは違うタイプだ。刀を殺人の道具としか見ていない。力で以って殺す事しか考えていない。

ブラインドネスが一步退く。狙いが見えない事に、次の一手を出しあぐねているのだろう。俺の眼 焦点を合わせないという曖昧な状態で維持しているのは、この為だ。相手も剣使いであればやりようがあるのである。次に何をしてくるか解らない、という心理的有利、戦略的優位性を形成する事で、西村の百式合戦法は場を制するものとする。

そして、逆に俺には見えるのだ。西村誠には視えないものを見る特技がある。敵意や殺意、それに類する意志の流れさえも。集中力を増す事で、その技能は向上する。

曖昧な気配というものではない。視覚的なものとして実際に現れる。幻覚か幻視かは解らないが、この時、相手となるブラインドネスの剣筋は全て単一の線 として軌跡が浮かぶ。どこからどう来るのかが見えるのだ。

先に明言しておく事にする。これは既に予知能力に近い。この優位が崩れない限り、俺に負けはない。

睨み合っていると、横合いから光が溢れた。真白ではない。シヨ

ーリ ヴィクトリア・ダイヤモンドがいる方向である。ブラインドネスが油断なくそちらを見やる。

「健在じゃないか、銀髪鬼」

先に見せてもらった白い文字盤 シャンデリアはその半径を二メートルにまで広げている。だが見慣れないものが背後に浮かんでいた。背中から少しだけ離れた場所、それこそ懐中時計の文字盤染みた形で浮かぶ、十二本の 剣だ。

ここに来るまでに、彼女の術式については大体のところを聞いている。これの概要を耳にした時は、瞠目したものだ。

剣つるぎの冠かんむり、ソード・オブ・クラウン ミスティック・アームズ 術式兵装と呼ばれる、内包ガイ概念ストという功的意図性を持った媒介が、それを解放する事で現象を
変移させる武装。術式と銘打たれてはいるが、これに術式は関与していないらしい。

これは単純に超常現象 厳密には事象変移であるらしい を起こすのだ。術式が同じ超常現象を起こすものであるからその名を冠されたという共通点と、もう一つ根拠がある。彼女が言うに内包ガイ概念ストを解放する時は精神を消耗させるようである。この兵装と自身の精神を繋ぐ接続子を術式回路と呼ぶ。

これは術式が霊子放射光に式を加える時、出力される通り道であると聞く。

出力されるだけの通り道を、入力する為の接続子として変換している。それはこの兵装を呼び出した時点から常に消耗している事を意味する。

十二本のソード・オブ・クラウンは自在に飛び回り、モデル・ウルフの体へと突き刺さってはその姿を消滅させていく。後には何も遺らない。魔を抜く破邪の剣。ここにきて俺は真白が彼女を呼んだ理由を、本当の意味で理解したのである。

彼女へと襲い掛かるモデル・ウルフは全てがその白い文字盤文字群は外円部にしか位置していない シャンデリアによって食い止められる。三百六十度、幾つもの円環が軸をずらして回転し始

め、彼女を球状に包んで廻る。文字通りのバリアである。あれを突破しなければ、彼女への攻撃は届かないのだ。しかし شانデリアに気を取られると、たちまち十二本の剣が死角から襲ってくる。

攻防一体の術式兵装は、しかしその消耗も激しいと聞いている。なるべく速く決着を付けなければ、と思う。

ブラインドネスが向き直った。俺を見る。今、俺の眼は赤いだろうか。自分では解らない。そうしていると相手は正眼に構えた。腰の前に柄を持つてくる、正当であり常の構えと呼ばれるもの。剣術の基本である。

何か、違う。さっきまでとは空気が変わったように思う。このブラインドネス、人外ばりの臂力に頼っているかと思えば剣の心得があつたのか。

清廉な空気が纏われる。周囲には戦闘で生じる音が響く。真白の剣戟、シヨリーの剣が飛び交う飛翔音。けれどそれら一切を無視して、俺達は二人の世界へと没入していく。

俺は下段に構えた。構えの種類の中では最も使えないとされるが、防御を主とした場合は後の後を取れる事もあり、確実な勝利を見据えた場合、その用途に価値が見出せる。

息苦しいまでの緊張感。集中力が高まっていく。周囲の音が遠くなり、呼吸が止まる一瞬に。

振り上げ、袈裟切りに打ち込んでくる相手の剣筋が、視えた
「っ！？」

俺はバランスを崩した。予想外の剣筋が鼻先を掠める。膝をつく。視えてしまったが為に動揺が走る。すぐさま切り上げが襲ってくるのを、刀身で受け止めた。驚異的な腕力。体が浮き上がり、後ろに仰け反る形になる。相手の刀は暴力的な勢いで刀身を滑っていき、ぎゃり、という火花が散った。

「はっ、はっ、」

有り得ない。有り得ない。有り得ない。剣筋が曲がった。途中から直角に切り込んできた。物理法則は？ 腕の力は？ それが出来

る理屈はどうなってる、俺には全然理解出来ない。常識外の剣筋なんて、視えても対応策が解らない。

俺の心理的有利、戦略的優位性は、砕け散る。積み上げてきた十年が酷く脆く思える。こんな剣があるなんて俺は知らない。解りたくない。俺の中の常識を覆しやがったのだ。

認めたくない。先祖が歴史を積み上げ、何代にも渡って磨かれてきた剣術がこんな事で崩れ去るなんて。

直角に曲がる剣が、腕を掠め、髪の一房を斬り、大腿を深く切り裂く。

「っ……！」

防げていたのに、防ぎ切れなくなってきた。力では押し負ける、下手をすると刀が折れる。これが、桜吹雪が折れたら間違いない死を意味する。半年に一回やる筈の手入れを何年してなかった？ いや、それくらいで折れる筈はないまだ折れないでくれ、俺はまだ死にたくない！

ブラインドネスが横薙ぎにしてくる。それを防ごうと刀身を立てる。勁を発揮して受け止める算段のつもりが、相手の剣が刀に触れる直前、真上に上がった。再び振り下ろしてくる。これも曲がるのか、と思えば真っ直ぐに打ち込まれ、肩口から二の腕を大きく裂かれた。後ろに下がりかけていた為、骨までは到達していないだろう。だが、もう右腕は上がらない。

「づあっ……！」

解らない。次に何が来るのか予測がつかない。フェイントを織り交ぜられ、頭はどんどん混乱していく。もはや形勢は完全に逆転されていた。

ならば反撃だ。やり返さなければやられる。死にたくないなら殺せ。殺さなければ、詩音や時雨がいるあの日常に帰れない。カエレナイ。殺したら帰れない。だってそれは人殺しになるのではないか。

果たして、俺は今回その覚悟を持ってここに来たか？

「豚のように喘いで死ね」

ブラインドネスが俺を視る。瞳のようなものはない。革のベルトが何重にも巻かれてその眼を隠している。あれは何だ。お前は何だ。お前は一体、誰なんだ。

咄嗟、ブラインドネスは飛び退いた。俺の傍らに真白、次にヴィクトリアが降り立つ。

「済まぬ、足止めを食った。大事ないか？」

「あ、ああ……」

大丈夫、致命傷はない。すぐに動けないような傷はない。痛みはあるが、耐えられない程でもない。ダメージの確認をすると、混乱していた頭が少しずつ落ち着いてきた。

「三対一か。分が悪いな」

ヴィクトリアが剣を放つ。それは難なく振り払われ、ブラインドネスは姿を消した。

完全な敗北だった。負けを噛み締める。遠くからは警備員達の声がした。樹木の間から、緑のトンネルの向こうからライトが近付いてくる。

「くそっ……どうしたら」

見つかったらまずい。刀も持っていて傷を負っている。立ち入り禁止の閉鎖領域、ここで捕まったら間違いなくやばい。そんな俺の心配を、二人は一蹴した。

「跳ぶぞ、ヴィクトリア。お主も顔を見られてはまずい。本職の刑事じゃろ」

「ええ、一度遠くまで逃げましょう。さあ、西村君！　しっかりして、跳ぶわよ！」

想いの外強い声で、力強く俺を抱えるシヨリ。何故だろう、お前は男性恐怖症で、俺にだってようやく触れられるくらいだったのに。どうしてそんな事が出来るのだ。

ジャンプの急激な上昇感が体を襲う。弾丸のように飛翔し、今度は空中で真横に跳ねた。連続跳躍というものだろう。

戦場から離れた。もう敵は来ないという脱力感があつた。ただ風切り音がびゅうびゅうと耳元でうるさく鳴っている。眼下の夜景も、今は心に響かない。

抱き締められている形に安心すると、声が漏れた。

「ちくしょう……ちく、しょう」

俺が負けた。何故負けたのだ、俺は。慢心があつたか。油断があつたか。体調は万全だった、気迫も間違はなく最高潮だった。頭もよく回っていて、これ以上ないくらい上手く状況も運べていたのに、なのに、こんなザマだ。まるで無様。到底人に見せられない有様なのに、俺はまだ生き汚く息をしている。いつそ剣士らしく、男らしく死ねばよかったものを。

みつともなくて涙が出る。情けなくて嗚咽が漏れる。

俺はここまで弱かった。弱かった。弱かったのだ！

「チクシヨウ」

まるで馬鹿であろう。畜生なのは俺だ。豚のように死ねば、少しは楽だったろうか。俺には剣しかないというのに、剣しか使えないよう育てられた人生だというのに、それを否定されて、敗北して、それでも尚生きているのは、もう後悔しか有り得ない。

「西村君……」

俺は何の為に生きてきたのだ。ただいきがって生きてきただけか。だとしたらその人生、豚にも劣る。殺す覚悟もないくせに戦場に出て、負けて帰ってきて泣いている。子供に過ぎる、その精神。

何もかもを投げ出したくて、何かに当たりたくて、ここから逃げ出したくても、俺の腕はちっとも上がらず、足もぴくりとて動かないのだ。

ただ、一つだけ解るのは、俺の右腕は傷ついていてさえも、ただその刀だけは決して最後まで離さなかったという事であろう。

嗚呼、父さん、母さん。どうかお許し下さい、貴方達の子供はこんなにも弱くて情けなくて、人に自慢出来る事が一つもない子供な

のです。

強くなつたつもりでいたのは、果たして錯覚だったのでしょうか。自己満足で勝手に満たされていただけででしょうか。

強くなりたい、もっと強くなりたいのです。子供がそれを願う事は浅ましいのでしょうか、貴方達の言葉を待つのはいけない事でしょうか。

否。否である。過去を見るな。心まで弱くなるな。もういい両親になんて頼るな。そこに現実はない。俺が負けたのは一度だけだ。あのブラインドネスだ。

心の中でまで、負けてはいけないのだ！

過去の幻想を振り払う。俺は独りだ、誰にも頼らないのだ。恥ずかしいところを見せてはいけないのだ。あの二人が生きた証、俺が生きる事で周囲に見せ付けるのだ。ここでそれを曲げるなど笑止である。墓の前でそう誓ったのは、その程度の意志^{ウィル}だったのか、と。

断じて、否。立ち上がれよ、男子だろ。西村の鬼子が一度負けたぐらいで泣いてどうする。鬼が負けっぱなしでは、いられないだろ。ブラインドネス。その名は覚えた。お前の剣も一度以上視た。

待っている。次は、俺の剣を見せてやる。

第四章 死に至る病

辿り着いた先は我が家だった。何故ここなのかを問いたかったが、もう声を出す事すら辛く、億劫だった。力が抜けていく感覚に逆らえない。血が腕の先から垂れ落ち、太腿からも出血は続いている。最も大きい切創がこの二つだ。他は比べるべくもない、掠り傷である。真白が言う。

「客間に寝かせる。鉄が戸棚にあった筈じゃ、それで怪我した部位の服を切れ。儼は湯とタオルを用意する。止血して消毒じゃな、あと縫合用の糸と針はどこじゃったか……」

何故知っているのだろう、鉄が戸棚にある、なんて。そういえば真白は俺の祖父と知り合いだと言っていた。では、この家の勝手もヤツに教わったのか。

それならおかしくはない。何時そんな事があったのかはともかく。「……戸棚の脇の、引き出した」

辛うじてそれだけを口にする。痛みがじくじくと意識を侵していく。ショーリが俺の体を引き摺るようにして家へと上げた。どうやら、腕力はそれ程ないようである。

「……………」

おかしく、ないか。だがその違和感の正体が解らない。直感が囁きただけだ。ちよつとした気のせいかとその思考を投げ捨てる。そう、ショーリは剣を使うのに非力なのはおかしい、と思ったただけだ。先程のように剣を撃つというスタイルであればそれは何もおかしくないのだから。

真白はこういう手合いの治療に慣れているようだった。てきぱきとよく動き、丁寧に手順を進めていく。医者か何かの心得があるのか。ショーリは真白の指示に従いながらも、良いアシスタントとして手際よくサポートする。

汗を拭く段階になって、上の服を脱がされた。俺の体を見ると、

彼女は閉口した。

「これは……」

未だ消えない数々の傷痕が露になった。その全ては数年前から癒えており、しかし惨たらしい仕打ちを受けた証拠として居間も残っている。痣や打ち身、中には真剣で斬られたものもある。到底、普通の高校生の体とは思えなかった事だろう。右の胸から左に大きく裂かれた横一文字が、特に目立つ。

「今さっきやられたものではないな。古傷……数年は経っておる」
そうだ。体中に残る傷はもう全て過去のもの。祖父が去って数年、新しい傷は出来ていない。この横一文字が最も古いもので、ざっと十年前になる。

呻き声が口から漏れた。真白が右肩口の傷に触れたのだ。

「ちよつと、麻酔もせずに……！」

縫合をするなら、もう少し患者に配慮してからするべきである。
でないと、痛みへの条件反射として暴れてしまう。傷口が開く悪因になってしまうのだ。

「仔細ない。肩から先の精神を少しだけ切り離す。触覚と痛覚が殆ど機能しなくなるが、単一の生命としての繋がりが皮一枚分残される。誰も喋るなよ、手元が狂っては一大事になるぞ」

それも術式というものだろうか。便利なものである。あわよくば直接傷を塞ぐものはないかと思っただ、こうして治療を施している以上、そこまで万能ではないようだ。

時間が静かに流れる。時計の針が夜中の一時を過ぎていた。意識が朦朧とするのは失血だけでなく、睡魔もあるかも知れない。

こんな夜中まで起きているのは初めてだ。体内時計が狂わなければいいのだが。そういえば今日も学校がある、どうするべきだろうか。衣替えがあるから詩音と時雨は必ず顔を見せる筈である。俺の夏服は、どこにしまっておいただろうか……

真白が、溜息をついた。

「ふう、これでいい。最も大きかった肩の傷は終えた。次は太腿じやな。血管の密集している内腿であれば手の施しようがなかったが、受けたのは外側じゃ。運が良かったな」

確かにツイていたのかも知れない。下手をすれば肩の傷は、右腕ごとバツサリやられていた可能性が高いのだ。咄嗟に下がっていないければ、と思うとぞっとする。

「真白。貴女、あのブラインドネスを知っているわね。彼は一体何者なの？」

その質問は予想していたのだろう、手を止めずに答えていく。

「その名を明かす事は、今の儂には出来ん。もったいぶっているように思われるかも知れぬが、事実を受け止める為には下地という器を作らねばならぬ。今は、まだ時間が要るのじゃ。どうしても、答える事は出来ん……」

真白はどうしても、と言った。その真意が読めない。だが、この女は確かにブラインドネスの正体を知っているのだ。あの時の会話からもそれは推し量れる。なのに教えないのは、どんな理由があるのだろう。

お前があの時、俺の頬に愛しげに触れたのと関係があるのか。

「ならそれ以外で、知っている事を教えて頂戴。簡単に明かせないのは私が警官だからでしょうけれど、大丈夫、口外はしないわ。仕事にも持ち込まない。貴女の因縁なのでしょう？ だからそれは貴女の手で決着をつけるべきだわ。でも、何も解らなければ手の打ちようがない」

「一端に生意気をいいよる。だが、まあ、そうじゃな。話しておこう、儂が知る、あやつの事を」

そうして語り出したのは、真白が治療を終え、俺の意識が覚醒と睡眠の間にある頃だった。

「ブラインドネスは元々人間じゃ。だが 呪い に踏み込み過ぎた。そうして人間と人外の狭間に位置するモノとなり、その身を鬼へと堕とした。殺人鬼へな。」

人を殺す鬼となり、己の目的の為には手段を選ばなくなった。思えばあの時から、人としての正気は失っておったのかも知れぬ。欠落した情動が、今、自分が何をしているのかも理解できぬ程にまで至った時、体があおして真つ黒になつてしまつたのじゃ。

それでも、あやつは目的の為に動く。かつて在った理想を実現する為に全ての障害を払い除けていく。そうして生まれたのが、あの魔剣」

魔剣という言葉に浮かぶのは、あの直角に曲がる剣だ。やはり、どうしても理解出来ない、慣性や質量保存の法則を全く無視した軌道変更というものが。それで威力が落ちる、という事もないのはこの身で実証済みである。手首を返したり、無理やり曲げたのは決して有り得ない。速度を落とさず威力を維持したまま、曲がるのだ。

一体、どうなっている。

「あれに関して、いつだか本人に聞いた事がある。まだ一握りの正気が残っておった頃にな。剣士としての極みに達した者だけが見る事の出来る、向こう側。そう言っておつた」

剣士の極みというのは、俺も祖父に聞いた事がある。三種の至技だ。

曰く、距離が縮まつたかのような錯覚さえ起こす歩法、縮地。曰く、裂帛の気合で相手を竦ませて戦意を失わせる、剣気。曰く、眼を閉じていても相手を察する事が出来る 心眼。

だが続く言葉から、それとは違うという事を察した。

「それは奇抜な発想や閃きで為せるものではない。弛まぬ鍛錬、厳しい修行を経る事で得た頑強な肉体と強い精神、そして磨かれた技があつてこそ出来るもの」

然りである。剣士に限らず、武道には心技体の三種が常に看板に掲げられる程重要なものだ。どれだけの高みであらうとそれは変わらず、またどのような達人でさえ向上心を失わずに日々鍛錬を続けていける目標である。

真白は言う。あの剣はその向こう側、剣の極致にある、と。

「あれは、風を受けて翻る燕をも一太刀で切り伏せる。刃を交えた者はこの世ならざる光景を目の当たりにする　魔剣・燕返し」

畏怖を感じさせる声音で、真白はそう言った。

「本来、空を舞う燕が向かってきても、刀で斬る事など不可能じゃ。燕は風を受けて飛翔し、風と共に生き、風と共に去り行くもの。それは振り下ろされる剣が起こす剣風でさえ例外ではない。交差する一瞬に剣の纏う風を察知し、それに乗る　そんな生き物を斬れる筈がない。」

故に人間では為し得ぬ技、魔剣」

そんな事が可能とは、恐れ入る。確かに剣は後方に風を起こすだけではない。進行方向にさえ僅かな風は生まれる。だがそんなものは微々たるものだ。人が解るか解らないか程度のももの。そうして剣は風を切り裂いて進む。燕は、その切り裂かれた風に乗るのである。故に、当たらない。

「あやつはその道理を曲げ、無理を通した。その結果、ああして剣筋を自由自在に捻じ曲げる事となっただけ。その気になれば正反対へ捻じ曲げる事も可能であろうよ。言わば一撃目と二撃目が同時に来るようなもの。さしもの燕も、後方から来られては身を翻す暇はない。どれ程の達人でも返しは間に合わぬ。全く、ブラインドネスが本気じゃったら誠の命はなかったらうな」

なんて事だ。手加減されていたというのか。だがあれで手心を加えていた、というのは少ししっくりこない。何よりも、俺を殺すと言っていた。そこに本気を出さない理由というのも存在しない筈である。

「いいえ、真白、それは違うわ。ブラインドネスは決して手を抜いていなかった。少なくとも私には本気に見えた。彼が西村君を殺さなかったんじゃない。殺せなかったのよ」

「ほう、つまり、誠は見切っていたと？」

「ええ、確実に。まるで予め、剣がそう来るといふ事が解っていた

ようだった。実際にこうして生き延びている事がその証拠だわ、あの敵と一対一でやりあえば、私や貴女だってタダでは済まないでしょう。そのぐらいの強敵であり、卓越した剣技だったわ」

「魔剣を見切る、か……だが、こうして満身創痍になっておる。可能性は低いのではないか？」

「それは、そうかも知れないけれど………」

「解らぬ話ではない。もし仮に、誠があの剣を見切っていた、或いは来るのが見えていたというのなら、対抗する術はある。儂やお主では、あの男が持つ認識否定をモロに受けてしまうからの」

「認識否定？」

「あやつが一対一でのみ発揮出来る、その名を冠する事にもなった特殊技能じゃ。己の姿を相手に視せない。視えないようにしてしまう」

「まさか、虚数言語化？ そんな、レコードの影響がないというの？」

「詳細までは儂も解らぬ、まあ人間と人外の特性を併せ持つらしいからの。じゃが、誠はその影響を受けていなかった。ここが重要じゃ」

話は読めないが、どうやらこの中で俺だけが、アイツに対抗出来るらしいというのだけは聞き取れた。

「実体のないモノを斬る事が出来る刀。この桜吹雪が持つ四言の力を使えば、例え術式じゃろうと虚数言語じゃろうと問答無用に切り伏せる事が出来る。ブラインドネスに限らず、人外との戦闘にはこやつが必ず必要になるじゃろう」

真白の言葉はどうにも胡散臭い。今の俺があまり頭を働かせている状態ではないからかも知れないが、その言葉には簡単に領けない根拠を疑ってしまうのは、卑しい性格の証拠であろっか。

そもそも、刀の呪いも言い伝えも、眉唾であるというのに。

「それが出来るのは、混血だけじゃ」

「……チーフの言っていた通りになったわね。いざという時は西村

の家が切り札になるって」

「ああ、あの熊男か。確か外事四課の情報収集やら伝達係を請け負っていたのじゃったな」

熊男という単語に、俺はあの人を思い浮かべた。骨董屋の店主である。成る程、ショーリのいる組織、外事四課の情報収集係だったというのならこういった事に詳しくても何らおかしくはない。ならあの時に店内が荒らされていたのは、外事四課へ伝えられる筈の情報やら伝達手段やらを破壊した痕跡なのだろう。

「混血……それも、人外へのキラーファクターになる？」

「こやつのはしかも特別じゃ。朝霧の血と混じっておるからの。破邪性を持った人の血と人外の血、双方入り混じって相克を起こしておる。今はかなり不安定じゃがな」

相克とは互いが互いに打ち勝とうと闘ぎあっている状態を指す言葉だ。けれどどちらが勝つか、どちらが上かは解らない。確か、いつかそんな話をした気がする。

成る程 然り。あの人外、骨董屋で俺の血を吐き出したのは、そんなものを取り込む訳にはいかなかったからだ。曰く、並の人外では近付く事もままならない朝霧の血、俺が母親から受け継いだ血が混じっていたというのがその理由だろう。

「ヴィクトリア、後は儂一人でやれる。お主もそろそろ^{なぐさ}塹に戻ったほうが良からう、警察の業務があるのではないか？」

「……そうね、公園での血糊を処分しないと。このままでは西村君が疑われてしまうわ。もう一度、夕方あたりに顔を出すから。何かあれば、その時に」

そういえば、事後処理があつた。確かにあそこで撒き散らした俺の血を調べられてはまずい事になる。殺人鬼にされて街を歩けなくなつては、色々困るのだ。

「うむ、ではな」

去っていくショーリに何かを言おうとしたが、眼が開かず、口も動かない。ただ、最後に彼女が振り返った ような気がした。

一時的に切り離された精神というのは接合するまでに時間が掛かるらしい。それはこの怪我が治癒するまでは圧倒的に早く、大体一日程度と聞いた。怪我そのものはおおよその所で一週間あれば塞がるだろう。問題なく動けるようになるまではもつとかかりそうである。真白は俺にそう伝えたと、やる事がある、と姿を消した。何かあればこやつに言え、と猫を置いていったのは俺に愛して欲しいからだろうか。

そんな事でも考えていなければ、やってられない。痛みでマトモに眠れず、布団に手足を投げ出したまま、風呂にも入っていない。ぐっすりとはいかないまでも睡眠を取れたのは幸いだったが、こんな姿を詩音や時雨に見られてはまずい。

何とか使える方の足と手で起き上がり、布団を仕舞って、二階にある自分の部屋へと上がった。これだけで息が荒くなり、血の巡りがよくなったせいで昨夜の痛みがぶり返してくる。

切れた精神というのは、完全に繋がらなくても痛みは感じるようである。薬のように都合の良い処置ではなかったようだ。麻痺しているように動かないのに、痛みだけは伝えてくる。ネガティブな精神状態に陥るのに、そう時間はかからなかった。

自室の布団の上に寝転がる。息が落ち着いてくる。窓の外が明るくなっているのに気付いた。夜明けが来るのだ。

昨日 正確には一昨日だろうか までは何も変わらない、平和な毎日が繰り返されていたというのに、たった一日で俺はこんなザマだ。夜の間にいろんな事があった。あり過ぎたと言ってもいい。夜通し動き回った所為で体は休息を欲しがっている。なのに、眠れない。生殺しである。いつそ眠れれば楽なのだが。

……そういえば、と。詩音にどう言い訳するかを考える。アイツを納得させるのは大変そうである。それに学校の欠席も伝えなければいけない。こんなナリでは勉強どころか通学も出来ない。ああ、夕方にはショーマン顔を出しに来るんだったか。あいつの美貌に二

人は何と言っただろう。シャンプーの匂いで解ったら詩音はエスパーだという事にしよう。牛丼も知らないなら肉じゃがはどうだ。白味噌の味噌汁も味噌わつてもらいたい。

真白は来るだろうか。どこか時雨と気が合いそうな予感もする……なんて。

そんな妄想をしても、現実からは逃げられないのに。

愚かである。どこかで逃げようとしていた。その問題から眼を逸らそうとしていたのだ。あの二人は言った。ブラインドネスに対抗出来るのは俺だけだ、と。それは暗に殺せと言っているのだ。俺に殺せと、人を殺せ、と。

何故こうもうまく転がってくるのだ、現実というヤツは。あの敵に対抗出来るのは俺だけ、魔剣を破れるのは俺だけ、術式の基点を見つけられるのは俺だけ

だけど、何故だろう。こう言っでは何だが、嘆く一方でどこか満たされているような気もするのだ。必要とされる事への安心……そんな、卑しい精神。だが、今まで全く、これっぽっちも俺の役に立ってくれなかった剣術に居場所が出来たというのは、そこに自分がスッポリと嵌っていくような、そんな安心感があるのである。

閑話休題。

魔剣についてである。あの曲がる剣はどうやら直角ではなく、自由自在にその角度を変えられるらしい。ならば一度剣を振り抜かせた後、再び襲ってくるという事だ。回避はイコールで死に繋がる。受け止めるというのも、あの人外の臂力を受け止めきる前提がなければ、死であろう。何て事だ、穴がない。完成されている。いや、最後の手段として、使わせないという部分に着目する。あの男は正眼の構えから放ってきた。斬る、という動作を繋げたように、切り返しを瞬時に行えるのなら、行動する前に、防御させればいい。

ならばこちらが仕掛けるべきは、突き。剣の型の中では最も相手までの移動距離が短く、最も速く相手に到達し、最も強力なものとされる動作だ。

正眼からの突きなら、ブラインドネスが一度剣を振り上げて攻撃してくるまでの動作に先手を打てる。後の先を取り、体の中心に位置する急所を穿つ。

だが、待てよ。相手は人外だ。骨董屋での事を思い出せ。相手は人間じゃないんだぞ。モデル・ウルフは急所どころか内臓、痛みなんかも感じていなかったじゃないか。あのブラインドネスは人間と人外、双方の特性を持っているというのだ。喉や心臓を突かれたくらいで止まるとは限らない。対人間で考えてはいけない。

再び着眼点を変える。剣を振れない程の距離、手が届く距離でならどうだ。いや、そこではヤツの人外としての膂力が最大限に発揮されるだろう。喉や頭を掴まれたらそのまま握り潰されてお終いだ。何という事だろう、これでは手がないではないか。

このままでは打つ手がない。突きも、拳の距離も奪われては、もう

では。ならば。そうだ。もう、斬るしかない。

骨董屋のモデル・ウルフを再三思い出す。しつこいようだが貴重なデータである。あの人外の体は内臓や急所がないかわりに、春光での攻撃を受ける事に極端なダメージを受けるといふ。言わば弱点。それこそが急所だ。

だが思い出すべきである。それ以外の方法でもモデル・ウルフは死亡する。真白の小太刀やヴィクトリアがそうだ。内包概念ガイストというものをつける事がそのキモらしいのだが、何やらそうでもなさそうである。

もしかして、ある一定の損害を受けると消滅するのではないだろうか。何故なら首を刎ねても暫くは生きていた程である。そこから更に追い討ちをかけて、ようやく消滅した。

では、最初から頭の天辺てっぺんから股下まで真つ二つ、唐竹割りにしてはどうだろう。そこまでされて尚生きている、という事はないのではないか。

俺は、何となくそう思った。

試してみる価値はある。光明があるとすればそこだ。

そう、魔剣が人類未到の剣であるというのなら、また俺も同じ事だ。混血として人から半分外れかけているらしい俺にも、出来るという道理である。

魔剣を倒す為の魔剣。相手よりも先に刃を到達させる速度、確実に正中線をなぞる技量、そして死を恐れぬ心が必要だ。俺はヤツの動き出した直後、攻撃動作に入っていて、もうそこから防御へ切り替える事は出来ないというタイミングを見て、それを放つ。大丈夫、俺には剣筋が視える眼がある。まるきり不可能では、ない。

先の後を取る。狙いはそこがいい。そして狙うべきは一撃必殺だ。だが恐れも迷いも躊躇いも捨てなければ、この剣は成立しない。

だから、この際人道や倫理は捨ててかかるしかないのだ。どうせ俺がやらなければ誰も殺せないのなら、その咎を背負うのは己の意志で決め、拾い上げるべきである。ジャック・ハンター、停死病、そのどちらにも、時雨と詩音をくれてやるつもりはない。そう、二人の日常を守る役割が、今の俺には科せられている。

それを言い訳にはしない。しては済まされない。俺は一人の男を殺す為に、人道を踏み外す覚悟を決める。これは義務でも責任でも、ましてや大義の為でもない。俺自身の求める日常がヤツの死の向こうにあるのだ。邪によって生を生む。人間が口に行っている食事と何ら変わらない。毎日多くの命を奪い、口にして生きている。そんなものにいちいち生や死という概念を持ち込む事もなく、ただ安穩と少し考えれば解る。友人一人の命とその他大勢の百人、自分一人と全人類、イルカ一頭と牛一頭、踏み潰した蟻と助けた野良猫、全て天秤にかけてみるがいい。自分にとって重い命だけ好きになる。これを違うと言うなら、もう絶食するしかないのである。

命とは、もうそれだけで既に平等ではないのだ。己の命が相手の命の価値を決める。無論客観的な判断をする人間もいるが、それだつてどこにバイアスがかかっているか解らない。完全な客観的視点など、もう神様しか持ち得ない。

ショーリよ、お前も最初はこんな気持ちだったのだろうか。けれどそれを尋ねるのは野暮というものだ。弱さを慰め合うような愚行、男として情けない。

朝の七時を過ぎた頃、玄関が開けられる音がした。鳥の囀りをBGMに、鼻歌交じりで掃除が始めるのが詩音の日課

途端、もの凄い勢いで階段を上がってくる足音に眼を見開いた。何かと思つてそのまま待つと、自室の襖が景気のいい音を立てて開いた。

「誠君、話が、つて、」

悲鳴を上げなかったのは偉いと思う。顔を覆う指の隙間からちらちらと視線を向けてくる様には軽い嗜虐心さえ抱くが、それを口に出来る程元気ではない。

「おはよう、詩音。どうかしたか」

上半身裸で寝そべり、太腿と右肩に血の染みを作る包帯を巻いていて、どうかしたか、もないものだな、と俺は思った。

「ま、誠君！？ どうしたのそれ、怪我！？」

慌てて俺に駆け寄る詩音は、もう俺が半裸であるという事も頭にないらしい。

「えっ、え！？ どうして怪我なんて、これ、病院でやってもらったの？ それに何だか、顔色が悪いよ」

「そう慌てるな、まず落ち着いて。昨夜色々あってな、痛みのせいで寝てないんだ。でかい声出さないでくれよ」

しゅんとしてしまう。

「う、うん。ごめん」

「いいけど。ああ警察や救急車は呼ばなくていい、もう処置は終わったし、事も済んだ。お前が心配する事は何も無いよ。この怪我也治るまで一週間ぐらいかかるかな。そういう訳だから、俺はしばらく学校にいけないから、その旨をお前から先生に伝えてくれないか」
神妙に頷くが、何故こんな怪我を、という点については退かない

姿勢で俺を覗き込んできた。

「じゃあ教えて。どうしてそんな怪我をしたの？ 事と次第によつては私、怒るよ」

「何でだよ。お前には関係ないだろ、それに爺がいた頃だつてこのぐらいはしょつちゆうだった。今更そんな」

「どうしてつて聞いてる！」

詩音が怒鳴った。珍しいと驚くより先に、目端に光るものが見えてしまった。

「何で教えてくれないの、大事な事は全部そうやってはぐらかして、私に教えてくれないよね。いつも一人で先に進んで、問題を解決して、何でもないつて顔するよね」

そうだ、俺は一人だ。誰にも頼らない。頼るなんて、俺の重荷を片方担いでもらうなんて、出来る訳がない。だから利用する。俺が相手を頼つて迷惑をかけてしまうより、せめて相手が俺を嫌つてくれるよう、利用する。そうすればもう俺に近寄つてくる事はない。

そんな事を思っていたのは、何時からだったのだろう。或いは思春期特有の、世の中を舐めた態度を高校まで引き摺っていたのかも知れない。今ではそこまで強く思つてはいないが、それでも俺のせいで誰かが傷つく事は、受け入れられない。

嬉しい事は分け合えても、悲しい事まで分け合う必要はないのだ。

「決めた。教えてくれるまで傍にいる。絶対離れないから」
「迷惑だ」

「そんなの知らない。もう決めた」

詩音は一度怒ると面倒臭いのである。この場合引き合いに出すなら時雨だろう、時雨の場合は怒ると物を投げてきたりする。そしてさつさどこかに行つてしまうのだ。これが一般的な怒りの表現

キレ方だと俺は思っている。

ところが詩音は、徹底的に話し合おうとする。時雨のように何かに当たるといふ事もない。ただ、言葉を重ねて心をさらけ出す事を強要してくる。そんなものに付き合う気はないが。

「何で俺が怪我したくらいで、お前が怒るんだ」

昔からそうだ。どこまでいっても俺の後ろからついて離れない。俺が怪我をすると代わりに泣く。どこからどこまで行ってもお人好しなのだ。

「放っておけないからに決まってるでしょ。それに、幼馴染みなんだし」

「解った、もうそれでいい。その代わり時雨には言うなよ。面倒臭いから」

「自分からは言わないけど、隠蔽の協力はしないからね」
「……………」

俺が困った顔をしていたからだろう。詩音の顔に微笑が戻った。

「朝ご飯、お粥なら食べられる？ 何かお腹にいれれば眠れるかも」
今度は俺の世話を焼く気なのだろう。全く、とんだお人好しである。今時こんな幼馴染み、どこを探せばいるというのだ。俺には、勿体無いのである。

「お前、学校あるだろ」

「ないよ。実は今日は日曜日でした。日曜だけど見せたくて来ました。どう、ビックリした？」

だから夏服なのだろう。下はいつもと変わらないが、薄手のものに変わった黒のオーバーニーとスカート、上は大きく印象の異なる、白のワイシャツのみとなっている。

「衣替えがある日曜日か。斬新な高校に入ったな」

そんな高校、どこにあるというのか。確認するが、今日は平日である。

「そうだねえ。あ、そろそろかな。時雨ちゃんも朝イチで来るって言ってたし。やっぱり最初に見せたい人がいるって、素敵だねー」
「……………」

面倒臭い。あいつが来るとほんと面倒臭い。けれどどこか居心地がよくて、安心する。昨夜の事が全て夢だったら、俺も一緒に笑えていただろうに

いけない、やはり心が弱っているようだ。怪我をして気分が落ち込んでいるのだろうか、そろそろ一度眠って　ふと、体の力が抜けた。

逆らいがたい脱力感がある。限界なのだろう、無理をせず逆らわず、それに従った。詩音が何かを言いかけて止め、襖を閉めて降りていくのが解る。どうやら俺が眠りたいのを察してくれたようだった。

眼が覚めると、オレンジ色の光が窓から差し込んできていた。もう夕方なのか。ずっと眠っていたようだ。

「やっと起きた」

険のある声に眼をやると、時雨が座っていた。正座しながら文庫本を読んでいたようである。コイツの正座は綺麗なもので、俺もよく見惚れてしまう。詩音と同じ制服姿なのに、どうしてお前も学校にいつていないのか。しかし夏服にポニーテールというのはやはり似合うものだ。

「この馬鹿、怪我して帰ってくるとか何様。私達に心配かけさせないでくれない、迷惑だから」

頼んでいない。それと、何様という表現もおかしい。

「理由は言えない」

「アンタがどういう気にいるかは、おおまかにしーちゃんから聞いた。言えないっていうならそれでいいわ、ただ、それが下らない喧嘩とか、そういうもので受けたものなら、私はアンタを軽蔑する」俺は、やれやれと頭を掻いた。流石に風呂に入らず寝たのでさっぱりしたいところである。だが割と不快感は少ない。何故、と周囲を見れば、時雨の脇に水を張った洗面器とタオルがある。

汗を拭ってくれていた、のだろうか。

「……軽蔑したけりやしてくれていい。でも言わせてもらうなら、これは　勲章だ」

あの瞬間を生き延びた。ヤツとの攻防を切り抜けた証。あの魔剣

を目にして帰ってきた証左だ。だから、次の手が打てる。打倒する為の手段が構築出来る。次に俺がどうするべきか、これから俺がどうしていくべきかを、悟らせたものだ。

「ハッ、馬鹿みたい」

だが時雨にはそれを伝える訳にはいかない。よって、こうして鼻で笑われ、罵倒される事となってしまう。幾らなんでも惨い仕打ちだ。お前には弱っている人を労わる優しさがいいのか。

「全く……」

いい加減風呂にも入りたい。沸いていなくても水で垢を流しておきたい所だったので、俺は半身を起こした。どうせ怪我をしたのは片足片腕だけである。何とかなるだろう。

俺に濡れタオルを投げつけようとしている時雨が、慌てて俺に身を寄せ、手を貸してくれた。

「む、無理に動かないで、ダメよ、まだ痛いんでしょ？」

相変わらずの心配性に、少し安心した。

「軽蔑したんだろ、いいよ、一人でやる」

流石に蔑まれてまで手を借りたいとは思わないのだ。まあ、本音は俺が意地を張りたいだけであるが。

「わ、悪かったから。謝るから」

半分涙声である。こうしているとしおらしいのだが、普段の強気とこれも合わせて、こいつの性分なのだろう。

しかし、やはり片足が使えないと立ち上がるのも難しい。壁に手をつければ楽だが、生憎俺は自室の真ん中に布団を敷いているので、それも出来ない。

「ど、どうしたいの、トイレ？ トイレなの？」

何でトイレにいくだけでそんなに縋るような声で尋ねられるのだろう。ちよつと普段とのギャップがあって面白い。

「いや、風呂。頭も痒いし、垢を落としたい。手を貸してくれ」

「解った、どうすればいい？」

俺が手を出す事で察してくれたのだろう。時雨の肩を借りて、そ

のまま風呂場へと向かった。

詩音は猫に夢中らしい。嫌がる猫に無理やり構っているようだ。彼女の家ではジャンガリアンハムスターを飼っているのも、どちらかというと詩音が構われているような気がしてならない。それはそうと風呂である。片手では背中まで流せないだろうと時雨が手伝ってくれた。オーバーニーを脱いだ足がスカートの端を縛っていて強調されており艶かしいのだが、そちらに目をやれないのが少し残念である。

「さっきの」

頭を流した洗いが肩口のガーゼに入り、少し痛みが走ったのだ。が特に気にせず、言葉に耳を傾けた。

「軽蔑するって、嘘だから。気にしないで」

「別に気にしてないが」

普段の口が達者な時雨は同級なら誰でも知っているが、コイツが本当は打たれ弱い面を持っているというのを知っているのは、俺と詩音或いは両親ぐらいであろう。弱さを隠す為に強く在ろうとする。それもまた一つの処世術であると俺は見ている。

ふとした時にその弱さを覗かせる。だから俺はこのイトコがかわいいのである。姉のようで、妹のよう。けれどあまり構いすぎると泣いてしまう。本当、コイツのそんな姿は他のヤツには想像出来ないだろう。吊りがちの眉が八の時になるのが、大体の目安である。

「馬鹿って言ったのも、本気じゃないし」

「そうか」

「まあそれはいつもなんだけど」

「知ってる」

勝気活発、明朗快活。けれど、それは表の顔。人と接する為の仮^{ルシナ}人格。本当は誰よりも傷つきやすい、繊細な心を持っている。

だから 巻き込むのは、躊躇われた。例え朝霧の血が強い力を

持つていても、それがどれ程益になると知つていても、俺にはコイツを利用する事が、出来ないのだ。

俺も人の事を言えないのかも知れない。ただの甘つたれで愚鈍なお人好し。詩音も時雨も守りたいから守るのだ、俺は。その為に他が犠牲になろうと、知つた事ではない。

ああ、ならば俺はお人好しでは間違いなくない。俺になれるのは、人でなしに違いはない。

「背中、大きいね」

「そうか？ 自分じゃ解らん」

「この背中が、いつも私を、私達を守ってくれてる。私はそれが嬉しいの」

背中を洗っているタオルが離れ、手が触れてくるのが解る。

「いつもありがとう。それを伝えたかった。二人きりになんてなかなかなれないし、こんな時でもない」と、ね」

「……気にすんなよ、しーちゃん」

自分でも赤面していくのが解る。この呼び名は、もうずっと昔、それこそ互いに二歳か三歳の頃に使っていたものだ。当時はまだ詩音がいなかった。だからこの呼び名は時雨だけのものだったのだ。全く、愛称を呼ぶなんて恋人同士でもあるまいに。

でも、それを覚えている人間は、もう俺しかいないのだ。俺しか、もう呼んでやれないのだ。彼女の母親の代わりに。

朝霧が何故、そんな血を持つのかを考えた。確か、時雨の父親

おじさんが言っていた事がある。朝霧は退魔師としてその血を洗練させてきたのだ、と。今なら解る。あれは朝霧一族が持つ特殊な眼 龍眼というものの事を言っていたのだ。

それを発現させた者はほぼ間違いなく、数年で死に至る。変死するのだ、例外なく。ある者は気が狂って自殺、ある者は周囲の人々の声が頭の中に響くとして自殺、またある者は化物が自分の腹を食い破つて出てきて死亡

惨たらしい過去だ。そんなものを何故今更になって思い出すのだ、俺は。いや、むしろどうして知っているのだろう。

退魔師の朝霧……それが現代までに変じて神社を建て、神道を広める事になった原因なのか。けれどそんな過去、現在を生きる俺達には何の関係もないだろうに。

嫌な予感がする。俺の直感が、そう囁くのだ。

けれど、思い出してしまふ。時雨の直感によく当たる。それは予言に近いものとして俺は見ている。

何か、よくない事が起こらなければいいのだが。

第四章 死に至る病（2）

玄関にシヨリが現れた事で、やにわに家が騒がしくなった。やれこの人は誰だの、やれどういう関係だのと詰問されたのだ。予め適当な言葉を探しておいたので、その通りに説明する事にした。

「仲間だ。何度も俺を助けてくれてな。大丈夫、いいヤツだよ」

シヨリははにかみながら、二人に対して名乗った。

「ヴィクトリア・ディアモンテです。よろしく」

男装のようなスーツ姿は元から良いスタイルを更に引き締めて魅せる効果があるのだと、その姿を見て理解した。仕事の出来る女という近寄りがたい空気さえ感じる装いが、シヨリのインパクト付けに一役買っている。女とは服装で化けるものであるのだろう。後頭部の低い位置で束ねられた、腰まである銀髪は昨夜よりも凛々しい印象を与えてくる。取っ付きにくそうな彼女は、しかし一方で男性恐怖症、自分の言動で自滅する癖がある。完璧そうに見えて、そうでもないという人物像だ。

時雨が答える。詩音はその後ろに隠れつつ、しかしやはり気になるように肩越しにシヨリを見ていた。

「朝霧時雨です。失礼ですが、うちの誠とどういったご関係でしょうか」

うちの、という表現は少しズレている。まあお姉さんぶりたいのだろう、時雨は俺を弟扱いする事が多い。母性本能が強いのかも知れない。

「いえ、昨夜はお世話になったものですから、その様子を見に……」
詩音が割り込んだ。おどおどしているのは人見知りだからだ。けれど今回は少しいつもと違い、強気に口を挟む。

「この匂い、やっぱりアナタですね。前も誠君の服に匂いがついてました。今朝だって家の中に匂いが残ってました。一体どういうご関係ですか？」

呆氣に取られるシヨリ。その気持ちはよく解る。匂いで判別された上に糾弾されてはもう逃げ場がないのだ。ならこれは証拠品を突きつけられた刑事の図であろうか。皮肉である。

「え、ええと。西村君、どこまで話したの？」

困り果てたシヨリが俺に助けを求めてくる。俺は足元の猫を右手で 拾い上げた。

「何も。この二人を巻き込む理由なんてないからな。お前が口の硬いヤツで助かったよ。ま、昨夜の真白との会話もあるから、信頼していたけど」

恐らく怪我の様子を見に来てくれたのだろう。気の付く女である。だが、その表情は厳しかった。その眼は俺の右肩を見ている。

「西村君。君、怪我は痛まないの？」

「え？ あれ、そういえば」

ついうっかり利き腕の右で猫を抱えていたが、特に痛みを感じなかった。太腿も、である。違和感が少し 治癒直後の肌がつっぱる感覚 残る程度で、痛みが、ない。

猫を時雨に押し付け 途端に暴れ出して飛び降りた 上の服を脱ぐ。右肩の傷を隠す包帯を取ると、切創が小さくなっていた。

「…………… 治るのが、早過ぎる」

緊張した面持ちのシヨリに、俺は昨夜の言葉を思い出した。混血として双方の血が相克を起こしている。なら、これはそのせいなのだろうか。怪我が再生するなんて、それこそ人外のようなのである。

俺は、ようやくこの時に実感した。思い知った。痛感した。

俺は人間と人外の狭間に在る存在なのだ。受けた傷がすぐに治ってしまう、赤い眼を宿した化物。今まで何となく頭の奥に仕舞いこまれて潜んでいた恐怖が、途端に首をもたげて這い出てくる。

怪異は実在する、という言葉と共に。それは俺とて、例外ではなかったのだ。

息を詰まらせる。自分が何なのかを再認識する。真白が言う混血という単語を今までよく考えなかったものだ。愚鈍に過ぎる。自然

体だからといってそれが看過出来る問題ではなかっただろうに。

でも、大丈夫、まだ俺は俺のままだ。アイツのように全身が黒くなったり暑さや寒さが解らなくなったりはしていない。まだ、俺は大丈夫だ。

三人を見る。詩音と時雨は解らないような顔をして、いつも通り。ただシヨールだけが俺を見つめている。あの時、初めて出会った時のように、揺れる瞳で。

探るような視線。そうだったのだ。あの時も、こうして俺の中に
ある異質なものを感じ取っていたのだ、このシヨールは。

「……………」

殺人鬼。お前は自分をそう言った。人外だけを殺す鬼だと。けれど、だったら、それは。もしもの時は、俺もお前の敵になるという事では？

「顔色が悪いわ。もう少し寝ていた方がいいのではないかしら」

ぞつとする。コイツが、敵になる？ 冗談にもならない。あんな数の剣に襲われたら、それこそ俺なんて一瞬で肉塊にされる。勝機どころか対抗策さえ浮かばない。それに何より俺は、シヨールとは戦いたくないと思っている。

今はダメだ、言葉を重ねるのが怖い。ここで何を言ってしまうかも解らない。少し時間を置こう。

返事もせず、俺は道場に向かった。狭い自室より、広げた道場で精神統一をしようと思ったのだ。そうでもしなければ、不安に負けてしまうと思ったから。

痛みがなくなった右肩と左の太腿は、胡坐をかいて座っているだけでも違和感を禁じえなかった。痒みがないのだ。細胞が活性化して次々に生み出されていく事で生まれる痒みが。膿だって少しも出ていない事が包帯の汚れで解る。多分、これは昨夜から一度も交換していない。本来ならじゅくじゅくとした状態になって何度も膿を吐き出し、汚れた包帯を交換する過程がある。つまり自然的な治癒

ではなかった。これは一体何なのだ。

いや、解っていた事だ。今までは理解したつもりになっていた。ただ、今回それを思い知っただけだ。自分はもう以前の自分とは違う、という事を、身を持って知っただけの事。

それで俺という中身が変わった訳ではない。そこだけは確かだと言える。少なくとも俺の主観に限っては、だが。

主観 そんな曖昧なもの、誰が保証してくれるというのだ。俺の正気なんて、主観なんて、その根幹が揺れているとすれば呆気なく崩壊する他愛のないものだ。俺の世界なんてそんなもの、そんな曖昧であやふやなものなのだ。実感する。狂っているヤツが自分を狂っていないと言い張った所で、その説得力なんてゼロに等しい。自分が何をしているか解らない 最後は、そうなってしまうのだ。なら、だったら俺はどうすればいいのか。

そうか。いざという時は、アイツがいる。俺がブラインドネスのように人間としての正気を失ってしまっても、あのショーリが止めてくれるだろう。たった一晚の付き合いだというのに不思議なもので、俺はアイツに強い親近感と親愛を抱いている。もしかしたら相性が良いのかも知れない。鬼子と殺人鬼なんて、それこそお似合いに過ぎるという話。

真っ暗な剣術道場には明かりがない。音を発するものもないので居間の談笑が漏れて聞こえてくる。どうやら打ち解けてくれたようだ、何もしていない俺だが、ついつい安心に胸を撫で下ろしてしまう。ショーリは上手く誤魔化せただろうか、等と邪推するくらいには落ち着いてきていた。

そうだ、アイツになら頼めるかも知れない。俺がもしブラインドネスのようになったとしても、あの二人の事を守ってくれと いや、これでは独善的だ。エゴを押し付けるだけである。ショーリがどう思つか、どんな迷惑を被るか考えていない。そんなものは感情に任せた衝動的発想。

だけど、俺はどうしてか、ショーリなら頼れると……頼り、たい

と。

頭を振る。誰かを頼ってはいけない。迷惑をかけるだけだ、そんな事をするなら最初から全部自分で守り通す気でいる。他人を当てにするな、最後の最後まで、意地を通すのだ。きっと後悔だけはしないで済むように。

「……………よし」

腹は決まった。せめて後悔はしないよう、俺に出来る事をするべきである。成すべき事を成す為に、まずはこの鈍った体を叩き起こす。刃物のように磨き、研ぎ出すのだ。体そのものを一振りの刀とする。数年ものブランク　祖父がいない事による対人稽古の不足を指す　で幾らか錆び付いてしまっているが、土台はキツチリ仕上がっている。剣筋を視る眼も健在だ。

俺は、西村誠という刀を研ぐ作業に入る。

座からの抜き付けに、板張りの道場はその空気を震わせた。床を踏み鳴らした音は近所迷惑かも知れない、それに居間まで聞こえる音量だった。だが、そんなものには眼を瞑っていただく事にする。俺は仕上げねばならないのだ。あの男を破る魔剣を。

立会いを行う仮想敵を想像する。相手が前から迫ってくる。中段構えから一度上に振り上げ、振り下ろしてくる。それを一時的な体重の消失　膝抜きを行って右に一步踏み出し、左足を引きつけて首下から刎ねる。残身　反撃に備える動作　を行い、右肩と左太腿に問題がない事を確認する。しつかり追従してくる、異常はない。

剣の構えに中段が一般的なのは、その汎用性からだ。切り下ろし、切り上げ、袈裟懸け、逆袈裟、横薙ぎ、突きのどれにでも派生が可能で、最も突きを効果的に放てる構えでもある。更には防御性も高く、どの部位を狙ってきてもそれなりに動作の拳動が少なく抑えられる。

ブラインドネスのものもこれだ。俺はその動作の型の中でも、特に真上からのもの、切り下ろしというものに着目している。中段構

えから言うと、一度振り上げて、振り下ろしてくる 仮想敵にさせた動作である というものだ。

これは、解りやすく言うなら剣の辿る軌道、ストロークが分割して二つになっている。振り上げる事でイチ、振り下ろして敵に到達するまでが二である。しかしこのストロークを短縮出来る構えがある。上段というものだ。

柄を額の前で握り、木刀の切っ先が頭の上、少し後ろを指す構えである。丁度、中段から剣を振り上げた時の位置ぐらいであろう。ここで剣を固定する。

これが上段構え。攻撃に特化した、しかし防御が少々疎かな状態である。この際、敵の攻撃を防ぐ事に関しては考慮しない。敵が動く前である先の先、もしくは動き出した直後の隙を付く先の後を取り、先に仕留めればこちらが負う痛手はないが、突きに派生されてくると辛いものがある。そこは間合いを調整する事で回避すればいいか。それにあの魔剣・燕返しは突き派生、派生突きは行わず、軌道変更は一度のみだった。まあ他に問題点があったところで、ここはこの理論を押し通す事にする。

ストロークは、イチで相手に到達する。中段よりもダントツで速い。実際に切り下ろしを行い、残身。姿勢そのものに問題はない。型の動作にもおかしいところはない。

ただ 遅い。剣速が圧倒的に足りない。だがこの点には理屈が埋め込まれている。少し百試合戦法を解釈しよう。

根幹となる発勁は足の指先から生まれる運動エネルギーを、全身のパイプを通して作用点へと送り込み、解放する事で成立とする。例えばを挙げるなら、俗称で言うワン・インチ・パンチが最も有名であろう。僅か二、五センチの隙間があれば、そこを加速した拳に成人男性が吹き飛ぶ程の衝撃力を発揮させる事が出来るというものだ。これは寸勁、或いは短勁と呼ばれる。拳法の技であり、本来剣に使えるようなものではないのだが、祖父の雅久はこの発勁の概念を独自に応用させて剣術に取り入れた。

前提として、剣が体の一部になるような型の反復練習を行う。そして型を刀人合トウシンわせて単一の動作と捉えて行えるようになった頃、足指からの勁のパイプを作る。運動エネルギーをロスなく繋げ、流れるようにする。そしてそれを、剣のストロークに載せるのである。解放する瞬間は、剣の重心　刀身の丁度中間より少し上にある芯にて接触時に行く。シビアなタイミングで、これができるようになるまで、俺は五年かかった。

剣を振るという事で誤解されやすいのが、最初から勢いをつけて振ると、ミートポイント　力が解放される作用点、芯の事　が「最も速度の乗る地点」のみになってしまう事だ。素人がよく陥りやすいミスで、これは誤りである。野球やテニスならいざ知らず、剣術でこれはない。これを加速度的な動作と言う。しかし剣なら、軌道そのものがミートポイントでなくてはならない。何時、どこでどこが触れても　斬る。ストローク自体が必殺であるのだ。故に剣速は、比較的緩やかなものとなる。等速でなければ、前述した加速度的な動作のミートポイントを全体に広げられない、という理屈である。よくある剣豪の動作は水のように緩やか、と例えにされるのは、これに一因があるだろう。

話を戻そう。上段構えからの剣速である。速度が足りない、と言ったのは上記の等速度が原因であり、しかしこれは剣術の観念から言えば間違いではないので、疑問を抱いている。

単純に速さだけを求めるなら加速度的な振り方をすればいい。しかしそれでは力の伝達にデメリットしか生まれない。等速度的な振り方ではブラインドネスが攻撃してくるまでに間に合わないのではないか。振り方を変えて数度、切り下ろす。

切り下ろした時に膝と腰を沈み込ませ、体重を乗せる。力を解放する芯が命中する時点で刀を握り込み　刀は左手で振るものである、本来右手はあまり力を入れない　しっかりと勁を伝達する。しかし、これだけでは足りない。今の俺では、この魔剣は成立し得ない、という事が解っただけだった。

もう少し。もう少しで完成しそうなのに、齒痒い思いである。

だが、そこまで焦ってもいない。俺には奥の手が一つある。数年前に祖父を破ったものだ。俺が百式合戦法を継ぐ時に編み出した、我流の秘剣である。まあこれに至っては、発想が数年前というものもあつて些か突飛に過ぎるものとなっている。あまり人に自慢出来るものではない。

自ら隙を晒すという愚行、鼻で嗤われて然るべきなのだから。

視線を感じて、そちらを見た。女性三人と猫一匹がいた。様子を見に来たようだ。やはり床板を踏み鳴らす音が原因だろうか、それについては申し訳ない気持ちである。

「うるさかったか。悪いな、夜中に」

時雨が一番に口を開いた。

「苦情が来るわよ。ただでさえ隣の藤崎さんには迷惑かけてるつてのに、どういふつもり？」

それを言われると痛いので、閉口するしかない。

「久しぶりだねー、誠君がお稽古してるの」

「ああ、そうだな。昔も今も、二人には世話をかける」

それで思い出したのだらう、祖父の酷い仕打ちによく倒れていた昔の俺は、つい先程のように風呂に入るのも毎回手伝ってもらっていた。食事や怪我の世話もあつて、二人がいなかったらと思うと身震いする。

「剣術……刀かあ」

シヨリーが物欲しそうに見ていた。というかお前、もう暗いけど帰らなくて良いのか、と。

「……やってみるか？」

一瞬はつとして、しかしそれを押し殺した。

「いいえ、遠慮しておくわ」

しかし興味はアリアリのようである。まあ自分の技に誇りを持っている剣士の場合、他の得物はなかなか持ちたがらないものだろう。

「でも誠君、何時の間にアルバイト変えたの？ 私知らなかったよ」
「え？」

シヨリーが慌て始めた。俺はアルバイトを変えたつもりはないし、そもそもあの骨董屋の事があってから他のバイトは受けていない。シヨリーはと見ると、口から言葉にもならない言葉を発している。放っておくと自滅しそうなので、口裏を合わせる事にした。恐らく、それが一番いいのだろう。

「ああ、シヨリーの言う通りだよ」

「……シヨリー？」

時雨が眼を細めた。

「ヴィクトリアさんの事？」

「そう、あだ名。俺がつけた」

「センスないわね、可愛げが全然ないじゃない。何その男みたいな、もつとマシなの付けてあげなさいよ、馬鹿」

腕組みをして俺に小言を言い始める時雨。恐らくこれに悪気はない。女性ならもつとかわいいあだ名を付けてやれ、と促しているのだろう。時雨の言う「しーちゃん」を思えば解らない話でもないのだが、では一体どういうのならしくり来るだろう、と考えていると。

「……割と気に入っていたのだけれど……」

それに慌てて弁解を始める時雨を置いて、俺は木刀を壁に戻した。

もう夜も遅いので、シヨリーを送っていく事になった。詩音は隣なので問題はないが、時雨はそうもいかない。朝霧神社はこの界限、北市街区の外れにある。郊外とも呼べる場所であり、街路灯も少ないのだ。

「んー、じゃあお母さんに頼んで送ってもらおう！」

詩音が気楽にそう言うのだが、俺としては気が重い。またご迷惑をおかけしてお気を悪くなされないだろうか。とても心配……いや、それどころじゃない、今日学校行ってないのではなかったか二人共、

サボってうちにいた、という事がバレては一大事である。それこそ顔向け出来ない。

一人で後ろめたい気になっていると、詩音が続けた。

「私の我侭なんだから、誠君が気にするような事じゃないよ。ホラホラ、夜のおデート楽しんでおいでー。でも後でレポートの提出があるから、きちんと纏めておいてね」

送っていただけなのにデートとは冗談じゃないと思ったのだが、眼を見るに本気である。寧ろ、眼が据わっている。冗談では、ないようだ。

俺はそれ以上深く考えないようにして頷いた。

道中、シヨリは俺の先を歩いていた。家はこの街、高倉市の中心市街地に建つ高層ビル、スカイヒルズタワービルにあるという。そこは市民の中でも特に富裕層が居を構える場所である。セレブと呼ぶのが正しいだろうか。しかし職が警官なのでそれも違う気がする。コイツもコイツでよく解らない背景を持っているものだ。

「縫合用の針と糸を常備してある家って、今時普通なのかしら」

言外に、西村の家がおかしいという事を言っているのだろうか。あんなものが用意してある家など、他にある訳がない。そうやって幾らでも深読み出来るセリフに拳動不審になっていると。

「私も用意しておいた方がいい？ でもあれって専門の医療資材よね、どうやって調達するの？」

「いや、用意はしなくてもいいんじゃないか。うちがおかしいだけだし」

探せば麻酔用の注射器も出てくる筈である。あの時は痛さと眠さで頭が満足に回っていなかった。疲労もあっただろう。真白が嫌に万能なので助かった。

縫合用の糸というのは生体に影響がなく、雑菌等の繁殖しない清潔で生理的な素材で作られている。傷口というデリケートな部位を縫おうというのだ、そこには細心の注意が払われていて当然である。

では何故うちにそんなものがあるのかというと、これがまた剣術では真剣同士の立会いが多くなる為だ。どんな上級者でも事故は免れない。素人同士の生傷も絶えない稽古に、いちいち救急車を呼んでいては近所迷惑でやっていけないのである。

「門下生がいて繁盛してた頃は、かかり付けの医者がいたしな。まあ近所の外科クリニックなんだけど」

流石の爺も医師免許までは持っていなかったのだ。傷ついた血管も縫ったりしなければいけない為、素人が下手に手を出せるものではない。そこをいくとあの真白、知識の量にどうにも不可解なものを感じる。戦う事に慣れている、のは勿論として、術式や剣の技量、ブラインドネスとの因縁に縫合法の手腕……これでは幾度もの修羅場をくぐり抜けて来た歴戦の猛者のようにさえ、思えるのである。

いや、実際そうなのかも知れない。未だ底を見せないアイツにも事情があるのだろう。だがその得体の知れなさ、少し不気味にも感じる。

そもそも、俺はアイツの事をまだ全然知らないのだ。

「なあ、シヨールよ。お前に頼みたい事がある」

俺は言い出す事にした。道場で考えていた事だ。こんな事を言う少し格好を付けすぎているように思われるかも知れないが、躊躇はない。

「もし俺がどうにかなくなってしまったら、俺を殺してくれ」

或いは。自分であるという事を忘れてしまったら、俺が詩音と時雨を殺してしまう可能性だってあるのだ。そんな事、最もしてはいけない事だ。守りたいから戦うのに、それを自分の手で傷つけるなど、言語道断というものである。

「……………」

シヨールは答えない。やはり、こんな頼みは自分勝手に過ぎただろうか。それとも予想出来ていたから、どうはぐらかすか考えているのか。

「どうして、私なの」

頼むべきは真白であつたかも知れない。俺をこんな出来事　怪異に誘つたのはあいつである。しかしあまで得体の知れない女、どうにも信頼が置けない。

「お前の実力は一度見た。アレなら何の心配もない、一撃で俺を殺せるだろ。逃げる事も避ける事も防ぐ事も出来やしないんだ。それにお前は自分で言つた。殺人鬼だつて。だったら俺がそうだった時、お前が殺すべきだろうと思つたんだ」

「真白に頼むのが筋ではなくて？」

「俺もそう思つたさ。けれどダメだ。根っこの部分にまだ何かを隠している。真意が見えないヤツは信じられないからな」

「私だつて隠しているわよ」

「だろうな、でもお前は真つ直ぐだ。あの時交わした言葉でそれが解つた。お前は信じられる。お前にしか頼めない。お前になら、殺されてもいい」

殺し文句ね、と。静かに言葉が帰ってきた。

「百歩譲つてそれは良いとしましょう。でも、そうなったらあの子達はどうするの？　貴方を殺した私は確実に憎まれる。そんなの、ゴメンだわ。確かに嫌われる事には慣れて　慣れていくけど。人間を殺すなんていうのは、私の中で、私が決めたルールに反する事よ」

「俺がそうだった時、多分それはもう人間ではなくなつてるって事だろ」

ルールには反しないのだ。だが言われる通り、これは俺のせいで憎まれ役になつてくれと頼んでいるようなもの。シヨリが嫌だと言え、強制は出来ない。

「けど、俺までブラインドネスのようになったらどうする。俺は誰よりも呪いに近い場所にいるんだろ、ならないって保証がない」

「……そう。不安なのね」

彼女は振り返り、微笑んだ。

「あの子達を傷つけるのが怖いよね、それって。多分だけど、貴

方ならそう考える、んだと思うの」

「ああ、ドンピシャだ。当然だろ、俺は誠実な男だぜ」

「私の胸ばかり見ている人の言葉とは思えないわね」

バレていた。言葉に詰まり、シヨールの苦笑がまともに見れない。あえて見ないようにしていたのに、どうしても眼がいつてしまうのだ。今だから言うが、初対面時から気にはなっていたのだ。

「でも、いいわ。騙されてあげる。悪い男に引っかけたと思えばいいのかわ。でも一つだけ約束して。私は貴方を殺さずに止める。その後は、貴方が自分で何とかしなさい」

開いた口が塞がらない。どうしてそんな事を断言出来るのだろうか。自信を持っているのはいいが、あまりに大言に過ぎないだろうか。

「お前、止めるって、どうやって？ だったらブラインドネスもどうにか出来るんじゃない」

「アレはもう手遅れよ、自分から堕ちてしまった。でも貴方はそうはならないでしょ。あの二人が最後の止め金になる。今日会って解った、あの二人は貴方を愛している。貴方もあの二人を、愛している。だから、最後まで抵抗出来る理由になる。」

だから、私が貴方を、最後まで堕ちる前に止めてあげる。そうしたら、後は君自身の意志ウィルが決めてくれるわ」

「意志？」

「そう、人間を人間たらしめているもの、それは精神や魂だけじゃない。深層意識イドと自我意識エゴの間にある、己の意志ウィルよ」

それが、お前のルールだというのだろうか。意志によって生を得る。生きる為の意志を持て、と。だったら了解しよう、お前のルールに則って、俺は最後まで抵抗する。それが信賴の証になるだろう。「よし、解った。約束だ。そうだ、違えない為の約束って、指切りをするものなんだぜ。知ってるか？」

俺は右手の小指だけを立てた。シヨールはきょとんとしている。

「俺はお前を信じる。だからお前も信じてくれ。これはその証明だ。なんてのは、クサ過ぎるか？」

恥ずかしさに頭を掻く。ショーリはおずおずと右手を差し出してきた。

小指同士が、絡み合う。

「いいえ、そんな事はない。私、やってみたいと思う。約束というものを」

綻んだ表情がせめて見られないように、と俯いて、俺は最後にやったのはいつだったか思い出せないその決まり文句を唱えるのである。

「ゆーびきーりげーんまん」

俺達はこの日、違えない約束をした。まだ会ったばかりだというのに、盲目的な信頼を寄せて。それでも俺は、その相手がショーリであるなら、裏切られても許せるだろうと、どうしてか思うのである。

多分、運命とはこういうものなのだろう。コイツと出会えたのは恐らく、この為だ。俺を止めてくれる人と出会えた、運命なのだ。けれどそれが最後に実を結ぶかどうかは、己の意志ウィルが決めるもの。チャンスをもに出来る人間とは、そうやって運命の波に乗っているのである。

運命 赤い、糸。それは縫合系ではないけれど。俺とショーリを結ぶ運命の糸があるのだとしたら、それは血塗れの赤い糸である事だろう。

でも、俺はこれが縫合系であればいいと、心の隅で思ったのだ。

帰り道の話である。友人 南清二が最近始めたと聞いているコンビニが近かったので、足を運んだ。先に稽古を終えていたのが喉の渇きの原因だろう。冷たいものが欲しかったのが本音である。

「いらっしやいまー……あれ、西村」

レジ打ちをしている彼に歩み寄る。

「よう、清二。こないだはありがとな」

「別にいいよ、でも何か面白そうな事してそうじゃん、僕にも一口噛ませてくれない？」

ふむ、と考える。確かにコイツの情報収集力は眼を見張るものがある。ここは一つ、それを利用させてもらいたいところだ。

「ああ、俺もお前の力を借りたいと思う。ちよつと調べて欲しい事があるんだけど、いいか？」

「オーケー、どんときなつて。あ、店長ー、僕もう上がりますねー」いきなりそう声を上げた。通路の先にいる中年男性が手をあげて答えている。

「お、おい、いいのか？」

「いいのいいの、どうせ時間だったんだ、いやあ元は欲しいコンバットナイフが高くて買えないから、その足しにするのに始めたんだけど。バイトも結構良いもんだね。面白い」

勤労意欲を出すのはいいが、危ないものを買集めるのは止した方がいと思う。

清二が着替え終わって、外に出てきた。

「じゃあ、僕の部屋に行こうか」

そのまま連れ立ってアパートへと向かった。

彼の部屋は色々な物が溢れている。六畳一間を借りているらしいのだが、その殆どが怪人のお面やらモデルガン、はたまたカップ麺などの空容器で埋め尽くされている。キャンプ用のテント器材まであるのは一体何事であろうか。

「んで、調べて欲しい事って？ 僕としては先に西村が何やってるか知りたいんだけど」

「ああ」

協力を頼んだのだ、隠し事は出来ない。しかし馬鹿正直に教えるつもりも毛頭ない。術式等の、機密と思われる重要なところは伏せて、簡潔に伝える事にする。

「俺が探ってるのは、ジャック・ハンター事件だよ」

清二には停死病　あの人喰いの術式を街に張っているという「レイス」なる人物を探してくれるよう頼んでおいた。潜み、隠れて姿を現さない重要人物だ。そう簡単に見つかるものではないだろう。念の為にPMCランツクネヒトの事も伝えたが、どこまで探れるだろうか。代わりに提供した、銀髪の美女と知り合った事やあの爪痕スクラッチの正体、モデル・ウルフの情報は少しまずかっただろうか。彼の好奇心が妙な形で刺激されていない事を祈りたいところである。

そんな時である。特有の排気音を響かせて、バイクが走ってくる音がした。それも一台や二台ではない。ざっと十台以上　道路の向こうから群れを為して、俺を中心に円を描くように回り始めた。自動車もいるのだろう、正対するライトが嫌に眩しい。手を翳して眼が焼かれるのを防いだ。

「な、何だ……？」

嘲笑と怒声。罵声とクラクション。若者の集団であるのがバイクの改造度合いから見て取れる。やがて一台の車、眼の前に止まったソレから一人の人物が降り立った。

「よう兄ちゃん、驚かせて悪かったな。俺はクドウだ」

そう名乗ったそいつは、俺より背が高く、細身だった。緩めのサイズである黒いタンクトップに赤の革パンツ、足は黒い革靴だろうか。銀色のチェーンを首に巻き、腰にもつけてチャリチャリとうるさい。

「コイツらは俺のチーム、ライトニング・クルセイダーズだ」

……頭の悪そうな名前である。語感だけで選んでそうなところが、特に。俺がそう思っていると、返事ぐらいしろ、と恫喝された。

「俺に、何か用」

途端に周囲から声があがる。舐めてんじゃねえぞ、という類ものが大半だ。

「いや何、最近ナンカ調子こいて、俺の街を嗅ぎ回ってる餓鬼がい

るって聞いてよ。一言忠告しておいてやろうと思っただけ」

そこで男　クドウは顔を寄せてきた。香水の匂いがキツかった。耳打ちするように声が響められる。

「　お前、ブラインドネスとやりあったんだってな？　よく生きてたぜ、アイツから逃げ延びるなんざ、奇蹟に近い」

「　！？　お、お前、まさか！」

周りからの恫喝染みた不満の声が一際、大きくなる。クドウはそんな中でも続けた。

「俺も同じさ、お前と同じ。持つてるんだろ。超常現象を起こす力

天からの贈り物ギフトをよ」

贈り物　ギフト、と言ったのか、今。それは何を指して言っている言葉だ。赤い眼か、それとも剣筋を視る眼か、はたまた別のものか。

「コイツらも同じさ、お前と同じ。力が欲しくて俺のところへ来た、頭の弱い連中だ。チーム名も俺が決めた訳じゃねえ。だがな、コイツらは今までの弱い自分から決別したくていやがる。下らねえこの社会に自分という存在を思い知らせてやりたくていやがるのさ。」

どうだ、お前。ブラインドネスを相手にして生きてられるヤツなんてそういない。同志になれよ。どうせもう人外に近いんだ、楽しくやろうぜ」

このクドウという男の言葉は一見、耳障りが良く聞こえる部分もある。弱い自分との決別。それは強くなるという事だ。弱者を虐げる立場になるという事。それは、俺が求める強さではない。

そんなもの、俺には必要ない。

同じ、と言ったか。守りたいものを守ろうと願い、その為に人を殺す覚悟を決め、それでもダメな時は自分を殺してくれと、自分の命を諦めた俺と、今そこをバイクで周回して下卑た笑いを浮かべる頭の軽そうな輩を、同じだと言ったのか。

冗談にもならない。冗談じゃない。冗談ならもつとまともなものを言え。

「そうか」

俺は屈みこんだ。クドウがいぶかしんで体を折る。距離はほぼ密着に近い。この距離なら何の問題もない。

寸勁、俗称はワン・インチ・パンチという。僅か二、五センチの距離があれば、成人男性すら吹き飛ばす威力を発揮する、零距离でも撃てるパンチだ。クドウの鳩尾に放たれたそれは、眩しいライトを照射し続ける車輛のボンネットにぶつかって体を預けるクドウの姿で、その威力を証明する。

罵声を上げて駆け寄ってくる群衆。予想出来た展開だ、戦略に何の捻りもない。状況としては俺は無手であり、ここでやりあうのは場所も不利で得策ではないと判断、閉ざされた人の環に突破口を開けるのが最優先である。

先に駆け寄り、男の顎をかち上げた。振り下ろされた得物が背後で虚しくアスファルトを叩く。ソイツを次に向かってきた相手への壁になるよう立ち回り、突き飛ばして足止めとする。身を屈めて背後からかかってきた相手に蹴りをいれ、そのまま引き戻しての二撃目はその隣にいた相手へと吸い込まれる。

別角度から突き出されてきた鉄パイプは咄嗟に肘と膝で挟んで受け止め、右手で掴んで引き寄せる。足払いもかけて体勢を崩させると顔を蹴り上げて、その得物を奪ってまた違う背後の敵へと突き入る。

人の環が狭まってきた。やるなら、ここである。

発勁。足の指から生まれた運動エネルギーを、全体を通してそれを加算し、遠心力や体重その他諸々を込め、作用点へと導く。前準備として、腰を落とした。

「……………ッ！」

ストロークはイチで始まり、イチで終わる。これは剣ではないが、俺の体は剣そのものである。斬れはしないが、切れる一撃を放つ。

水平に真一文字、後ろ回し蹴りが三人纏めて薙ぎ払った。吹き飛ば輩に巻き込まれてまた複数人が足止めをくう。やった事は単純だ、

既存の格闘中にある、後ろ回し蹴りというだけである。ただ、その威力は常人では為し得ないもの。

これを、百式合戦法、歩の段フミノダン 足刀・一文字と呼ぶ。人は腰に重心を置く構造をしているので、そこを足払いで横から刈り取ってやれば呆気なくバランスを崩す。そこからは慣性に任せて押し出してやれば容易に飛ぶのだ。これを俺は、地面から引っこ抜くと呼んでいる。

不用意に近付くのが危険だと解ったのだろう、群集は二の足を踏んだ。当然である、誰にでも出来る事じゃない。俺はお前達とは違う。安易に縋って力を手に入れた訳ではない。

眼を覚ませ、クドウの言葉はまやかしだ。ああやって人心を操って、誑かしているだけなのだ。だが今、それに耳を貸す程冷静でも温厚でもないだろう。

俺は隙について最も環の薄くなった箇所へと走り、薙ぎ倒して突破した。逃走する俺を見てだろう、クドウが号令をかけるのが聞こえる。

「逃がすな！」

建物の影に隠れる。走り回ったせいで息が上がっている。すぐ脇をバイクと車がかましく通り過ぎていく。まだ安心は出来ない、総勢で何人いるか解らないのだ。およそ二十人程度だとは思うが
「よう」

跳ね退いた。建物に腕をついて気だるそうにしているクドウが、そこにいた。取り巻きはいない。

「なかなか良い度胸してるじゃねえか、お前よ。俺に一発くれたヤツは久しぶりだぜ、大したもんだよ。流石、ブラインドネスとやりあうだけはある」

俺の頭に浮かんだのは、どこでバレた、という事だった。ここに来るまでバイクや車では通れない道を通り 地元民の土地勘である 追跡も攪乱して撒いていたというのに。中には行き先を予想

するヤツもいて、今のよう^にに間一髪の時もあつた。

「そう警戒すんな、何もしねえよ。そのうち相応しい機会が来るだろ^うからな。お前があの人外　マシ口だったか？　という限りはな」

人外と断言した。あの真白を。いや、確かにそれなら納得がいく。今日だって時雨を避けるようにどこかへと行っているのだ。頷ける話。

「あの盲目野郎に会いたければ、明日の夜、教会にきな」

「……仲間なのか、アンタ」

クドウは、呆れたように首を振った。大げさに両手を開いてポーズを取っている。癪に障る男である。

「誠！」

背後からの声である。弾かれるように振り返ると、どうしてか時雨がいた。息を切らして、膝に手をつけている。

どうしてここに。こんな時に、こんなタイミングで現れる？

「時雨！？　どうして」

まさか、予言だろうか。時雨の持つ奇妙な　言うなれば特殊な力である。彼女の直感が、時折何かを感じ取ってそれを口にする^と、実際にそれが起こる。

「へえ、上玉じゃん」

クドウが興味を示した。俺は咄嗟に立ち塞がる。ものの、片腕で「どけよ」

押し退けられた。岩のような存在感を感じる。俺では、止められない。しかもここは狭い、真っ向からやりあうのは不利の一方。

「時雨、逃げろ！」

「へえシグレちゃんっていうの。かわいいねえ」

背後からでも解る。このままでは時雨が、襲われる。

「な、何、貴方……」

後ずさりながら、震える声で。

「アハッ、あなたとか、ちょっと興奮しちゃうじゃん」

クドウの顔が、時雨の顔に近付く。意図を察した時雨が、咄嗟に平手打ちした。

「ッ、ハッ！」

しかしクドウの右手が、時雨の胸に触れている。彼女は腕を振り払って俺を見た。俺は、頭の中が真っ白になって、時雨の目尻に湛えられた光るモノを見て、視界が真っ赤になるのである。

「ま、誠！」

「そいつに触るな！」

近寄り、両足を地面につけると腰を落として力を溜める。さっきの後ろ回し蹴り、足刀であるが、今度は決闘用のもの。

足の裏が相手の腰を蹴り、地面から引っこ抜く。時雨は俺の動きを昔から見ているからだろう、何をするか察して体を壁際に寄せている。

クドウの体が宙に浮き、数メートルを一気に飛んだ。明らかに俺の体重よりも重い相手の体であるが、そんなものは正直、無視出来るのが勁の強みである。時雨が俺の傍に駆け寄る。怖かったのだろう、俺の服を掴む手が震えている。

「おー、イツテ……何だよ、お前調子乗ってんじゃねえぞ」

「うるせえ、先に手を出したのはお前だろうが」

「ハハッ、そうだっけね。まあいいや、じゃあ明日な。待ってるぜ」

クドウは、跳んだ。シヨリの大ジャンプとは違う、あれは真白と同じものだ。術式を使わない長距離移動……アイツももしかしたら人外なのか。

勁の爆発的な作用力を一点に集中する後ろ回し蹴り　足刀・鎧いどう通しいどおを放ったが、然してダメージを受けていなかったように見えた。頑丈な肉体である。ヤツを倒すには

俺の服が引つ張られた。時雨が俯き、顔を見せないまま、泣いていた。

「……………く、っ」

だが気丈に顔を上げて、先を行った。

「こつち、このままじゃ見つかるから、この先の人通りが多い道に行くのよ！」

やはり、そうなのだ。予言……時雨の予知めいた行動は、そのせいである。

ゲームセンターやパチンコ店、風俗店が並ぶ歓楽街を歩いていく。しかし先に行く時雨はふらふらと体を揺らしており、先程の精神的なショックが窺い知れる様子である。俺はどこかゆっくり出来る場所を、と思ったが、どこも怪しい雰囲気、怪しい視線でこちらを伺っているように見える。時雨が学校の制服姿というのもある

そこで俺は、ここはこの場所しかないなと決断して、男としての行動力を見せるのである。時雨の手を引いて、その建物へと有無を言わず、入った。

「え、えっ？」

「大丈夫だ、少し休憩するだけ。俺もお前も、休む必要があるだろう。自分の体に疲労もあったので、受付を済ませて指定された部屋番号の鍵を取り、向かう。」

「え！？ で、でもここ、ラブホテル……」

そうなのだ。でも、ここしかないのである。俺の金銭面でも、場所的にも。

部屋は妙な匂いがした。芳香剤だろう、と判断してルーム中央にある丸いベッドへと腰を下ろす。時雨が戸惑いがちに、左側へと少し離れて座った。

「はぁ……それで、どうしてお前があそこに？」

まだ俯いている。話し出すのを待っていると、やがてぼそぼそと。「私が、たまに変な事を言い出す癖があるの、解るでしょ」

「ああ、予言みたいな」

「あれって、最近解ったんだけど……やっぱり、未来に起きる出来事が、視えてるみたいなの」

「予知か。成る程、道理で」

恐らくだが、俺が奴等に捕まる未来などが視えたのだろう。それなら家に送られていった筈のコイツが息を切らせてここまで走ってくるのも、頷ける。今、自分にしか出来ない事をせず、人が傷つくのを見過ごすなんて事、コイツに出来る訳がないのだ。

彼女が顔を上げた。泣き腫らした赤い眼が痛々しい。

「お、驚かないの！？　こんなの絶対おかしい、おかしいって思っ
て、絶対誰にも言えないって思ってたのに」

そこまで焦るのも頷けないではないが、俺は昨夜からトンデモな出来事に巻き込まれている身である。今更新鮮な驚きであるとは言えなかった。麻痺しているのかも知れない。

「俺も似たようなものが視えるからな」

実際、それは嘘ではない。あの剣筋は未来の出来事を視ているのだ。時雨と俺は、そういつた点で同類であると言える。

やはり、血だろうか。朝霧の血。

「アンタも……？　どうして、そんなの今まで一度も教えてくれなかったじゃない」

「お前とは縁が遠い話題だ。相手の剣が来るのを視る事が出来る。来る先が、視えるっただけ」

剣ではどうやっても時雨と共有出来ない話題だ。これは話す機会がなくて当然だろう。

「そう……良かった、私だけじゃ、なかったんだ」

また、彼女の目尻から涙が流れた。やはりまださっきの男の影がチラついているのだと、すぐに解った。

「さっきの事だな。大丈夫だ、アイツは俺がきっちり殴ってきてやる。安心しろ」

すると、時雨はブンブンと頭を振った。

「ち、違う、違うの。その、胸を……」

「触られた方か。いや、あれはアイツの手が早かったただけだ。あの状況ではどうしようもなかった。犬にでも噛まれたと思って」

小さい声が、心に受けた傷の程を如実に伝えてくる。

「やだよ……初めて触られたのが、あんなヤツだなんて、やだよ」

南清二が、俺に学校で言っていた話にはやけに専門的なものが多い。その中の一つを、今、こんな時になつて思い出してしまう俺は、案外あいつの話を楽しんで聞いていたのかも知れない。

強烈なエピソードと共に記憶された出来事は、脳の記憶のメカニズムの中でも長期記憶というものにインプットされる。これは鍵の開け閉めや服の着方、切符の買い方等、普段通り行動していて繰り返し使われる記憶が、海馬からの呼び出しの頻度に応じてどんどん強く、克明に記憶されていく事で、忘れにくい記憶 になつていくものである。逆に勉強や料理のレシピ等、その場限りの記憶は海馬からの呼び出しの頻度が少なく、短期記憶 として忘れやすいものとなつていく……という話だ。

時雨は、初めて、と言つた。あんなヤツに触られたという事実が、受け入れられないというのだ。こんな時はどうするべきだろう、俺が触れてやるべきだろうか。しかし踏ん切りがつかない。それを俺がしていいものかどうか。

ショーリの言葉を、思い出した。あの二人は貴方を愛している、と。本当だろうか、それはお前の勘違いではないのか。お前は会ったばかりの二人の気持ちが解るといふのか。それに愛なんて、どうやって理解してあげればいいというのだ。

「時雨、その、な」

俺は、先に思い出した記憶の話をした。時雨は途中までは真剣に聞いてくれた。

「何それ、全然ロマンチックじゃない。こんな時に、そんな話する？」

睨まれた。いたたまれない気分である。

「いや、だからな。もつと強いエピソードを記憶に上書きしてやればさっきの事は、おい、なんでそんな離れる？」

丸いベッドの反対側に行く程、距離を取られた。見れば顔は真つ

赤である。

「待つて待つて！　ここ、ラブホよ？　あれより強烈なエピソード
つて、そ、それともう」

「いや、胸の話だ！　それとは違う、最後まではしない！」

一旦、落ち着く。だが誤解が生じたようだ。

「それって私に魅力がないって事に……」

ややこしくなってきた。しかしこれは今からずっと時雨について
回る心の傷になる。もっと丁寧に扱ってやらないといけない問題だ。
「違う、そういう意味でもない。ただ、俺はお前の傷を癒してやり
たいだけだ。勿論お前が、俺の事嫌いだっていうならそれでいい。
強要なんて出来ないしな。でも、お前が泣いてるのを見るのは、俺
もつらいんだ」

他人から見ればそんな程度という問題でも、時雨は内面がかなり
打たれ弱い。こんな程度という問題でも、きつとずっと泣いている
だろう。子供の頃からこういう二面性を持っていて、相反する二つ
の感情を抱く複雑な心理状態　ダブルバインドを持つ。

多分、それは俺への態度と気持ちだったり、詩音への羨望と嫉妬
だったりするのだろう。しーちゃんと呼ばれなくなってから、少し
ずつ俺達から離れていって、巫女の務めを果たして。それでもまだ
あの頃のまま、俺の姉であってくれるのだろう。

「俺には、お前を癒してやる事は、出来ないんだろうか」

だから、俺はこいつがかわいいのである。シヨリの言う通り、
愛しているかまでは解らない。ただ血の繋がりをそう誤解している
だけなのかも知れない。俺には親がいないから、母性の強い彼女に
母親の影を見ているだけかも知れない。

でも、大切にしたいという思いに嘘や偽りは一つもない。

時雨は暫く逡巡した後、何かを決心したように俺の隣に座った。

「解った。そこまで言ってもらえたら、女冥利に尽きるわ。何だか
変な話だけど、今回はそれでいい。納得してあげる……ほら」

胸を突き出された。程良く育った大きさが眼の前にある。

「いや、ほら、って言われても。どう触ったらいいんだ？」

「し、知らないわよ。そうだ、あのピンク雑誌の男の人みたいに触ったら、いいんじゃないの」

ここでその話を出すのか。だがそれなら、概略としては解りやすい。後は、俺の度胸が試されるだけだ。

そろそろと手を近づける。喉が渴く。唾を飲み込む。緊張が一気に増す。右手に神経を集中する。何せ初めて女性の胸に触れるのだ。俺の長期記憶にだって保存される強烈なエピソードである。イトコの……姉とも言える人の胸。その背徳感が、俺の背を押した。

触れる。柔らかい、というのが第一印象。撫でる、さする。と、時雨が艶のある声を上げた。

「っ、はあ、」

多分、弱い刺激が服越しに着ているからだろう。もしもじと体を擦じらせている。顔が先程までの赤面顔とは違う。艶というのか、色っぽさが増している、ように見えた。紅潮した頬がそれを示す。

何も言わず、時雨は上のワイシャツを留めているボタンと青のネクタイを外していく。多分、彼女はさっきの記憶を上書きするという言葉をそのまま飲んでくれたのだ。服の下から触るのは、俺が初めて。そういう意味を持った行為。俺はボタンが外れて出来た服の隙間から手を差し込んだ。柔らかさが一段と増して感じる。面白いように形を変える。指の形に沈み、力を抜けば弱く押し返す。

「時雨、ブラを……」

「ん……」

試しにと言ってみたが思いの他、彼女は抵抗しない。言われるままに背中の手をやると、ぷち、と音がした。下着の抑圧から解放された彼女の胸は、少し大きさを増したように見える。大き過ぎず、小さ過ぎず、と言ったぐらいだったが、Cカップだと過去に聞いた覚えがある。

その肌は滑らかで、また吸い付くようで、ともすればずっと触っていたくなるような感触だった。温かくて、もっと触りたい、もっ

と触っていたと思う。俺の頭もだいぶやられてきたようである。

このままでは少し、自制が効きそうに、ない。

「きゃっ、」

お姫様抱っこのように時雨の体を持ち上げ、足の間に彼女の臀部を置くように座らせる。一気に距離が縮まり、体同士が触れ合い触れ合う場所が妙に熱を帯びて感じる　顔が上気していくのが解る。心臓が、痛いくらいに脈打つ。

「ま、誠……」

夢中になっていく。彼女の体に。ああ、俺も男なのだな、という実感を抱いた。時雨が体を逸らして触りやすいようにしてくれる。背中から手を回して、両手で触る。彼女が俺の首筋の匂いを嗅ぐ。顔を押し付けてくる。時雨の匂いに、頭の芯が痺れていくような感覚がした。もしかしたら、このまま……

携帯が鳴る。二人共硬直してしまい、俺は物足りなさともつと続けたいという欲求、そして自分は何をしようとしていたのかを深く猛省する事になるのである。

「あ、あ、しーちゃん！？　うんそう、今家についたところ！　え、ああそうだっけ、いや実はお風呂入ってて、頭がちょっと働いてないかなーなんて、ハハハハ」

嘘もいいところ、支離滅裂の会話をしている時雨は、今、何を考えているのだろう。俺から飛び退いて携帯電話に話しかけている。でもまあ、これで良かったようだ。電話がかかってきてくれて助かった。あのままだったら最後までしていたかも知れない。そんなのは、彼女も不本意であろう。

俺の気持ちだって、今、誰を向いているのか解らないのだから。本能に従って性欲を貪るのは、そんなのは彼女の求める　ロマンチックな恋　ではないのだ。

大切にしたい、と言っておいてこれでは、男として情けない。もっと男を磨いてから、恋というものを考えよう。

電話で応対する彼女の晴れた笑顔に、俺はそう思ったのだった。

第四章 死に至る病（3）

時雨は上機嫌だつた。それはホテルを出てからも続いているように、どうしたのかを尋ねても適当にはぐらかされている。さっきの事かと言うと眉根を寄せて怒り出した。

「アンタね、そういう事は解つても言わないのよ。全くデリカシイないんだから、そんなだからあんな」

途端、頬を緩ませる。斜に構えて覗き込むように顔を寄せてきた。「フフ、そういえば鼻息荒かつたわね。このケダモノめ、ああ怖い怖い、電話来なかつたらやばかつたなあ。傷物にされちゃうとこだったかも。ねえ、そうしたら責任取ってくれたのかしら？」

肘で小突かれ、俺は何やらヘソを曲げればいいのか喜べばいいのか解らない、くすぐつたい心持ちになるのである。

「知るか。いいからその話はヤメヤメ。全く、お前の為にと思つておっぱい揉みしだいたのにこれじゃ骨折り損だ。いや、手揉み損だ」全くの嘘である。得しかしてない。お礼を言いたくてさえいるのだ。時雨はと見ると頬を赤らめて俺を睨んでいた。

「この馬鹿、往来でそんな単語口走るな！ お、おっぱ、お……！」どうやら俗な単語に置き換えると口に出すのが恥ずかしいようである。面白いので放っておく事にする。

「好きで揉……触らせた訳じゃないし！ アンタがどうしてもって言うからだろ！」

成る程、時雨の中ではそれで決着しているらしい。最後にオーケー出したのはお前なのだという事を指摘したかったが、まあ別に良しとする。何であれ、嫌な相手に許せる行為ではないだろう。それにこれは、時雨の想い出として大きな意味を持つからこそ行つた事である。決してやましい気持ちや動機ではなかったのだ。俺に後ろめたい所はなく、しかし行為の後の気恥ずかしさからこうして軽口を叩き合っているという状況だった。

いつも通りの関係に、形だけでも戻りたかったのだ。

「……それで。話を戻すけれど、アイツに触られたってのはもう頭から吹っ飛んだだろ」

「あ、まあそれは。直にやられちゃったインパクトに比べれば、確かに犬に噛まれたぐらいに思えるわねえ。なんだか、あんなのどうでもよくなっちゃったわ。最初は泣く程嫌だったのに……」

時雨は、自分の胸元　心臓のある位置を手で押さえた。

「強烈なエピソードによる記憶の上書き。確かにアンタの言う通りかもね、今じゃホテルの方が印象に強く残ってる。それにアンタは優しかった。肌を通して、アンタの熱が直接伝わってきたのよ。心臓の鼓動も聞こえてた。それって生きている事の証明よね。アンタがすぐ傍にいて、私に触れてる。それだけで、何だか気持ちよくなって……だから、アイツの事なんかもうどうでもいいわ。私はアンタの熱を覚えてる。あの熱さがまだこの胸に残ってる。今はそれでいいと思える」

微笑が浮かぶ。そこに無理に強がっている様子はない。

「そうか、気持ちよかったのか」

「なっ、うるさい。そこだけ反応するな、このヘンタイ！」

時雨は熱と言った。それは俺にも同感である。時雨の熱が、体越しに伝わってきた感触を覚えている。彼女が言うように、あれこそが生きている証明だろう。掌にも覚えた心臓の脈拍は、きっとこの先もずっと覚えている筈である。

お互いが生きている事の、レゾン・デートル存在証明として。

「俺に惚れると火傷するぜ」

「あっそう。火傷したら補償の電話はどこにかければいいかしら」

「冗談を言ったら現実的な返しである。ぐうの音も出ない。こういう手合いが一番困る。」

「やっぱり藤崎さんかな。あら大変、アンタまたあの人に迷惑かける事になるわね」

「いや待て俺に惚れる事が前提であって、そもそも火傷するという

事が確定してる上でその話進めてないか」

時雨は走り出し、俺の前を行った。距離が出来て、周囲の喧騒が会話に割って入ってくるようになる。酔っ払いの怒声にパチンコ店の騒音、車のクラクションまで届いてきた。

風に靡くポニーテール、後頭部の高い位置で縛られたそれを含めて、車のライトに照らされて浮かび上がる。後光を差しているように。

「それなら問題ないわ」

「何？」

よく聞こえない。時雨は何て言っているのだろう。彼女は振り返って、何かを口にした。

「――！」

近くの線路を通る電車の音が重なった。なんて不運だろう、これでは何も聞こえない。ドラマのワンシーンのようにでいて、ロマンチシズムの欠片もない無粋な金属摩擦音の波が、その言葉をロマンチックに攪っていった。

「何だって！？ 聞こえないって、おい！」

彼女が笑顔を零して、走り出す。夜の街を駆け抜ける俺達は、傍から見ればどのように見えただろうか。

時雨がこの時なんて言ったのか、聞こえなかった。けれど、それを彼女に確認する事はない。なんとなく　それを聞いてしまったら、この関係が壊れそうで怖かったのだ。このままでいたい。それは俺の我侭なのだろう。時雨の気持ちに見て見ぬフリをする事に、したのだ。

あの時、俺は時雨の心を縛る事にした。恐らくこの先もずっと、彼女はこの時の事を覚えているであろうと、それを承知で行為に及んだのだ。初めて触れる異性　その想い出がずっと未来まで残るだろう事に、気付かない筈がない。

どうか許してほしい、お前を縛り、けれどその気持ちに答えられない俺の弱さ、我侭を。こんなのは最低だ、きっぱりとお前を諦め

る事も出来ない、はつきりしない男なのだ。

せめて言い訳をさせてくれ。だって、俺には恋なんて、解らないのだ。剣術ばかりで生きてきた俺が、誰かを好きになる事なんてなかった。今ようやくその問題を解きにかかれたのだ。どうか俺に、今暫くの時間を与えて欲しい。

俺は思うのだ。恋に限らず、大切な人を守りたいと願うのは、それは必ず誰か一人でなければいけないのだろうか。俺は詩音と時雨を守りたいと願う。二人を大切にしたいと思う。そこに、どちらが上かという順列を絶対に持ち込まなければいけないのだろうか。それは、どうしてだ？

どちらも大切で、どちらも上に決める事は出来ない。相克、二元論、或いは互いが互いを必要として生きていく、共存、共生というものがあっても……いいのではないか。それは何も悪い事ではないと思うのだ。

とは、言っても。人の気持ちというのは、そう簡単には決着しないものだろうけれど。そういう未来があればいいと、俺は願わずにいられないのである。

ふとした瞬間に思い出す。お互いの熱を思い返す。その熱に焦がれる想いが、どうか互いの枷とならぬように祈るばかりである。

時雨を送った後、俺は家の道場で素振りをした。やはり切り下ろしの剣速に難があるのである。動作を見直し、力の流れを見直し、最後に刀を見直す。クドウの言った言葉が脳裏に甦った。明日の夜、教会　そこにあのブラインドネスがいる。だが、この魔剣は完成していない。未完成のまま実戦に投入など馬鹿のする事である。一度でも見せてしまったら魔剣には成り得ない。一度も見た事がない得体の知れない剣　それが魔剣の象徴となる重要な要素である。それで言うなら、あの魔剣・燕返しはその効力の大半を失っていると言える。それならば勝機は、ある。

俺の魔剣、その完成は間に合わなかった。それも当然であろうか。

寧ろ一朝一夕で完成した剣などに信頼を置く事など出来ないのが俺である。

しかし悲観してばかりもいられない。恐らく決戦になるのは明白だ。念を入れる為に桜吹雪の手入れにかかった。

刀で最も重要なのは、目釘めくぎと呼ばれるものである。これが柄の拵えと刀身なかこ 茎と呼ばれる、柄に入っている部分 を固定する重

要な部品なのだが、素材は竹なのだ。特に質が良いとされるのは、時間が経って枯れあがった竹、例えば竹刀等しなを分解して削り出し、作られたものである。剣道部が長く使っていたものだと特に良い。スポーツ専門店に引き取られ、分解された竹刀から作られた目釘は粘りがあり、よく持つのだ。

何故、竹なのかという事について少しばかりの解釈。

実は金属、鉄製の目釘というのもあって、硬度的にこちらが良いのではないか、という話がよく持ち上がるが、これが竹に劣るのである。

柄の拵えに開いた穴を目貫めぬきというが、鉄ではこれを痛めてしまい、ガタガタと刀身が動き始めて固定の具合が緩くなってしまうのだ。更に、竹と違って目釘の限界が来ると一気にポキッと折れてしまい、刀身がスッポ抜けてしまう。戦闘中にこんな事があつては致命的である。付け加えるなら、目貫穴だけでなく刀身 茎の部分 に開いた目釘穴も緩くなるので、同様の事が起こる。

次に竹製のものだが、こちらは長く使い込む事で柄拵えと刀身の目釘穴によく馴染み、引き締まった状態で固定してくれる。更に大一番の前にはこの目釘自体に湿り気をくれてやると 時代劇で見られる、刀の柄に唾を吐きかける動作はこれが目的である 水分を吸収し、膨張してがっちりと固まるのである。更に対人稽古の時などに、局所的にかかる衝撃もある程度逃がす性質があり、限界が来ても竹なのですぐには折れない。繊維が太く頑丈であるからだ。

尚、当然であるが刀身の目釘穴や柄の目貫を傷めるという事はない。言い忘れていたが、桜吹雪春光四言四枷さくらふぶきはるみつ・しげんしかせにはこの目釘穴が二箇所

ある。

更に言葉を重ねるなら。簡単な道具があればその場での交換が容易である。昔の武士などは替えの目釘と交換セットを常に持ち歩いていた、という話は有名である。

閑話休題。

ハバキというものがある。刀の鯉口を切った時に見える、鐔と刀身を繋げている重要な部分だ。桜吹雪はこれが金色をしていて派手だが、これが鐔などの切羽せつばと呼ぶ部品も合わせて

「ん……？」

目釘を抜いて柄拵えを外してみた所、その中に納まっていた刀身の茎なかこに、何やら不思議な文字が刻まれている。

「これは、呪まじないか何か。臨・兵・闘・者・皆・陣・裂・在・前：

…九字というやつだな」

成る程、呪のろい殺しに相応しい呪文である。これは九字護身法くじごまほうと言って日本で発展した呪術の一種だ。今は仏教にて使われる。曰く、神仏の加護によって病魔や災厄を払い遠ざけるとされている。

何やら派閥によって解釈の仕方に違いがあるようで、特に奇異なのが、九字を切ると魔を打ち抜えるが、切り過ぎるとその場の運氣の流れまでも切ってしまい、災難が寄ってきやすくなるのだと聞く。九字の切り方は手で印を組む手印と刀を使ってその場に格子状の印を結ぶ刀印とがある。手刀を作って刀印を結ぶのが最も手っ取り早いだろう。これは早九字はやくじという。

ふと時計を見ると、十二時を回っていた。体内時計が狂っているようである。いつもなら十一時には限界が来る。片付けてから風呂で体の垢を落とし、床についた。

翌朝、詩音が来た。家の掃除をして洗濯物を始めとした家事一切を済ませると、食事の用意にかかるのが日課である。今は洗濯物を干している。こうして見ると通い妻のようだ。その鼻歌に誘われるよう、足元に猫が寄っていった。猫に話しかける女子高生の図

というのも心癒されるものがある。

警戒されて距離を取られているが。何だろう、あの猫は歌が好きなのだろうか。まあ詩音は修道会の聖歌隊メンバーである。あの鼻歌にだって俺には解らない良さというものを持っているのかも知れない。ピアノも弾けて歌もやれる、天は二物を与えずと言うが、あるところにはあるようである。

「詩音、歌ってくれ」

縁側に腰を下ろしたままの俺が、中庭

すなじゃり 砂砂利の海を眺めて言

うと、物干し竿に洗濯物を干す彼女がこちらを振り向く。

詩音がいるのは縁側と砂砂利の海

中庭の間だ。そこだけがち

よつとした陸地になっている。芝が茂る、頼りない浜。俺が詩音に求めた歌は、アメイジング・グレイス 驚くばかりの恵みである。

「私そんなに軽い女じゃないですから！」

「んー、じゃあいいや」

聞きたかったが、特に言葉を重ねてまで頼むようなものでもない、
と思っていると 詩音は冗談交じりの対応である。

「諦めるの早過ぎ！ 何ですかその思いつきで言ったかのような態度、ちよつと相手に対して失礼じゃないかな」

腰に両手を当てて、憤慨しているポーズである。無論本気ではなく、顔には微笑がある。

「えー？ うーん、まー、そーじゃない？」

ごろりと横になる。西村家の朝は早いのだが 昔から朝稽古の習慣があつた 最近ではこうして他愛もない談笑をする時間となっている。

最近、一日がやけに長いような気がする。夜遅くまで起きているからだろうか。そうしてウトウトしていると、真白が置いていった白猫が腹の上に登ってきた。

もうそれだけで俺の眠気は吹き飛び、ボルテージは最大まで上がる。

「どこまでもクレバーに抱き締めてやるぜ！」

も、のあたりで逃げられた。丁度上半身を起こしたくらいである。悲しい。

「誠君、例え言葉だけが空回りしたとしても諦めちゃいけないよ!」
「んー、遠慮しとくー」

ごろごろと寝返りを打つようにすると、詩音がまた洗濯物を干しにかかる後姿が見えた。足元にある籠の中を見ると、もう少して終わるらしい。

「諦めが良過ぎる誠君っていうのも珍しいねえ。まあ普段からそんなしつこかったら引きますけど」

「何だ、お前から見て俺はどういうキャラなんだ」

「そうだね、格好いいヒーローかな」

昔の約束を引用したのだろうか、冗談のようにしか聞こえない。

ヒーロー、HERO、H・ERO……えっち・えろ……である。英雄、色を好むというが、これはそれを暗に示しているのだろうか。にしては的を射すぎているような。

そもそも、これは冗談の類である。いつも真面目な話ばかりでは、息が詰まるというものだ。

「そして私は悪の幹部! ライバルなのです! ここを通りたくば私を倒してからいくがいい! フウーハハハ!」

制服にエプロンをして背中を見せながら言うセリフではない。弱そうである。ちなみに洗濯物に用はないので倒す必要さえなかった。仕事のないヒーローである。

しかし俺は今日、このまま学校へ行くべきなのだろうか。いつもの日常にひと時だけでも戻りたい気持ちはあるが、あの集団 確か、ランニング・クレバーズだったろうか。

アレにまだ狙われているかも知れないので、デメリットしか生まれないだろう。もし迂闊に登校したとして、そこをあのランニング・ランナーズに待ち伏せ、囲まれてもしたらまずい。学校は檻 言い得て妙である。

いや、そういえば時雨の面が割れているのではなかったか。あの

クドウは女性を尊重する心を持ったような人間ではない。自分の欲望をぶちまけるだけの卑しい男に思えた。もし時雨がまた襲われてもしたら、それだけは、防がなくてはならない。

なんて迂闊さだ。こうしている場合ではない。俺はここに至って始めて、あのクドウの危険さを実感するのである。相手はバイクや車を使えるのだ、加えて人数もいる。その気になれば交代制ですつと俺達を見張る事も出来る。まだ家の場所を押さえられてはいないだろうが

「お、電話だ」

詩音の携帯が鳴る。俺はそれに聞き耳を立てた。我ながら、良い趣味である。

「ああ時雨ちゃん、どうしたの？ うん、今洗濯物終わるところだよ。あ、もう学校？ 早いねー、今日は風紀委員の当番だったわけ？ え、誠君ならすぐそこにいるよ。じゃあ代わるね」

開かれたまま、青色の折り畳み式携帯を渡された。耳を当てる。

「もしもし、時雨か？」

『おはよ。挨拶くらいしなさい、トウヘンボク』

いきなりご挨拶である。しかし、何事も起きていないようだと思う。安堵の息が漏れた。

「良かった、無事みたいだな。昨夜の奴等が待ち構えてたりしなかったか」

詩音が何事かと睥目するが、構わないでおく。

『アンタね、すぐ傍にしーちゃんいるでしょ。滅多な事は言わないのよ。後でフォローしときなさい。それで、なんだけど。アンタは今日、学校には来ない方がいいわよ』

「何でだ？」

『そいつらが来た痕跡があるの。学校の校庭にバイクの走り回った痕が残されててね。校舎の窓も割られてる。多分これ、そういう事……でしょ？』

間違いない。そうか、昨夜は時雨が制服を着ていた。慌てていた

事もあるだろうし、それを責めるつもりもないが、学校がバレているとなると完全に、陸の孤島と化す。

『私は今朝、風紀委員の当番だったから一時間早く登校しててね。そしたら先生達がこの惨状に困ってるのを見て、私もどうしたらいいか考えてたの。今は警察の人が来てるし、暫くは大丈夫だと思うけど……アンタ、あの妙な男に目を付けられてたでしょ。帰りに待ち伏せされたら危ないわ。だから、学校には来ない方がいいと思うの』

時雨の判断は正しいだろう。俺が現場にいても同じ事をした筈である。時雨に来るなと伝えたと思うのだ。そうすると困るのが、詩音の立場だ。もしコイツが俺と時雨に縁のある女だとバレると、間違はなくあのクドウが出てくる筈である。

人の口に戸は建てられない。級友の誰が口を割るとも限らないのだ。

級友……そうだ、清二ならクドウの事も知っていそうだ。連絡を取ってみよう。それだけでどうにか状況が好転する筈もないので、桐谷の手も借りる事になるかも知れない。

「近くに清二はいるか？」

『いや、ここ校舎の裏だから……校内で携帯の使用は禁止でしょう』
風紀委員が自らそれを破る筈がなかった。まあ、堅い女だと思いはしたが、時雨らしいので良しとする。

「解った、こつちからかけてみる。お前は帰る時、桐谷のバイクに乗せてもらえ。ヘルメットをしてれば特定されないだろ」

桐谷の使っているものはフルフェイスのもので、外見から時雨と判断するのは難しくなるだろう、という目論見だ。例え校則違反だろうと、これが最も安全な方法である。

『でもそれ、校則違反』

「後生だ、時雨。お前を案じる俺の気持ちを汲んでくれ」

電話口の向こうで息を呑む気配がした。確かに学校側にバレたらただでは済まない。だがそれ以上に、あいつらにバレたら時雨は恐

らく、傷物にされるだろう。

そんな事は、許されない。

『わ、解った。アンタがそこまで言うなら』

『ありがとう。また後でな』

通話を切り、詩音を見た。

「色々聞きたい事もあるだろうが、今は後にしてくれ。必ず説明する」

詩音は神妙に、しかし事の重大さを推し量るように頷いてくれた。

「うん、解った」

「それで、俺は清二に電話をかけたんだけど、どうすればいいんだ？」

操作の説明を受けて、発信する事に成功。程なく、相手が出た。

『私だ』

「お前はどこの重役幹部だ」

なかなか個性的な応答である。寝起きであろう、声にいつもの調子がない。

『あれ、その声は西村じゃん。どうしたん、昨日の話ならまだ』

「いや、今はそれはいいんだ。それよりお前、今どこにいる？」

『ついさっき起きたとこだけど。今何時だと思ってんのさ、まだ家だよ』

清二の部屋を思い出して、どこで寝ているのか想像出来ずに頭を抱えた。

「まあそれはいい。今すぐ調べてもらいたい事があるんだ」

『あれ、また？ 何だい、最近多いねえ』

「それについては申し訳ないと思ってる。だが俺は、お前の情報網は頼りになるものだと思うてる。力を貸してくれないか」

頼りになる。頼ってしまう。俺には出来ない事、知り得ない事をコイツは平然とこなしてしまうのだ。また今回も、それを利用させてもらう事になる。

『いいよ、何』

「ランニング・ナントカズという集団を知ってるか？」

もはや原型を留めていない気さえするが、少年グループの名前なんて興味がなく、然して重要でもないと侮っていたのが裏目に出た。
『……ランニング？ タンクトップみたいなあれを着た集団か何かな』

「いや、そうじゃなくて。少年グループみたいな、バイクや車で走り回ったりしてたんだが」

『それ、もしかしてライトニング・クルセイダーズ？』

「ああ、そうそう、それだ」

『結構有名どこだね、少年犯罪グループだよ。主に違法薬物を密売してる、暴力団の下部組織だ。この街では一番大きいグループなんじゃないかな。詳しく調べよう、ちよっとパソコンつける。確か専用のまとめサイトがあった筈』

犯罪グループだったのか。街で一番大きいとなると、やはりあの程度の人数が全員ではないのだろう。背後に暴力団もいるとは、厄介なのに目を付けられたものである。

「トップが誰か解るか？ クドウってやつに会ったんだが」

『ああーその人か。最近入ったばかりだけどすぐに当時のトップを殺して、のし上がったヤツだね。何でも不思議な力を使えるらしくて、それでメンバーを釣って纏めてるらしい。本人は、ギフトって呼んでるみたい』

トップを、殺した？ 殺人を犯したというのか。それで平然と君臨しているというのか。マトモではない。頭のネジが一本二本ぶっ飛んでいるとは思えない。

そして、ギフトとは何だろうか。天からの贈り物……クドウは確かそう言っていた。

術式とは、違うのか？

『警察も苦労してる。担当部署は外事四課だね。あれ、外国人も関わってるのか。へえ、虎頭……^{タイガーヘッド}中国系の犯罪シンジケートも一枚噛んでるって。ここって確か新型のMDMAの亜種を下ろしてるとこ

だよ。名前は、color」

カラー……色というのか。MDMAについては以前に清二から聞いた事がある。

「ゲートウエイドラッグ……入門用の麻薬だったか？」

『あ、前に言ったの覚えてた？ そう、使用者の薬物全般への抵抗感をなくし、より副作用や依存性の高い薬物へ誘導する契機となるものだよ。そうやって薬物濫用の入り口になるからゲートウェイ』

入門用も何も、薬物というだけで危ないものだという危機意識が俺にはある。だが、こうした 他のに比べて軽いもの だという意識を持ってしまうと 或いは持たされてしまうと、つい好奇心から手を伸ばしてしまうのかも知れない。

友人がやっているから。周りに進められて。若者が陥る薬物への入り口は、こうした手合いが多いのだという。

『メチレンジオキシメタンフェタミン。MDMAの略ね。これって錠剤型の合成麻薬だけど、たまに覚せい剤に分類されてる。製造が簡単で亜種も多い。colorもその一つ。だけどこのcolorだけが、他のと違う』

同じであり、違うという。その噛み合わない齟齬が意味するところは何かというのか。

『最近広まってきたんだけど、そのcolorだけ、使用後の副作用に奇妙な事例が報告されてるんだ。何でも、黒い影が見えるようになったとかが共通してて、中にはクドウと同じような、特殊な力みたいなものを使えるようになったって。いやそれ幻覚じゃねえのって話だけど』

クドウと同じ力。俺はヤツのそれを眼にしてはいないが、渾身の蹴りを受けても平然としていた所を思うに、何かしら不気味な要素を孕んでいそうで、悪い予感に身震いをするのである。

黒い影。幻覚。幻視。そうであるなら一番良い。幻像が見えるだけなら安全だ。だが、それが幻像ではない事を俺はこの数日でどれだけ痛感した事か。

怪異は実在する。俺達の知らないところで、それらはひっそりと息づいているのだ。

「根城は解るか？ そいつらが拠点にしている場所」

『え、いやそこまでは。普通ネットに公開してたりしないでしょ。でもそうだな、桐谷なら知ってるんじゃない。あいつの中学時代の友達が入ってるって聞いた事あるよ。桐谷も誘われたけど、なんとか断ったって。まあ信頼出来るソースだと思うけど』

「そうすると、桐谷に聞くのが一番いいか」

『僕が聞いておこうか？ アイツ多分まだ寝てるし、学校行くついでに起こして聞き出すくらいは出来るよ』

「そうか、それなら頼む。電話ではどうしようもない」

桐谷はバイトの時間帯が深夜だ。以前はそれで助けられたが、今回は早めに起きてもらう事にする。

『解ったらメールする。あ、連絡先はこの携帯でいいの？』

頼む、と言ってから通話を切った。詩音が不安げにこちらの様子を見ている。洗濯籠の中は、まだ物が残っている。

「すまん、暫く携帯を預からせてくれ。清二からの連絡を待ちたい」

「そ、それはいいけど。ドラッグとか何とか、やばそうな単語がたくさん飛び出した訳ですが、そのあたりについての説明、してもらっていいかな」

「心配か」

「と、当然だよ。誠君が薬物とかやっちゃったら、もう私どうしたらいいか解らなくなりそう」

少しでもそんな未来を考えたのだろう。眼の端に光るものが見えた。昔から涙もろいのである。

「そんなわけないから安心しろって。俺がお前のご両親に顔向け出来なくなるような事、するわけない だろ」

そんな訳がない。でも、そういう訳にはいかない事もある。あのブラインドネスを殺す事を決めた俺は、もう藤崎さんのお世話になる事は出来ないだろう。

今はまだいい。この微温湯ぬるまゆのような日常は、言つなれば嵐の前の静けさだ。それも風前の灯であるが。

「うん、そうだね……そうだよ。私は、誠君を信じるよ」

実際に事を成し遂げてしまった時、俺は　もう藤崎さんとは、その娘の詩音とは、会えないのだ。それを、理解し受け止める。やろうとしている事は、それだけ重い。

人殺しは許されない。どのような事情であれ肯定される事ではない。それが一般見解だ。シヨリーのように特殊な例はあれど、俺が手下を下そうとしているのは半人半妖　ここでは仮にそう定義させてもらうとして　なのであって、シヨリーとは違う。

半分とは言え、人を殺す。そこには必ず罪過オリジナが生まれる。人の原罪　命を奪って生き永らえるという行為だ。

知恵の実じゅんじを食べた人間は、その瞬間から樂園を追われるのが、この世の運命なのである。

詩音は、一度見たものを忘れない特技があつた。だからだろう、この時の俺の嘘は、俺が嘘をつく時に必ずするという癖を、見抜かれていたのだ。後々、それは後悔したくても出来ない事態へと繋がっていく事になる。

血に濡れた柴しばの影で、羽根を休める小鳥はいない。血塗れの翼では、重くて、遠くへ飛んでいく事が出来なくなる。仲間の元へ帰れなくなる。

そうして羽ばたけなくなった小鳥は、地に落ちて　死ぬ運命だ。

結局、清二からの連絡があつたのはそれから三十分後だった。詩音には生憎ながら遅刻してもらつた事になってしまい、申し訳なく思っている。

しかし、メールに添付されていた画像には　携帯のカメラで撮つたと思われる、紙に書かれた地図　には、入り組んだ場所にあるクラブを差していた。

そこは若者向けの違法なクラブ　レイヴというトランス系サウンドを一晚中流し、MDMAや大麻といった多幸系ドラッグを使用して、踊り、または性交をして狂ったように一晚を過ごすダンスイベントを主としているらしい。

ダンスクラブ、ラ・ヴェール。雑居ビルの地下三階にある、名実共にアンダーグラウンドであり、その違法・^{イリーガル}パーティを主宰するのが、ライトニング・クルセイダーズだという。

俺はそのメールの内容に上から下まで眼を通した後、詩音に頼んだ。

「すまん、これを、内容を見ないようにして消してくれ」
詩音はその通りにしてくれた。

レイヴという違法パーティは薬物の広範囲な使用がその側面にある。以前は無料で配布され、誰でも気軽に楽しめたという。恐らくそれで、あのMDMAの亜種、Colorの認知度と効果を広めているのだ。

けれど、薬物の使用によって何かの特殊な力に目覚めるという事があるのだろうか。俺はそれを確かめる為、ショーリのいるスカイヒルスタワービルへと向かった。部屋にいれば御の字だが、いなければいないで構わなかった。どうせ夜までする事もないのだ。

ショーリはいなかった。受付窓口に住た人に聞いたところ、仕事に出たらしい。アポは取られていますか等と聞かれたが、何だかよく解らないので鳩が豆鉄砲をくらったような顔をして帰ってきた。恥ずかしいので思い出さない事にする。それにしても外事四課というのは忙しいのだろうか。ショーリ自身が特殊な立場とは聞いているが、その行動アルゴリズムはまだ把握していない。機会があれば知る事になるだろう、と思いいなおして、場所の下見にと目的の場所、先の画像にあった違法ダンスクラブへと向かった。

雑居ビルの脇にある、長い階段を下りた先に扉があった。両脇に

黒いスーツを纏ったガタイの良い黒人が二人いる。あれでは中に入れない。周囲に、ここがラ・ヴェールであるという看板や表記もない。アングラである事を自覚しているのだろう。このままここにいっても益になるような事はないので　黒服の二人が階段の先から見下ろしている俺を見つけた　さっさと退散する事にした。

昼になった。腹ごしらえに何かいいものはないかと周囲を見渡すが、テレビでCMによく出ているジャンクフード店が目に入る……の、だが。

その店舗のすぐ脇で、若者三人、いずれも男が群がっていた。どうやら誰かに絡んでいるようである。ああしてみつともない風習を目にするのは久しぶりだが、やはり見ていて気分が良くない。

見て見ぬフリも出来た。自分から進んで面倒事に首を突っ込む馬鹿は相当な阿呆か、お人よしのどちらかであるだろう。

俺は、まあ、前者であるが。

「よー、何してんの」

適当にそう声をかける。ああん、と息巻いて三人が俺を睨んできた。その向こう、三人に囲まれていたのは、小学生ほどの少女だが金髪碧眼である。今まで見た事もない、純粋な白人であろう。

親とはぐれてこんな目にあっているのは泣いてもおかしくはないものだが、その少女はどうやらそれとは違うケースであるらしい。平然と　寧ろ泰然としていた。

「そういうの止めたら。店にも失礼だろ。営業妨害で訴えられるぜ。それに大の大人三人で子供いびってんの？　社会人でそれってどうよ」

途端に俺を取り囲み、罵声を浴びせてくる。

「誰だテメエ、カッコつけてんじゃねーぞ！」

襟首を掴まれた。因縁をつけたのは主目的としてこれをさせるのである。正当防衛は成立した。

掴んでくる腕を右手で持ち、左手で相手の脇下へと拳を打ち込む。

ここは最も筋肉を鍛えにくい場所であり、太い血管が通っている急所だ。思わず蹲りそうになる男の腕を取って側面へと回り、相手の体を俺とは正反対を向くよう捻る。

「あだだだ！」

肘の関節を極められ、悲鳴を上げる若者。他の二人はそれを見て手を出しあぐねている。これで結構な早業である。かかった時間としては拳を打ち込んでから丁度一秒くらいだろう。

「俺、警察の知り合いいるんだよね。しよっぴかれないんなら呼ぶけど、どうする？」

二の足を踏んでいた二人は逃げ出した。取り残された一人を解放してやると、腕を押さえて二人を追う。これで一件落着であろう。店の人と利用客からの冷たい視線がなければ。

「あー、大丈夫か？ 怪我とかしてないか、えーと」

名前も知らなければどう呼べいいのか解らない。子供の扱いは門外漢である。言葉を待つものの。

「……………」

喋らない。どこかお礼さえ言われないのは少々きつい。迷惑だったろうか、まあ確かに知らない人からいきなり親切にされたらその裏を疑ってかかる、というのは一般常識として子供の持つべき自衛策であるが、ここでそれをされるとは思わなかった。

いや、違う。この少女、何かおかしい。眼に光がない。意志を感じさせる、普通なら在って当たり前の何かが、ない。

背は俺の腰程しかなく、美しい金髪を低い位置で左右に二つ、縛っている。ツインテールというものだろう。可憐なのは可憐だが、見れば見る程、異質である。白人種だから肌がとても白い。服は黒いゴシックな感じのするドレスであるが、派手さや主張が少なく街に溶け込んでいると言える。だがどうにも、違和感が拭えない。

もしかして英語じゃないと通じないのか、と戸惑っていると。

「……………アイス」

それだけ言った。アイスとはどういう意味だろう。

「アイス、食べたい」

そうか。それで、俺にどうしろというのだろう。買って来いという事か？ いや、これはそういう流れのようであるが、何故助けた側の俺が買って来なければいけない空気になるのだろう。普通、逆ではなからうか。

「どうやって……買う？」

成る程、買い方が解らないのか。それなら納得である。知らない人に物を教えるのは俺としてもやぶさかではない。

「お金がないと買えないぞ。この店でも買えるけど、お金はあるのか？」

「……………」

また黙る。もしかしてさっきの三人もこの問題にぶつかっていたのだろうか。そしてじれったくなつて声を荒げ始めた、とか。何だろう、簡単に想像出来る。最近の若者は切れやすいと言うが、それはちょっと切れ過ぎであろう。

少女はドレスのポケットを探つて、掌のそれを見せてきた。

「ドル紙幣！？ いや、それ日本円に換金しないと使えないぞ！」
保護者は換金させなかったのだろうか。ドル紙幣なんて初めて見たので少し驚いてしまう。いや、だがどうにか日本語は通じるようである。ゆっくりなら応答するようなので、まだこの地に慣れていないだけなのかも知れない。

それにしても　まるで、人形のように表情が動かず、瞳に意志が見えないのが不可解だ。

「解つた、それなら今回は俺が立て替えよう。特に下心がある訳でもないのだから及ばない。ああそうだ、買い方は解るか？　一緒に買おう、何事も実践だ」

俺が先に行つて振り返ると、少女はそれでようやく意図を察したのか、トコトコとついてきてくれた。

とりあえずアイスを買ひ与えた　までは良いのだが、この少女、とにかく喋らない。名前も行き先も答えないので、俺はこれでお役

御免か、と立ち去ろうと思うのだが、服の裾を掴まれて動けないのである。

とにかく、周囲の視線が痛くなってきたので近くにある八尋殿自然公園に足を運び、そのベンチにて腰を下ろした次第である。

「道に迷った訳じゃないのか……？」

得体の知れない少女だ。助けたのは良いものの、何やら拘束されて動けない。性犯罪者だと間違われるのも御免被りたいところなので、早く解放されたいのだが。

「……アナスタシア」

少女は、唐突にそう言った。見れば手に持って舐めていたアイスはもうなくなっている。食べ終わるまで喋るつもりはなかったという事か。

「アナスタシア・ラウ・キルバイン。あなたは、お兄さん」

自己紹介だろうか。お互いを知る為の手順を踏んでいる。これは少し、この場で解放されるのは難しそうな予感がした。

「俺は誠だ。西村誠。解るか？」

首を傾げられる。

「あなたは、お兄さん」

「解らないんだな、そうだな」

マイペースなのだろうか。人付き合いが苦手そうである。いや、人の事は言えないが。

「それで、まあ、俺はお兄さんでいいけど。そのお兄さんはもう行くと思うんだ。あー、アナスタシア……は、どこに行くつもりだったんだ？」

道に迷っていたなら、交番に連れて行くべきであろう。もしかすると先程のジャンクフード店で誰かと待ち合わせをしていたかも知れない。一度そっちに行って話を聞いてみるべきだろうか。

「……スカイヒルスタワービル、という場所、探しています」

あの建物はこの街のランドマークともなっているの、市民の誰かに尋ねれば一発でアレと指差すだろう。場所もここから近い。俺

が連れていってあげるべきだろうか。

しかし道徳的に考えれば、交番のが優先順位が高い気がするのだが……保護者が探しているのかも知れないし……いやあそこに入居してきたと考えれば……

俺は、こういった事態の見通しが不明瞭な場合、直感に従う事にしている。

「よし解った、連れていってあげよう。だけどそこで俺はバイバイだからな。面倒事はゴメ　！？」

背後から、のそりと何かが現れた。巨大な動物、犬　狼に近い四足のシルエツトだが、体毛が白い。雪のように純白だ。

そして何より、大きいのである。四足歩行の姿勢で、鼻先から尻尾まで、およそ二メートルはある。尻尾の長さまでいれるとそれよりも大きいだろう。そして高さは、地面から耳の先までで一メートルを優に超す。犬では、ない。狼でも、ない。

少女はそれに、近寄った。アナスタシアが乗りやすいようにその生き物は屈む。少女が乗ると　横向きの女性的な乗り方である立ち上がった。その間、俺から眼を逸らす事はない。

その眼もまた、どうしてか　赤いのである。

俺はまた、怪異に遭ったのだろうか。これも人外なのか、と。

「フェンリル。ご挨拶」

そう呼ばれた白い獣は、ウオフ、というように鳴いた。狼のそれに近い。獰猛な気配は感じないが、俺を警戒しているのだけは解った。

「ゴスペル。ご挨拶」

俺の背後から、ヌツと現れたのは、黒いソレだ。フェンリルという白い狼と同型の生き物だが、全身の体毛が黒い。そして瞳はと見ると、こちらは金色をしている。

何だこれは。どういう生物なのだ。こんな巨大な生き物、動物園でしか見た事がない。

そして何よりも、さっきまでは確実に、いなかったのだ！

どこから現れた？ 術式か、いやそんなものを使った様子はなかった。狼、もしかやジャック・ハンターに關与しているモデル・ウルフと何か關係があるのか？ あちらは犯行時刻が全て夜中だ。だから夜にしか活動出来ないというのは 俺の勝手な思い込みだっただけか！？

今まで構築してきた情報が、覆されたような気がした。

少女の瞳が俺を見る。その眼は光を映す事はない。

金と赤、そして少女の翠、三対の眼が、ジツと俺を見ていた。

第四章 死に至る病（４）

道すがら、少女に幾つか尋ねた。答えが返ってくるまで時間がかかるので、根気強く粘ったのは言うまでもない。こうしていると詩音が言うように、俺は諦めが悪いのだろうかと自分を省みるのである。

アナスタシア・ラウ・キルバイン。年齢は今年で十二歳。両親は不明、生まれた国籍も不明だが、育ったのはロンドン郊外だという。テムズ川が流れるのを見て育った、というのだ。ロンドンと聞くと、俺としてはやはりグリニッジ王立天文台の名が浮かぶものである。

初代王室天文官にジョン・フラムステッドを迎えて一六七五年、建設されたものだ。文字通り、世界の空に線を引く経度と緯度の概念を生み出した、今やなくてはならない観測法である。本初子午線これを知らない者はいないだろう。やがて鉄道網が整備されると国際列車等の運行の際、全世界に標準的な時刻と子午線が必要とされ始め、急速にフラムステッド天球図譜が普及した。

その後の一九九〇年、観測拠点をケンブリッジに移行されてその役目を終える

つまり、観測機関だったのだ。星を視る事で自分の位置を知るという方法は、画期的な観測法と果てしない夢を人々に与えた。時代は大航海真つ只中。海を渡る先人達はどんな想いで星空を見上げていたのだろうか。

そんな他愛もない妄想に耽るのも、アナスタシアからの返答がやけに時間を食う訳であり、暇を持て余した俺の益体もない時間潰しと思ってもらえれば幸いである。

「……ロンドンを見下ろせる、小さな丘がある。そこで皆と育った」話しぶりからするに、ロンドンの歴史や上記の観測法には触れていないようである。関係性はなく偶然そこに住んでいただけのようだ。俺は王立天文台を一度は見てみたいと思っていたので、その詳

細について詳しく尋ねようと思ったが、少女の乗るフェンリルという白い狼　姿形が最も近いので仮にそう定義する　が、牙を剥いて威嚇してきたので、さすがにと引き下がった。

「なあ、その犬……というか狼か。それは　」

人外か、と口にしそうになり、慌てて噤んだ。その単語は本来、普通に生活している人ならまずもって話にあがらない。ここでそれを出すという事は、いかにも自分は関係者です、という事を晒す事になる。俺は少し考えて、こう言った。

「　生物か？」

我ながら妙な発言であるが、それ以外に適当な単語が出てこなかったのだ。これ程大きな犬だが狼だかは見た事もない。精々比較対象に、動物園にいるようなもつと大きなもの　キリンや虎などを頭の中で引き合いに出したが、それに負けないような体躯をした生物が街中を歩いていていいのだろうか。どう見ても肉食だろうに。だが人外に常識というものも当てはまらない。真白が以前言っていた、悪い人外もいれば善い人外もいるらしいし、この状況をどう受け止めていいのか解らないというのが本音だった。慌てたりしなかったのは少なからず免疫が出来ていたからだろう。アナスタシアは首を傾げてから、フェンリルの後ろ首を撫でさする。

「私の弟と、妹。この子が弟の方」

これを単に、動物好きな少女なんだな、と割り切る事は簡単だ。しかしその生物は……間違いなく、人外の眼を持っているのだ。

考察が進まないうちに目的地、スカイヒルズタワービルへと辿り着く。アナスタシアはと振り返ると、既にフェンリルから降りていた。

そうだ、これは俺には直接的な関係がない。彼女の中では、俺はまだ人外との接点など一つもなさそうなお兄さん」であろう。ならば、余計な事に首を突っ込むべきではない、お前には他にやる事があるだろう、西村誠。この少女に現を抜かして、本来の目的を疎かにしていい理由などある訳がない。

敵になる理由も、組する理由も存在しない。ただここに入居してきただけの金持ちかも知れないのだ。外事四課……シヨールの前例だってある。力を持つという事は、それを行使する義務が生まれるという事でもあるのだ。無秩序に行使される力はただの暴力であり、それらは統制されなければ自らを傷つける刃となる。ならば然るべき管理機関に身を置き、組織の目的の為に役立てるのが、最も賢い生き方であろう。

人が持つ武力とは、有史以来そうして管理されてきた、暴力であると思うのだ。彼女もまた外事四課という枠に納まる、と　そう都合良く考えれば、俺はそれ程の不安を抱かずに済むのだった。

何時の間にか夕暮れになっていた。スカイヒルズを後にした俺はその足で以前の続き　術式の基点とやらが街のどこかにないかと探していたのだが、とんと見当もつかず、途方に暮れてしまっていたのである。真白がいればグイグイと引っ張っていつてくれるから次に何をするべきかを把握しやすかったのだが、俺一人では、こうしようと目的が浮かんでもそれが果たして正解なのか、判断基準が少ないので頭を悩ませるところだった。

そういえば、真白はどこにいったのか。あれから全然姿を見かけないが、彼女には一体どのような目的があるのだろう。俺に手伝いをしろ　そう言ってきたのはいいが、自分から姿を消して行方をくらます、というのは事前に説明の一つも欲しかったところなのが心情というもの。

シヨールにも会えなかった。何故だか得体の知れない不安が胸に湧きあがってくる。こうなると俺一人で夜の教会に行く事になるのか。実際にそのつもりで考えていたが、いざという時になってみると、何て頼りない体だと思う。俺にはブラインドネスのような特殊性も、クドウのような頑強さの欠片もない。ただ標準体型で、少しだけ筋肉質ではあるうが、それだって普通と比べて少し、である。あんな人殺しの集団　それもPMC、戦いのプロと言える傭兵と、

マトモにやりあえるのか？

そも、相手は何人だろうか。クドウがああ言っていたという事は、少なくともブラインドネスと二人でいる可能性が高くなる。となると、そこに三人目、^{スリーマンセル}レイスがいない理由というのも見つけるのが難しくなってくる。三人一組が分かれて行動している、と考えるのは愚かである。

少し見方を変えよう。教会で何をしようとしているのだろうか。夜というのは人目を避けたい理由があるのだろう。それは容易に想像が付く。人喰いの術式か人外の製造か、或いはまた別の何かかも知れないが、凡そはそんなところが思いつく。

全く、気狂いのようである。そんな事を教会でするとは、冒涇も良い所というもの。

教会は、そんな事をするような場所ではない。

ん……？ 何かが、頭の隅に引つ掛かった。先まで考えていた、教会で何をするつもりか、という事ではない。そこではない。悪寒がする。なら、教会は何をする所だ。ゾワゾワと、ジワジワと気持ち悪さが押し寄せる。おい、何か大切な事を忘れていないか、俺。今日は平日だ。アイツの、あの習慣がある日。教会、礼拝、洗礼名。綺麗な名前に余計な音を付け足した、場所。俺はそれがあまり好きではなかったのではないか。

「詩音……？」

そうだ、礼拝がある。今日はその習慣がある日だ。何故気付かなかった、俺はどうして朝一番にそこを思い出さなかったのだ。いつもの事だと考慮から外していたのか。とことん巡りの悪い頭である。叩き割ってしまいたくなる程に。

学校までは少し距離があった。走り出す。最短距離の道順を頭の中で導き出すと、俺は体力が尽きる事も厭わず、全速力で街を駆け抜けた。

まだ学校にいればいいが……いや、その前に公衆電話だ。詩音の携帯の番号は暗記している。道の途中にあつたらうか。しかしそれ

で捕まらなかったら……

最悪の事態が頭に浮かぶ。いやそんな事は起こり得ない、落ち着け、詩音が俺の関係者だとアイツらにバレる可能性は低い筈だ。でも学校はバレていて、相手は人数だつて多い。陸の孤島、或いは檻桐谷はあの少年犯罪グループに知り合いがいた。逆がないとどうして言える。そう、校内に犯罪グループの関係者が潜んでいる可能性だってあるのだ。麻薬の密売による薬物濫用は、今や日常的に目にする事件となつていて。つまり、それは多数人数によつて人のネットワークを駆使し、バラまかれていているという事に他ならない。

思い出せ。クドウはあの時、なんて言つていた？ 俺の街、なんて事をのたまつていなかったか。その意味するところ、奴等がこの街で一番大きな勢力を維持している根拠は、そうやって広範囲をカバーする巨大な情報網にあるのではないのか

情報のリーク。時雨と詩音。バイク。車。薬物 嫌な想像が止まらない。

「ざけんな……！」

そんな事は許さない。許されるような事ではない。もしクドウが詩音に何かしようなものなら、指一本でも触れようものなら、俺は冷静でいられる自信がない。

冷静でなんて、いてやるものか。

「くっ……」

鼓動が痛い。どんどん早まってく。すると唐突に、視界が真っ赤になった。転びそうになる。何か、おかしい。俺は心臓に持病なんて持つてない。だとしたらこれは何かの前兆か。景色が見えないという程ではなく、赤色の向こうに薄く透けて見える。フィルターがかかっている、というような言葉が浮かんだが、視界にフィルターなどかけられる筈もない。ましてや走っている最中だ。

視界、つまりは眼。心当たりは、一つしかない。

通りがかった十字路の、ガードミラーを見て気付いた。俺の眼が、真っ赤に発光している。霊障の眼が発症したのだ。そういえばこれ

がどうすれば起こり得るものなのか、という事について、今まで解らなかった。考える暇もなかったように思う。あがっていた息がいつの間にか落ち着いている。何故か体の調子が良い。失った体力が補填されているような 奇妙な感覚を覚える。これは一体どういう事なのだ。

いや、待て。待てよ？ そうだ、冷静になれ。今の俺は、傍から見れば眼の赤い特殊な人間だ。どうやっても目立つ。このままでは学校になんて近寄れない。不審に思われてしまう。カラーコンタクトなどという言い訳では通らない。だって、自ら光を放つ程に魔的なのだ。

人目を集めて、それこそアイツらの情報網に引っかけってしまう可能性が高いのではないか。ではどうやって元に戻すのかというと、これも全然解らない。

「クソッ……！ 肝心な時に！」

感情に任せてコンクリートのブロック塀を殴りつける。硬い音がない。拳をどけると、罅割れている。おかしい。本来こんな力は俺にはない。勁を使えばやれるのかも知れないが、あれは相当に集中しなければ行使出来ないものだ。こんな簡単に、日常的に使えるものではない。それに、力いっぱい殴ったというのに拳が痛まない。

これは何なのだ。この ブロック塀をも簡単に割るような力は俺はそこで、頭の血が引いていくのが解った。詩音の事は心配だが、思考の主観を一時的に自分の事 俺のルーツへと置いたのだ。ある。今後の行動に関わってくる重要なファクターだと思ったのだ。自分の置かれた状況で今何をするべきか見極める事は必要である。

俺のルーツ、つまりは朝霧だ。そして西村の先祖が人外との混血という事。俺がブラインドネスにやられて、真白に傷を縫合してもらった時、半分寝ているような状態だったのを覚えている。その時に聞こえた言葉 今なら、はつきりと思い出せる。

「今はかなり、不安定だとか、言ってたよな」

つまりこのように偶発的に発症、或いは発現する可能性もないで

はない、のかも知れない。いや、何かしら因果関係はあるだろうが、今はまだはつきりしないだけだろう。現に真白やシヨリーは自由に使えていた。使う為のスイッチのようなものがある筈である。

こう考えれば微妙に噛み合う。相克を起こしていた俺の中のバランスが、人外の側へと傾いた。天秤がそっち側に動いたのだ。それなら、まだ解る。

だが、何故という疑問が残る。とは言っても詳細な情報のない現状では突き止めるのは難しい。

「とにかく、このままじゃ人通りの多い場所もいけない、学校も無理」

それなら、こちらから行くのではなく、来るのを待つしかない。

歯痒さに唇を噛む。詩音が学校から出た後、無事に教会まで辿り着く保証はどこにもない。だが今下手に動けば、それこそ今後の活動に支障が

支障？ 何故そんな事を考える。それは保身ではないのか。我が身かわいさなどがどうして優先されるのだ。そんなもの。

「知った事かよ！」

ふざけている。何が今後の活動だというのか。そんなもの、詩音が傷つくのを見過ごしてまで大事にするようなファクターか。否。断じて否である。保身など、クソくらえだ。

「人外が何だ、化物が何だ……！俺は西村の鬼だ、元から、昔から、解つてた事じゃねえかよ！」

拳を握り締める。出血したようで、血の滴がアスファルトに染みを作る。誰かに嫌われる事なんて昔から慣れている。誰も信じられなくなるなんていつもだった。だから誰も頼れなくて、利用すると自分に言い訳して、今まで自分を騙してやってきたんじゃないか。本当は友達になりたくている弱い自分を、騙して。

だけどそれでもあの二人だけは。二人だけは違ったのだ。嘘をつかずに済んだ。本当の自分を晒せたのだ。そしてずっと俺の傍にい

て、支えてくれていたのだ。親族にも見限られて主のいなくなった家にとった一人残された俺を、ずっと、今まで……！

血が、どうしたというのか。過去がどうしたというのか。そんなものは今関係ないだろう。自分の目的を見失うな、今、自分が何の為に戦っているのかを忘れるな。

在るがままの心に従え。自分の意志を、^{ウィル}信じるのだ。

「泣いておるのか」

ふと、そんな声がした。見ると、真白が立っていた。少し離れた街路灯の上、アンバランスに、バランス良く。

知らずに流れていたそれを服に擦り付けて　　夏服なので肩に誤魔化した。

「今までどこに行ってたんだ、お前」

真白が口元に何かを運び、それを齧る。小気味の良い音が耳に届いた。リンゴだ。

「これを買いにな。うまい林檎を探しに　　そういう事にしておくれ」

「……その秘密主義に眼を瞑ってやってるんだ、ちょっと協力してくれ。今困ってる」

ほづ、と片眉をあげて、口元には余裕を覗かせる笑み。何故だか久しぶりに、真白に会ったような気がした。会わなかったのはたった一日程度の時間なのに。

「申せ」

「詩音を助けたい。このままじゃ俺の巻き添えを食うかも知れないんだ。だけど俺ではどこにいるか解らない。運が悪ければ、敵側に捕まっている可能性もある。」

頼む、真白。手を貸してくれ」

真っ直ぐにその白い瞳を見る。真白は靈障の眼を使っていない間、名前の通りに全身が真っ白だ。どこか人を小馬鹿にしたようないつもの調子で、けれど一本芯を感じるいつもの声音で。

「それはお主の本心からの頼みじゃな。眼を視れば解る。その赤紅しやくしやうが何よりの証拠じゃ。それは、己の内側と外界を繋げるものじゃ。人外の力が使えるようになる、等というような簡単な代物しろものではない。それは、想いを力に変える……そういうものじゃよ」

「御託はいい。手伝ってくれるのか、くれないのか」

苦笑し、真白は街路灯から飛び降りた。

「その問いに意味はない。答えはもう出ておる。こうしてお主の前に姿を現したのが、何よりの証拠。先の声と想いの進りを視て解ったよ。あの時、儂が手を差し伸べた童わらしはもうおらぬ。儂が導くべき子鬼は、もうおらぬ。」

なれば、己の願いを言うがいいよ、西村の鬼。この白い鬼は地獄の底まで付き合おう。契約は既に成っておる。なれば一蓮托生じゃ。儂の目的とお主の願いは合致しておるからの。困った時はお互い様。今はそういう言葉もあるじゃろう？ それにあの教会も、どうやら普通ではないようじゃ。一度調べる必要があると思っておったところでの」

普通ではない 教会を調べる。そのワードは、ある一つの結論を導き出す。

術式の基点だ。人喰いの術式を起動し続けている柱の一つが、そこにあるのか。

「儂の手を引けるのはお主だけじゃ。儂に命じる事が出来るのは、お主だけじゃ。」

お主の後ろには、常に儂がいる。恐れずに進むが良い」

真白は、相変わらず回りくどい。これは恐らく性分だろう。だが、言っている事も相変わらずに頼もしい。どこから来るのか解らない自信が、俺に一握りの勇気をくれる。

「手伝え、真白。俺は詩音を助けたい」

「相解った、我が主よ。して、どうする」

打てば響くような返事。それが今は心地良い。妙な単語が聞こえた気がしたが、今それは重要ではない。

「昨夜、クドウって男と会った。そいつはブラインドネスが今夜、教会に現れると行っていた。多分仲間なんだろう、それで、今日は詩音がその教会に礼拝にいく日なんだ。夜まではわからないと思うが、もしかしたらクドウ達と鉢合わせするかも知れない。」

それだけじゃない。クドウの手下グループはこの街に大きく根を張ってる。その情報網が俺や時雨、詩音の事を探っていないとも限らない。そうするとアイツらにとって邪魔な俺達への切り札にされる可能性が高い」

言いながら整理していくと、頭が冷えてきた。

「時雨の方は手を打った。詩音が利用されるのだけは、何とか防ぎたい。それが俺の本心だ」

朝に送り出す時、よくも深く考えずにいたものだ。思わず齒軋りしてしまう。いや、自分を責めるのは後にするべきだ。

「二手に分かれた方が得策じゃな。そういえばアレはどうじゃ、ほれ、ヴィクトリアが持っておるような、こういう」

何かを折るような仕草をする。携帯電話だろう。

「携帯なら、途中の公衆電話でかけてみる。俺が学校に行くのが一番良いだろう。お前は教会の周囲を見てくれ。入り口で合流しよう」
赤い眼も、俺が落ち着いたからか発光現象は収まっている。感情に左右されるのだろうか。先の言葉に真白は力強く頷いた。そこで俺は、コイツが公衆電話でショーリと連絡を取っていた事を思い出すのである。

「そうか、お前ショーリの電話番号解るんだよな」

「うむ。十円で呼び出してやるぞ」

そのくらい安いものだ　とか言ったら、ショーリに怒られるだろうか。財布から硬貨を取り出して、渡す。俺も大分冷静になれてきたようである。やはり、コイツはどこか俺を落ち着かせる雰囲気を持っている。以前から知っているような　奇妙な連帯感だ。

「ヴィクトリアには教会の方に来てもらう。そこで落ち合おう。ラックネヒトの三人とやり合う事になるかも知れんぞ。刀を忘れる

なよ　我が、主^{あるじ}」

真白は少し屈んでから跳び上がり、一気に長い距離を移動する。以前に見た大ジャンプだ。ショリーのものとは違い、術式というものを使った様子が見られない。力づくで跳んでいるのか。

俺を主と呼ぶ事もそうだが、アイツには色々と聞かなければならない事がある。あの秘密主義も、長くは続かせないつもりだ。

道中にあつた電話ボックスに入り、硬貨を入れて詩音の携帯番号をプッシュするものの、繋がらない。何度か試したがダメだった。これで状況は一つ、悪くなる。

「電話に出られない状況にあるって事か」

コールはかかっていた。いつもならすぐに出る。携帯を手放さないヤツなのだ。依存症という程ではないが、これがないと生きていけない、等と言っていた事がある。多分、冗談であるうが。でなければ俺に触らせたりしない筈だろう。

二つ目の悪い要素　時間だ。もう陽が暮れて夜の帳が下りている。ここは北市街区の中でも　現在地は西村家である　郊外に近く、街路灯くらいしか明かりがない。見上げれば星が瞬いていた。本初子午線　今も見えているのかどうか解らないそれは、例えば自分の位置は解つても、他の誰かの位置を教えてくれる事はない。だったらそれは孤独であろう。世界に自分というの一人きりで、自分はここにいるのだという証拠を、空に線を引く事で為し得たのなら。それこそは世界にたった一人遺される事にも似た、孤独という実感であると思うのだ。

人は空を飛べない。その摂理を覆す事は難しい。それには飛行機を使うしかないだろう。スペースシャトルだって、月より先には人を乗せていけない。結局は宇宙の広さを実感しただけだ。未だ地球圏から出られない　結局は地に足を付けてしか、生きられない事を実感しただけではないのか。

けれど、もしかしたら、空に線を引いたのは。決して届かない高

みに手を伸ばす、人の憧れの現れだったのではないか 皮肉
である。星の高みに手を伸ばした人類は、自分の小ささをより強く
噛み締める事になるのだから。

空の軌跡は、昔より変わらず、そこに在る。
人は未だ、それに触れる事は無い。

道端の街路灯が点き始め、空は完全に暗くなる。夏になると
日が伸びるものだが、俺が教会に辿り着いたのは午後八時半を回っ
た頃だった。念の為に藤崎家の呼び鈴を鳴らしてみたが、誰も出て
こなかった。よく藤崎さん夫妻はこうして家を留守にする事がある。
詩音がうちに入り浸る理由の側面には、こうしたものもあった。

刀を持ち出しての夜間徘徊はあの時以来である。もし警官に見つ
かったら職務質問は免れないだろう。近隣の知り合いにも見られた
ら後が大変だ。なるべく人通りがない道を選んで進んだ結果、前述
の時間になった次第である。

教会の敷地は、街の中心市街地にあるにしてはかなり広い。正面
入り口から見て、左右に駐車場 冠婚葬祭の為の利便性であろう
と聖堂への道があり、建物の裏手には針葉樹林の植えられた、
小さな林 その中央には広場がある。聖歌隊の催しは主にここで
行われる為だ 以前シスターアウレリアと会話した水車小屋は、
林の隅にぼつんと。

真白と共に立っていたショーリが、俺に気付いて小さく手を振る。
「もう全快したみたいね。良かったわ」

華やかな笑顔を向けられて少し気恥ずかしくなるものの、尋ねる
べき事があるのは忘れなかった。

「詩音は!？」

答えたのは真白。

「ここまで探してきたが、どこにも。その様子じゃと家にも帰って
おらぬようじゃな。だとすれば」
「クソッ!」

地面を一度、踏みつける。それで少しだけ、感情は収まってくれた。

詩音はこの中だ。今すぐ行って助けたい。けれど、もしアイツが傷付けられていたり、薬物漬けにされていたりしたら。

俺は、正直自分でも何をするか解らない。自分が、どうなるのか。落ち着こう、という意図ではなかったが、言葉を続けた。

「シヨリ、お前は外事四課だったよな。Colorとかいう薬物を知ってるか」

男装のようなスーツ姿をしているというのもあって、凜々しい雰囲気緊張して、同時に周囲の空気が引き締まった。

「どこで、それを」

「ある筋からな。その薬物が、人に妙な力を与えるというのは、本当か？」

暫く逡巡した後、シヨリは告げた。情報は共有するべき、と判断してくれたらしい事が次の言葉からも受け取れる。

「天恵の事ね。ギフト 大方その通りよ。Colorは、個人差はあるけれど後天的に靈知適性を付帯させる事に成功した唯一の薬物なの。この靈知適性というものが、術式や天恵を使う時に必要な靈知因子グノーシス・ファクターなの。靈知適性があれば精神を出力して靈子に干渉する事が出来るようになる。この出力端子となる接続子が、以前に説明した術式回路よ」

素人に説明するには専門用語が多い。もしかして教え下手なのだろうか。これでは喉を通らないので、俺なりに噛み砕いてみる事にする。

まず、クドウの持っているという超能力のようなものの名前が、ギフト 天恵というのは間違いがない。天からの贈り物……成る程、確かに超能力というものは先天的である話をよく聞く。清二の話を思い出すなら、ESP《超感覚的知覚》サイコキネシス テレパシーや透視、予知等、認知型の超能力 や、PK スプーン曲げや手を触れない物体移動等、物理的な超能力 というものが代表的だという。

恐らく天恵もその一種であろう。これについては、言葉通り超能力と認識するのが一番良いようである。

次に、グノーシス・ボジティヴ靈知適性について。これがないと超能力や術式を使えない。つまり合成麻薬のcolorはこれを人に与える薬物だという事であるようだが、後天的に超能力、及び術式の才能を植えつけるという事になるのだろうか。だとしたら、画期的である。

グノーシス・ファクターそして靈知因子は多分であるが、因子という字面通りに受け止めるなら原因、または概念を差す言葉であろうか。

超常現象を引き起こす為に必要な、靈知適性と術式回路を同時に差したような言葉の使い方である事からもそれは明白だ。これが総称となるようである。

術式回路については未だに詳細な説明がされていないが、術式を使う際に精神や靈子を化合して生まれた靈子放射光に、エーテル式を与える通り道、とだけ聞いている。

そもそも曖昧なのが、化合というのはどうやっているのだ、という話である。単にその場で混ぜ合わせるだけならそんな通り道は必要ない筈だ。術式は精神を削る。それなら、精神の出力を行う端子である、とした方が解りやすいが……式を与える、とはどういう事を言っているのか解らない。

顎に手をやって考えていると、真白が補足してくれた。

「ヴィクトリアの言う通り、術式回路というのは何も術式のみに使われる故に、そう呼ばれる訳ではない。天恵も術式も、やっている事は同じなのじゃよ」

同じ、とは何だろう。超能力と術式では、国語と数学ぐらいの違いがあるように思えるのだが。

「靈子は人の思念に敏感じゃ。よって精神の出力度合いによって様々な形を取る。これはな、使用者の内面。心の象徴のようなものを汲み取るからじゃ。勝手にな。内象世界と呼ぶべきか、深層心理と呼ぶべきか……確かあの男は、モチーフ主題構造と呼んでいたかの。まあ、その人間が心に宿す象徴じゃ。イメージ超常現象はその方向性に収束される。

例えば、ヴィクトリアなら 剣の術式しか使えぬ」

得意不得意がある、という事だろうか。或いは用途が縛られる制限のように聞こえる。

「どのような天恵、術式であれこの法則からは逃れられん。その人間が生きてきた証が、精神のカタチが外界に出力される。そう捉えてもらって構わぬ」

「要は、万能じゃないって言いたいのか？」

「相違ない。じゃが計算を必要とする手前、天恵よりも術式のが圧倒的に不利じゃがな」

ヴィクトリアが続ける。

「術式は、人間の使われていない無意識を演算領域として使用する。脳は高性能なコンピュータに匹敵するからね。そこで精神と靈子に主題構造という公式を反映させた上で、自分が使用出来る術式がどういうものであるか、その幅が決まるという事」

「んん……すぐに理解するのは難しいな。いや、解りやすい例えがさつき出た、シヨールは剣しか使えないって。それはつまり、シヨールの主題構造とやらが剣だから、そういう種類の術式しか使えないって事、でいいか？」

「ええ、それで合っているわ」

俺は溜息を吐いた。

「そうか……何だか一気に疲れたよ。もっと噛み砕いて説明してくれ」

人に物を教える時は、相手の身になって話す事が重要であると俺は思っている。だからいつも人に何かを教える時は、説明しながら一緒に実践するのだ。それが一番解りやすいと思う故である。

シヨールは申し訳なさそうに顔を伏せた。

「ごめんなさい、今まで誰かに物を教えた事がなくて……」

また、である。コイツは色々と初めてが多過ぎるのではないだろうか。機会があれば問い質したいところだ。

真白が先頭に立つ。

「では、往くか」

俺達は頷き、敷地を進んで聖堂の扉を、押し開けた。

男の声がした。

「来ましたか、堕ちた白の古代種^{エンシェント・イモータル}。それに銀髪姫。遅かったですね」
聞き覚えが、ある。だが、到底信じられない光景だった。いつも
柔和な微笑を湛えて、修道者達に徳高い話をしている、あの。

「ハイド神父……！？」

暗闇の漂う礼拝堂に、その男性は在った。ロウソクの頼りない照明があちこちに見える。影が揺らぐ。

「ええ、西村君。君にはお礼を言わなければなりませんね。私の下に彼女　マリア・藤崎を連れてきてくれた事を」

聖壇の上に寝かされた、詩音の眼は閉じられている。気絶しているのか、眠らされたのかは定かではないが、辛うじて胸が上下しているのが見てとれた事に軽く安堵した。

「お主がレイスじゃな。何故にその娘を欲する」

ハイド神父は、その口元を　邪悪に歪めた。いつも開いているか閉じているか解らない細い眼が、睨みつけるように真白を見る。
「威勢が良いですね、イリーナ・ヴィングフェルト。私の中の神が言うのです。貴方達のような存在をこの世から消し去れ、と。」

その為の武器。その為の兵器なのです。彼女は只の人間ではない。貴女も知っているでしょう！　この少女をこの円卓へ連れてきたのは、他でもない貴女なのですから！

両手を広げて、演説をするように語る言葉は、俺の頭に入っていない。何だ、コイツは。何を言っているのだらう。詩音が、人間じゃない？　兵器？　イリーナ？

直感する。コイツは、違うものだ。俺の知っているハイド神父ではない。

立ったままの俺を中心に、^{けんせい}シヨールと真白が左右に離れた。空気が緊張している。何者かに牽制されているのだらうか。

「油断するな、居るぞ。ブラインドネスと、ラークじゃ」

ラーク……恐らく、それはクドウの事だろう。どこかに隠れているのだ。

だが俺は眼の前の信じられない光景に、眼を瞬かせるばかりである。

「は、ハイド神父。どうしてアンタが。詩音は、アンタを信頼してた。アンタの教えをちゃんと毎日守ってた。なのに、どうして」

神父は、俺を見て、嗤った。歪んだ笑みで。

「ハッ、子供ですね、西村君。ですが、今まで彼女を守ってきたその行動には感謝しています。彼女と一緒に私を信じたその未熟な精神にもね。」

何故、と問いましたか。その答えは簡単です。人外をこの世から消す為ですよ。その為に私はPMCなどという下劣な輩が集まる組織に入り、こうして龍脈の配置を利用して人喰いの結界を張りました。地道にね。ですがその努力を一蹴するような武器が、私の手元に転がってきたのです。それを拾わない人間はいない。

武器とは、そう、この少女です。ラークの情報網を利用して調べたところ、十年前にこの街に現れたという。そこにいる堕ちた白の古代種、イリーナ・ヴィングフェルトが組するレジスタンスによって連れて来られた、世界再生機構が生んだ三人のAS、最初の一人
アドヴァンスド・ソルジャー
個体識別名称・エクスキャリバー！

この子が只の人間だと思えますか？ 病弱性に疑問を持った事は
シナスタジア
？ 彼女が共感覚を持つている事は？ その身に強力な術式兵装を
ミスティック・アームズ
宿している事は！？」

キミは何もシラナイ、と。

「よろしい！ では共に分かち合いましょう、彼女が目覚める喜びを。丁度Color投与から一時間、そろそろ効果が始める時間です。この道具がその身に宿す 人外を葬る力。私の剣！」
ソルギ

詩音が、苦しそくに顔を歪ませる。呻き声が漏れる。

何を、したのだろう。詩音に 俺の詩音に、何を。Color

投与と言ったのか。お前は詩音に、薬を

「西村君、いいの！？ 彼女、このままじゃ……！」

「ならん！ 今近付いたら巻き添えを食うぞ！ アレの解放時には周囲に空間断裂の域内作用効果が生じる、生身の人間なぞ細切れじゃ！」

何故、詩音なのだろうと、俺は思わずにいられない。今朝までは元気に、うちで洗濯物を干して、朝食を作ってくれて。朗らかに笑って、アメイジング・グレイスの鼻歌を歌っていたのに。十年前から俺の妹みたいなヤツで、後ろをよく付いて回ってきた、気弱で人見知りで、でも人一倍優しいヤツだったのに。

それなのに、どうして、こんな事になるのだろう。

「うああ……！」

詩音が身を振る。半身を捻って背を上にした。眦から涙が流れているのが解る。

俺と、眼が、合う。

「み、見ないで……」

ようやく搾り出したような詩音の言葉を押し潰す、ハイド神父の狂った笑い声が、耳に障る。

「ははははっ！ よく見ておきなさい、最初のASにして最強の術アドヴァンスド・ソルジャー ミスディック・アームズ 式兵装、空を断つ剣！」

その光景を、俺は生涯忘れないだろう。

詩音の背には、酷い火傷の痕がある。まるで天使が翼をもがれたような、大きな痕が左右に、二つ。そこから現れた光の翼は、左側だけのアンバランスなものだった。上、中、下の三枚だ。片翼の天使。そんな言葉が頭を過ぎる。

蒼く、半透明の綺麗な翼は、折り畳まれていたソレを広げ、伸ばした。溢れるような蒼い光の粒子は、粉雪のように儚く散って消えていく。或いは、風に吹かれる新雪のように舞い上がる。

聖壇が傷だらけになる。鋭利な切創 何かに斬られたかのように

だ。壁、床、天井　周囲のもの全てにそれが及ぶ。視えない斬撃の嵐のようである。

詩音の髪が、蒼く染まっていく。瞳さえも蒼穹に。けれどその顔は、悲しみや苦しみ、そういったものしか浮かんでいない。

グラデーシオン・エアのエーテル・コンバーター。誰かがそう言った。俺の耳はそれが誰の声なのか、もう判別していなかったけれど。

けれど、否応なく、そいつの声が、俺の意識を忘我の淵から呼び戻す。

「これが、ガーディアン・ブレード！」

ハイド神父、俺はお前を許しはしない。アイツは、悲しい時にその傷痕が痛むと言ったのだ。それを無慈悲にも抉り、自分勝手な望みの為に利用するつもりなのだろう。何度もその傷を抉って、あの翼を利用するのだろう。

だというのなら。俺のやる事は同時に決まったのだ。この視界が赤く染まるのが、その証拠となる。

ハイド神父……いや、今はレイスと呼ぶ事にする。お前には聞きたい事が山ほどあるが、今は一瞬でもその声を長く聞いていたくない。お前は詩音を裏切った。あいつの心を傷つけた。その行い、今の俺から冷静さを奪うには十分過ぎる。

刀袋の封を解き、鞘をベルトに差して、抜き身を構えた。

今なら、斬れる。迷いは存在していない。人を殺す。純粹な人間を斬る。罪の意識はなく、良心の呵責もない　違う。それを考えていないだけだ。怒りに身を任せて、思考していないだけ。だが、今はそれでいい。そうでなければ、人間なんて斬れない。

道徳や倫理など、持ち込むな。己の心に従え。

レイスが俺を見る。向かって伸ばされた手に文字の円盤が浮かび、何かをしようとしているのが解る。恐らくは術式だろう。

愚かだな、レイス。俺に向けるその敵意、それが辿る軌跡は全てこの眼に視えている。例えば剣であろうと術式であろうと、それ

は変わらないのだ。

霊障眼・赤紅。お前が想いを力に変えるというのなら、この身を焦がす程の怒りに力を貸せ。

第四章 死に至る病（5）

教会での状況は、三つに分かれての事態となった。

しかし、西村誠以外の主観をリアルタイムで追っていくのはどうやっても難しい。故にここでの事は、それを取り払ったの回想にしたいと思う。

今から追っていく二つの事態は、実際にその時の西村誠が見た光景ではない。けれど確実に後で伝え聞く事になる話である。それはこの時の重要な一幕である為に、同じ時間軸上で俺はその場にいなかったが故、回想のような形に主観を置く事になるのは当然とも言える。

三対三、或いは一対一が三つに分かれる状況というのは、実際にここで取れる対策としては最善の策だったであろう。互いをフォロースし合う連携戦闘というのは、何日も一緒に訓練して相手の呼吸や得手不得手に合わせなければならぬ性質上、今の西村誠、シヨリ、そして真白には無理な話であるのだ。

ならば、そこは団体戦ではなく個人戦にするのが道理である。

故にこれは、個人戦を見て回ってきた自チームの同輩が聞かせてくる試合展開のような話になる。

こうだろう、と微に入り細を穿って想像する回想。つまるところ言いたいのは、その状況下での俺の主観、或いは視点というものの移動に近い。

ヴィクトリア・ディアモンテ シヨリは礼拝堂での事態を見た後、周囲の気配を探った。誰かが自分を見ている、という感覚を肌に感じるのだ。それは真白も同じであるようだった。

「あの術式兵装は私も知らないわよ。彼女は一体何者なの？」

十二本の剣の環を背中から少し離れた場所に展開し、後光を背負うような形に置いて臨戦態勢へと移行する。腰の高さには防御用の

障壁となるシャンデリアが回転し始め、白に近い銀色の燐光を放っていた。

「蒼い髪と眼……エーテルシフト効果でしょうけれど、あれも霊障眼の類？」

真白は苦々しげに顔を歪めて、右の小太刀　拵えが白木作りである　を順手に、左は逆手に持つている。ここに来る前から着物の腰に巻いてある帯に提げられていたものを、抜き放ったのだ。

「あれは擬似的な霊知感覚器官。アストラル・オルガン　古代種の　角　に近いものじゃ。

あの娘が何者かと問うたな。それについては十年以上前の話になる。ミッドガル　世界再生機構が、世界で最も優秀な術式使いの家系　オリジナル・セブンに名を連ねるアルカデルト一族の遺伝子から人間を複製する事に成功した。それがあの娘、AS被験体ゼロワンじゃ。優秀なアルカデルト家の女は大容量の術式回路を生まれ持ち、精神と霊子ゴーストマナの調和率もこの上なく高い。それを更に人工的に拡張、強化する事で対人外兵器と成り得る、圧倒的な攻撃力と防御力を持たせる計画が推し進められた。当時は人外への実用性や汎用性というのが世界再生機構側でよく把握されていなかったらしく、ただ強力な殺傷力と防御力を求められた。

じゃが、それが良くなかった。力はあってもそれを扱う術が未熟じゃった。結果として制御不能に陥り、施設を壊滅させてしもったのじゃ。最強の剣　エクスカリバーという識別名称を与えられてあやつが最初にその力を振るったのは、皮肉にも自らを造り出した創造主達じゃった。人類を守る為の剣とされながら、な」

ショーリは愕然と、自分の体を抱いて片翼を震わせる少女に視線を送った。生まれたての雛のようであるが、その実体は既にヒトの血に濡れた剣である。人類を守る剣とは到底呼べないような代物だ。振るえば己を、味方をも傷つける剣　諸刃の剣とはよく言ったものである。過ぎたるは及ばざるが如し　扱いきれぬ力は、それが無い状態のままと同じか、それよりも悪い状況しか作らない。

しかし、それをこの時の西村誠が知る道理はない。敵意を剥き出

しにしたレイスが眼の前にいる。右手から放たれた術式　弾丸のように一直線であるそれを、抜き身の刀を立てるようにし、辿ってくる軌跡の上に刃を置いた。命中と同時に切断。刀の刃縁^{はふち}　刀身の先端から鰐までのうち、切断面である刃先から峰までについた角度に従い顔の左右を通り過ぎ、背後の壁、入ってきた扉の両側に命中する。

飛来するものを斬る場合、それはストロークを必要としないのだ。こうして軌道上に刀を置くだけで、勝手に斬れてくれる。映画等ではよく見る芸風だが、地味ながら高難度の技術だ。だがその裏腹、相手の狙ってくる場所をよく把握し、タイミングを合わせて両手を握り締め、がっちりと剣を固定しなくてはならない。ここで実際に成功させたが、これは軌跡を視る眼の恩恵が大きいだろう。何せ、実行したのは初めてなのだ。

術式を斬ったのか、と瞠目するレイスに、西村誠は一気に肉迫した。それと時を同じくして、礼拝堂の横手にある扉とその上階、バルコニーのある通路から、人影が姿を現した。

真白は上階の人物、ブラインドネスに。シヨリーは横手から現れた人物、クドウ、或いはラークと呼ばれる男に眼をやった。

おどけたような調子で片方の眉をあげる、クドウ。

「ン？　お前もかよブラインドネス。まあ、どうせバレてたしな。奇襲諦めんのは当然か。俺は、気配を殺す、とかいうやつ？　そういうみみっちいの出来ないしょ」

片足に体重をかけ、探る視線。礼拝堂には刀が術式を斬る、乾いた音が響く。

「で、どうする。どっちがどっちの相手するんだい？　俺は」
言い終わらない内に、真白は上階の　壁を伝うように配置された足場へと跳んだ。シヨリーに顔を向けず話す。

「ブラインドネスは俺が請け負う。角^{つの}の力を使うかも知れぬ」

角という単語^{ワード}には、白の古代種^{エンシェント・イモータル}とレイスが言った、真白の本性
人外のステージ？を差す言葉だ　を晒す意味が込められている。

この時の、ガーディアン・ブレードを発動した藤崎詩音を人類最強の剣と言いつたのなら、この真白　真名イリーナ・ヴィングフェルトは最強の外人種である。

ただ、過去の出来事から同胞と争い続ける立場に身を落とし、本来の力の大半を失って尚、人類の傍に寄り添って生きる事を選んだ過去を持つ。

その真白が角の力を使うというのは、残された力を最後まで振り絞る行為に他ならない。文字通り、命を削る意味を内包する。

だが今、そう選択しなければこの三人はここで終わっていただろう。それだけ、ブラインドネスとクドウ　ラークは手強い。

必然的に、シヨリはもう一方と相對する事になる。

「……クドウ。外事四課で指名手配されてる、少年犯罪グループのリーダー格ね。一応言っておくわ、大人しく投降しなさい。でないと、どうなっても知らないから」

背後に環を作るように並んだ剣の一本が宙を移動し、シヨリの手元へと収まる。流れるように突きつけた。

「おー怖い。そっぴやお巡りさんだっけ、銀髪姫。ハハッ、警察怖くてチームの頭なんてやってられねえよ。ンーいやしかし、いい体してる」

舐め回すような視線に、シヨリは不快感を覚えた。

「いや実はさ、さっきもババア一人、犯^ヤってきたんだが　やっぱ三十超えるとダメだな、体力なくて。ちよつと血イ流したぐらいですぐ氣イ失^ツちまう」

シヨリには誰の事を言っているのか解らなかったが、後に伝え聞いた西村誠は、シスターアウレリアがこの時、死亡していた事を知るのである。

「やっぱり、若い女がいいわ。ちよつと痛めつけたくらいじゃ何ともねえ。顔を傷だらけにした時の悲鳴を聞いた事あるか？　アレはたまんねえぜ、最高だ。皆この世の終わりって感じに泣き叫ぶ。一番笑えたのが、救急車呼んでーって縋りついて来たやつかな。面白

かったから死んだ後も犯したけど、ソツチはイマイチだった。死姦はダメだね」

眉根を寄せる事もなく、シヨールは無造作に、背後の剣をクドウに向けて飛ばした。十一本の剣が同時に飛翔し、クドウの体は串刺しにされ、床へと縫い付けられる。

噴き出す血潮、鉄臭さが充満していく。滴る血液はしかし、時間をおかずにその流出を止めた。

「ひゃ、ヒヤヒヤヒヤ！」

「イイね、と。息絶える事なく視線を送りつけてくる。

「イイぞ、その容赦の無さ！ やっぱ自分が人間じゃねえと情も湧かねえか、銀髪鬼よお！」

床に刺さった剣を、体を起こす動作で引き抜き、そのまま 跳ぶ。突進だ。だが生半可な膂力ではない。振り被った右腕を力任せに叩きつけてくる。シャンデリアに衝突、反撃しようと剣を構えていたシヨールは、突き破ってきた拳に剣を寝かせて咄嗟に防ぎ、後方へと吹き飛んだ。

礼拝堂の壁が崩れる。自分の体に相対速度ゼロで固定してあるシャンデリアとは言え、運動エネルギーの全てを受け流してくれるものではない。こうして許容範囲を超えたエネルギーが衝突すれば、呆気なく破られるのだ。

シヨールが打ち付けられた体の痛み、歯を食い縛り、体勢を立て直そうとしているところへ更なる突進、追撃が加えられる。クドウの右腕を視界に認めたシヨールは、声を呑んだ。

赤黒い手甲だ。ガントレット黒の全体色に赤の血管が走っているからそう見えるのだと理解した時には、その手甲が剣を折り、腹部にめり込んでいた。壁を突き破る事二度、ついにシヨールは建物から外へと出る事になる。

十二本のソード・オブ・クラウンは、実質その脆弱性を隠蔽する為に多数を飛ばす方法を取っている。これは彼女の意のままに操れる反面、そうして弱点をカバーしなければ実用出来ないのだ。クド

ウが突き破られた壁面を通って姿を現す。既に敵のダメージは甚大と見るや、口を開いた。

「どうだい、やっぱり術式じゃ天恵には適わないって実感したか？ そらそうだよな、七面倒臭い手順なんて一切ねえ、天恵は願うだけで発動出来る、奇蹟みてえな力だ。天からの贈り物に、人間のこさえた技術なんて結局適わないのさ」

「……口うるさい男ね」

そう吐き捨てた。本来、この銀髪姫は非情である。そういった面を見る事のなかった西村誠には知る由もなかったが、その本質、相手が誰であれ隠すつもりは毛頭ない。

「事の最中にベラベラ喋るなんて、余裕のつもりかしら。ならいいわ、黙らせてあげる」

彼女の瞳が、発光現象を伴って魔的に変質する。そして彼女の髪からも、銀色の光が粒子となって放たれ始めた。

「アクセス
接続」

伸ばされた右手に握られていた、半ばから折れているソード・オブ・クラウンはその先端から消失し、次に現れるソレへと構成を変えて組み込まれていく。

巨大な剣である。大きさは身の丈程、剣幅は三十センチを越すだろう。白く輝く不可思議なその剣身は、しかし^{ガード}鍰が存在せず、また柄^{グリップ}とも繋がっていない。ショーリが握る柄から僅かに離れて、宙に浮いている。

一見すると確かに剣のフォルムをしているが、剣身と柄の間には物理的な繋がりが無い事が解る。だがその空間には、鍰の代わりに四角錐が四つ存在した。

正方形の頂点と同じ位置関係。角錐は何れも外側を向く。である。そしてその中央部から、虹色の光が流れ出す。

体に未だ突き刺さるソード・オブ・クラウンを引き抜いたクドウは丁寧に一本ずつ折ると、ショーリに顔を向ける。血が溢れているが、衰弱する様子は見えない。右手の手甲も健在であった。

「ようやく出したか。ソイツとやりたかったねえ。銀髪姫の代名詞だもんな。とは言っても、知ってるのはコツチの分野に関わってる連中だけだろうけど」

シヨールの剣は、その名をハイペリオン・バスターソードという。
エーテル
霊子放射光で形成された近接戦闘用ブレードを何本も束ねた、本来ならば人間の術式回路では形成も出来ない負担を要求してくる。

剣身の中央には紫色の芯が存在し、そこには文字のようなものが刻まれている。魔術的な意味合いを持つ幾何学紋様のようなもの、古代ユリシーズ文字だ。

シヨールは左足を前に　爪先は真っ直ぐ相手を向く　右足を引いて肩幅に開いた。剣先を相手に向け、肩の高さで水平にすると柄を顔の前に持つてくる。

そこから考えられる攻撃は、突きだ。これだけの大きな剣の自重を伴って放たれては、例えば相手が盾を持っていたとしても貫けるだろう。

果たしてそのように事は運んだ。しかしやはり予見されていたように、クドウは半身翻して回避する。彼女から向かって左の方向だ。シヨールは向き直る動作含めて左足を引き　踏み込んだのは右足である　剣先を足元まで下げた。

次は切り上げ。構え直して、右上方から切り下ろす。これらは剣の移動に主眼が置かれており、その間に型の構えがあるという剣技である。剣の移動に関しては、まず腰の回転から始まる。手首の返しは柔らかく、裏刃を使えるように意識する。これは西洋のものに近いが、ところどころに独自性が加えられている。例えば盾を持った行動は考慮されておらず、防御は全て防御用の術式であるシャンデリア任せである。

しかし今回は、相手がそのシャンデリアを軽々と突き破ってくる突破力を持っている。彼女が剣技に重きを置いて、慎重に立ち回る理由がそこにあった。

数合やり合った後、やがて振り下ろされた剣に、クドウはここぞ、

と右の手甲で打ち上げる。衝突、靈子放射光の青い火花が舞い、互いに距離が開く。

シヨールのものは一撃必殺の剛剣である。ハイペリオンという剣は彼女が持つ際にはとてつもなく軽いが、他の者にはその逆となる。百キロを超えるのではとも思える重量を持つのだ。だが今、その質量と互角に打ち合ったクドウは表情に笑みさえ浮かべた。

「イイね、闘争の空気！ 焼ける鉄てつの臭い！ 血が滾るイイ臭いだ！」

付き合わず、右下からの切り上げを放つ。クドウは左腕を飛ばされつつも右の拳をきつく握り、手甲の力を込めて、彼女の鳩尾みぞおちへと叩き込んだ。

大きく飛んで地面を転がると、激しく咳き込む。しかしこちらは腕一本取ったと。

「おおお！」

クドウの飛ばされた腕が、切断面から再生 否、再生成される。真新しい骨、神経、血管、筋肉、皮膚 術式や天恵では為し得ない、超常現象である。

「まさか、禁呪……」

息を荒げたクドウは膝をつく。

「ハア、畜生、何度やっても、慣れねえな、こりゃ」

彼が持つのは、天恵だけではない、とこの時のシヨールは理解した。禁断と言われる生命の神秘に踏み込んだ、幾度体を破壊されてもこうして再生成する それは呪いである。

クドウは九つの命を持つ。それ故に精神を蝕まれて夜も眠れない程の激痛に襲われる事があり、それはいつ訪れるのか解らない。痛みへの恐怖に歪んだ心は、いつしか他人を傷つける事で安定を求めるようになっていた

クドウは知らないであろう。天恵ギフトとは天の恵みであると言うが、それはまた別の国で、全く逆の意味を持つ言葉なのだ。

ギフトは、毒である。毒の贈り物を喜ぶなど、愚かを通り越して

哀れでさえあろう。

「グ、うう……イテエ……痛みの波がきやがったか。これだけは、どれだけ経験しても嫌になる、ナイン・ライヴズの欠点だな……」
独り言を零す事で、痛みから気を逸らしているのかも知れない。
足元がおぼつかない様子に、ここを勝機と見たシヨールは剣に力を込めた。

七色に光る鐔の靈的作用現象に呼応するが如く、剣身が白い光を放ち始める。空へと伸びる光の柱　それこそがこのハイペリオングノーシス・エラエクトの本質、ガイスト内包概念だ。
ハイペリオン

星の名を冠する聖剣である。空への光は剣身を伸長した概念を持ち、実体は伸びていなくとも、振り下ろせばあらゆる敵を断ち切る効果を発揮する。

彼女は片膝を地につけたまま、真上からそれを叩きつけた。

右腕と、頼みの手甲を失ったクドウはそうして敗退する。シヨールの方はこうして決着したのである。緑が茂る林に、大きな爪痕を残して。ここまでの通り、彼女は人間では扱えない術式、不可思議な剣、そして奇妙な知識の偏りを見せる事から　人外ではないか、
と思える点が多い。

それは違ったのだ。少なくとも西村誠が捉えている人外像とは、一線を画す存在だった。何故自分を殺人鬼と言いつ張っていたのかも、実際の所本人にはそういう生き方しか出来なかったからなのだ。そういう力があるから、そうしていただけたのである。

彼女自身でさえ、自分の事を把握し切れていない。しかしあの真白が一目置く存在である事から、領けない特異性はあっても共に在る事は出来た。言い換えるなら、眼を背けていただけであるが。

人間でもなく、人外でもない。どちらにも属さない故に中立であり、どちらにも固定観念や先入観を持たず、何のバイアスもかかっていない視点を持つ　ヴィクトリア・ディアモンテ。西村誠にとって、それは憧れになりつつあった。

真白の方へと回想を移す前に、少しばかりの解釈。

人外のステージ？とされる古代種は強大な存在である。全ての人外種の上に立ち、それらを統べる統率者、もしくは超越者というものなのだ。寿命は存在せず、不死性を持っている。ここでよく勘違いされるのが、ステージ？を出発点として？を経由し、？へと至るというものである。それは生命の系譜として正当であるが、この場合それは当てはまらない。

後に判明した事柄では、人外はステージ？から？へは移行しないというのも、そういう進化経路が存在していないのだ。進化の段階が？で打ち止めなら、？はどこから現れるのか。その答えが、その名前にある。古代から生き続ける種……不死性を持ち、しかし己の眷属を作る事は出来ず、孤独と共に生きる種族だ。

だから、子を成す事も出来ず、ただ時間の流れる様、世界の移り変わりを眺めていくだけの観測者であるのだ。最初にそう生まれた故にそう在り続ける事を運命づけられたのである。

真白は、そうして人間を糧とする古代種と敵対し、それまでの己の在り方を否定し、ただ一人の為に人間の側につく事を決めた。無垢な古代種だったのだ。

張り出たバルコニーから跳び上がり、屋根へと場所を移したブラインドネスは、自分を追ってくる真白と正対した。構える。一気に張り詰める空気に、彼女も応えた。

二刀一对の小太刀、五月雨入道は春光一派の奇刀である。拵えが白木造りで強度に不安が残るが、魔を祓うという主目的に置いては寧ろ長所となる。霊木を使用しているのだ。

ブラインドネスの打ち込みを、左の逆手で受け流す。右の順手で反撃するものの、相手は驚くべき反応速度でそれを回避する。一刀と二刀では有利不利がはっきりと分かれる。距離にもよるが、今の段階では真白に有利があった。だというのに。

「相変わらず、その無粋な眼帯は外さぬのじゃな」

一旦距離が開いたのでその声をかけたが、答えはない。溜息が漏れた。

「ヤレヤレ。現実を見るのが、そんなに怖いのか？」

黙れ、と。今度は答えがあった。

「黙らぬよ。お主が求めるものはこの世にない。どうあつても手に入れる事は出来ぬ。何故それが解らぬのじゃ。そんなもので眼を覆い、醜い認識否定の衣で耳も肌も覆えば、現実から隔絶されるところも思つておるのか？ そんなものは、逃避じゃろうが」

正眼からの突きが来る。二刀を交差させるようにして、顔の横に流した。

「儂を見るがいい。お主とは比べ物にならぬ程、長い時間を生きてきた。それでも尚この赤い眼は一点たりとも曇らぬぞ。お主とて男子じゃろう。そんな事で何とする」

「お前には、守りたいものがあつたからだろう！」

恐らく初めてになるであろう、怒声 真白は驚きを隠せずにした。完全に人外の側に堕ちてしまった人間というのは、感情のような精神活動が停止する事を知っていたからだ。

「俺だつて希望があれば……希望があるから、こんな事をしているのだ！」

「お、お主、まさか正気を取り戻したのか！？ なら、まだ望みは」
「笑止！」

罅迫り合いの均衡が崩れる。上からの切り下ろしは、その剣筋を不可視に変えた。認識否定の特殊技能を、剣に与えたのだ。真白は直感で察したその危険性に飛び退いたが、着物の胸元を深く裂かれた。

そこから見えるのは、白い肌と、心臓のある位置 ではあるが、真白は人外種だ。そこに人間と同じく、脈打つ心臓がある筈はない。代わりのものが収まっている。

「今更ヒトに戻る気はない、心ココロという不完全なものに踊らされるの

は御免だ。俺は鬼だ、人外の、鬼だ」

「そうして感情を露にしておるなら、お主はまだ人間じゃ！ その宿命から逃げられはせんぞ！」

ブラインドネスは口を噤み、言葉を重ねる意志を捨てた。横薙ぎの切り払いを二刀で受け止め、足を後ろに退く。後がない事を認めると、体の位置を入れ替える為に鍔迫り合いに応じた。押し返す。それを見て取ったブラインドネスは一度刀を引き、中段に構えた。

そこから来るのは、魔剣・燕返しである。真白はそれを敏感に察した。今の自分ではそれを受け切る事が出来ないと直感、避ける為の足場もない、と来れば。

必然的に、それを 受け止める 事を選択する。

だが今のままの自分では無理だと解る。力を抑制して成人女性に近い制限をかけている状態では、この魔剣を止めるのは不可能だ。白木造りの柄も、持たない。

真白の紅い心臓が、一際強く発光、脈打つ。人外種としての力を全て解放するつもりなのだ。余力がなくなる為、これで後がなくなるものの、やらなければ間違はなく負ける。

角というのは、こめかみのあたりから発現する。後ろに向かう形で、空を衝く。骨や体内の何かが凝縮されて、というものではない。

これは精神に形成される霊知感覚器官である。

アストラル・オルガン
ヴィブラ・ホーン
霊知感覚器官、調律震角。

周辺の霊子^{マナ}と己の感覚・精神を繋げ、思いのままに操作、或いは知覚する事が出来る、人間にはない異質な感覚器官だ。これを使用した場合、自分の輪郭から意識が広がる感覚がある。齎される拡大感覚は、人間の脳だとしたら処理が追いつかない情報量とその演算速度を要求してくるのだ。

受け止める。それは両手の小太刀を離し、挟み込むようにする事で成功した。角によって強化された知覚能力と認識速度があつてこそ、白刃取りだった。

魔剣・燕返しの詳細を西村誠に教えたのは、彼女である。それは

この真白がブラインドネスの事をよく知っているという事でもある。故にこうして魔剣を受け止める発想もあり、実際にそれを行う手段も持っていた。しかし、これはブラインドネスを倒す為の手段ではない。それこそが最大の難点だった。

良くて拮抗。それ以上はない。両手は塞がり、今までの長い戦いで失われた力が大き過ぎて能力を使う事も難しい。真白の限界が、ここまでなのだ。

「クッ……！」

いつまで持つか。勝利がないのは最初から解っていた。角を発現していられる限界は短い。ブラインドネスの力もあり、足が教会の屋根を割って埋まる。やむなく膝を折る事になると、徐々に劣勢に追い込まれていくのは自明の理だった。

足元　礼拝堂からは剣戟が響いている。術式を斬っている音だというのに、二人は気付いている。

「誠は、ああして今を懸命に生きておるというのに、お主は、現実逃避か」

「お前こそどうだ、ヒトの血を吸えば、以前のように力が戻るというのに、それから逃避しているだろう」

痛いところを突かれた、と真白は表情に苦渋を滲ませた。

人間を糧とする古代種は、そうして自己を保存する必要があるのだ。生物が持つ遺伝子の構造とは異なる古代種の性質、或いは宿命である。リンゴのようなヒトと同じ糧では、もはや自分を保つていくのに足りないのだ。

生命体の遺伝子情報が要る。それも、近い形状でありながら違う性質を持つ生物のものがだ。時に血液であったり、肉であったりするその摂取に異を唱えた、たった一人の古代種が、現在の彼女であった。

瞬間。空気が変わった。ゾワリ、という悪寒が二人の体に襲い掛かる。圧力さえ伴って感じる霊子の波が、礼拝堂から放たれて

いるのだ。木々がざわめき、髪はたなびくが風のような自然現象ではない。固定座標に収束していた大量の霊子が解放された時に起こる反応現象だ。

収束された^{エーテル}霊子放射光は、急激な解放により内側から弾けようとする反応を抑えないと、^{エーテル・バースト}第五元素爆発が起きるといふ性質を持つ。これは爆弾のように物理的な衝撃力と霊子の活動を阻害する、^{エーテル・ブラスト}風衝撃波と^{アストラル・ブランク}霊子波空白を発生させる。

今この場で起きれば、この小さな教会など容易に吹き飛ぶだろう。その原因となる心当たりは、今この場で一つしかない。そして、これは二人もよく知っている出来事　十年前の事件と酷似している。

^{エーテル・ブラスト}「霊子風!? いや、第五元素爆発は起きていない。あれに比べればそよ風のようなもの。まさか、解放されかかっている前兆か？」

だとしても、打てる手立ては……「エクスカリバーは、一度起動すれば強制終了までは、止まらぬ筈」

ブラインドネスは眼下の林へと飛び退き、距離を置いた。屋根に残る真白は、もう角を形成している余力さえなく、言葉を最後に動けずにいる。

^{アマノミハシラ}「また、天之御柱が現れるのか。レイスめ、制御出来ると言ったのはやはり勘違いだったな。所詮、薬などでは御しきれないものだ」

ここにおいては危険と判断したのだろう、ブラインドネスは夜の街へと大きく跳んで去っていく。未練や後悔、或いは仕留め切れなかった口惜しさというものは、一度も振り返る事のない姿から、無いと見て取れた。

仲間を助けよう、という動きは微塵も見せない。契約で繋がっている傭兵だからであろう、または誰かが欠けても補充されるからか切り捨てするような態度。その形容がぴたりと当てはまる。けれどブラインドネスをよく知る真白は、彼が己の過去までは切り捨てられない人間であると理解していた。

「待て、待つのじゃ……お主はまだ人間に戻れるというのに、現実

から眼を背けて、まだ過去に生きるといふのか。そうやって心が囚われるのを、あやつは望むのか」

あらゆる出来事は過去になる。どのように残酷な事件も、明るい出来事も区別無く。真白の胸中に去来する思い出は、果たしてどのようなものだっただのかは知る由もない。

彼女とて過去に囚われている。それは自ら望み、選択したものだ。ならばそれはブラインドネスと何が違うのか。彼にかける言葉として、先のものは、彼女にも言えたものではない。

自ら選び、望んだ未来であつても、後悔からは逃げられない。黒と白の違いは明白でありながらも、その性質は実質、よく似ていた。同類相憐れむ……互いが互いに同情し合う境遇なのだ。

どちらも過去に眼を向けており、現在まゐを見て生きているとは言い難い。けれど想いに囚われるその姿こそ、あまりにも人間臭いといふものである。想いを引き摺りながら生きていく、無かつた事には、間違つても出来ないのだ。

あらゆる出来事は、そうして未来へと向かう。時間の流れには逆らえない。そこに痛みや悲しみ、辛い記憶という重荷を抱えて尚、絶えぬ流れに従う他はない。

礼拝堂内、西村誠はレイスの放ってくる多様な術式に手を焼いている。

それも必然だった。人外との戦闘は経ていても、術式の知識はあつても、こうした不可思議を扱う人物との直接戦闘は経験にないのだ。言わば未知との遭遇に近い。

ここで主観を戻そうと思う。回想は終了である。

西村誠　俺が寄つて立つ主観のもとに、たった一人の憎むべき敵が眼の前にいるとするなら、後は殺す事だけを考えるばかりである。

本来、俺は感情の波に身を任せる事の少ない方であると思つていゝ。昔が人間不信だっただけに、そうして精神活動を抑圧して生き

てきた弊害であらう。

ならばこれこそが本性である。敵を殺す為だけに発揮される、西村誠という一本の剣が持つ内包概念だ。^{ガイスト}善でも悪でもなく、ただ殺すという目的の為に特化された殺人技術と殺人思考が、今何の抑圧もなく解放されている。

社会も、道徳も、善悪もない。大衆が決めた倫理などが挟まれる場ではない。大勢が決める善　つまり正義が、この場だけには当てはまらないのだ。そもそもそんなもの、立場に因って都合良くその意味を変える曖昧なものであらう。

人間は、術式や超能力で相手を殺害する事態の定義を定めていない。逆も然り。殺されそうになったから殺した、人間ならその場合は過剰防衛になるが、殺されたのが人外なら、罪に問われるか？否であらう。笑ってしまう、人間同士にしか、そのルールは適用されないのだ。

故に今、自分の身は自分で守るしかない。大事な時に何もしてくれない人間の法に、今この時、どれだけの価値があるうか。だからこそ俺は戦う事に迷いが無いのだ。あの骨董屋の時だって、命に危険が及べば躊躇い無く武器を手にし、それを振るえた人間だ。

危険が、暴力が、自己保存への執着が、俺の本質を限りなくクリアに視せてくれる。どこまで行っても、俺は歪^{いびつ}なのだという事実を。ならば俺は鬼にならう。元々、半人半鬼^{はんじんはんき}の化物だ。そこから半歩踏み出す事には何の迷いもない。

大切なものを守る為なら、俺は人を殺せる。大切な人を助ける為なら、俺は、人間である事を諦められるのだ。

レイスの術式運用には一切の躊躇がない。殺傷目的の弾丸を幾発も放ってくる。それら全てに対して刀を向け、芯に当てて切断しては追い詰める事が出来ない。こちらの前進を防ごうと胴体、及び足を狙ってくる。視認出来る予測軌道上から足を半歩ずらしてそれらを避けると接近に成功する。レイスは動かず、俺が刀を振る動作に入っても些かの動揺も見られなかった。詩音を渡さない為の立

ち位置でありながら、迎撃の動作に入らない。

その思惑は、水平に首を刎ねようと払った刀身が、何もない空中で何かにぶつかったように止められた事で判明する。シヨリーのものと同じ、防御用のバリアが張られているのだ。不可視であった点は戦術的に見て、この時、俺に一瞬の動揺と隙を生む為であり、またそれを逃がさないように狙いすましていた事に起因するのだろう。術式で造られた、光る弾丸が左胸を狙っている。予測軌道上から体を逸らす。直後に発射され、どうにか命中は免れたが服を掠めている。この眼は真実、予知に近いのだろう。敵の意志を俺に伝えてくれるのだ。朝霧や混血がどうであれ、今はこれをうまく使いこなす事が重要視される。俺の生命線だ。

「クローン人間にそこまで情を抱くとは、滑稽ですね！ 人形に執着する偏愛者のようですよ、西村君！」

聞いてはいけない。心を乱すな。俺は一本の剣である。

これまで解った事は、このままでは防御用の術式は斬れないという事と、レイスはある場所から動かないという事である。弾丸の密度が増してくると、俺は長椅子の間に体を潜り込ませてやり過ごした。しかし硬めの木造であり、薄い部位に当たった数発が貫通してくる。威力が高いのかも知れない。弾幕が張られていて まるで機関銃のフルオート射撃のようだ。細かく砕かれた木片が飛び交う中、最も狙いの薄い場所へと回避を

否である。ここで取るべき判断は、防御ではなく攻撃だ。ただでさえ射程の差が著しい中、防御に回ってはそこで勝負が決してしまう。戦闘の成り行き、流れで解る。ここが分かれ目だ。ならば考える。どうすればヤツの懷に飛び込めるのか。斬れないにしても、せめてこちらの間合いに踏み込まなければ勝負にさえならないのだ。

防御用の術式とは、やはり物的に運動エネルギーを防ぐものなのか。それとも霊的にこちらの侵入を阻むのか。このあたりの性質が判明していないが、刀でダメなら拳である。共に渾身の いや。

違うのだ。霊子放射光とはそもそも、人間の精神と大気中の霊子

を化合して生み出されるもの。それはあたかも別の物質に変化しているように聞こえるが、本質はその二つではないのか。つまり、この二つの繋がり　　言わば分子間力のようなものを解除する方法があれば、あれを斬る事が出来るのではないか。

人間の精神……つまりは、霊である。霊を抜く手法を、俺は既にそのヒントを手にしている。

狙いを精神と霊子、二つの繋がりを分かť事に定める。攻撃用の弾丸は斬れても防御用のが斬れないというのは恐らく剣が持つ運動エネルギーが足りないのだ。弾丸なら軌道に刀身を置くだけで、自ら斬れてくれた。つまりは、それに匹敵する力が必要。

しかし俺の剣圧の限界というと、上段からの切り下ろしが最も発揮されると思われる。剣の重量、遠心力、腕力及び発勁による運動量の割り増しが、今のところの最大攻撃力となっている。

礼拝堂に行儀良く並べられた長椅子を盾に、近くで燃え盛るロウソク台を掴んで投げ付ける。レイスはそれも避けようとしな^い。命中し、砕け散る。床の絨毯に火が点いた。

注意を逸らすのに、これでは足りない。この弾幕と合わせて、まるで戦車を相手にしているようだ。装甲を破るには近付かなければならず、その為にはこの弾幕を掻い潜らなければならない。先程までの銃弾の雨は、今はナリを潜めている。恐らく消耗が激しいのだろう。次に俺が近付いた時に、再び使ってくる筈である。

ならば、当然であるが近付く布石が必要。今のように小さなキツカケでは難しい。あの弾丸の嵐は手数が多い。ロウソク台の一手ではアドバンテージを作れない。もっと大きなもので視界を奪う必要がある。

そこで、俺は思い出す。天啓とはこの事である。先の夕暮れで、俺はコンクリートのブロック塀を殴って割つたのだ。その力は、想いを力に変えるこの赤い眼のものであるのは間違いない。では、それでこの長椅子を投げ付ければ、戦局は変わるのではないか。

手は、ある。

この方法が今取れる最善の策であると直感する。俺の眼は先頃から光りつぱなしである。今なら、出来る。人を超えた力を出せる。故に人では無理と諦めるな、俺はもう独りではいたくない。アイツを、詩音を助ける為に、人外である事を願うのだ！

「おおおお　！」

刀は手放せない。片手でやるしかない。地面にボルトで縫い付けられている事などお構いなしに、俺は右手で長椅子を、地面から引っっこ抜く。ばきばきと音を立てて脚の部分が割れていき、やがて持ち上がり、五人座りのそれが、浮いた。

そのまま投げ付けると、レイスが度肝を抜かれたように眼を見開いた。一瞬だけそれが見えたのだ。手を翳してそれに対して防御すると、やはり不可視の壁によって防がれた。だがその間、俺が完全に肉迫するまで　この瞬間の接近はたったの数歩で、やはり人間の脚力ではない　完全に閉じられていた。

俺は、呪い^{のろ}を抜^{まじな}う呪いを口にする。

この後、呪いを受けて桜吹雪はその刀身を水晶のように変えた。

「臨・兵・闘・者・皆・陣・裂・在・前！」

振り被る。するべきは真上からの切り下ろし。未完成の魔剣ではなくセオリー通りの打ち込みだ。だが只の打ち込みではない。これは西村百式が誇る、勁を用いた最大威力の切り下ろし。

百式合戦法・刀の段・兜割^{トウ}りである。歯を食い縛り、喉の奥から言葉にもならない声が出る。

「　　カッ　」

人間から外れた力を用いての一刀に、今までの切り下ろしとは何かが違うと直感する。

その、瞬間。俺は視た。一瞬だけ視えたのだ。本来なら、敵から俺に伸びるだけの軌跡が、俺から敵に伸びている光景が。まるで、こう斬れと言わんばかりの道標が。

振り下ろされた剣は、防御障壁を切り裂いて、しかし、レイスを殺す事は出来なかった。直前、眼を開いて体を捻り、懸命に避けよ

うとする様が見えた。障壁という余計な抵抗さえ無ければ、切り下ろしの回避は間に合わず、脳天から入っていただろう。

そうして狙いを外され、レイスの自分を庇った腕一本、切断する事に成功しただけだった。

仕留め損なった。だが致命傷だ。痛みによるショック症状もある。早急に手当てしなければもうヤツは助からない。そしてそんな事を、今の俺が許す筈がない。

悲鳴が響く。血潮が噴水のように湧いてくる。顔の半分にかかった。熱い。生きている証明だ。だが敵のそれに、何の感慨も抱く事はない。寧ろ

「痛い、痛い、痛い！死ぬ、ああ、ああ！血が、止まらない」同情の余地はない。あの人食いの術式で死んでいった人達は、そんな事さえ言えなかった。唐突に奪われた未来を嘆く事も出来なかった。そしてジャック・ハンターの片割れ、人工タイプのモデル・ウルフを生み出した咎もある。

コイツのやった事は重い。償いきれるとしたらそれは死を以って他にない。だが、俺にコイツを断罪するような権利はないだろう。だから俺は私怨によってのみ動く。偽善を働く気はない。自分を正当化するつもりもない。

ただ言えるのは、人を殺す覚悟がある者は、同時に自分が殺される覚悟を持つべきであるという事だ。それなくして、殺人の業は背負えない。

あらゆる物事には善悪の二面が内包されている。それをどう取るのかは、全て自分の意志によって決められる。ならばこれは間違はなく善ではないと俺は言おう。限りなく悪であると俺は叫ぶべきである。

コイツを殺した先に明るい未来が待っていたとしても、悪を為した俺はそこへは行けないのだ。何食わぬ顔で幸せを享受する等、許される事ではない。

罪の意識とて、購いの意思とて、それが免罪符になる事はないの

だから。

「死ねよ、どうせ何人も殺してるんだ。いつかこうなるって解つてたろ。自分のやった事はやがて自分に返ってくるんだからな」

因果応報の理とは、優しくもあり、残酷でもある。その二面性は、互いを食い合う相克なのか生かし合う共存なのか、俺は知らない。

だって、その言葉の意味を理解出来る程、俺は長生きしてない。人の繋がりを知らない。知りたいと願う事が、今までなかったのだ。「最後に言い残す、言葉はあるか？」

剣先を向ける。狙いは喉元である。いつそ楽にしてやろうと思つたが、そんな義理もないか、と剣を引いた。

哀れに惨めに苦しみながら死んでいくのが、悪党らしいというものである。

「ないか。ないよな。お前みたいなゲスは、そうやって死んでいくのが相応だよ。殺人鬼」

呼吸が浅くなってきたレイスは力なく横たわる。出血多量と痛みによるショック症状であろう。死が近いのだ。呆気ないものである。ハテ、と思う。俺はどうしてここまで無感情に考えているのだろう。あれだけ詩音が世話になって信頼を寄せていた神父である。今となつては裏切られた気持ち強いが、長い間良き隣人でいてくれた人に対して、ここまで心無い所業が働けるものなのか。

良き隣人であつたから、裏切られた事の怒りが強いのか。しかし怒りなど、俺は今感じていない。では、これは一体何なのだろう。

「ま、誠君……」

詩音の声が耳に届いた。苦しんでいるようだ。だが今はこの悪党が死んでいくのを確認したい。二度とこんな真似が出来ないように死ぬべき人間であるのは間違いないのだ。それは彼女の無事より優先されるべきで

疑問。

「あれ……？」

俺はどうして、詩音の心配をしていない。大丈夫か、と一声かけ

てやるべきだろうに、それをしていない。今も、そうするべきかどうか悩んでいる。

おかしい。今の俺は、して当たり前配慮をしていない。どこるか怒りや悲しみも感じないのは、おかしい。何故だ？

いつかの天秤の話である。片方の側に傾いた天秤は、そちらが重過ぎると呆気なく壊れてしまう脆さを持つ。俺の中の人外と人間の計りは、果たしてどちらにどれだけ傾いたのだろう。精神活動が狂ったのは、何かの前兆であろうか。

「誠君、ダメだよ、誰かを傷つけたりしちゃ、いけないよ」

違うのだ、詩音。俺はお前のヒーローにはなれない。今ではもう、柴にだってなれないのだ。お前を守りたいのに手を血に染めた、悪い鬼なのだ。

何故、そんな悲しそうな顔で俺を見る。俺は救いのない道を往くというのに、お前は、お前だけは、それを悲しんでくれるのか？

「詩音。お前は」

「話は、後でね。大丈夫、私が何とかするから」

そう言つて、羽根を広げた。片側三枚の蒼い翼だ。

彼女は、一度覚えた事を忘れない。それはこの羽根であつても変わらなかったのだ。彼女にしてみれば都合三回目の起動であつたという。一度で覚え、二度目で実行し、そして三度目の今回、それを応用させた。

レイスの斬られた腕から流れる血が、止まる。痙攣やショック症状の容態も治まっていく。何をしたのかと見ると、彼女の蒼い瞳が、炎のあがり始めた教会に眩しく輝いていた。

彼女に何が起きているのか、この時の俺は解らなかった。

ただ、ガーディアン・ブレードとはこうした奇蹟を可能にする兵器であつたという話を聞いたのは、大分後になってからだった。

火の手があがり、教会は火事となった。かろうじて脱出した俺達

四人は、一時的な対処として西村家に集まった。詩音に何が起きたか、シヨールと真白に何があったかを、ここで聞いたのである。

その日から、俺は悪夢を視るようになった。誰かが追いかけてくる夢、誰かを殺しにくる夢、或いは殺される夢というようなものだ。刀の呪い。一度でも起動すれば自身が呪われるという、死に至る病を負う事になる呪い。そうして、何かを決定的に踏み外したような、どこかで根本的に間違っていたような思いを、俺は抱く事になる。

人外に近付いた体は、それから眼を逸らす事を許さない。逃げられない現実を叩きつけてくる。心のどこかで迷っている俺に、この上なく厳しい現実を。

俺の選択は、本当に正しかったのか。倫理を外れかけたあの時の俺の思考は、誰かに言えるようなものには思えず、独り抱え込む事になった。

家に帰るというシヨールも流石に消耗しているようで、止めなかった。けれど、それが良くなかった。深夜のスカイヒルズタワービル爆破事件は、この直後、シヨールが帰宅したと思われる時間に起こったのだった。

何かが狂い始めている。このままではいけない、という漠然とした思いはあっても、それをどうしたらいいのか解らない。或いはこの思いさえ狂った精神のせいなのかと考え始めると、俺は何もかも信じられなくなるのだった。

第五章 再生の剣

不快さに眼を覚ました。見れば寝汗で部屋着が濡れている。着替えて階下に向かうと、詩音が客間に寝ている姿が見えた。普段ならもう起きている時間であるが、疲れているのかも知れない、とそのままにして、居間に入る。

時刻は朝の七時である。昨日の夜に西村家へ戻ってから一夜が過ぎた。シヨールだけが自宅に帰ってここにいない。真白はと見ると、居間でニュースを見ているようだった。廊下を仕切る障子窓を閉めると、こちらを見ないまま声をかけられる。

「昨夜、ヴィクトリアの住んでいるビルで爆破事件があった」

一瞬、何を言われたのか解らなかった。

「ば、爆破？ いや、ここ日本だぞ。テロとか起きる国柄じゃないぞ」

テレビや人に伝え聞く限り、他の国に比べて日本の治安が良いのは間違いないと思う。少なくとも発砲事件や殺傷事件が日常的に発生する国ではないのだ。海の向こうとは違って。その日本で爆破とは、尋常の事態ではない。

「それで、シヨールは」

まさかとは思う。あのシヨールが死ぬ筈がない。けれどそんな根拠、どこにもない。死なない事など誰も保証してくれないのだ。アイツのように強いやつがそんなに簡単に死ぬ訳ない、と思っても、人は呆気なく死んでいくものであると、あの教会で俺は知った筈である。奇蹟でも起きない限りは、逆らえないのだと。

「少なくともあやつの部屋があるフロア丸ごと吹き飛んだようじゃ。最上階に近かったのが幸いかも知れぬ。下の階や地上、周囲の建物に被害はないと言っておるが、避難勧告が出ておる」

「そんな、事が。シヨールは、どうなった？」

それ程の大事が起きていたとしたら、夜中に眼が覚める筈じゃない

いのか、と。

「生きてはいるようじゃ。昨夜も言ったじやろう。僕は角の力を使ってもう一步も動ける状態ではなかった。疲労のように、無理すれば動けるとかいうものではない。体を動かす生命の力が尽きかけていた。それだけ、あの角の使用には危険が付き纏うのじゃ。僕は眠るというものを必要としないが、快復には単純な時間経過を必要とする故に動けなかった。お主は、まあそれとは違う状態で動ける状態ではなかったの。」

覚えておるか？ 以前に話した、刀の呪い」

頷く。桜吹雪の呪いだろう。それについては倉から持ち出した夜に話した気がする。知識としてはそれ以前から知っていたが、呪いが実在するという事について知ったのは、その時が初めてだ。

「人を殺す、呪いか」

「そして、人に殺される呪いじゃ」

曰く、桜の木の下には死体が埋まっている。そんなお伽噺もある程には、桜というのは魔的なものなのだ。散る様が美しいのは、死を美徳とする過去の慣習がそう思わせる。

儚く散る桜の花弁。桜吹雪は、人の死体から血を吸った花弁が舞う光景だ。それは昔の呪いの媒体にはうってつけだったのだろう。桜が血を吸うか否かの真偽、迷信はともかくとして、そういうものだという概念が含まれていれば、呪いに成り得るのだ。

思い込みとは似て非なる。想いをカタチにする。人の情念とはこの世で最も美しく、また恐ろしいものだろう。

「夢を見たらう。人を殺し、殺される悪夢を」

「どうしてお前にそれが解る、真白」

「それを手にした者は、例外なくそういう末路を辿ってきたからじゃ」

「……お前、本当に何十年も生きてきたんだな。そんな事は、読める物なんかで眼にした程度じゃ言えない。実感みたいなものがこもってる」

真白は人外である。それは昨日の夜に要約されて耳にただけであるが、その裏付けは至る所に潜んでいた気がする。言葉遣い、術式や呪いの知識、そして近代文明に疎いところ……

末路、と真白は言った。ならそれは、俺がこれから死んでいく過程の入り口だというのだろうか。気分が重くなる。

「桜の呪いは未だ消える事はない、か。お主がコケにしていた呪いに、実際に襲われる感覚はどうじゃ？」

皮肉のつもりだろうか。だとしても、実在の疑わしいものに殺されるというのは冗談にもならない。

「悪夢なんかで死ぬか。たまたま夢見が悪かっただけじゃないの。こんなもので人は死なない。呪いは術式のようにカタチを持たない、曖昧なものだろう。それに妖刀とかの話はどうも胡散臭いんだよ。所詮、刀だろうが」

術式は明らかな意図性を持って行使されている。その様子を何度も見てきた為に、カタチあるものとしての認識が強い。対して呪いというのは、カタチを持たないあやふやなものだと感じている。

西村の呪いにしあって、男の俺にしてみれば偶然性が高く、確率的なものではないのかと捉えている。故に刀も同義である。

さも馬鹿にしたように片眉を上げる、真白。

「ここまで式シキに関わっておいて、そういう態度を崩さぬか。その言葉がいつまで続くか、見物じゃな」

何の気なしに思うが、妙に落ちついている自分が嫌になった。こんな話をしている場合ではない、シヨリが心配ではないのか、とだが話をする事で俺を落ち着かせようとしてくれた真白に感謝をするのが先かも知れない。

少なくとも、行き先も決めないまま飛び出さずに済んだのだから。話の腰を戻す。

「昨夜にあったって爆破事件、死傷者の方はどうなってる？」
発生から数時間は経っているようで、テレビでもひっきりなしにレポーターが事件のあらましを繰り返し、何度もその光景を見せて

くる。黒く焦げた最上階付近を下から見上げた映像……あまり何度も見たいものではない。

「ヴィクトリアが万全であればこの程度で怪我也すまいが。あの後では、な」

「……怪我を、したのか？」

「負傷者の方に名前も出ておった」

だとしたら病院である。どのくらいの怪我をしたのかは解らないが、一度尋ねてみるべきだろう。もしもあの時、帰ろうとするシリを無理やりにも止めておけば、と後悔せずにいられない。

けれど、昨日の俺にそんな余裕はあったろうか。もしかしたら彼女は氣を使ってくれたのかも知れない。昨夜は、俺にも考える時間が必要だった。

それも、詩音によってレイスは一命を取りとめ、逃走を許してしまった結果が原因だ。散々という結末ではあったが、詩音があの時に俺を呼び止めて、人を殺す事を望まなかったという点にだけは、安心出来た。

それよりもシヨリと真白の努力を無駄にってしまったのが頭に痛いのだが、悪い事ばかりでもない。人喰いの術式を起動している基点というものの破壊には、成功したのだ。

詩音の翼が起こした、アストラル・ブランク霊子場空白というものによって、その詳細な場所が判明したのが最大の要因である。それは周囲の霊子を吹き飛ばし、濃度を極端に薄めてしまう現象であるという。これで認識の隙間にあつたという術式の基点を俺が発見し、刀を用いて破壊した。認識攪乱用の術式がかけられていたのが発見出来ない原因であつたようだ。そうして隠蔽を行っている術式を機能させる霊子そのものを吹き飛ばして無効化した事で発見出来たという理屈である。

真白が語るに、それは必須の手段ではないが確実であるという。俺の眼だけで探すには、あの教会は広過ぎたらしいのだ。確かに、人に視えないよう隠蔽されていて、それを眼を凝らして探し当てるというのは、労力を取られれば時間もかかる作業であろう。例える

ならダウジングに近い。一方詩音の起こした現象ならば、広範囲を一気に搜索出来るようになる効果的なものだ。それこそ一目で発見出来た事実がそれを証明する。

やはり、何度考えても不安になる。詩音は俺の知っている詩音ではないのか。あんな翼があつて、どこかがおかしくなったりはしないのか。俺なんて眼が赤くなるだけで、色々な弊害が起きているのだ。人外の力を発揮するなど、傍から見ればまるで化物であろう。最後の情緒不安定な時だつてそうである。何故殺人に対してああまで冷静でいられたのか。以前から覚悟はしていたが、もっと人間らしい心理が働いてもいい筈である。

ただ人を殺すというだけでなく、知り合いを殺すというのだから。「真白。詩音は、俺の知っている詩音なのか？」

不安に駆られてそう問い掛けた。返ってくるのは、いつもの回りでどい返答だつた。

「変わらぬよ、以前のまじや。些か記憶の混濁が見られたが、問題ないじやろう。あれだけの負荷だしの、何も無い方がおかしいというもの。それと、あの娘にはお主が必要じゃ。傍にいてやれ。例え翼があろうと中身までは変わらぬ。ああ、安心するがいい、薬物の効果は残つておらぬじやろう。そもそもASは、アドヴァンスト・ソルジャーそんなものの体内残留を許さぬからの」

「……ソルジャー。それ、兵士か何かの名前か？」

「人間の体を弄繰り回して生まれた、いわゆる所謂強化人間じゃよ。技術発達が未熟だつた為に完成度は低いが　この娘を含めて、当時三人が製作されてな。一人目はクローン人間からの強化、二人目は選り抜かれた受精卵、つまりデザイン・ベビーからの強化育成、そして三人目は、人間と人外の混血から強化した。うち三人目は失敗作として廃棄処分されたい。まあ、混血というのは不安定な代物じやからの。後天的に何かを付与させる事など不可能だつたのじや。

ミッドガルド
アドヴァンスト・ソルジャー・プロジェクト
世界再生機構は、このAS計画によって一兵士が持つ戦闘能力を向上させようという目的じゃったが、そう上手く事は運ばなかつた。

ゼロワンは起動と制御に不備が残る欠陥を持ち、ゼロツーは暴走事故に巻き込まれて行方不明、ゼロスリーはそもそも失敗作で廃棄されたとなると、禁断の領域に踏み込む事はまだ人間に許されておらぬ、というようにも見れてしまうの。

ゼロワンについての話がまだじゃったな。

ミスティック・アームズ

あの翼は術式兵装に分類されておる。軍事のもので言うなら戦術兵器の類じゃ。あれ一つで戦場のパワーバランスを覆す、既存の銃火器などとは比べ物にならぬ大破壊を引き起こせる代物でな。危険度の扱いとしては列車砲に近いじゃろうか。完全に制御出来れば軍隊一個師団をマトモに相手取れるじゃろうよ。

正しく大量破壊兵器じゃ。ああ、それとこれも言っておく。

十年前に起きた 天之御柱 の正体は、起動に失敗したガーディアン・ブレードじゃ」

あの大規模な雷の事を言っている。天之岩戸に落ちたという天災だ。あれがまさかにも人の手によって起こされた現象であるうとは、今まで考えた事もなかった可能性である。

列車砲と同等の扱いという事についてはまず、列車砲がどのような物かを把握していなければならぬだろう。それを気にした俺が後に南清二から得た情報によると、こうある。

陸上では運用が困難な大口径・長砲身・大重量の重火砲を列車に搭載し、鉄道のレール上を走行する事で移動可能とした巨大兵器である。中でも最大のものは八十センチ列車砲・ドーラというもので、これは総重量千三百五十トン、全長四十三メートル、全高十一メートルオーバーを誇る移動式カノン砲だ。これだけ聞くと、もはや動く要塞であろう。

しかし真に恐るべきは、そこに設置された砲身から発射される砲弾にある。七百キロ及びの爆薬が、着弾時におよそ幅十メートル、深さ十メートルのクレーターを穿つ破壊力を発揮する。

つまるところ、超兵器と呼ぶに相応しい代物である。

そんなものと詩音が同じ扱いというのは、実を言つとまるつきり想像もつかないのが正直なところである。

しかし、軍隊一個師団とマトモにやり合える大量破壊兵器　真白がそう語る理由の影には、そういった一因も裏付けとしてあるというのだ。

それは天之御柱という超常現象が、単に起動に失敗しただけで発生したという事からも多少、窺い知る事が出来る。

「あれ自体が巨大な剣となる筈じゃったが、龍穴ドラゴンス・ホールからの過剰な霊子流入が災いして暴走しての」

混乱してくる。コイツは、十年前の事件の真相を言っているのだろ。けれど今の俺はそれを全て受け止める事が出来ない。

詩音の危険性を抜きにしても、解らない事が多過ぎるのだ。

とりあえず、詩音の持つガーディアン・ブレードというのを使おうとして、失敗したというのが大本のようではあるが。

「何の為に、そんな事を？」

「プロジェクト・レコードブレイカーというのを実行しようと企てた連中がいての。当時から世界再生機構への反対活動をおったレジスタンスと共に、そやつらの計画を潰して回っていたのじゃ。それがこの街で終結した」

「よく、解らない。そのプロジェクトってのは、悪いものなのか？」
彼女は重々しく頷いた。真剣な様子である。だがどうにも、空想的な感じがして現実感の伴わない話に感じる。

まるで、一介の高校生が巨大な陰謀を前にしているような感じがして　　ついていけない。

「レコードというのはの。この世を縛る環リングじゃ。時に真言と言い換える事もあるが、やはり環とされる事の方が多いじやろ。その環というのは、理ことわりを意味する。閉ざされた円環は、万物を流転させる意味を持ち、そういう役割を担っている。そしてこれは同時に、在るべきものが在るべきカタチに落ち着くよう定める調停者のように働く。世の中のバランスを整える、 баланサーじゃな。それが、地

球を囲む幾重もの環の正体じゃ。まあ、眼には見えぬが」

本初子午線。輪廻の環。空の軌跡。全く関係ないであろうそんな言葉が、脳裏を過ぎる。

「この街で終結した理由というのが、盤のように広がる龍脈にある。その当時に研究所から連れ出されたばかりのエクスキャリバーは、まだ術式回路や霊知感覚器官が成長しておらず、起動と制御に不備があった。それを、龍穴の膨大なマナで補助しようとした　円卓と呼ばれる由縁になった、十二個の小径^{パス}を全て解放してな」

それで、無理が祟り暴走した。つまりは、そのガーディアン・ブレードというので空に浮かぶ環を壊そうとしたという事のようにである。確認すると頷いてくれたので、この解釈に間違いはないようだ。まだ詳細は掴めていないが、大筋はこれでいいのだろう。

「それに、どんな意味があったんだ？」

「聞けば鼻で笑うようなものじゃ。儂とて最初は面食らった。じゃが、やつらの意志は強固じゃったの」

昔を懐かしむような、感傷に浸る表情だ。

「この星を巡る大いなる術式を破壊し、神の存在を確かめる。或いは、自らが神になるというものじゃ」

少し、理解するのに時間がかかった。ある程度経つとじわじわとこみ上げるものがあり、やがて堪えきれず、冷めた笑いが漏れた。腹を抱える。

「そんな、そんなのが十年前の真実？　ハハツ、馬鹿にも程があるな。誇大妄想家の集まりか何かだったのか、お前の敵って！　頭のネジが緩んでるとしか思えない！　良い具合にイカれてるな！」

怪しい宗教に通じるものがあるだろう。うちは仏教だが、俺自身は神仏を信じていない。家柄や世間体から法事なんかの時にはその手順を取るが、信じる必要を感じないというのが本音だった。だから、神なんて信じない。

だって、人間にだけ神がいるのはおかしいだろう。神が実在するというのなら、犬猫の類にもその存在を証明してやれなければ理屈

が通らない。人間だけが、そんな都合の良いものに縋れる道理はないのだ。

それに、動物を喰らって、植物を搾取して生きるような罪深い生き物が神になろうなどと、業が深いにも程がある。

「ま、そういう反応が普通じゃろうな。人間の複製という禁忌ともされた行為を平気で行える連中じゃ。儂も擁護などする気はない」

一頻り笑った後、気になる単語があつたのを思い出す。

「そついや、研究所がどうか。人間を複製って本当なのか？ どうも疑わしいんだが」

「ふむ。あれはロンドンの郊外じゃったかの。町並みを見下ろせる、小高い丘にあつた」

鼓動が、強く脈打った。

そのフレーズは、どこかで聞いた事があるのだ。以前、どこかで

「そこにあつた、能力開発研究所……確か、EDENじゃったかな。隠蔽用の術式で囲われた、世俗とは無縁の箱庭じゃ。そして、禁断の神秘に踏み込んだ人体実験場」

ロンドン郊外。小高い丘。テムズ川。そう確か、金髪、碧眼の。

「そこも、十年以上前の暴走事故で廃棄されたがな」

廃棄？ 暴走事故で？ いやだが、あの少女はそこから来たと言っていた。覚えている限りでは十二歳だと。廃棄されていたとするなら、その話と食い違う部分がある。まだ機能していると考えるのが、自然だ。

違う、待て。それよりもだ。あの少女とは一体どこで別れた？

あのスカイヒルズではなかったか。爆破事件のあつた、あの建物

爆破 そうだ、爆発事故ではない。つまりそれは自然に起きた出来事ではなく、人為的な意図が認められた結果だろう。

十年前。詩音が現れたのもその時期だ。二度目の暴走とされる天之御柱事件があつたのもその時だ。そして昨日、十年前に廃棄された筈の場所から来たという少女と、会った。それは、もしかしたら真白の敵ではないのか。あの事件が、まだ終わっていないとい

う事ではないのか。

それは、また詩音が狙われるという事に、なるのではないのか。
繋がった。全てが一致していく。

「な、なあ。お前がいたってレジスタンスは、なんていうんだ」

そして、真白はそれに答える。俺は、もしかしたら自分は今、大きなうねりの中にいるのではないかという錯覚を、そうして抱く事になったのだ。

「外事四課の母体となっている、ウェンズデイ機関。源流を室町時代の陰陽連とする、人外と戦う人間達の集まりじゃよ。」

そして、お主の父と母が関わっていた組織でもある」

照り付ける太陽の光に肌を焼かれつつ、街並みの中を進んでいく。梅雨前線が近付いているというフレーズを家電製品店の前を通る際耳にしたが、空にそんな気配は見られなかった。暑さを避けて日陰に避難し、少しばかり思索に耽る。

真白とショーリは、ウェンズデイ機関の所属員のようだ。その機関というのがどのようなものかは解らないが、今俺達が直面している事態^{キフト}に対して対処する、特殊任務機関であると聞いた。内情は術式や天恵の研究・調査からそれらに目覚めた人材を管理保護し、また悪用の際に対しては逮捕状ナシで捕縛出来る権利を持つ、独立組織だという。時には殺害さえ問わないらしいのだから、ブラックな話である。だが確かに、ブラインドネスを筆頭にPMCランックネヒトの面子やそれに従うモデル・ウルフを眼にしていると、そういった集団が存在する必然性というのも身に染みて感じられる。

常識では太刀打ち出来ない非常識に、やられているだけの人間ではないという事だろう。どのような不条理にさえ立ち向かう人の強さが、そこに見て取れる気がする。

病院に辿り着く。俺は予め聞いておいたショーリの病室番号を探して扉を開けたのだが、そこは誰もいない個室となっていて、口を開けたまま呆然としてしまった。背後から肩を叩かれた事に振り返

ると、一人の女性がいる。見たところ同い年くらいだろうが、下を黒いスラックスのワイシャツ姿に、人受けの良さそうな目鼻立ちをしていた。美少女と言って差し支えないだろう。

「君が西村君かい？」

茶色に染められ、凛々しいと表現出来る形に整えられた短髪。嫌味でない程の明るさを覗かせる表情には、好奇心が浮かんでいるようにも思える。

「アンタは？」

隙の無い立ち振る舞いに警戒心を見せると、相手は顔の前で両手を振った。

「ああ失礼、僕は如月葵^{きづき・あおい}という。驚かせて悪かったね。で、君が西村君で合ってる？ ヴィクトリアを、シヨリーと呼ぶ、西村君？」

「そうだけど。シヨリーを知ってるのか？」

面白いものを見た、とでもいうような顔をして、まじまじと俺を覗き込んでくる。興味深そうにされるのは構わないが、どうにも読めない女である。

「へえ、本当なんだ。あの銀髪姫をねえ。ふうん、ほー」

端正な顔立ちなのは解るが、あまり良い出会いの仕方ではない。疑われても当然の態度はこちらの出方を伺っているような、言わば試されているような感覚さえ覚える。というのは、穿ち過ぎだろうか。

「アンタ、シヨリーとはどういう関係だ。今あいつがどこにいるのか知ってるのか」

顔を離して、意地の悪そうな笑みを作ると。

「ついて来たまえ」

如月葵と名乗る少女はどうやら一つ年上らしく、車の運転も心得があるようだった。外国の教育機関を飛び級で卒業したと語り、外事四課に入ったのもその時の恩師に勧められてだという。助手席に乗せられ、向かった先は中心市街地から南の地区だった。

アパートの駐車場に車を停めると、降りるように言われる。

「そんなボロでもないけど、年季が入ってて風情があると思わないかい？」

「……言っちゃ悪いが、それをボロと言っんじゃないのか。世間一般的に」

やれやれ、と言わんばかりに首を竦ませると、先を促してくる。

「あいつも会いたがつてるよ。このところ職場でも君の話ばかりだ。男に警戒心の強いあの銀髪姫を、一体どうやって籠絡したのか聞きたいところだね」

籠絡とは人聞きの悪い話である。俺は特に何かした覚えはない。

しかしそんな話に興味を惹かれるのは、男の性であろうか。

「例えば、どんな事を？」

「んん、そうだねえ。優しくて誠実だけど、ちょっとえっちだとか」前半はどうだか知らないが、後半は合っている。というか身に覚えがあつて顔を覆いたくなった。以前言われた、胸ばかり見ているという事を根に持たれているのだろうか。今後は一層注意しよう。

「……手箆めにでもしたかい？」

吹き出しそうになつたが、堪えた。怪しいものを見るように細められた眼が胸に痛い。

「そんな事するか！ 殺されるだろ！」

言い切つたところで如月葵は立ち止まつた。ここだ、と鍵を開けて入っていく。後に続く……と、妙な臭いが鼻についた。

鉄の臭いだ。加えて、油が空気中に飛散したかのように、喉に臭いが纏わり付くのは何故だろう。狭い上がりがまちから少し進むと申し訳程度のキッチンが備わつた一室の全容が確認出来た。ベッドに横になっていたであろうショリーはこちらに気付いて半身を起こし、ワイシャツ姿の下に包帯を覗かせて、そこにいた。

「西村君！？」

「無事だったか、ショリー……って、無事ではないか」

あちこち怪我をしている。包帯の巻かれた右腕、左首、覗く胸元

にも見てとれる。首にも巻かれていて、満足に動けるような状態ではないようだった。

応えると、落ち着きを無くし始める。胸を撫で下ろせるいつもの光景を見ているのもいいのだが、今はそれよりも部屋中に蔓延している鉄の臭いの原因を探ろうと視線を巡らせた。

すると部屋の隅、ショーリの寝ている枕元に、黒い塊があった。それ一つではない。壁に立てかけられていたり、畳の上にぞんざいに置かれていたりする。それは、銃だった。

すると大気中の油の臭いというのは、手入れ用のもの。ガンオイル。だろうか。

「これ、モデルガンか？ 俺の友人もこういうのを集めてて、面白い趣味してるなと思ってたんだが、似たようなのがいるもんだな」
「全部本物だよ」

返答に驚ける程、俺も物を考えない奴ではない。外事四課。彼女が人外と戦う組織の所属員だというのなら、こういう武器を個人が携行していても何らおかしいものはないのである。術式や呪い殺しが無い普通の人間が戦う場合、こういった物が最優先で選択肢に入ってきて当然だろう。

護身用には無骨過ぎる拳銃、そして突撃用の長い銃身を持つた小銃に、更にそれより長い銃身と照準器が備えられた。恐らくは、狙撃用の銃。

「エヴァから聞いてないのかい、僕は君達のような力を持っていない。精々盗み見る程度のものしかないからね。銃を使うしかないのさ」

如月葵は小さな冷蔵庫から缶のビールを取り出してくると、部屋の中心に置かれたテーブルの傍ら、片膝を立てて座った。

「君もやるかい、西村君」

「ビールか。いや、俺は未成年だから。ていうかアンタもじゃないのか」

硬いねー、と零しながら一気に煽る。喉を鳴らしてうまそうに飲

む姿は、おっさんのようにも見えた。

どこか呆れを誘う光景を無視し、俺はショーリの傍に寄って声をかける事にした。

「ショーリ、また会えて良かった。爆破事件があつたって聞いて、心配したぞ」

彼女は胸元に手を寄せると、縮こまってしまった。

「ご、ごめんなさい。でも私も油断してたわ、まさかビルの中で待ち伏せなんて」

「待ち伏せ？」

「ええ、小さな子だったわ。金髪で、狼のようなものを二頭従えて間違いない。あの少女 アナスタシアだ。二頭の狼はフェンリルとゴスペル、人外のような眼を持った生物。俺の思考がそこに至ると、丁度如月葵が口を挟んだ。

ミッドガルド
「世界再生機構の特殊任務部隊だよ。トライデントっていうんだ。

ヴィクトリアを襲ったのはその内の一人、コードネーム・ダブルトリガー」

それが、あの少女のあだ名のようなものだろうか。個体識別名称のような。

「……アナスタシア・ラウ・キルバイン……か？」

如月葵は、やにわに身を乗り出してきた。

「知っているのか!？」

やはり、そうなのだろう。この反応で、違いました、というのは有り得ない。だとしたら何という馬鹿だろう、あの時の自分を殴ってやりたい。齒軋りする程に。

俺の自己満足が、道案内という愚にもつかないお節介が、こんな結果を生む事になってしまうなんて。後悔先に立たずとはよく言ったものである。ショーリが傷つく原因を作ったのが、俺だという事を自覚するのだ。

「済まん、ショーリ。あの少女をビルに案内したのは……してしまつたのは、俺なんだ。道を知らずに困っていたのを、ついお節介で

案内してしまっただ」

頭を下げる俺に、戸惑いの視線を向けているのが解る。だが恥を忍んで己の犯した罪を晒さなければ、俺はその視線と向き合う事は出来そうにないのだ。

「謝って済む話じゃないのは解ってる。みすみす敵を連れてきてしまったんだ、殴られても文句は言えない。済まない、俺があの時、あの少女を助けなければ」

「そうか、君が、連れてきたのか」

無機質な音がする。見ると、如月葵が拳銃を構えていた。陰のある表情と言葉が、俺の胸に刺さる。

「おかげでヴィクトリアはボロボロだ。爆発の中心から吹き飛ばされ、あの高さから地上に落下して、生きているのが不思議なくらいだったんだぞ。シャンデリアの形成が間に合わなければ最悪の事態になっていた。その原因を作ったのが君だというなら、僕は君を許さない」

「葵ちゃん！ ツ、痛……」

首を押さえ込む彼女に身を寄せる。

「シヨリ！ 無理するな……いや、済まん」

もしかしたら彼女も、俺を許してはくれないのかも知れない。そう思っただけなのに二の足を踏んでいると、シヨリはふいに笑った。

「君、今日は謝ってばかりね」

「え？ あ、いや……そうかな」

穏やかな微笑に、眼を逸らした。

「葵ちゃん、彼の事を許してあげて。きっと彼は、ただ道に困っている少女を助けただけなのよ。この人らしいわ、とても。だから、止めてあげて。私は大丈夫だから」

これじゃ僕が悪役だ、とばかりいって懐に銃を仕舞う、如月葵。俺はというとシヨリのセリフに戸惑いを隠せず、顔を伏せて見えないようにしている。

如月は続けた。

「ダブルトリガーは世界再生機構の中でも最高クラスの力を持つ。
ミッドガルド
アトワァンスト・ソルジャー

特にトップスリーのASをトライデントと呼称するのだが、特殊任務実行部隊にはその名の通り、この三人が組み込まれていてね。

実質、少数精鋭ながら軍隊規模の戦力を持つ連中だよ」

世界再生機構の名前は何度も出てきているが、概要は真白の敵と認識している。ひとまず、神の存在を確かめたい連中……という事にしておこう。

「そのダブルトリガーがショーリを狙ってきたという事は、トライデントってのもこの街にいてるって事か？」

特殊任務というのはやはり、人外との戦闘や術式関連の専門だろうか。というところだ。PMCランツクネヒトとの関係が気になるところだ。その関係が悪ければ最悪、外事四課 ウェンズデイ機関との三つ巴になるだろう。

「察しが良いね。本来なら先制攻撃と同時に畳み掛けるのがセオリーなんだが、昨夜から今まででそんな動きはない。ダブルトリガーも姿を消した」

そこで少し気になった事を尋ねた。

「ショーリが見たという事は、ダブルトリガーは同じフロアにいたんだよね。それなのに、どうやって逃げた？」

それには、ショーリが応えた。

「空を飛んで。以前、私がしたようなジャンプでなく、フライの方よ」

「そんなもの、どうやって？」

ショーリは、俺の眼をじっと見た。まるで試すように、反応を見逃さないように。

「起動と制御を簡易省略化された、新型のガーディアン・ブレードよ」

携帯電話の液晶画面に、昨夜の爆破事故が起こった直後の映像が

流された。ウエンスデイ機関が撮影したというものである。赤い爆炎が窓から伸びたと思うと、今度は黒煙がもうもうと流れ始めた。その中から飛び出してくる、碧色の羽根　上下二対の四枚羽根を背中から生やした、あの少女だった。映像は一時停止する。

「間違いないか、西村君」

「ああ、あの時の少女だ。やっぱり……この子が、敵なのか」

現実を叩きつけられた感覚だった。心のどこかで、違っていたらいいのに、という甘い希望を抱いていた。あの時のアイスを食べていた無垢な横顔が、白い狼を撫でていた表情が、どうしても頭から離れなかったから。

「二頭の狼というのは恐らくファミリア・スピリットだろうな。常駐型の術式で、彼女の護衛のようなものだ」

「これが新型のガーディアン・ブレードとすると……アナスタシアは、もしかして二番目のASというやつか？」

確か、先に真白から聞いていた話にあった。一人目はクローン人間、二人目はデザイン・ベビーと。二人が同じものを持っていると考えても、おかしくはない。

ショーリが言葉を継ぐ。

「ええ。藤崎さんからすれば、妹のようなものね」

出来れば聞きたくなかった言葉である。しかし、今得られる情報からは今後必要になってくるであろうものが多いという予感がある。解らない事は聞いておくべきだろう。

「それだけじゃない、三叉槍トライデントと言つたる。ASの四番目と五番目もいるとするなら、かなり状況が悪いぞ」

「四番目と、五番目？　やっぱり、ええと……世界再生機構の能力開発研究所だかつてところはまだ機能してて、新しいASが生み出されていた、という事か？」

「その理解は正しいよ、西村君。特に気をつけるべきは、この四番目だ」

やはり、先頃の予感はずしかったのだ。これで裏付けが取れた。

見せられた携帯の画面に、日本人らしき男の顔が映し出された。
無造作な髪型に無表情　青年である。

「コイツはダブルトリガーよりも攻撃力に優れていてな。ASにはアドバンス・ギフト特化型天恵というのが後天的に付帯されているのだが　まあ、クドウの持ってた天恵ギフトの強化版みたいなものだ。これは例外無く、薬物と外科手術で処置される。でもコイツだけは天然のまま、トライデントに選ばれる性能を示した。クドウなんて目じゃないくらいの、圧倒的な攻撃力だぞ」

ビッグ・バウン天恵ギフト、害為す魔法の杖　レーヴァ・ティンと、如月は続けた。

「五番目は、まあ、君なら出遭ったとしても殺される事はないだろう。女と子供は殺さないって不思議な奴だからね。説明は割愛させてもらうよ」

そこで、如月は立ち上がった。

「そろそろ時間だ、エヴァに頼まれた、人喰いの結界を形成している基点を探さないと」

エヴァという単語に首を傾げていると、ショーリが助け舟を出してくれた。

「真白の、ウェンズデイ機関での呼び名よ。白のエヴァっていうの」「名前の多い奴だ……」

ただでさえ色々と情報過多なので、頭がこんがりそうである。すっかり酔いの醒めた如月は　先程からずっと話していて気付かなかったが、もう随分な時間が経っている。窓から見る空はオレンジ色だ　外出の用意を始めた。

「遅くなるかも知れない。ヴィクトリア、何かリクエストがあれば帰りに買ってくるが」

「そうね……シャワーを浴びたいかしら」

その言葉に、彼女は固まった。そういえばこの一室には浴室の類が見当たらない。もしかしてトイレも共同だろうか。だとしたら、近くの銭湯にでも行くしか……

「すまんが、そんな時間は……」

申し訳なさそうに言う如月は、俺を見て。

「頼めないか、西村君。ヴィクトリアの世話、っと、失礼」

携帯電話が鳴って、それに応対する姿を見ると、いよいよ彼女にも時間がない事が伝わってくる。ここは頷いておくべきだろう。

「解った、後の事は俺がやっておく。急いだ方が良いんじゃないか？」

「済まない、今度何か奢ろう」

片手をあげて忙しく去っていく姿に、シヨールが薄く微笑んだ。
「どうした？」

「いえ、彼女を見ていると楽しくって。ほら、鍵もかけずに」
本当だ、と返して、ドアのロックをかける。

「随分忙しそうだったが、外事四課はそういうもんなのか？」

「まあ、そうね。ところで、シャワーの話だけれど……髪を洗いたいのよね」

「ああ、解った。しかしどうする、ここには浴室のようなものがないぞ。銭湯に行くにも、お前一人で体を洗える状態ではないし……」
洗面器に湯を張って体を拭くというのでは、髪までは洗えない。

「うーむ……」

そこで、気が付いた。

「そういえば、どうしてシヨールは病院じゃなく、ここにいるんだ？」

「だって、ダブルトリガーは私を狙ってきたのよ。病院なんかいたら、今度は病院が爆破されるわ」

至極当然の答えだった。けどそれと言ったら、ここも同じではないだろうか。それとも同じ外事四課の仲間だから構わない……そういう事なのか。いや、もしかしたら護衛が他にもいるのかも知れない。

「お前をここに連れてきたのは？」

「葵ちゃんと、他にも数人。隣の部屋で待機している筈よ」

「なら、その人達に頼んで……ん、その中に女の人っているのか？」
「いないわ」

「……そうか」

これで銭湯の線は完全に潰えた。となると、最後の手段である。

「車を出してもらって、うちに行くか。真白か、起きていれば詩音が手伝ってくれるだろう。シャワーは無いが、髪は洗える筈だ」

俺の言葉に、ショーリは笑顔を返してくれた。

車を降りる時に、携帯電話を渡された。ショーリのものが壊れてしまったのでその代わりらしい。何かあれば連絡するようにという言葉に頷いてから、彼女をおぶって家に上がると、障子窓から見た限りでは居間には誰も見えなかった。真白はどこかに出かけたのだろうか。そういえば先程の如月葵は、真白からの仕事のように言っていた事から本人もそれに向かったのだろうか。そう考えると筋が通る。

ひとまずショーリを居間に下ろして、客間の襖を開けるが、詩音はまだ寝ていた。先日の、背中に翼を生やした出来事は彼女にどういう夢を見せているのだろうか。それを思うと心が痛む。俺に人殺しをさせないよう、最後はレイスを助けたのだから。

ガーディアン・ブレードにあんな使い方もあるとすると、一体その限界はどこにあるのだろうかと考えてしまう。

頭を振る。考えても解らない事は、幾ら考えても意味がない。

しかしこうなると困ったものである。俺がショーリの洗髪を手伝う事になった。

「まあ、仕方ないか」

どうせ髪を洗うだけならそんな手間もかからないだろう、と。その時の俺は、後の事態にこの時の甘い見通しを後悔する事になった。今のショーリは体を満足に動かせない。首や腕、肩、足もそうだ。それを脱衣所に入る前に再確認した。ショーリは何も疑っておらず、誰か女性が手伝ってくれるだろう、と思っているようだ。俺はそこ

に事実を告げる。

「すまんが、洗髪を手伝えるような女が家にいない。俺……が手伝っても、いいか？」

念の為にそう言うと、恥ずかしさと戸惑いに顔を真っ赤にしたものの、やはり髪を洗いたい欲求には逆らえないようにで　　気を使っているようだ　　小さく頷いてくれた。

絹糸のようだった。すると指をすり抜けていく気持ちのいい感触は癖になりそうで、銀色の照り返しにどこか神秘的な感じを受ける。

バスタオル一枚、背中をはだけたショーリは小さくちぢこまっている。大して俺はズボンの丈を折り返して濡れないようにしただけの服装である。何度も手櫛で梳いていると、何気なく聞かれた。

「どうかしら……」

「ん？　何が」

「私の髪……」

「ああ、綺麗だ。触り心地もいい。ずっとこうやってたいな」
満足そうな吐息が漏れる。

話は先程の事に変遷していく。

「まさか葵ちゃんのアパートにまで来てくれるなんて、思わなかったわ。心配してくれたの？」

「そりゃ、まあな。仲間なんだし」

「……減点ね」

久しぶりに聞いた。これはショーリの口癖のようなものなのだろう。減点されても、それが聞けた事自体が嬉しい。

「爆破事件の時な、申し訳ない話だけど、その時は寝てたんだ。情けないよな、仲間に危険が迫ってたつてのに」

「いいのよ、真白から聞いてたわ。あの刀には呪いがかかってるって。悪夢を見る呪い」

「そんなもんで言い訳はつかないだろ。今朝初めて聞いてさ、どう

したらいいか解らなくて……でも真白がいてくれたから、行き先も決めないまま飛び出したりしなくて済んだ」

溜息が聞こえる。

「貴方の周りって、女の人ばかりね」

「ぐっ……いや、でも、うーん、そうなるか……」

笑われた。

「そうだな、周りは女ばかりでも、背中を流した女は初めてだな」

「……そういえば、誰かに、その、肌を見せたのは、初めてね……」

どきりとする。すっかり忘れていたが、このショーリは何かと初めてのものが多い。現代に生きていれば当然のようにするであろう出来事や触れ合いも、未体験だったりするのだ。

「なあ、お前さ。本当のところ、何歳なんだ？」

「あ、ダメね、女性に年齢を聞くなんて。デリカシーがないわよ」

「本当の事が知りたいんだ、ショーリの」

思えば、こいつの事で俺が知っている事というのはかなり限られる。その身元については殆ど何も知らないと言っていいだろう。

切れ切れに、小さく返答が返ってくる。

「私も、知らないのよ……自分がいつ、どこで生まれたか。気がついたらこの街にいて、真白が私を導いてくれて……ただ、覚えてるのは二つだけ。私の名前がヴィクトリア・ディアモンテという事と

虹を見ると、懐かしい気持ちになるという事だけ」

名前と虹に、コイツのルーツを辿るヒントがあるという事か。記憶喪失なのかと思っただ、それにしても流暢な日本語や戦闘技術について違和感が付き纏う。

「いつか、解るといいな。お前のルーツが」

「そうね……」

流すぞ、と言って湯をかける。洗髪は終了だが、風呂まで来てそれだけでは気が済まないものだろう。話し合って、背中を流す事になった。

それに、こうして穏やかに時間を過ごすというのも、これはこれ

で心地が良いものであり、終わらせるのを惜しがったのが正直なところである。

「俺、髪の毛長い女がタイプなんだよ」

「えっ!？」

飛び上りそうな勢いに苦笑が漏れた。

「な、何、いきなり。私、からかわれてる？」

「いや、思った事を言っただけだけど」

そう返すと、剣呑な響きの答えが返ってきた。

「胸の大きな人、の間違いではなくて？」

否定し切れないところがあるので黙る事にした。

「はあ。やっぱり、ちょっとえっちな人ね」

それは男なので仕方が無いと思ってもらっしかない。寧ろ女に対してエロくないとなると色々と問題である。年中脳内ピンクでも問題だが。

スポンジで程よく泡の乗った背中に、手で触れた。弓なりのように反応するショートを見るに、どうやら敏感なようだ。

スポンジと手では、感触がまるで違うから驚いたというのもあるが。

「何、するの」

「いや、綺麗な肌だなと思って。悪い、つい手が伸びた」

怒られるかと思ったが、思うところでもあったのか、彼女はスツと背筋を伸ばした。

「 以前の話、覚えてる？ 二人は欠点を乗り越えて欲しいと思ってるって」

「え？ ああ、真白の本心は知れないけど、俺はそう思ってる」

あの夜、八尋殿自然公園に忍び込む直前の話だろう。大ジャンプは印象に残っている。忘れる訳がない。

「最近少しずつ、頑張ってみようと思ってて。でもまだ、自分から男性に触れるのは怖くて。女とは違って、がっしりしてて怖いから……仕事なら大丈夫なのに、変かしら、こういうの」

変ではないが、意外ではあった。シヨリならそんな事を頑張らなくてもやっていけると思っていたのだ。表面上は非情な銀髪姫：それだけでも、何も困らないように見える。でもそれだけが、コイツの内面という訳ではないのも、また確かだろう。

仮人格の仮面は一見強く見えるものの、それは内面を隠す為の外面ではないのだ。密かに異性に触れたいと思う事は、何もおかしい事ではない。

「変なもんか。変わろうとしてるのは良い事だと思うぞ。少なくとも、俺は嬉しい」

はにかんだような吐息が漏れて、聞こえた。

今だけは、その仮人格の仮面を外しているという確信がある。本心を俺に晒して、本当の自分を見せているのだ。でなければ、肌なんて許さないだろう。

時雨の時のように、心の傷を癒すようなものではない。必要なものではない。けれど殺人鬼を名乗り、市民の為に一人戦い続けてきた孤独な彼女に、誰かが手を差し伸べ、優しく触れてあげてもいいと思うのだ。

もしも俺にそれが許されるなら、幾らでもこの手を伸ばそう。

「ねえ。私に触れてくれる？」

応えて、背中に手を這わせた。泡の所為もあって、つるつると滑る。やはり敏感なようで、事ある毎に体を反らすように反応し、艶のある声が彼女の口から漏れる。

「あまり大きな声出すなよ。詩音が起きてくるぞ」

口を噤む様子もかわいらしく見えた。背中の中ほどから肩甲骨、肩のあたりまで掌を滑らせると、今度は肩を伝って右手へと移っていく。

気持ち良さそうに眼を細め、短い息を繰り返すシヨリを見ると、俺まで妙な気持ちになってしまうので、考えの焦点をずらす事にした。

男性恐怖症というのが彼女に対して適切な言葉かどうかは解らな

い。それでも一步踏み出して今の自分を変えていこうというのは、心の強い人でなくては出来ないと思うのだ。

少なくとも、今のシヨリーは俺に対して一步、近付こうとしてくれているのだろう。そう思っていると、切なげな呼吸を続ける彼女が言った。

「これ、何……？ 何だか痺れる、みたいな感じが……」

え、という声が漏れた。思わず手が止まる。まさか、気持ち良いという感覚も知らないというのだろうか。だとしたら、偏った知識というレベルではない。本来なら快感というのは中学生あたりで習う保健体育の知識の筈であるが、それも知らないとなると、一般的な義務教育の過程を経てきていないという事になる。

おかしい。だとしたら、女性体としての機能は？ もしかして男を怖がるのは、そういう知識が一切欠落して、どういうものを理解していないからなのか？

だとしたら、シヨリーは欠落だらけだ。そんな事が有り得るのだろうか。でもそれなら、ガードが硬いとされて当然である。何故なら人は未知を恐れる。それは本能のレベルで仕組まれた反応なのだ。「気持ち良いっていうのも、知らないのか？」

「気持ち良い……？ これが、そうなの？ シャワーぐらいでしか思った事、なかったわ」

性的な快感神経が一度も刺激された事がない。つまりはそういう事だろう。少し考える。これではシヨリーがこの先、イザという時になつてからでは困るのではないだろうか。もしそんな時に何の予備知識もないようでは、相手に一から説明される事になるような、間抜けな光景が浮かぶのだ。

いや、或いは獣のように飢えた男に無理やり犯されるような心配も出てくる。どこをどう防御したらいいか解らないからだ。それって女としてかなりまずいのではないだろうか。そうか、シヨリーが肌を晒さない理由というのはそれもあるかも知れない。そっちは、どこまで出していいか解らないからだだろう。

基本的な事が抜け落ちているのだ。しかし、それを本で学んでいられるような状況ではない。だって、そもその経験則が不足しているのだ。イザその時になってから、ああこういうものなんだな、と理解するようでは遅過ぎるだろう。所詮、知識は知識である。経験には勝てないのだ。

「うーむ……」

こうなると、誰かに経験として教わった方が良いのではないだろうか……いや、それだと意味が無いのだ。男が彼女の体に触れなければ、実体験として刻まれない。でも俺は先日時雨とあんな事をしたばかりで、これってどうなのだろう。女なら誰でも良いのか、という疑問が浮かんでくる。そんな訳はないのだが。

「どうしたの？」

シヨリーの手首を掴んでいる俺の手に触れ、指を絡めてきた。

「ふふ、大きい手。ごつごつしてる」

触れたいという欲求はある。男性としてそえられるものもある。しかしそれだけで彼女に触れ続けるのは、許されないだろう。

あの夜に触れた真っ直ぐな意志を思い出す。あの時から、俺の中で彼女は憧れになった。折れず、曲がらず、揺るぎない強さに初めて触れたのだ。名前を呼ぶのだって結局は恥ずかしかったただけだ。でも今は、シヨリーという呼び名が心にスッと入っていく。それが心地良いと感じる事もあった。

頼りたいと思う事も、笑顔に触れたいと思う事もあったのだ。

ああ、と実感する。俺はもしかしたら彼女にも、あの二人と同じような想いを抱いているのかも知れない。守りたい、傍にいたい。本当は弱い自分の心をさらけ出したいと。

約束だって、ある。最後の最後、俺が人外に近付きブラインドネスのようになってしまった時は、止めてあげるといふものだ。

だったら、それでいいじゃないか。俺を救ってくれるという彼女を、俺は守ればいいだけの話なのだ。そこから俺が助かるかどうかは自分次第でも、彼女が最後のストッパー役を担ってくれるなら、

失う訳にはいかない存在であろう。

相克、二元論、共存という二重螺旋の、その間に。
真っ直ぐな一本の芯が通っても、いいと思うのだ。

「シヨリ。続けるぞ」

絡ませていた指を解き、腕を辿って体の腹部へ。そこから、胸へと渡った。

「んうっ……」

少し体を仰け反らせて、耐えている。まだ快感の波は弱いようだ。

「だ、ダメ。胸は……」

「大丈夫、優しくする。でも次からは、心に決めた人に触らせるように」

両手から零れる大きさの双丘は、まるでマシユマロのような感触だ。色白の肌も相俟って指の喰い込む様が艶かしく映る。シヨリは体が勝手に反応するのを抑えようと必死に耐えているようだ。

「あっ、ふぁ……！」

「気持ち良いか？」

応える前に、耳を唇で食んだ。嬌声を強引に噛み殺した横顔がすぐ目の前にある。左目のところに泣きボクロがあつた。小さな発見である。

何とか声が漏れるのを抑えようと眼を瞑る姿に背徳感が首をもたげる。体を丸め始めたシヨリに覆い被さるような体勢になり、刺激を続けていく。

やがて双丘の頂点にある突起が硬くなり始めたので、それを指で摘む等の行為を続ける。太腿をすり合わせてもじもじとし始めた様子が見え、目論見が成功している事を知った。

「これ、何なの、どうしてこんなに、ときどきするの？」

「お前が女だつて事だよ。男と女は、惹かれあうものなんだ」

お互いに恋をする生き物。だから、男だつて怖いものじゃない
そう伝えたかったのだが、どこか誤解されたいらしい。

「私、惹かれてるの？ そっか。これが、好きって事なのね」

心臓が、一つ跳ねた。予想もしていなかった言葉である。熱に浮かされたような表情は色っぽくて、俺の眼を惹き付けて離さない。

俺は恋を知らない。好きというものが解らない。それを、彼女に先を越されてしまったようだ。でも悔しさはない。寧ろ嬉しいのだ。彼女が、大人の女性になる事が。

「ねえ、貴方は」

下腹部に手を伸ばすと、その言葉は途切れた。秘裂の一番上にある突起に触れ、転がすようにすると彼女は途端、弓なりに体を反らした。背中に触れた時のような条件反射とは違う。性的な絶頂であろう。やはり敏感なようである。快感に慣れていないのもあるだろう。やがてぐったりと脱力すると、体をもたれかけてきた。

荒い息を整えるシヨリーと視線が交わる。すぐに逸らす。また、交わる。頬を紅潮させた彼女は最後に、気持ち良かった、と囁いた。

頭が冷えてくると、自己嫌悪の念が湧いた。詩音が寝ている横で、俺は何をしていたのだろう。倫理的にまずかった気がする。やはり俺は最低だ……時雨の時も思わないでもなかったがあえて眼を逸らしていた問題である。いや、でも直接的な性行為に及んでいない事から、最後の一線は守っていると言えるだろう。鉄壁の防衛線である。

シヨリーは包帯を巻き直した後、浴衣を着ては慣れない着心地に興味を示していたのでそのまま布団に寝かせた。しかし一度脱いだ下着は洗わない限り付けないというので洗濯中である。今は何故か干してあった俺のを穿いている。あの行動の意味は何だろうと考えてしまうが、やはりよく解らない。まあ、ないよりは良いのかも知れないが。どこか無邪気な子供が興味の赴くままに行動しているような……いや、深くは考えまい。

深夜、床についた後の話である。

自室の襖を開ける音が聞こえた。足音からして詩音ではない。歩

くのも辛いというシヨリが二階まで来たのだろうか。近くまで来たかと思うと、布団の中に風を感じた。潜り込んで来たのだ。

「おい、何してる」

「あら、寝てるかと思ったわ」

すぐ横にシヨリがいる。下の客間で休むように言ったのだが、何故ここに来たのだろうか。

「何だか、ときどきが治まらなくて。苦しいような、満たされてるような、そんな感じなの。これ、何だか解るかしら」

「い、いや。病気が何かか？」

「あ、減点ね。ムードの欠片もないわ……ねえ、触れてみて」

浴衣の首元にある隙間から覗く肌、その心臓がある場所に手を導かれる。確かに早鐘のように鳴る心臓が脈打っていた。鼓動の一つ一つが、彼女の生きている証明だと解る。

「貴方のも、触らせて」

予想外な事だった。シヨリの方から俺に触れてきたのだ。心臓のある場所に、直に触れてくる。暖かい手だった。

「うーん、私のみたいに早くないわ。どうしてかしら」

「さあ。何でかな」

「どうして……？　こんなにふわふわして、気持ち良いのを感じてるのは、私だけ？」

そこで彼女は、表情を綻ばせた。それは銀色の月光に照らされて、眩しいくらいに映った。

「もしかしたら、それが恋なのかもな」

「なら、いつか貴方にも恋をさせてあげるわね」

第五章 再生の剣（2）

お化け屋敷と呼ばれる建物がある。北市街区の中でも外れの外れ、森に囲まれた辺鄙な場所に建っている洋館だ。子供の頃、詩音や時雨と共に何度か忍び込み、肝試しに使った馴染みの深い心霊スポットである。

二十年前から誰も住んでおらず 噂では第二次世界大戦時からある物件 たまにホームレスが忍び込んで数日で行方不明となる事もあった曰く付きの物件なのだが、今回ここを調べる必要が出てきて、俺は数年振りにその場所へ足を運ぶ事となった。

発端は真白や如月葵の基点探しが捗らなかった為である。やはりレイスの隠蔽工作は専門家という事もあってそう簡単に見つけられないようなものではないらしく、また俺自身あまり手伝っていないかった手前、この申し出は断れない。さて今日から手伝いにいこうと思っていたところ、家に顔を出した真白が言った。

「どうもうまくいかん。お主、ずっとこの街に住んでおったのじゃろう。霊が集まる場所だとか、雰囲気の良い建物だとかに心当たりはないのか？」

霊子は精神と密接な関係にあるからの。そうした所に術式を敷いた可能性が高い」

この言葉をキッカケとして話は進み、筆頭候補のお化け屋敷が頭に浮かんできては事ここに至った次第である。成る程、心霊的なスポットとなると教会に基点があった事も含めて頷ける話である。今後はそれを頭の隅に置いておくようにしよう。

閑話休題。

俺の横には、先頃に眼を覚ましたばかりの詩音がいる。その向こうに朝霧時雨だ。お化け屋敷に詳しい幼馴染み達だが、二人には先日のもあって同行は気が進まないものだった。

しかし、シヨールが家にいた事から彼女の怪我に追及が及び、そ

これから俺の以前の怪我也合わせて今回、これ以上は隠せないとして白状したという事の運びである。

それだけでなく、詩音が背中から翼を生やした事実、十年前の記憶が飛んでいるとの話から、事情の説明は彼女達を納得させるにも必要な事であつただろう。

霊子、精神、術式から呪い、天恵、敵、そして人喰いの結界が街に張られている事までの一部始終を話した。するとお節介な二人は首を突っ込んできて、よせばいいのについて行くと言い出しては、まるで世の為人の為、女子高生探偵気取りで事件を解決しようと思つていふようなのである。

俺としては命の危険がある事を再三説明したのだが、真白が言うに人外の動きは朝霧の血が、PMCランツクネヒトは詩音のガーディアン・ブレードが牽制するというのである。時雨はともかくとして詩音の方は起動と制御に不備。もしくは暴走の可能性があるとされる危険なもののだが、その点についてはあの教会での最後に起きたレイスの治癒を手がかりとして、うまくいけば制御出来る可能性があるらしい。実際、ここへ来る前に簡単な術式兵装のレクチャーをヴィクトリアから受けていた。

或いは制御が完全でなくとも、そうした結果が残つたせいで敵にもしかしたらと思わせる事が出来るとして、一緒に行く事を推奨されたのだ。

いるだけで牽制になる。ドーラ列車砲と同等の危険性を誇るガーディアン・ブレードに、迂闊に手を出す馬鹿はいない。そんな理由である。

「詩音、本当に体は大丈夫なのか。起きてからまだ二時間しか経つてないだろ」

動きやすい服装としてジーンズに白のブラウスという格好で、眼鏡の位置を直しつつ彼女は答えた。

「誠君は心配性だなあ。私は大丈夫だよ、寧ろいっぱい寝たからいつもより調子良いぐらいですよ。ほらほら、力コブ」

全くコブが見えない二の腕である。そんな詩音のお目付け役として、時雨が口を挟んだ。こちらはブラウンのカーゴパンツにプリン
トTシャツというラフな格好だ。彼女にはこういった活動的な服が
似合うと思う。気のせいかなポニーテールがいつもより元氣そうであ
る。

「しーちゃん、あんまり無理しちゃダメだよ。具合悪くなったらす
ぐに言ってね?」

「いやいや、実はこう見えて運動神経には自信があるのです! 体
育会系の先輩にも勧誘された事あるんだから!」

これが意外な事に事実である。詩音は体は弱いのだが、体を動か
す事に関してはセンスを光らせる。体力がないのであまり長続きは
せず、すぐへばって注目される事が少ないのもあり、知っている人
間はかなり限られるだろう。持久力を考慮しない場合、下手をする
と俺と同等か、それ以上なのだ。トロそうな というと失礼に当
たるが 外見に反した長所である。

だがそれも、AS計画最初の被験体という過去を知っていれば、
頷ける話ではあった。強化人間^{ネクスト} その言葉が、脳裏に甦る。

「でも丸一日寝込んでたのにいきなり運動なんて、体がついて来な
いんじゃないの?」

時雨が心配そうに肩に手を置く。詩音は眼を逸らした。

「だ、大丈夫だよ……きつと……」

希望的観測に縋るのは、多分自信がないからだろう。まあイザと
いう時はおぶって家まで帰るか、一通りの探索が終わるまで待つて
いてもらうしかない。

「早めに終わらせよう。シヨリも心配していたし」

この一言がなければ俺は平和に探索をこなす事が出来たのだが。

「ま、誠君! そんな事言っつて事はやっぱりあの人とはもう抜き
差しならないとこまで行っただね!? さあ、教えて! どこま
で行ったの、教えてくれるまで離れないから! しらばっくれても
ダメだよ、もう怪しい匂いがプンプンですよ、プンプン!」

「女たらしめ、道理でヴィクトリアさんを泊めた訳だ　って、抜き差しならない！？　しーちゃん、それはやっぱり、やっぱりそういう事なの！？　まさかとは思ってたけど！」

やおら騒ぎ始めた二人を尻目に、持ってきていた刀の鞘尻で錆だらけの鉄扉の錠前を強引に外し、蹴り開ける。絡み付いていた蔦が苦しそうに音を立てた。見れば膝丈までの茂みが建物まで続いている。放置されて数十年、庭は手入れされず窓も割れ放題、外装もボロボロで、塗装があちこち剥けていた。子供の頃に見た光景よりも劣化が進んでいる。

「よし、行くぞ！」

気合十分、準備は万端である。俺は屋敷の敷地内に足を踏み入れようとしたら襟首を掴まれて引き戻された。

「行かせないよ！　それよりも先に昨夜の詳細な説明を求めます！」
「アンタ、行く前に話す事があるでしょう！　家ではあの二人がいたから口には出さなかったけど、先に私達に言うべき事があるんじゃないの！？」

「お、お前ら一体何しに来たんだ！」

あと、多分抜き差しならない、というよりはのっぴきならないと言った方が正しいような気がするが、墓穴を掘りそうなので止めておく。多分語感で誤解しているのだ。

「そんな話は後で幾らでもしてやる、優先順位を間違えるな！」

「な、何その態度！　ちよつと誠君、私知ってるんだからね、昨夜ヴィクトリアさんと一緒にお風呂入ったんでしょ！　ここに来る前に聞きだしたんだから！」

バレている、と一瞬緊張したが、俺は口が滑った前科を踏まえて貝のように黙る。時雨が続けた。

「い、一緒にお風呂……！？　待つて待つて、確かヴィクトリアさん怪我して腕もマトモに動かせなくなかった？　じゃあそれって」「洗ってあげたんだ！」

「全身を洗い回したのね！？」

詩音は良いとして、時雨のはおっさんの発想である。悲しくなるのは何故だろう。

向き直って、二人を見る。解っているのだ、これはからかっているだけ。本気で俺を問い詰めようとは思っていないのだろう。けれど、俺の意思を確認しておきたい。多分そういう事なのだ。ショ―リをどう思っているのか、これから彼女とどうしていききたいのか。「怪我をしてたんだ、氣遣ってやるのは当然だろ。それとも放っておけば良かったってのかよ。そんな話は聞きたくないし、するつもりもないからな」

少しかだけ本心を吐露する事にした。

「アイツは今まで独りだった。孤独に戦ってきたヤツなんだ。だから俺は手を差し伸べたいと思って、そうしただけだ。それは昔、二人にしたのと同じ事だぞ。」

同情じゃない。自己満足から来る理由でもない。手を繋ぎたいから、こっちから伸ばした。アイツはそれを握り返してくれた。だから、守りたいと思った」

黙りこくる二人を置いて、敷地へと入っていく。俺もずっと独りだったのだ。独りだと思っていた。つい最近までは。

でも違ったのだ。俺の傍にはこの二人がいてくれた事に気付けた。昔の俺が差し伸べた手を取ってくれた二人に、知らないうちに随分助けられていた事を思い出す。俺が誰も信じられなくなっても、二人だけは離れないでいてくれたのだ。

だから、俺はもう一度、誰かに手を差し伸べる事が出来たのだらう。

だって、独りでは手を繋げない。絆を結べない。誰かがいなければ喜びを分かち合えない。傍に誰かがいる、それはきっと、独りであるよりはずっと良い事だと思うのだ。

それが俺の偽らざる本心。利用する、と息巻いていた外面を剥いだ、正直な本音である。

「誠君、少し変わったね」

そうかも知れない。今、それを実感している。本当の自分を、少しずつ見せられるようになってるのがその証拠だろう。

「まあ、あの人の影響でしようね。結構似た者同士だし」

そうなのだろうか。自分ではよく解らない。でも、それなら確かに、俺が自分を見つめ直す契機になりそうなものである。自分を見ているのと同じ事なのだから。

「そうだね、内面を隠して強がってるところとか？」

お前は人を良く見ているな、詩音。昔からそういう所は適わない。「私も人の事言えないけど、良い事なんじゃないの。もっと自分に素直になりなさいよ」

まだ、それを始めたばかりだ。その強さを手に入れるまで、これからもつと時間がかかるだろう。

でも、思うのだ。人を殺す覚悟をして、実際にレイスの腕を切り落とした俺が 血に濡れた掌を持つ俺が、この二人とまた手を繋ぐ事が出来るのだろうか、と。

罪の意識も、贖いの意思も、免罪符とは為り得ない。だからと言って今、独り思い悩んで二人を戸惑わせるのが俺に相応しい行動なのだろうかという疑問もある。否、罪を傘に着て周囲に当り散らすのが相応だとは思えない。

まだ、答えは持ち合わせていない。それを探している最中だ。悪を為した後、俺はどうしていくべきか、どこへ向かうべきか

本心の吐露は、ここまでだ。もうこれ以上俺の抱えているものを二人に見せる事は出来ない。だって、どうしたって重荷になってしまっただろう。こんな問題の片棒を、この純粋な二人に担がせるなんてのは許されない。

「自分に素直に。そうだな、少しずつやっていく事にするよ」

静かな笑いが漏れた。空元氣もいいところだが、今だけはバレない嘘であって欲しい。穏やかな空気に心が和らぐ。作られた笑顔でなく、自然に零れた笑顔というのは、やはり見ていて心地が良い。

だから俺は二人を見ているのが好きなのである。

「シヨールは自分から変わろうとした。男が苦手だって欠点を克服しようとした。だったら俺も、負けてられないよな」

自分を騙さずに生きていくのは難しい。でも、少しずつでも変わろうと、強くなるうと思うのは何よりも大切で、また難しいのだから。独りでは無理なくらいに。

だったら、仲間を信じればいい。独りで無理なら二人、二人より三人。そうして出来た環が、きっと大切な絆に変わるのだ。

心臓の鼓動が、生きている証明であるなら。手を通して相手のそれを感じられるなら。それは独りではないという証になるのだから。俺は、そう思いたい。

それが、一度でも人外である事を願った鬼に許される事はないとしても。

内装は外と比べて、比較的綺麗な状態で保たれていた。無論埃は積もっているが、調度品の状態や絵画、絨毯等に欠損や特別目につく汚れなどは見られない。西洋風の建築様式であり、暖炉や豪華な照明が確認出来る。見落としがないよう物陰にも気を配りながら調べていくと、離れてついてきている詩音が声をかけてきた。

「そつえば誠君。私の背中に羽根が生えたってやつだけど、アレ、もしかしたら何とかなるかも知れないよ。ああ、何とかって自由に使えるかもって意味なん、」

「はあっ!？」

平然と発せられた、しかし驚愕の内容を告げる言葉に声が裏返った。あまりの驚きに舌がうまく回らない。

「が、ガ、ガーディアン・ブレードが自由に、使えるって!？」

時雨は何事か、と俺に眼を向けた後、詩音とを交互に見る。

「何それ。羽根って?」

「あ、時雨ちゃんにはまだ言ってなかったね。私の背中に火傷の痕、あるでしょ。あれって羽根を出す為の ステイグマ 聖痕ってやつなんだって」

神の焼印 科学的に説明出来ない何かによって体に現れる、受難を超えた証とされる痕である。

「そもそも羽根って？ 幼稚園のお遊戯会に使うアレみたいな？」
「そんなのと一緒にするな。文字通りに羽根が生えるんだよ、特異体質とでも言えればいいのか……まあ、それがガーディアン・ブレードって名前なんだ。十年前の天之御柱の正体だよ。地脈を利用して強引に使わされた結果、ああして暴走したんだ。しかし詩音、自由に使えるかもって言ったよな。それはどういう意味なんだ」

時雨への説明はとりあえずこの程度に抑え、詳細は後に回させてもらうとして、説明を求めた。

「あ、うん。私って十年前までの記憶はほぼ無いんだけど、ああなつたのって多分、昔に経験したような気がするのね」

恐らく、能力開発研究所での事だろう。体が覚えているのかも知れない。強烈な印象を伴うエピソードは、脳だけでなく体にも長期記憶として残るのか。

「そう思うのも、以前の教会で羽根が出てきた時に思い出したというか、感じたというか、まあそんなワケなんだけど……うん、ほら、私って覚えるの早いじゃない。それって結構自慢の特技な訳ですよ」
「ああ、お前の唯一と言っていい長所の事か」

「ひどい！ うーん、でも、まあ否定し切れないのもあるけど……いや今それはいいとして。とにかく教会で無理やり薬を飲まされて出てきた羽根をどうにか抑え込もうとしてただけだね。その時に気付いたの。ある一定のラインを超えたら無理だけど、あの羽根をちよつとだけ出して、ちよつとだけ使う事なら出来るんじゃないかなーって。教会で出たのが最大サイズだとすると、その半分以下、それこそ時雨ちゃんが言ったみたいに幼稚園のお遊戯会に使われそうなサイズになっちゃうんだけど。ああ、そうすると自由に使えるってのは語弊があったかな。まあ、そんな話な訳ですよ」

俺は、手の震えが止まらなかった。喫驚^{ウツキ}や詩音への恐怖ではない。ただ、感動が湧き上がってきたのだ。

「す、凄いだろそれ！ お前、そんな事が出来るのか！ ははっ、そうかそうか、制御出来るのか、あの羽根を！」

手に汗を握るとはこの事である。ドーラ列車砲にも匹敵する威力を持つというあの羽根が使えるとなると、状況は一気に逆転する可能性が生まれる。PMCランツクネヒトの三人にだって、勝てる見込みがかなり出てくるのだ。

そういえば、確かに教会での最後、詩音はあの羽根の力の一端を制御していたように見えた。とすると天之御柱のように大規模なものは無理でも、人の腕を治すくらいの小規模なものなら制御が可能成る程、頷ける。それなら徐々にステップアップしていけるかも知れないという望みだって生まれるのだ。これは詩音の長所が大きく生かされた結果であろう、正にその為にあつたとも思える、奇蹟のような才能である。

続く言葉にもその片鱗が伺える。

「いや、何ていうかアレ、ピアノに似てるんだよ。いや、もしかするとオルガンかなあ。そういう楽器を使って弾く、音楽みたいなものを頭の中で作り出して、羽根から外に出すの。つまり、羽根は発声器官？ うーん、というよりはもっと機械的な……そう、エフェクターだね。出す音に効果をかけて、周囲に訴えかける意味をもたせる。そんな感じがするよ」

俺はそこで、以前真白とショーリに説明された 術式の概要 について思い出す。霊子と精神を化合し、生まれた霊子放射光に式を用いて意味を持たせると、術式が完成する というものである。先の詩音の説明は、それにとてもよく似ている。

だとしたら、感覚で術式を使っているという事なのだろうか。何となくそういうモノだと解る それはもう物覚えが良いとかいうレベルの話ではない。一を聞いて十を知る……天才の所業だ。

音楽と何か通じるものがあつたのかも知れないが、それにしただけで驚異的であると思う。

「まあ、弾ける音楽には限りがあるみたいだけど。体の中にある楽

譜みたいなものに近いのしか弾けないっばいよ」

これは主題構造^{モチーフ}の事を言っているのだろうか。では、やはりガーディアン・ブレードと言えどその制約からは逃れられないという話だろう。そうしたシステムの盤上でやっていくしかないと認識する。「大体はヴィクトリアさんからのレクチャーがあつたから裏付けが取れたんだ。でも言われる前からそんな予感はあるし、そういう確信を得られたからこうして話せたんだけどね」

話についていけない時雨を盗み見た詩音は、思い切つたように提案してきた。

「一度、やってみてもいいかな？ 実践してみればもっと詳しく解るかもだよ。それに誠君、術式のナント力っていうのを探すのに私の羽根、使えた方が便利なんだよね？」

「それも聞いたのか……まあ、そうなんだけどさ。でもガーディアン・ブレードは起動時に致命的な欠点があるだろ。見えない斬撃みたいなものを周囲に撒き散らすんだ。俺達が惨殺されちまうよ」

教会に今でも残る多数の切創が、それを証明している。

「言つたでしょ、ある一定のラインを超えたら無理だけど、それに及ばないレベルでなら大丈夫って。薬で無理やり使わされた時とは違うよ。今度は自分の意志で使ったから」

「何だと……いや、確かにそうだ、あの時のレイスは投与から一時間と言つていた……アレは強制的な起動だったんだ。でも、今度は違う。いやしかし、それでも失敗しないとは限らないんじゃないか？」

実践した後、この周囲一帯が切り刻まれてもしたら。そういう悪い想像をしてしまうのが人の性であろう。

だが、強い意志を込めた眼で詩音は断言した。

「失敗しないよ。予感があるの。あの羽根は多分、私の心に従ってくれる。だって、私の音楽が私の手から離れて、勝手に演奏される筈ないでしょ。第三者が妨害してこなければ、だけどね。それに、傍に誠君がいてくれるなら、尚更だよ」

初めての演奏会で、ただ一人、お前に笑いかけたからだろうか。
心から詩音の演奏を楽しみにしていたその観客を悲しませるような
事を、彼女がする筈はない

俺だつてそれを信じたい。けれどもしもの事を考えると、どうし
ても踏み切れないのだ。詩音は悲しそうに、けれどそれを押し隠し
た声で言う。

「信じられないなら、それでもいいよ。私から離れてて。あの切断
する現象みたいなものは、目測だけど半径五メートルぐらいだと思
う。それより距離があれば、影響はない筈だよ」

そこで、ついに時雨が口を挟んだ。

「大丈夫。しーちゃんは、失敗しない」

思わず鳥肌が立った。何故、詩音の羽根について殆ど何も知らな
い筈の彼女がそこまで断言出来るのか、と。友情故の盲信などが持
ち込めるような場合ではないのだ。なのに、どうして。

何故ならそれこそが、彼女の持つ特別だったからである。朝
霧は俺のルーツだ。剣筋を見る眼があるのは、その家系の血が俺に
も流れているからであり、そして時雨はその直系である。俺なん
かとは比べ物にならない、オリジナル純血種なのだ。

朝霧時雨の予知能力は、殆ど外れ知らずの的中率を誇る事実を、
この時ようやく思い出した。クドウ率いる少年犯罪グループの追跡
を難なく逃れた事からも、それは証明されている。

「それは、予知か？」

「……多分。予想と直感が重なる瞬間に視える映像　予知と言え
ばそうなるのかしらね。とにかく、蒼い羽根が視えたわ。私達も無
事である光景。今までは半信半疑だったけど、やっぱりこれは未来
を視ているんだと思う。だから、きっと大丈夫。それでなくても私
はしーちゃんを信じるけどね」

ここまで言われては引き下がれない。時雨は腹を決めたようだ。
俺が、この上まだ四の五の言って男を下げるようでは仕方がないと
いうものである。

そうして、守ると決めた女を少しでも疑った自分を恥じた。

「済まん、詩音。お前にそんな事を言わせるようじゃ、ご両親に合わせる顔がないな」

「いや、お父さんとお母さんは関係ないんじゃないかなあと思うのですが」

「時雨のお墨付きだ、っていうと少し癪に障るかも知れんが、俺もお前を信じるよ。それぐらいは許してくれ、根が臆病なもんでな。それで、手を握ってればいいのか？」

繋ぐ事を許してくれるのか。血に汚れた俺の手は、彼女と繋ぐのに本当に相応しいのか。直前で迷っていると、向こうから掴んでくれた。

ほっそりとした指が掌を握る。詩音は静かに眼を瞑った。

「ありがとう。傍にいてくれて、本当に嬉しい」

それを聞いた時雨が、反対の手を握った。

「私もいるからね。忘れないですよ？」

「うん、忘れてないよ。時雨ちゃんならこうしてくれるって思った」

微笑みあう二人を見て、俺は時雨に手を伸ばす。

「時雨」

「な、何よ」

「お前も、俺と手を繋いでくれるか？」

時雨と直接会うのは、あの日以来になる。けれど少しの戸惑いの後、彼女はしっかりと俺の手を握ってくれた。

やはり俺は罪深いのだらう。悪を為そうと人を傷付けて、その上知らぬ顔をして裏ではこんな事をしている。全てを話さず、ただ彼女が与えてくれる優しさに甘えているのだ。なんて傲慢、我執、尊厳の侮辱である事だらう。

考えれば考える程に俺が否定されていく。やろうとしている事は本当に正しいのか。今からでもあの日々に戻るのではないか。俺は間違っていたのではないか。そう思わされるくらいに。

でも、退く訳にはいかないのだ。でも、どうかもう少し。あと少しだけでいいから、この温もりを感じさせて欲しい。俺が何故危険を冒してまで戦っているのか、その向こうに見ている日常の為に、この非日常を乗り越えていく為に　二人が与えてくれる優しさを、心の強さに変える為に。

胸の内で二人に謝罪し、ありがとう、と呟いた。

「別に、アンタの手なんか握りたくないけど。そうしてほしそうだからしてあげるわ。全く、いつまで経っても子供なんだから」

「はいはい。そういう事にしておくよ」

「何よ、偉そうに」

「お前が言うか、この高飛車女」

足の甲を踏み付けられそうになった。寸前で回避したが、いきなりこれとは乱暴な女である。さっきまでの憂鬱な考えが一気に吹き飛んだ。

「何しやる！」

「高飛車とか言うからだろ、この馬鹿！」

「だ、黙れ小娘！」

「アンタだって同年だろ！」

「うるせえ、言ってみただけだ！」

「はあっ！？　そ、そんな理由で言葉を選ばない！　大人ぶりたいだけじゃん！　みつともない！」

売り言葉に買い言葉　というには些か幼稚だったが、いつもの時雨とのやり取りは一見、喧嘩しているように見えていつものコミニケーションである。しなないと不安で、こうしていると安心する。すれを見ていた詩音は、くすくすと微笑んだ。

「いつも通りだね、二人共。私に羽根があっても、普通じゃなくても、そうしてってくれるんだね」

普通じゃない　それは俺も、時雨だってそうなのだ。いつも通りでいられる事が、この場合はおかしいのかも知れない。けれど、そついられる事を嬉しく思うのも、正直なところである。

「普通って何だ」

何気無く発した俺の言葉に、答える者はいない。

「社会に溶け込める事か。誰にも不思議に思われない事か？ そんな事言ったら大なり小なり、普通じゃないところを誰でも持つてると思うぞ。桐谷は禁止されてるのにバイク通学、清二はサバイバルマニアで、たまにハッキングの真似事してる。真白は人間じゃないし、ショールは不思議な力を持つてる。

普通ってのは、世間一般が多数決で決めた曖昧な言葉に、俺には聞こえるよ。だって誰もが普通を装ってるだけだ。人に言えない秘密なんて、誰でも持つてる。だったらお前の羽根も、隠すべき秘密としては普通であり、中身は普通でない事になる。つまり人に不審に思われたくないから、普通であろうとする心の働きが起きて、普通を装う事になる。なんて、そんな話もこんな話も、下らないよな。

だから、っていうのも何だが、そんな枠組みに囚われるな。普通じゃないと自分を否定するな。少なくともここに二人、お前を信じてる奴がいるんだから。お前は、お前が信じたいと思うものを、自分が普通じゃないからと言って、疑っちゃいけない」

俺自身はそんなものを飛び越えて、非日常と言える体験をしてきた。有り得ない光景を何度も眼にしてきたのだ。それでも俺は、自分自身を肯定してここに在りたいと願ったのだ。

「それで言うなら詩音、俺だって普通じゃない。でも俺はお前を信じる。それは、そうしたいからだ。二人と一緒にいたいからだ。お前は、どうだ？」

二人はキョトンとして、俺を見ている。やはりおかしな事だったろうか。自分としては普通じゃないという事を、重荷に感じて欲しくなかったから言葉にしたのだから。

これは所詮、詭弁かも知れない。それでも俺の言いたい事の十分の一でも伝わってくれば、と思わずにいられない。

「誠君、やっぱり少し変わったね」

「変か？　こんな俺は、嫌いか」

「うっん。やっぱり私のヒーローだよ」

詩音は再び眼を瞑る。心なしか握る手に力が込められた、気がした。

「私が信じたものは、こういう絆だったから」

蒼い光が詩音の背に生まれる。あの時の翼が再び姿を現す。しかし今度は以前と比べるべくもない、小さなものとして。小鳥の幼い羽のように、しかし片側三枚の歪な姿だけは変えないままに。

折り畳まれているのを全部伸ばしたところで、二の腕半ばまであるかどうかという小ささである。よく視ると光が集まったような形で、羽毛のようなものはないが、蒼い粒子を周囲に漂わせている。

この粒子が集まり、羽根の形を形成しているのだろう。つまりこれが^{エネルギー}霊子放射光なのだ。

同時に外見の変化もあつた。詩音の長い髪が蒼く変色し、瞳も同じ色に変わっている。俺の霊障眼と同一のものであるのかは不明だが、少なくとも人外のような威圧感、圧迫感を感じられない。何か別のものなのだろうか。

詩音が、頭を抑えた。頭痛を堪えている時のような表情だ。

「大丈夫か？　真白に聞いた限りでは、髪と眼の変色は^{アストラル・オル}霊知感覚器官とかいうものらしいが……」

「うん、聞いている。これ、意識が無理やり拡張られるような感じなんだ。でもこのおかげで普段は解らないものが解るようになるし、視えないものが視えるようになる。そういうものらしいよ」

これも霊的な感覚を持つようになる、^{グノーシス・ファクター}霊知因子なのだろうか。

「長くは無理かも。とりあえず怪しそうな場所を片っ端から当たっていきたいんだけど、いいかな、誠君」

眼鏡を外して、そう問い掛けてくる。

「解るのか？　術式の基点がありそうな場所」

何となくね、と答えて先を歩く。俺と時雨はそれに続いて、二階への階段をあがった。

詩音が立ち止まったのは、二階廊下の途中にある部屋の前だ。扉は閉められていたので、黒ずんだ木材に悲鳴をあげさせつつ、その口を開けていく。

「違ったかな……」

予見は的中という訳ではないらしい。だが、違ってはいても何かを感じたという事は、それなりの結果がここにあるというのだろう。「いや、基点とかいうのとは違うけど、何かいるみたい。あの部屋の隅、何か視えない？」

時雨は首を傾げた。恐怖に耐えているのか、俺の後ろで服の裾を掴んでいる。

「何もいないけど……やだ、怖い事言わないでよ」

「そうか。いや、俺には視えるぞ」

西村誠は、敵意に敏感だ。どれ程の小さな害意であっても、それを見逃す事はない。部屋の隅に視えるのは、以前から付き合いの長い、あの霞の影だった。

これについては既に調べがついている。放置しておくには気になる問題だったのだ。

「人外が顕在化する以前の段階らしいな。昼間はああしてレコードの影響を免れ、霊的な力の満ちる夜中から行動を開始する……でも、例外もあるという。」

七つの大罪とかつてのを主^{モチーフ}題構造として生まれたモデルタイプは強力な呪いの集まりとして、レコードの影響を跳ね除けてしまうらしい。つまり夜に限らず行動が可能であり、顕在化していない時はあの霧み^{ゴースト}たいな状態で力を温存している。って話だ」

まるで幽^{ゴースト}霊。物質透過をする真正銘の心霊現象だ。シヨリに言わせれば虚数言語化というもので、これはレコードが人外を排除しようとする働きから自己保存を行いつつ、最低限逃れる為の状態らしい。

言わば人外という存在の影だ。これを媒体として、あのモデル・

ウルフが実在化するのである。

だが、それは俺の予想を大きく覆した。初めて見るタイプのモデルだったのだ。

「き、キツネさんだ」

詩音の言う通り、山でよく見かけるような狐の形をしていた。しかし輪郭でそうと解る程度であり、風景に穿たれた穴のように質感がない。モデル・ウルフと同じような、真っ黒に塗り潰された姿だ。「下がれ、詩音！ アウトキャスト 人外は人間を攻撃してくる、呪いが顕在化した現象なんだ！」

しかし。詩音はそこで、俺の度肝を抜いてくれた。

「違うよ、この子は私達が怖いだけ。自分が傷付けられるのが、怖いだけなんだよ」

一步、近寄る。詩音が、人外に。

黒い狐の紅い眼が、伺うように揺れる。

「待て！ 何されるか解らないぞ、俺だって初めて見るタイプなんだ！ 自衛の手段を持たないお前が、迂闊に近寄っていい相手じゃない！」

「大丈夫。見てて」

何が大丈夫なのか。見ていていい場合なのか。今すぐ仕留めなければ、詩音が殺されてしまうかも知れないのだ。今すぐ、駆け寄るべきなのに。

詩音の背にある、随分小さくなってしまったガーディアン・ブレードの輝きが増す。周囲に靈子放射光を拡散させるように、粒子を放っているのだ。

アストラル・オルガン 霊地感覚器官が齎すという拡大感覚によって、彼女は何かを感じているというだろうか。

もしかすると

「ほら、大丈夫だよ。怖くない」

人外の狐に掌を差し出す。もう距離は殆どない。その気になれば噛み付かれる距離だ。俺の心臓が潰れそうな程に締め付けられる中、

詩音は、掌でその狐に 触れた。

「っ……!？」

俺は一瞬、呼吸が止まった。まずい、と直感が囁いているのだ。
だというのに。

「ほら、ね。怖くないでしょ」

狐は、されるがままだった。撫でられて、眼を細めてさえいる。

どういう事なのか尋ねると。

「この羽根にね、伝わってきたの。怖い、僕をどうするの、来ないで っ。でも、ちゃんとこうして優しくしてあげれば、ね？」

言葉は通じなくても気持ちは通じるんじゃないかなって、私は思った訳ですよ」

「人外と、和解したっていうのか ！？ 何だよそれ、それもガ

ーディアン・ブレードの力だって、いうのか…… 一体その羽根は何なんだ、ちつとも解らないぞ！」

口元で、しい、と静かにするサインを送られる。

「私だって解らないよ。今解るのは、大きな声を出すとこの子が怖がるって事。それと何を考えているのか、私に伝わってくるって事かな」

動物と解り合う人間が世の中のどこかにいるという話がある。けれど、これはもうそういうカテゴリーの話ではない。言ってしまうば異種生命体との意思疎通をしているようなものなのだ。呪いという禍が形を成したものと、想いを交わす

あの羽根には、まだ未知の部分が多い。今回解ったのはそれだけだろう。

「 え？ 案内してくれるの？」

狐が頷き、俺達の横を通り過ぎる。体躯の程は俺の膝ぐらいまでしかない、本来の狐と同サイズだった。

「あ、案内って…… 人外が、俺達を？ どうなってる、こんな事が有り得るのか……？」

いや、そうだ。思い出した。真白が言っていただろう。悪い人外もいれば善い人外もいる。そしてシヨールは、人間よりも自然に近い、地球の共生者だと。

それだけでは解らない事も多いので、一旦この問題は棚上げとする。今はあの狐が俺達をどうするつもりか　人外の意志ウイというものを確かめたいと思うのだ。

怖いもの見たさか。知的好奇心か。動機はどうであれ、詩音がそれを信じたいと思ったのなら、俺も付き合おうと考えた。

道中、巨大なライオンが行き先を塞いだ。階段の踊り場に悠然と佇む、動物園で見るとような巨軀だ。時雨が息を呑む気配が伝わってくる。詩音でさえ恐怖で足が竦んでいた。何故こんな動物がここにいるのか。このライオンも体が黒いので人外と解るが、こちらはその迫力と恐怖もあつて意思疎通どころではないのか。

そうしていると、先を行く人外の狐が、黒いライオンに近付いていく。顔を寄せて数度、頷くようにすると、ライオンは狐と連れ立って階段を降りていった。

「な、何なのあれ。あれも狐と同じものなの？」

やはり、時雨にも視えている。顕在化した人外は常人にも視認出来るのか。

「解るか、俺に解るかよ、こんなの。ただ、でも、今を見た限りでは……狐がライオンに何かを言つて、同行を促した　ように見えなかったか？」

詩音が頷く。

「そ、そうみたいだけど……あ、はは。怖くて腰が抜けちゃった」それも当然であろう。女子高生が本物の肉食獣と直面したのだ。それも百獣の王となると、彼女が幾ら人外と意志を通わせる事が出来るとしても、人としての先入観からそうなるのは自然の反応なのだ。

「どうだ、詩音。アレとも話し合う事が出来そうなのか？」

「わか、解んないけど。あのライオン君がこのお化け屋敷の中では一番偉いみたい。何となくそういうのは伝わってきた。そして、彼らが邪魔に思っている紋章みたいなものが、この屋敷の地下にあるって……それを壊す手伝いをして欲しいって」

手伝え、というのか。人外が、人間に。邪魔に思っているというのは恐らく術式の基点だろう。あれは人外にとっても迷惑なものなのか。そういえば、人外は場を乱すものを嫌うという話だったか？二頭の後を追いつながら、地下へと伸びる石壁に囲われた階段を下りていく。

驚いた事に、先を行く人外は、道中にてどんどんその数を増やしていくのだ。蛇や蠅はえ、蠍さそりに驢馬ろば、そして狼 モデル・ウルフ。百鬼夜行。或いは魑魅魍魎の跳梁跋扈とでも例えるべきか。いずれも黒い体色に紅い瞳というのは変わらないが、人間が見知っている同じカテゴリーの生物にしてはサイズや部位の位置が明らかに違うのである。

お化け屋敷 そのあだ名がこの洋館にこれ程相応しいとは、今まで思いもしなかった。どうやら真実というのは俺達が普段眼に見ない場所に潜んでいるようである。

「まさか、こんなに種類がいたとは……襲われたらひとたまりもないぞ」

詩音が対話出来るからと警戒を解く程、俺も馬鹿ではない。しかしそんな俺を詩音が諫めた。

「ダメだよ誠君。彼らは悪い子じゃないよ。向こうから私達を襲おうなんて意志は全然無いんだから」

「何だと……？ だって人外は、人間を食べて生き延びるものだから人間の精神が堕ちて生まれた呪いそのものなんだろ？ 実際ここでホームレスが行方不明になった事もあるっていうじゃないか」

襲われないという保障はどこにもない、と言うと。

「違うよ、彼らはそういうのじゃない。人間が生まれるずっと昔から存在してたんだって」

足元に寄ってきた狐の頭を一撫でし、まるでペットのように同伴させる詩音。近寄ってきたのは会話をする為か。

「ホームレスの人は、実は放火魔だったんだって。自分の家にも火を点けちゃうくらい、世を憐んでて……でも土壇場で怖くなって逃げちゃって。それで雨風を凌げるここに住むようになったけど、やがて同じように放火して自殺しようとして。彼らだって居場所が必要だから、ここを失う訳にはいかないって話し合って、その人を

」

殺した、のか。やはりそういう事の顛末になるのだろう。

「あのライオン君が、どこか遠くに連れていってあげたんだって」

「は？」

「や、彼らが一齐に集まってきたところを見て気絶したらしいよ。彼らはそれでかわいそうになって、とりあえず余所の場所に置いてきたんだって」

随分、人情味のある話に思えるが……人外がそんな事をするものなのか？

「僕達は無意味に人を殺したりしない、って言ってるよ。でも人は僕達を殺すよね　って、私達が、君達を傷付けてるの？　そうなんだ、ゴメンね。私は何も知らなかったよ」

そういえば、レイスに人工的に造られたモデル・ウルフが発信する救援信号のようなものを察知して、自然に生まれたモデル・ウルフが助けに来て　それで人間と殺し合う事になったという顛末がある。

そうか……そうすると彼らは、人間よりもずっと純粋な存在なのかも知れない。

「しーちゃん、泣いてるの？」

先に行く人外の群れが、立ち止まって詩音を見ている。涙を流す彼女を囲むと、各々が同胞の死を悼むように、頭を垂れた。或いは、悼んでくれている人間に感謝をするように。

「これは……こんな光景が、見られるとは」

今まで思いもしなかった。考えもしなかった。知識としては知っていたが、人外にも考えがあつて、想いがあつて、仲間がいてそれを大切にしている光景が眼の前にある。

だとしたら、人外を一面的に見ていた固定観念を改めなくてはいけないだろう。何という可能性なのだ、詩音の羽根は。人外と解り合う事が出来る翼とは、恐れ入る。

もしかしたら、詩音がもっと多くの人外と理解を深める事が出来れば、人間と人外が共存する未来が、いつか訪れる日が来るのかも知れない。そんな幻想を抱くぐらいに、俺はこの光景に感動していた。

「え？ 誠君が、何？」

俺の名前が出た事に、何事かを尋ねると。

「え、え？ 何を、言ってるの。君達……？」

「詩音、彼らが何を言ってるのか通訳してくれ」

「うん……キミは本来こちら側の筈なのに、どうして人間と一緒にいるんだいって」

「そうか、やっぱり解るのか。俺が混血だって事」

「誠君、どういう意味なの？」

「西村の家が代々呪われてたのは解るよな、女しか生まれないうてでも今代で男の俺が生まれた。それは呪いが顕在化したからじゃないかって話だ。先祖帰り 真白はそう言ってた。人間と人外の間生きる、中途半端な存在」

詩音が再び、狐に眼を落とした。

「キミは混じり物だね。純粹じゃない。僕達とは違うし、人間とも違う。どちらでもありどちらでもない コウモリみたいだね……って」

心を抉られるようだった。純粹な存在であるという事は、言葉を余計な飾りで彩る事もしない、子供のような無邪気さを持つという事だ。棘があつても、それは彼らの偽らざる本心。続きを、待つ。

「キミはこちら側の存在だけど、僕達は君を受け入れたくない。龍

眼の血は、僕達にとって猛毒だから。そつちの、後ろに隠れている人間よりも、ある意味。毒、で　　き、穢きたないって」
笑いが、込み上げた。

「は、ははは。言ってくれるね、人外。言うに事欠いて、穢いとは驚いたよ、ここまでコケにされるとは思わなかった。そうかそうか、お前ら、俺を穢いと思ってるのか」

刀を握る手が、ぶるぶると震えた。

よりにもよって、穢いだと。あさぎり・ききょう　にしむら・せいいちろう朝霧桔梗と西村誠一郎の血が、穢いだと。

西村の一族が、穢いだと？

「詩音、どけ。そいつらに言っていていい事と悪い事があるのを思い知らせてやる」

身内を、両親を、家族を馬鹿にされて黙っていられるタチではない。十年前につけられた心の傷に塩を塗り込まれた気分で、吐き気がする。親が俺を産んだ事を責められている気がして、冷静ではいられない。あの心無い言葉を吐き続ける親族達の顔を思い出して視界が真っ赤に染まった。

しかし、彼女は両手を広げて立ち塞がった。元々狭い通路なので、そんな事をされると幅いっぱい通行止めになる。

「ダメ！　人間同士みたいに怒ったらダメだよ、彼らは元々人間の言葉なんて二の次のコミュニケーション方法なの！　だから自分達の言ってる事が誰かを傷付けるって解れば、きつと謝ってくれる！」

その後、詩音は彼らに向き直って言葉を重ね続けた。横顔を垣間見る事が出来たのだが、どこか必死で、俺を庇ってくれているように見えて、ようやく頭が冷えてきた。

背中を突つかれる。

「アンタ、いきなり怒るんじゃないの。しーちゃんだってあの子達だって、怖がってたでしょ」

「……解るのかよ、お前に」

「雰囲気で何となく、かな。でもやっぱり、あそこで怒らないアン

タはアンタらしくないかもね」

「何言ってるんだ」

「ふふ。両親を大切に想ってるって証明を、行動で示したって事よ。実際にキレて殴りかかってたら大変な事になってたろうけど、まあ、今はブレーキ役がいるから大丈夫だと思ってたわ」

やがて詩音が振り返ると、晴れやかな表情を見せた。

「この子達、解ってくれたよ！ ごめんねって言ってる、やっぱり人間の倫理とかは難しいみたいで、でも僕達に君を害する意志はないって。良かったね、誠君」

呆気にとられている俺の脇腹を時雨が小突く。

「ありがとう、ぐらいい言っておきなさいよ。アンタが傷付けられるのが嫌で、嫌われるのが嫌で頑張ってるんだから。その誠意に答えるのが男の役目でしょ」

「言われなくても解ってる。ありがとうな、詩音。それとそっちの人外、一つ言っておくけどな。もしこの先、人間と人外が解り合う時が来たら、俺みたいなのが生まれるんじゃないのか？ それを穢いというのは、人と言葉を交わして、理解し合ってる今も否定する狭い意見じゃないのか。よく考えてみてくれ、俺がどうして、ここににいるのかを」

ライオンを筆頭に、彼らは踵を返して先へと進む。やはり俺の言葉は届かないのか、と悲観していると、詩音が俺の手を握った。

「良かった、良かったね！ 時間はかかるけど、君が生まれた意味を考えてみるって！ 何も考えずに否定した事は悪いと思ってる、って。本当に良かった、彼らが誠君の事、解ってくれようとしてくれて……」

ふつと体の力が抜けたようで、膝をつきそうになる彼女を咄嗟に支えた。人外の群れが何事かとこちらを振り返る。俺は時雨に刀を預けると、詩音をおぶった。

「限界が来たな。無理するな、休んでろ。俺が連れて行ってやるから」

「ご、ごめん。やっぱり長い時間は無理みたい」

充分だ、と返して。

「おい人外、お礼代わりにお前らが邪魔にしてるヤツをぶっ壊してやる。案内しろ」

上から視線は多めに見てもらおう。憤りが完全に収まった訳ではない。それでも彼らとほんの少し解り合えた事に、心がどこか喜びを感じているのはウソではない。だから俺も彼らに歩み寄ろうと思ったのだ。自分の意志で。

詩音の意志を無駄には出来ない。俺を庇って必死に言葉を重ねてくれた事を、この先も忘れないでいる為に。

絆は独りでは結べない。例え相手が人でなくても、恐れずに手を伸ばす勇気があるのなら、その先にはきっと新しい未来が待っていると思うのだ。

バイクと車が群れを為して集まってくる排気音を、どこか遠くで耳にしながら、俺はそう思っていた。

第五章 再生の剣（3）

近隣で何か騒ぎでもあったのか、車輛の集まってくるような排気音が聞こえている。現在地は地下にある石壁の通路なので振動や反響で音が籠った。時雨が上を見上げて言う。

「何か、嫌な予感がするわね」

俺も聞き覚えのある気がするバイクや車の排気音に、少し悪い気運を感じていた。

「手早く済ませよう」

まずはそちらより優先順位の高い、本来の目的を遂げる事を重視する。人外の群れに従って進んだ先は樽が規則正しく積み上げられた倉庫だった。独特の木の匂いと酒　ワインらしきものの香りが鼻につく。

「これ、酒蔵か？　ここだけ丁寧に内装を施してあるな」

しかし空き巣にでもあったのか空き瓶がそこかしこに転がっており、栓の開けられた樽も幾つか見受けられた。零れた跡も見取れる。長い時間管理の手が及ばなければ、こうも荒れてしまうものか。考えるに恐らく、こういった地下なら四季を通して温度の変化が起きにくく、乾燥しにくい故に酒蔵としては最適なのだろう。詩音の父親がアルコール類を嗜むので、その程度の知識はあった。詩音が鼻をひくつかせる。

「庫内温度は摂氏十五　十七、湿度七十五%　八十%ぐらいがワイン倉の環境には丁度良いらしいけど。お父さんもこれと似たような場所に秘蔵のお酒を隠してるから、大体そのぐらいなんじゃないかな」

父の藤崎氏はたまに酒に関する自慢の講釈を垂れながら未成年の娘にそれを飲ませる、困った人物である。正直犯罪なのだが、娘を可愛がる親の心境、言わぬが花だろう。ついには俺や時雨もそれに巻き込まれた事があり　俺だけが醜態を晒した過去がある。

西村誠は下戸である。三人の中で一番アルコールに弱い事実を思い出しては、苦い気持ちになるのだった。

黒いライオンが酒蔵の中央で立ち止まり、ここだ、という様子で前足を何度か踏み鳴らしている。俺は詩音を降ろすと、時雨から刀を受けとってその場所に立つ。

居合い 左手に鞘を握って腰溜めに構え、腰を落とした抜刀の姿勢を取ると、右手の手刀で宙に印を結ぶ。この手刀は呪術的な意味合いが強いので、人指し指と中指だけを真っ直ぐ伸ばし、他は折り畳んだ特徴的な形だ。

まずは左から右へ、水平に 臨。次は縦、十字に交わる形で兵。臨を描いた水平線の真下に多少の間隔を開けて横の 鬪。兵を引いた縦線のすぐ右に同じ程度間隔を開けての縦 者。こうして交互に縦と横の刀印を繰り返していき、やがて格子状の方眼となった印契は完成する。これが早九字というものだ。

刀を抜き放つ。この動作、抜刀術というのは漫画や映画では華々しい戦闘の型として描かれる事が多いのだが、それは勘違いだ。実際、これは右手の小指のみで抜く動作であり、そのままの体勢では鞘から半分しか抜けないのである。では残りの半分はどうするかというと、自ら腰を捻って鞘を後退させるのだ。

今は左手に鞘を握った変則的な型だが、この基本は変わらない。故にこれを実戦に取り入れるなど、俺に言わせれば浅はかな素人の考えである。あくまで戦闘態勢へ移行する為の予備動作とされる動きなのだ。尚、剣士の視点から見た理想的な状態としては 最初から刀を抜いている というものであり、正眼 つまり中段の構えから突きを放つほうが圧倒的に速く、効果的であろう。抜刀術とは、それが間に合わない時の緊急的な対処であるのだ。

まあ、魅せる華があり、動作そのものに人を惹きつける芸術的な美しさがある事は否定しない。達人の磨き抜かれた所作まで貶すような真似は、俺には出来ないのである。

抜き放った刀身は呪いを受けて、水晶のように透き通る。霊的な

作法を取り入れて打たれた刀であるらしいので、呪いへの反応現象と見ている。視線を落とせば、床に凡そ直径一メートルの紋章らしきものが浮かび上がっていた。これが術式の基点だ。赤い半透明の文字盤が、刻一刻とその形を流動的に変えている。成る程、恐らくこれは金庫の暗証番号のようなものなのだ。一秒の時間経過と共に正解を変えると見受けられる。真白とシヨリ、そして人外達が解呪出来ないのは、これが原因だと察する事が出来た。

床に刀を突き立て、横一文字に切り裂く。紋章は霧のように姿を消し、石床を斬る無機質な音だけが酒蔵に響いた。

抜き身を鞘に戻すと、かちん、と小気味良く鍔が鳴る。

そうして、外から関とぎの声があがるのを聞いた。

「何だ？ 近くでイベントか何かあったか？」

やけに騒がしい。というよりは、怒声や罵声のようなものとバイクのアクセルを無駄に噴かしたエンジン音が、威圧的にこの屋敷を囲んでいる気がした。

この感覚は覚えがある。何よりも強い悪意が、この屋敷に向けてられているのだ。それが解らない俺ではない。

「あいつらか……ライトニング・クルセイダーズ稲妻十字軍」

とすると先程から聞こえていた排気音の群れも彼らであり、いよいよ人数が集まってきて行動を開始しようとしているのか。

だとしたら、まずい。今ここには時雨と詩音がいる。彼らの目的は彼女達である可能性が高い。ランツクネヒト傘下となっているあの少年犯罪グループは、クドウの手足のようなものだ。それが二人を奪いに来たとするなら、成る程、使い捨ての駒には最適な運用であるだろう。

成功すれば御の字、もし何らかの痛手を被っても替えが効く、代替可能な多数の戦力なのだ。ランツクネヒトに直接の影響は出ず、人外のように朝霧の血を恐れる訳でもない。この手があった事を今まで忘れていたのは、俺の失態に他ならない。

「そつくるかよ……二人共、今すぐここを出よう！ 多分もう囲ま

れてるが、後ろの林から裏山に出るルートがあつたよな」

二人は頷いてくれた。やはり、持つべきものは幼馴染みである。地元民の土地勘はこういう時に心強い。

裏山の広大な湖　　龍神湖を抜けて朝霧神社まで逃げるルートなら、途中で警官を呼ぶなり真白やシヨリ、如月に連絡を取るなりといった手が打てるだろう。

何にしろ、このままここで完全に包囲されるのを待っているのは得策ではない。この場で助けを呼び、それを待っていては数に押し潰される。せめて龍神湖まで行けば流れを変えられると踏んだ。

「でも、この子達は……？」

詩音が人外の群れに眼をやるものの、彼らがどうするのかまで俺が決めていいのだろうか。無論ある程度の善後策はあるが……

すると、彼女は再び背中からガーディアン・ブレードを生じさせた、彼らの意志を汲み取るうとしているのか。

「詩音！　もう限界なのに、無理をするな！　倒れたらどうするんだ！」

「くうっ……逃げるまでの時間はどうするんだって、言ってるよ」

逃げるまでの時間　　やはり二人が裏手の林を抜けるまでの猶予時間は必要であり、俺が追っ手を撒く工程もあるのを考慮すると、その余裕は限られてくる。というか、無いに等しい。

いや、大丈夫だ、霊障眼の使い方は理解している。一時的であれば人間を超えた力を発揮する事も可能なのだ。勝算がない訳ではない。

「お前が連れて行ってやれ。ここはもうダメだ、奴らのように危険な集団が乗り込んできたら、ひとたまりも」

俺の横を、一頭のライオンが、その巨軀を見せ付けるようにして通り過ぎた。

驚きの声は、ソイツが見せた鋭い牙と口腔に飲み込まれる。

「手伝ってくれるって。あの邪魔なのを壊してくれたお礼、みたい」
思わず、呆れてしまった。

「はは……律儀なヤツ。俺なんかより余程人情があるよ、お前。でもいいのか、恐らく戦いになるぞ」

無意味に人を殺さないのなら、無意味に人を傷付ける事も嫌うのではと思ったのだ。けれどそれは大きく的を外していた。

「僕達と解り合える……解り合おうとする人間なんて、今までいなかった。僕達は人と解り合える事を、嬉しいと感じた。その人達が害されようとしているなら、僕達は自分が傷つく事を恐れない。悪い人間と戦う事を、恐れない」

「ハッ。立派だよ、お前ら」

俺なんかよりも、ずっと。その純粹さを、眩しいとさえ思っってしまう程に。

良いだろう、それならば遠慮なく頼らせてもらう事にする。多勢に無勢と思っていたが、これ程心強い援軍はない。使えるものは全て使う。やるべき事は、この二人をここから逃がす事、そして俺達が生き延びる事だ。

元来た通路を戻る。敵の数と装備は知れないが、どうであれ万全の策を練る必要があるだろう。ここが正念場だ、頭を使え。あらん限りの知恵を絞れ。

俺が、人外を率いるのだ。

「ライオンは詩音と時雨を連れて、裏山の龍神湖まで逃げてくれ。お前の足と戦闘力なら大抵の人間は振り切れるし、遭遇しても何とかなる。そこでかさなら背に女の一人や二人乗せるのなんて容易いだろうしな」

百獣の王 動物園で見る普通のものより一回り大きいソイツは、力強く頷く。

これは驢馬ロバとどちらが適任か思ったが、護衛の意味も含めるとやはりライオンが最高位にあがる。攻撃力と速度、この万能性は流石、肉食獣の王と言っべきだろう。

「その他はここに留まっただけの時間稼ぎだ。驢馬は脚力を生かした外周部からの一撃離脱だな。蠍サソリは庭の茂みに潜んで自慢の針を突き刺

してやれ 毒は出すなよ、殺す必要はないんだから。蛇は蠍をフ
オローして敵を足止めすれば高い効果を見込めるな。空を飛べる蠅
は上空からの攪乱かくらんが良いだろう。戦場を俯瞰ふかん出来るアドバンテージ
は大きいぞ。詩音、ここまで良いか？」

「うん、大丈夫。彼らは理解してるよ。それに 頭で念じるだけ
で話す方法、見つけた」

驚いたものである。詩音の学習能力の高さに、改めて目を見張る
事になったのは言うまでも無い。それはさておき。

「そして、狼 モデル・ウルフ」

ニメートルという体躯に鋭い爪、牙という姿に骨董屋での邂逅を
思い出す……ものの、それはコイツではない。違う個体との事なの
だ。

あの時と同じ姿をした、それでも違う個体であるこの狼に。少な
からず思うところはある。それでも今は、為すべき事を為す為に自
分を納得させる。

「お前には、俺の背中を任せるからな」

遅れずに付いて来い、と告げた。ソイツは、頷いてくれた。概略
は以上であるが、最後に言っておくべきであろう重要な、その後の
方針。

「やばいと思つたら逃げろ。仲間を置いて逃げる事を恐れるな。死
を怖がるのは何もおかしい事じゃないんだ。そしてお前達それぞれ
が自分の命を優先して逃げれば、結果として全員が生き延びる最善
策になる。決して無理をするな、戦闘では己の役割を忘れた者から
死んでいく。そもそも、これは時間稼ぎに主眼を置いた戦法だ。ラ
イオンが無事に朝霧神社付近まで逃げられればそれでいい。

だから、人は殺すな。この二人の為に殺人を犯すな。それだけは、
この俺が許さない」

二人の為にする殺人は、結局のところ二人に殺人の罪過をなすり
付ける行為だ。以前から俺が自分の為にレイスを殺すと繰り返して
いるのは、そこを間違えない為である。

誰かの為に殺してはいけない。それは罪を軽く感じる悪因となってしまう。自らの行いを正当化し、捻じ曲げて理解してしまう事に繋がるのだ。誤解とはこの事である。純粹な人外達に、そんな過ちをさせてはいけな^{ウィル}いと、俺の意志が囁いている。

「目的が、そこに至る過程を正当化してくれる事はない。人間の歴史はそれを何度も間違えてきた。その度にやり直してきた。手を取り合^{ウィル}って、同じ事を繰り返さないように」

戦争が、革命が、平和が後世に伝えるのは、そこなのだ。例えば何度同じ過ちを繰り返しても、何度でも手を取り合おうとする。時には恥やプライドをかなぐり捨てて、かつての敵と手を繋ぐ事だっ^{ウィル}てあったのだ。

そう あらゆる出来事は過去になる。歴史とな^{ウィル}って後世に語り継がれる。決して消えない傷痕だっ^{ウィル}て残る。それでも 人間は、自分達の未来を諦めたりはしなかつたのだ。

「だから、生き恥を晒せ。生きる事を諦めるな。生き延びる為の努力をしろ。どんなに生き汚くても、未来への歩みを止めてはいけない。だが決して道を違えてはいけない。それこそが、生きるという事だ」

生の実感。心臓の鼓動。それは人外には無いのかも知れないけれど。彼らの生きようとする意志を否定する事は、誰にも出来ない。^{ウィル}その魂の尊厳までは、どうやっても殺せないのだ。

やがて階段の途中まで至ると、焦げ臭い というよりは様々なものが入り混じって燃えているような、奇妙な臭いがしている事に気付く。詩音が羽根を消し、その臭いに鼻を動かす。

「これは……もしかして、火事!？」

「火を放ったのか!？ 森に囲まれた建物に ！？ そんなの、正気の沙汰じゃねえ!」

下手をすれば飛び火して山火事になる。森が焼けるというのは酷いものなのだ。延焼に延焼を繰り返して、一帯を焼け野原に変えて

しまう程に。

下手をすれば、裏山の湖どころか朝霧神社まで燃える事に

「クソッ、馬鹿が、馬鹿野郎が！ 平気でこんなタブーを冒せるのかよ！」

イカれている。どれだけの人が命を落とすか解らない、大災害なのだ。山火事というものは。広がり広がって、市街地にまで被害が及ぶ可能性だって出てくる。もうそうなたらこの街の消防隊では消火能力が追い付かず、火の勢いが弱まるのを待つようになってしまふ。どうやっても、人では自然の驚異に打ち勝つ事が出来ない現実を思い知らされるのだ。

急げ。事は急を要する。対処は一秒でも速い方が良い。

「二人共、ライオンの背中に乗れ！」

すぐさま指示通りに動いてくれる。言わずとも俺の考えが伝わっているようで何よりである。狐は詩音達と共に行きたいようで、彼女の手に抱かれていた。

「指示通りに、迅速に行動してくれ。一旦湖に到着したら警察と消防に連絡を」

時雨が、焦りを表情に滲ませて俺を見る。

「大丈夫よね、無事に帰ってくるわよね？」

階上に出て、一階の窓を開ける。周囲にはやはり火の手が回っていた。木造なのもあって勢いがあり、早い。乾いているのも拍車をかけている。最後に雨が降ったのは何日前だったか、と考える間にも、火勢が増していく。

「俺は西村だぜ。この程度の逆境に負けるものかよ」

ライオンに目配せする。いつでも良さそうだ。詩音の方はと見ると、手が狐を抱く事で塞がっていて、後ろから時雨に支えられている形だった。

「ま、誠君……」

「振り落とされるな。舌を噛むな。後で必ず合流する。またな」
「行け、と言い放つと同時にライオンが身を屈めた。開いた窓を」

一気に飛び超えて、森の中へと姿を消していく。速い。

遠くで硝子の割れる音を聞いた。群集が侵入を図るつもりなのだろう。まだ完全に囲まれてはいなかったようだ。それならば、建物を軸にして。

「挟み撃ちだ！ 分かれて屋敷伝いに回り込め！ 狼は俺の後ろから離れるな！」

三・二と戦力を分岐させる。闘争の空気に緊張するものの、過度に硬直しないよう自身をコントロールする。剣士であれば必須の自己管理である。大丈夫だ、頭も回っている。体の調子も良い。

屋敷を盾に顔を覗かせ、敵の様子を伺う。また、硝子の割れる音がした。どうやら連中が投げているものが原因のようだ。命中と同時に同じ音がする。

「あれは……火炎瓶^{かえんびん}！？」

簡素な作りの手投げ武器だ。ワイン瓶のような硝子容器にガソリンや灯油を入れ、導火線代わりになるもので栓をし、それに火を点けて投擲すれば、命中と同時に発火するというものである。

爆発物として取り締まれない法の穴を点いた、外国の革命や暴動によく使われる低コストで高い効果を発揮する武器だが 現在は国によって逮捕される 果たしてそれが街のグループ、それも少年の集団が扱うに相応しいものだろうか？ れっきとした活動目的を持つ武装集団か、過激な宗教グループでもなければあんなものは持ち出してこない。ましてや治安の良い日本などで 考えるに、彼らは二人の拉致など考えてはいない、という可能性もあるのでは……？

頭を振る。状況は既に動き出している。俺が練った案を今から取り下げる事など出来ない。何よりも、混乱が起きる。戦闘においてそれは最も避けるべき事態だ。

敵の装備に眼をやる。鉄パイプや木刀、ナックル、防具としてフルフェイスヘルメットを被った輩も見られた。多数に囲まれるのはまずい。まずは指揮官を狙いたいところである。扇動しているのは

いた。

金髪、巨漢の男だ。肌は浅黒く、腹部が妙に出ている。丈が余る程大きい白の柄シャツにジーンズ……典型的なクラブ系のファッションだろう。今も演説のように声を張り上げて群集を鼓舞している。士気は高いようだ。

反対側の味方に合わせて、飛び出す。こういうのは先制攻撃が肝心だ。初撃を受けた相手の混乱に乗じて、懐深くまで切り込む。数で負ける俺達がこの機を逃しては、勝機を逃す事にもなりかねない程に重要な戦術的要点である。

驢馬^{ロバ}の突進にグループの注意が向く。かと思えば足元から蛇が絡みつき、蠍の針が突き刺される。麻痺を起こす毒でも出したのか、少年達は意識を失ったように倒れていく。足元に気を取られていると、上空から巨大な蠅が襲い掛かる。グループに混乱が生まれる。そこに俺とウルフが反対側から接近、扇動役がいる付近まで一直線に突き進んだ。まずはこの並み居る兵隊を打ち破らなくては、ヤツのところまで辿り着けない。

ならば、兵隊の壁を貫くのみである。腰を落として右拳を握り込む。両の足指が踏ん張る力を足首のそれと連結させ、乗算された運動エネルギーを脛脛、膝、太腿を通して更に加算、腰、腹部、胸部、右肩、右上腕がそれを殊更に増幅させ、攻撃力へと転化させるべく右拳一点へと集中していく。

只の正拳突きを遥かに凌駕する、回転を加えての螺旋^{らせんけい}勁である。ボクシングにあるコークスクリュー・ブローに近いが、全身の力を統合するこちらの威力は高い。代わりに連射が効かない欠点がある。

弾丸のように腰溜めの構えから打ち出される拳が、目前の兵隊、鳩尾^{みぞおち}へと命中する。更にフォロースルーとしての体重移動と軸足の踏ん張りが威力を後押し。

押し出されるといよりは打ち出される勢いで、相手が吹き飛ぶ。人体の重心を強引にずらして、地面から引っこ抜くという以前の論

理と同じものだ。巻き込まれて倒れる様子を視界に捉えて、息を吐く。

これを、百式合戦法、拳の段が崩し 寸鉄・針と云う。

この発勁は術式や天恵というような不思議ではない。鍛錬すれば誰にでも出来る、極めて物理的な技術体系だ。無論習得に時間はかかるし難度は高いが、俺のような体付きでもこのような怪力を発揮出来る。接近戦闘の要として頼れるものである。続く兵隊を足払いや後ろ回し蹴りで薙ぎ倒す。

勁の連続使用は運動作用力の発生と連結の面で難しいが、これを息継ぎというやれない事はない。背後はウルフが守ってくれている。双方の処理能力を超えた飽和攻撃に晒されれば崩れやすい陣形だが、その前、相手が攻撃を仕掛けてくるタイミングに先手を打ってやれば出鼻をくじかれ、周囲も前衛の転倒に巻き込まれて足を引つ張られてはこちらの有利に持ち込める。要はやりようである。劣勢を優勢に変えるのも、陣形の役割だ。

鉄パイプを横殴りに叩きつけてくる相手には、体に命中する以前のタイミングで屈み込み、鞘の身を添えるようにして軌道を逸らす。一瞬で到達してくる鉄パイプにこうした反応を返す俺は、やはり普通ではないと映るのだろう。相手が眼を見開いている。それを視界の隅に置いて、胴体を蹴り飛ばした。突き出されてくる木刀を両拳で挟み込み、右肩に担ぐようにして引き込む。相手が眼の前まで近付く。顎を打ち上げた際に回り込み、関節を極めて兵隊達への盾にする。この時、背後の相手はウルフがしてくれている。鋭い爪と牙、そして何よりも長いリーチを活かしている。ショーリの言う通り、常人ではウルフに勝つ事は難しいのだ。敵の攻撃が一旦、止む。

状況をこちらが有利なように動かす為、更に敵陣深くへ踏み込んだ。巨漢の煽動家が視界に入る。コイツさえ倒せば敵の士気はガタ落ちする。あえて忠告するのであれば、戦闘の要は最後尾に控えているべきという事だろう。戦術よりも立場と見栄えを取ったのか、

前に出過ぎてきている。それが敗因となる。

俺の全身は刀だが、部位ごとに役を持たせた立ち回りも考慮されている。言うなれば腕は針、足は刀。そして踵は、斧の役割を持つ。

頭上に真っ直ぐ掲げた足、その踵が振り下ろされる。勁の力が持つ作用力を切り下ろしの一点に集中した、足刀・鎧通しと同じ決闘用の戦技。

乱の段、刃雷である。巨漢は頭を打ち据えられて脳震盪を起こし、失神。倒れた姿を周囲が認めて混乱が起きる。

近接戦闘ではこうして拳、刀、乱、歩が真価を発揮する。これら全てを臨機応変に混成させ、技から技を接続し、拳乱歩刀とするのが真髄である。

人の海に吞まれつつも、やけに兵隊の眼が据わっている事にこの時点でもうやく気がつく。正直、それは遅いくらいだった。

薬物による特殊能力付帯 以前の話で出てきた、colorというものを、彼らが既に服用していたのだと理解するのに、それは致命的な遅さだったのだ。

驢馬の嘶きが耳に届いた。兵隊の一人が薬物使用によって目覚めた特殊能力 天恵を行使したのだ。凡そ初めて見る事になるであろう、その光景は圧倒的でさえあった。

掌から炎を出している。なのに自身の体や服が焼ける事はなく、ただ周囲に熱と燃焼を齎す超常現象なのだ。あれが霊子放射光によって引き起こされる、事象変移なのだろう。真白は言っていた、術式は計算を必要とする手前、どうやっても天恵に敵う事はない。持つて生まれた才能には何をしても勝つ事が出来ないのだ、と。

その兵隊の行動が引き金となって、周囲も一斉に、意識のタガを外したようだった。地面を凍らせる者、水を吐き続ける者に両腕を銛のように変化させる者、体が肥大化して身長が三メートル近くまで伸びる者

「何だよ、それ……!？」

おかしい。どう見たって化物だ。俺が……まさか半人半鬼の俺が人に対してこんな言葉を使う事になるとは思ってもいなかった。

「に、人間じゃねえ！」

肘から刃物を出した兵隊に、驢馬の首が切られた。蠍に複数が襲い掛かり、踏み潰される。蛇は体軀を肥大化させた兵隊に、半ばから引き千切られた。蠅は叩き落され、焼き殺された。

まずい。まずいまずい！

ここにきて戦力差が大きく開いてしまった。こいつらは最初からこうする気だったのだ。ただ、人の姿を保てなくなるから最後の手段に取っておいただけで……！ 指揮官となる煽動家がいなくなり、混乱しているのも拍車をかけているだろう。

このままでは全滅する。既に残りは俺とウルフのみだ。

俺は脇からウルフに抱えられた。

「なっ、何をする！」

これでは動けない、的になるだけだ。そう非難しようとしたが、出来なかった。投げ飛ばされたのだ、持ち前の怪力で、兵隊のいない森の近くまで！

西村誠には、ある特殊技能がある。視えないものを視るというものだ。今までそれは剣筋や術式の軌道などを視認して回避する手段程度にしか思っていなかったが、俺はここでその認識を改める事になる。

ウルフの眼。赤いそれが、俺を視ている。何かを訴えかけるように。

『逃げる』

そう言っている。間違いない。俺がそれを間違う筈がないのだ。

俺には 人外としての血が半分流れている俺には、ウルフが眼に込めたそのメッセージを、受け取る事が出来るのだから。

滅多刺しだった。周囲からありとあらゆる刃物で、モデル・ウルフは串刺しにされた。

叫ぶ事は出来た。ウルフと呼ぶ事は出来た。だが、彼はそれを望

んではいなかった。逃げる、生き延びてくれ、そう眼が語り　今も、死に至る今際の時さえも、俺に訴えてきているのだ。ウルフ、と叫びかけていた言葉を、飲み込む。

炎で焼かれ、首を飛ばされる　それを最後に見てとり、俺は背後の森に駆け込んだ。

何故だ。どうして俺だけが。涙が止まらないのはどうしてなのだ。人外なんて、解り合えても俺にはどうせ一歩引いた位置での出来事だったから関係無いと思っていたのに。

なのに、彼らは俺を信じてくれて、最後の時まで戦い続けてくれて、最後には、俺を助けてくれたのだ。

本当に悪いのは人間だ、なんて事さえ考えてしまう程に、今の俺は人外の死を悲しんでいる。嘆いている。解り合えた事、失った事、ここから先の未来を共に歩めなくなってしまうて。

叫びが出るのを抑えられない。逃げているのに、自分はここだと敵に知らせてしまうようなものだ。だけど沸き立つ激情を抑える事は、今の俺には難しかった。悔しいのか、悲しいのか、負け続けている自分が情けないのか、それさえもはっきりしない。

けれど、ウルフは逃げると言ってくれた。俺を信じて、未来を託したのだ。ならばそれに応えるべきであろう、信頼とは、そういうものであるのだから。

負けた事は恥ではない。次に活かすべき教訓が多く生まれる。人外とだつて解り合える事を知る事が出来たのだ。今度の敗北は、とてつもなく意味が大きい。

自分でも言つただろう。生き恥を晒せ。生きる事を諦めるな。生き延びる為の努力をしろ。どんなに生き汚くても、未来への歩みを止めてはいけない。だが決して道を違えてはいけない。それこそが、生きるという事

心の中で、彼らに対して　ありがとう、と告げた。

このまま火災を広める事を、彼らだつて望んでいないだろう。すべき事は決まっているのだ。

足に力を込める。走り続ける。霊障の眼を使つて、人外じみた速度で森を駆け抜けた。

そして、その場所に出た。裏山の湖だ。静謐な空間で、清冽な水面を湛える場所である。水際と森の間には広場があり、そこに。

詩音を庇うようにして時雨が立っている。正対している相手は

「ブラインドネス」

ヤツが、俺を視る。革ベルトを何重にも巻いた、気狂いじみた眼帯を通して。足元にはライオンの残骸が転がっていて、それはすぐに霧のように消えていった。

時雨の足元では狐が威嚇している。唸りをあげて、ブラインドネスの注意が俺に向いた時、牙を剥いて襲いかかった。

「ダメッ！」

あまりに呆気なく、斬殺されて……詩音は顔を両手で覆った。

最大限、彼女達を守ろうとしてくれたのだらう。俺がもう少しでも速ければ、あの狐だけでも助けてやれたのかも知れない。

歯を、食い縛る。俺はいつも負けてばかりだ。打ちのめされて、泣いてばかりで、助けられなくて。それでも。

何度でも立ち上がる男である事を、誇りに思っている。

男というよりは、鬼と騙るべきであらうか。何にせよ、俺は諦めが悪いのである。心の中でライオンと狐にも、ありがとう、と伝えた。二人を守ろうとしてくれて、嬉しかったのだ。

済まなかった、というのは侮辱であらう。彼らにも矜持がある。その誇り高き死を穢す事は俺には出来ない。

「何で、アンタがここにいる」

俺の問いに、意外にもブラインドネスは答えた。以前にも見た黒いコート姿、肌をも覆う漆黒のヴェールを纏つて。

「俺も、このあたりの生まれだな」

このあたり。それなら近所の人間だったのだろうか。だとしたら成る程、あのお化け屋敷から逃げるのであれば、このルートを

時雨は眼を瞬かせる。

「え、何、鍵？ おじさん、何を、言ってるんです、」

「知らないわけがないだろう！」

怒号だった。この男は今日、意外な面ばかりを見せる。

何故だ。そこには必ず理由がある筈だ。半信半疑だが、本当に俺の父親なのかも含めて、見つけるのだ。その理由を。

「お前がどうして人外を寄せ付けない体か解るか！ その正体は龍穴を封印出来る事にある！ 人柱としてお前達は龍眼を発現した女を犠牲にしてきたのだ、その血を絶やすまいとする浅はかな行いをお前の祖先は繰り返してきたのだ！」

その封印を維持していくのがお前達の役割だろう！ ガーディアン・ブレードの暴走によって開いてしまった龍穴の封印を、誰が塞いだと思う！」

龍穴。龍眼。封印。そして、十年前のガーディアン・ブレードの暴走。

もし。もしもだ。このブラインドネスが仮に俺の父親、西村誠一郎だとするなら。俺の母親である西村桔梗は、どこに……いる？

旧姓、朝霧。

「そうだ、桔梗だ！ 龍眼を発現した朝霧の女は数年で死に至るだから、自ら生きる事を諦め、この街の為にと命を捨てて、人柱となったのだ……それを、俺はその忌まわしい慣習を破壊する為にここへ来た」

「慣習を、壊す」

「そうだ、小僧。桔梗の亡骸を媒介として、あの呪いは機能している。龍門という封印だ。故に俺は次の媒介。次の巫女であるその女を、殺しに来たのだ」

「それをして、どうする」

そんな事は絶対にさせない。だが、その先にこの男は、何を見ているのが気になった。

「封印を解く。そして ガーディアン・ブレードによって輪廻を

司るレコードを破壊し、彼女の魂を呼び戻す」

狂っている。これでは妄言であろう。マトモな人間が口走る言葉とは思えない。

だが、その単語の繋がりが意味するところを、俺は理解出来る。

この場で俺だけは、正確にその意図を把握出来るのだ。

こいつは、詩音と時雨を使つて、母を甦らせようとしている。

「どういう事だ、それじゃまるで、空の環を壊したら人が生き返るように聞こえる」

「そうした事を可能にするのが、その強化人間が持つ、蒼の世界^{エンブリオ・ミッドガル}ブル^{フル}卵だ。蒼のファークヴニルが持つオリジナルを世界再生機構が模倣して複製した欠陥品だが、現存する世界卵としてたった一つ、人間を蘇生出来るオーパーツ。見つけるのに苦労した」

まだ右側の羽根は出せないんだろ　と。

その男は、口にした。

「アンタは、時雨と詩音を、利用して……母を甦らせるつもりなんだな。そういう事だと、俺は認識した」

時雨を殺して、詩音の羽根をまた暴走させて。

恐らく時雨の血が、封印を解く鍵であるのだろう。最初に言っていた事と繋がる。だがその後はどうなる、龍穴を解放した後はそうか、そうだ。

人外は場を乱す者を攻撃する。真白が、あの岩　天之岩戸をどうにかしたいと思つていた俺に何と言つていた？　人外のステージ？が黙つていない。ならそれは真白と同じ古代種が表れる事を意味するのではないか。

真白以外の古代種は、彼女と敵対している。人間を攻撃するのに容赦しないだろう。何故ならそれこそが人外の本質だからだ。場を乱すのなら、その原因を取り除く。自然との共生者。ガイア仮説が示す、この惑星の自浄作用なのだ。

詩音だって、三枚の羽根を使うのに薬物の助けを必要とした。だが今度はその倍、六枚のガーディアン・ブレードを使うというの

は、恐らく命の危険が及ぶに違いない。

術式兵装は精神を消耗する。三枚羽根の状態でさえ抑制が効かなかったのに、六枚となつては容易に限界を飛び越える量だろう。

そして

「アンタは、本当に西村誠一郎なのか。西村の一族には女しか生まれない。アンタは本当に、俺の父親か？」

「お前が誰かは知らないが、西村に女しか生まれないというのは間違いだ。昔に凶被^{まがばら}いとして男ばかりが生まれていた説がある。老人共が勝手にその反動を解釈しただけの迷信だ。だが 凶被いの血が現在まで引き継がれ、先祖帰りが生まれたのは、確実に呪いの顕現だな」

「呪い？」

「ふん、西村を騙る癖に、真白といってそんな事も聞いていないとはあの女の血を引いているんだよ。尤も、古代種は子を産めない。故に血を一滴、人に与えたただけだな」

人間が変質するには、それで充分な猛毒だった

「古代種の血はそれだけで人を冒す。既に精霊に近い分類だからなあの化物はそうして西村を人から外れさせた。己の願いと共にな」
これ以上の問答は止めだ。ブラインドネスはそう言って刀を向けてきた。

……だが。知りたい事は知れた。コイツは間違いなく俺の父親だ。けれど。詩音と時雨を殺すというのなら、俺の父親などでは断じて無い。そこだけは、自分の中で退けない一線である。

俺の事が解らなくても構わない、十年の空白を埋めたいとは思っても、その最後の一線だけは、例え親であろうと踏み越えさせはしないのだ。

何故なら。自ら鬼に堕ちた父を、父が持つ魔剣を破れるのは、俺だけだから。

真白やショーリ、他の誰にも、それは出来ない。この男が生きている限り、ランツクネヒトとの闘争で彼女達とウェンズデイ機関に

勝利はない。勝てるのは、その見込みがあるのは、俺だけ　　なのだ。

現実とは、こうもうまく転がってくるものなのか。俺に親殺しを強要してくる現実など、クソ喰らえだ。

魔剣を見切る眼は俺にしかない。対抗出来る剣技は俺しか持っていない。祖父の虐待じみた稽古も、ここで身を結ぶのであれば、少しは許してやっても良い。

鞘から抜き放った刀に呪いを施し、透明なそれへと姿を変える。

水晶のような刀身である。時雨が声をあげた。

「誠！　お父さんのよ、十年前にいなくなった、自分の親なのよ！」

だから、許せないのだ。だからこそ、俺がやるのだ。この男は俺のルールに触れた。その瞬間から退く事の出来ない対立が生まれた。俺が自らこの意志を曲げない限り、この男はそれをする。

「今更、親の愛が欲しいとか思ってたねえよ」

そう、今更だ。想い出の中で生きていれば、俺にはそれで充分である。

俺が敗れたのは一度限り。今度は俺の剣を見せると誓った。その相手が父であるのも、それはある意味運命なのだろう。

「俺は、父を超える」

ランツクネヒトの中で最大の障害であるコイツを、越える時は今なのだ。

少年から大人になる時、男ならいつか父親を超える時が来るように。俺のそれが今であるように。

俺は見栄を切った。決闘の作法である。

「ブラインドネス。西村百式合戦法、十四代目後継者がその磨かれた技に挑む。これを受ける覚悟はありや」

「偽者が、よく吼える。お前は一度、俺に敗れているという事を忘れていないだろうな」

構え、応じる。

「十三代目正当後継者、その挑戦を受けよう。我が魔剣、恐れずにかかって来い」

「いざ」

「尋常に」

勝負。

初手はこちらから。中段からの突きを、相手は半身はんみになる事で回避した。やはり反応速度が尋常ではない。普通なら腕でどうにか逸らすようなものを、体で避ける。これはこちらへの攻撃と同時に行われるのが主目的にあるらしく、襲い来る横薙ぎを屈む事で回避した。

魔剣の使用には独特の溜めがある。以前の事から解るに、中段構えからの三呼吸がそれだ。横薙ぎや切り上げから突然変化する型もない事はないが、いずれも二呼吸を必要とする。その中で最も恐ろしい威力を持つであろう変幻自在の燕返しは、中段の構えを経由するのだ。それが心身共に集中しやすい為であろう。構えとは、それ程に重要なものである。

距離が詰まっている。一度身を離すのが定石だが、俺はここから攻める。離れば魔剣が来る。先手を取ったのもこの為だ。

使わずに封殺する。まずはこの手を試してみたいのだ。

しかし鳩尾にめり込んだ拳打が、それを呆気なく防ぐ。距離を取られた。拳もアリらしい。やはり近接戦闘では人外の身体能力が差を生むらしく、俺には不利が生まれるようだ。

次を予想して防御を重視、下段に構える。相手は中段からの三呼吸、その後の切り下ろしが放たれた。間違いない、魔剣だ。俺は靈障の眼を使つて、これを受け止める事を選択する。火花が散った。金臭い匂いが鼻に届く。罅迫り合いに持ち込む。しかし状況は均衡し、有利には運べない。また離れて、今度はこちらから。上段からの切り下ろしを横合いから打ち弾くようにして外され、反撃として

柄尻の打突を額に受ける。視界に星が飛んだ。このままやられっぱなしではいられない。体は既に密着している。寸剋によって相手の腹部に手痛い一撃を打ち込んだ。だが体を引っこ抜くまでには至らない。咄嗟の事に剣から拳へのシフトが遅れた為だ。勁を練り切れていない。未熟さが出た事に歯軋りする。

三度離れた。実力は俺が少し劣るようだが、どちらも決め手にかけている為に拮抗している。右からの袈裟切りを弾かれ、反撃の横薙ぎを受け止める。体の位置を入れ替えて、離れた瞬間に突きを繰り出す、刀身で逸らされた。硬直。離脱時の剣戟が湖の静謐を乱す。

四度目の仕切り直し。恐らくここで、決めに来る。

小手調べは終わりだ。どちらにも決め手がない以上、肉を切らせて骨を断つ策に出るのが最も有効な最善策。

だが、俺にはある。切り札が、一枚。かつて祖父を破った秘剣である。

俺は正対するブラインドネスから視線を外し、背後を見る。突然背中を見せられた相手は戸惑い、誘いか、正気か、と疑うだろう。

然り。これは罠だ。この背構えから、俺はヤツが見た事のない一撃を放つ。或いは、視えない一撃だ。

眼を閉じて、集中する。よく人は集中というと視界の一点を見続ける事と勘違いするが、それでは視覚に縛られて寧ろ視野狭窄を起こしてしまう過ちだ。集中とはもっと純粹に、心で聴くというものである。

精神を研ぎ澄まして背後を、視る。無論、眼に映る事はない。だが剣筋は見える。どう来るのかが俺には解る。三種の至技が一つ、心眼だ。

直感が、靈障の眼が、未来の剣筋を感覚で視せてくる。隙だらけの背にそれが打ち込まれてくるのを、待つ。

草を踏む音。駆け寄ってくる。空気が一気に緊迫する。風を切る音がした、その瞬間に。

膝抜きを行い、体を右に翻して一気に相手の死角に飛び込む。ブラインドネスと交差する形、瞬間、ヤツは俺の右手側にいる事になる。人間の視界は真横までは及ばない。故に回避不能のカウンタ―となる。加えて膝抜きの究極の形、縮地によって相手は未だ自分が攻撃している最中という刹那にあり、意識は完全に攻撃に傾いている。ヤツからすれば眼の前の敵が消えたように見えているだろう。この一瞬をモノにする。

人間が最も鍛えにくいとされる脇腹を、斬った。

己が攻撃を致命的な隙として利用されればどのようなものであれ避ける事は出来ない。何故ならそここそが、最大の隙であるからだ。更に視覚外から飛来する斬撃に反応するのは達人でも不可能に近い。

ブラインドネスが膝をつく。俺は残身を取った。

秘剣・逆風之太刀はここに成ったのである。

第五章 再生の剣（４）

斬られた脇腹を押さえて、ブラインドネスは呻いた。

勝負はあった。一度の敗北から対策に対策を練って、終いには奥の手まで使ってようやくの勝利である。あまり誇れたものではないが、大きな一歩には違いない。

「剣を捨てろ。致命傷だ。ここからお前が勝てる見込みはないぞ」

桜吹雪によって受けた傷は、人外である限り再生しない。しかも九字を使った刀身である。半人半鬼であっても、猛毒であろう。

「グツ……俺が、負けるだ」と

血振るいをして、刀を納める。鏗鳴り、微風、夜の気配。

「桜吹雪は、人外にとつて猛毒の刀。呪い殺しだ。その体はもう冒され始めている。諦めろ」

俺とて毎夜、呪いが齎す悪夢に苛まれている。しかもそれは日に日に酷くなってきていた。斬る者にも斬られる者にも同じ痛みを負わせる呪いがそうさせる。四言四枷の由来である。死に至る言の葉と、死に苛まれる枷。因果応報。罪と罰。

脇腹から黒い霧が流れ出しているブラインドネスは、それでも。

「否、否！俺は負けない、こんな所で負けてはいられない……！あいつを助ける為にも、志半ばでくたばる訳にはいかんだ！」

革ベルトの眼帯に手をかける。

「お前は、危険だ。今ここで殺しておかねば確実に後の憂いとなる。ここで、俺の全てを賭してでも、殺す」

ブラインド
認識否定が、解かれる。黒い衣を剥がれたその容姿は当時から歳を取る事がなかったのか、予想していたより若く見えた。掘りの深い顔立ち。当然だが、互いによく似ている。

肌が、髪が、人間としての色彩を持つている。まるきり人間。しかしその双眸は血のように紅い。

「偽者め。お前に凶^{まがばら}抜いの力を、見せてやる」

真白が持つという、白い尖^{ホーン}角。俺はそれを直接眼にした訳ではないが、それは恐らくこういうものなのだろう。今、眼の前の男がこめかみから生やした角のような。

それは頭の後ろ上方を衝くように伸びた双角だ。

アストラル・オルガン　ヴィブラ・ホーン
霊知感覚器官・調律震角

齎^{オーケストラ}される拡大感覚が、周囲の霊子を集めていく。

「おおオオ　！」

黒い霊子^{マナ}がブラインドネスに纏わりつく。穢れや呪い、そういったものの集まりに、俺には視えた。霊子は精神^{ゴースト}と密接な関係にある術式とは異なる、負の面にもそれは言えるのだろう。

凶抜い。その言葉は間違いに思える。あれは邪なものを引き寄せているだけだ。直感がそう告げている。

拡大感覚によって肥大化した術式回路に、黒い霊子が満ちていく。自ら鬼に堕ちるといふのは、こういう事なのか。

俺は、眼の前で起きている事をようやく理解した。この男は人間と人外の狭間で苦しんでいるのだ。それでも強い意志で人間として生きていた頃の目的を果たそうとしている。その為だけに生きている。その為だけに、自分の体がどうなろうと力だけを求めてきたのだろう。他人がどうなろうと顧みる事もなかったのだろう。

たった一つの目的　愛する人を助ける為に。

その意志は紛れもなく強固。だが間違いなく、過ちである。盲目に過ぎるのだ。ブラインドネスとはよく言ったものだ。恋は盲目、なんて。笑えないにも程がある。

けれど、と思う。俺も、もしかしたらああなってしまうていたのかも知れない。あの男が母の為にというのなら、俺は二人の為にそうしていたのだろう。半人半鬼、同じ血族。親と子。共通する事項は多い。それも、過ぎる程に。

ヤツと俺は似ている。けれど決定的に違うものがある。ほんの僅かだが　道を違えているか、いないかというだけの違い。俺はま

だギリギリのところまで踏み止まっている。何度人を殺そうとしても、出来ずに負け続けてここまで来た。弱かったからだ。けれどヤツは自ら罪過を犯し、目的の為に手段を選ばず、その身を鬼に落とした。強かったからだ。

違いがあるとすれば、そこだけなのだ。故にもう一人の俺と言っても、過言ではない。ただ 強過ぎただけで。人を殺せる強さがあつたか否かの違いだけで。

だが。

「俺は……アンタのように、ならない」

ブラインドネスが俺を見る。紅い眼が濁り始めている。明らかに先程までとは様子が違う。あれは 正気を失っているのではない。凶暴性の垣間見える目つき。けれど、退く訳にはいかない。俺の後ろには二人がいる。負ける事は

直感が、囁く。残酷な真実を告げてくる。然して驚く事もなく、その事実を受け入れられた。

そう。事態の見通しが不明瞭である場合、俺は自分の直感を信じる事になっているからである。例えその向こうにあるものが、己の敗北であつても。

「……詩音、時雨、今すぐ逃げろ。時間は稼いでやる。警察と消防に連絡を取るんだ」

二人は、動かない。俺は震える体を必死に抑えて、恐怖を押し隠して叫ぶ。

「早くしろ！ アイツはお前達を殺す気なんだ。俺が何とかするか、真白とシヨリーを頼れ。あいつらなら何とかしてくれる！」

都合良く頼る事になってしまうあの二人に、心中で頭を下げた。今は他に方法がない。

「誠君は、どうするの」

「そうよ、一緒に」

「出来る訳がない。アレはもう鬼だ、呪いを纏った人外だ。俺以外にアレを相手に出来るヤツはいない。だから、俺が止めている間に

助けを呼んできてくれ。頼む」

多分。その時まで　俺は、生きてはいないだろう。

良くて相打ち。悪ければ瞬殺。眼の前のアレはそれだけの化物だ。俺が知る人外、人間のどちらにも属さない、第三者なのである。

考えるにああいうものを、鬼と呼ぶのではないか。俺のように言葉の上での心の有り様を言うのではなく、純粹に呪いを力に変える存在など、そんなものを殺す事が出来るのか。恐怖が体を支配する心が折れそうになる。

西村は、白い鬼の血を引く混血だ。それに傾倒して力を求めた男が、眼の前にいるのだ。強大な力を身に纏って。

それでも、退けない。自分が死ぬと解っても、ここは退いてはいけない一線。それが俺のルール。真っ直ぐに生きる為に違えてはいけない、俺自身の意志^{ウィル}。

二人は戸惑っている。詩音が嫌々をするように首を振った。ここに残る。そう駄々をこねる詩音に、冷静な時雨が言葉で喝をいれた。「私達が残っても邪魔になるだけよ！　今、出来る事をしよう！　そうじゃないとあの子だって危ないのよ！　感情に任せて我俣を言ってる場合じゃないの、しーちゃんだって本当は解ってるでしょう！？」

「時雨の言う通りだ。もう近くまで火の手が回ってきてる。アイツはこのまま俺達を逃がすつもりはないだろう。だから、俺が引きつけておく。その間に、生き延びる為の努力をしてくれ」

二人が生きる為の。俺が生き延びる為の。これは言わば命を預ける行為だ。それが解ったのであろう、詩音も態度を改めた。

「ごめん。しっかりしなきゃ。私達にかかっているんだよね。この火事も、誠君の事も」

「ああ。俺が火に巻かれないうちに、早めに頼むぞ」

せめて安心させようと、そう口にした。二人に眼で合図をする。

俺の打ち込みと同時に、ブラインドネスの横を通り抜けるのだ。

息を吸って、吐く。せめて一秒でも長く生きておかなければ。ど

れだけ力の差があるうと、簡単に死ぬ訳にはいかない。

俺に死を覚悟させる程、今のブラインドネスは強大だ。あの角が恐るべき力を持っている事実を窺い知る事が出来る。無尽蔵の力を外部から吸収し続けられるのだ。それこそ星の生命力である霊子^{マナ}が尽きぬ限り。

そして霊子も、こういう緑が多く霊的な場所には相当量が供給されていると見て良い。

断言しよう。今回、俺に勝ち目はない。剣士ならば、戦場に身を置く者ならばそういう気配が解るのだ。強大な敵との力量差という、圧倒的な断絶の向こうにいるものとの違いが。

顔の傍に柄を持ち上げて、刀身を上に向けて真っ直ぐ立てる。脇構えである。ここから走り寄って袈裟切りにするのが距離を詰めながらの攻撃で、最も威力を出せる。

その時だった。視界に何かが、映ったのだ。それは見慣れたもの。剣の軌跡。敵から伸びてくるものではない。

（俺の手元から、敵へと伸びる軌跡　こう打てという、予知の剣筋）

察する直感。尚も見える幻視。真上からの切り下ろす剣筋　これが現れるのは恐らく偶然ではない。教会の時と同じだ。集中力が最大限まで研ぎ澄まされている現在において、死ぬ訳にはいかないという生への執着と、背後に守る者がいる不退転の因果が、俺にこれを視せているのだ。

自分の事だからこそ、そうだと解る。俺が繰るべき魔剣の剣筋が、視えたのだ。

惜しむらくは。こういう状況に陥らなければ視る事が出来なかったという事、そしてあの型を完全にものに出来ていなかった事だ。ベースとなる型が不完全。それが土壇場でいきなり使えるようになる訳がない。

だが光明は見えた。もし生きて帰れたら完成させて
苦笑が漏れる。いの一番に使うべき相手が眼の前にいて、生きて

帰れたら、も無いものである。

ならば、最も鋭い太刀筋において、それを辿る。そこに光明があると信じる。

上段構えに仕切り直し、相手へ真っ直ぐ切り下ろす。それも人外の膂力でもって、最大の威力を叩き出す切り下ろしだ。

刀の段・兜割り。

駆け寄る。ブラインドネスはフラフラと体を泳がせている。やはりあの角、使用するには幾らか無理があつたのかも知れない。元々は古代種のものだ。人の身で扱うには過ぎたものだったのだろう。

だが、今は関係ない。この一撃を打ち込む事のみ考える。

最接近、絶好の距離。助走によって得た慣性も上乘せした一撃を、ブラインドネスは受け止めきれず 刀を真つ二つに折られ、右肩口からバツサリ、大きく裂かれていた。

鉄の兜さえ割る一撃である。刀を折るなど造作もない。

その隙に横を二人が通り過ぎる。俺は刀を引いて距離を取ろうと

抜け ない。深く、切り込み過ぎた。

紅く濁った眼が俺を見る。食い込んだ刀が抜けず、しかし相棒とも言える武器を諦めて手放せず、距離を置く事も出来ないまま。

心臓を、つらぬかれた

口から上がってくる熱いものを吐き出すと、血だった。道理で熱い訳である。そんなふうを考えてしまふ程、思考は平静だった。

解っていた事だ。こうなつては勝てる筈がないと。ならば相打ちという結果に転ばせる。せめて一秒でも長く、息をして、ヤツの体へ深く刀を食い込ませなければ

右の下腕が飛ばされる。痛みで左手を胸元にやっていたのが幸いで、そちらは無事だ。血の噴水。強烈な痛み、灼熱で焼かれるような激痛に悲鳴が出る。出そうになる。けれど、齒を食い縛って耐えた。そんな声を出せば戻ってきてしまうから。

故に。骨を斬らせて命を断つのだ。俺とて鬼の一族が端くれ、少しの間、息をしている事は出来る筈だ。驚くべき再生力がこの体にはある筈なのだから。

刀の柄を左手で握る。もう少し。もう少しで相手の心臓に達する

詩音の聲が、聞こえた気がした。

戻ってきた。馬鹿だ、馬鹿であろう。文字通り命賭けの、この努力が無駄になってしまう。けれど、あの二人に手を出させるつもりはない。何としても今ここで、コイツを道連れにしてやる。

刀が、ブラインドネスの心臓に到達する。人外には猛毒の刀だ。

因果応報、てんはつてきめん天罰觀面。死に至る病、お前も味わえ。

流石にこれ以上、桜吹雪の呪いを受けるのはまずいと思ったのか……ブラインドネスは身を離して、姿を消した。それを俺が最後までで見ている事は出来ず、支えを失って倒れそうになる体を足で踏ん張る事も、出来なかった。

芝が申し訳程度に顔を見せる地面へ、倒れ込んだ。意識が遠のいていく。今日はこんなに寒かっただろうか。血と一緒に生きる力のようなものが、胸の風穴から抜けていく感じがして　とても、こわい。

詩音の顔が視界に映った。体を仰向けにされたらしい。彼女は何かを必死に叫んでいる。涙を流して、俺を見て。時雨も来たようだ。このままでは二人が炎に巻かれてしまう。森の火災は今も広がっているのではないのか。こんな事をしているよりも、早く逃げるべきなのだ。

逃げるべきなのに。俺の傍にいてくれる事を、本当は心の隅で嬉しくも思ってしまう。

解っている。これはもう避けられない死だ。驚くべき再生力なんというのはここまで致命的なものを負ってしまったては手遅れで、間に合うものではない。そんなの、自分の体なのだ、百も承知。ただ

自分を鼓舞するだけの言い訳だった。怖さを緩和するだけの。俺は、本当は臆病だったのだから。

死を覚悟して受け止めて、最後まで抵抗を続けられるようなカッコいいヒーローでは、ないのだ。

負け続けの人生だったけど。最後にこうして誰かが泣いてくれるのなら、それも悪いものではなかったように思う。

視界の隅に蒼い光が見えたのを最後に、俺の意識は途切れた。

なにか、とてもくるしい、きがする。

胸を掻き毟ったような記憶があった。何かを胸の中に押し込まれた。蒼い。それが解る。これは何だ。止めてくれ、静かに眠らせて欲しいのに、何をするつもりなんだ

全身の血が、沸騰した。

右腕、斬られた部位から先に何かが生える。感覚で解った。人外の腕だ。ウルフのように鋭い爪を持った、腕。そして右のこめかみから角が生える。そんな悪夢のような出来事を体感した、ような。全身を誰かに押さえられた。三人。四人かも知れない。そうでもしなければ痛みへの反射で暴れてしまうからだろう。

何かがおかしい。体内の何かが狂っていく。俺の中の天秤が、どちらにも偏って今にも壊れそうだ。壊れる。俺がこわれてしまう。

丸い月が浮かんでいる。円柱状の虹がおつきさまへと手を伸ばす。それは今の光景か、十年前の幻影か。

発砲音。壊れた車。炎が荒ぶる深夜の森。泣き叫ぶ俺。

モノクロの風景、手榴弾の爆発。人が死ぬ。たくさん死んでいく。だって知らなかったんだ、詩音を連れ出した事がそんな大事になるなんて。何度も街を探検して連れ回していたから、すっかり毎日の中に溶け込んでいて。誰かから狙われているって、知らなかったんだ。

これは十年前の光景だ。俺は確かに、そう思っていた事がある。それを見ていた事がある。

何故忘れていた？ 何が俺からそれを忘れさせた。そうだ、あの女。真白が俺に手を翳してから、次に起きた時には何も思い出せなくなっていたのだ。それに関する記憶がゴツソリと。道理で見覚えがある割に、思い出せない筈である。

もしかしてあの事件は、俺が元凶となって引き起こされたものなのでは？ それを忘れさせる為に、そう処置したのでは？ 心が壊れないように。

そうか。俺はそれ程に罪深い人間だったのか。だとしたら此度の死は相応であろう。殺されて当然だ。十年前の事件で死んだ人間は数え切れない。公表されていないだけで、俺はそれを見ていたのだ。俺が殺したも同然なのに、それを忘れていた。

忘れていた。安穩と平和に浸っていた。業が深いにも程がある。

何だか、長い時間眠っている気がする。体が固まって、座りが悪い。起きる事にしよう。起きられるのか？ まあ、やってみなければ解らないか。ここが地獄だろうと天国だろうと、まずは視る事から始めないと。

眼を、開けた。

白い。蛍光灯が見える。ここはどこだ。頭がボンヤリとして、さっきまで何を考えていたのか思い出せない。周囲を見渡すと、徐々に解ってきた。

ここは病院だ。個室で、余裕がある間取りをしている。左手には点滴が繋がれていた。邪魔なので取り外す。どうせ栄養剤か何かだろう、俺はそういう注射だとかを生理的に嫌悪している。過去、入院中の祖母が衰弱していく様に、これが毒を与えているように思っていた事があるからだ。

それにしても、視界が赤い。霊障の眼になっているのだろうか。左側の隅だけが普通だ。

ベッドから降りて、立つ。多少ふらついたが、歩くのに問題は無い。筋肉の衰え具合から、ここに来てそれ程時間は経っていないよ

うだ。廊下に出ると、ちらほらと人が行き交っている。喧騒に紛れ、屋上に向かった。

途中、気付いた事がある。右の眼だけが赤く光っているのだ。精神状態は落ち着いているのに、治まらない。常時これでは困ったものなので、右眼だけ瞑って歩く事にした。すると視界の赤いフィルターが消えて、いつも通りになる。

暦を見た。六月も半ばを過ぎたあたり。地獄や天国にしては現実的なものである。

やはり、俺は生きているのか。何故だろう、あの状態からどうやって蘇生したというのか。完全に心臓を失って、もう生命活動を続ける事は出来なかった筈だ。不可解に過ぎる。

そんな事を考えつつ、屋上へ出た。
曇っている。風を感じる。だが。

（暑さも寒さも感じない。今は梅雨だ。本当なら蒸し暑いのに）

そうだ、と思い出して右腕を見た。斬られた筈なのだ、ブラインドネスに。しかしそこにはいつもと変わらぬ肌と形をした、俺の腕がある。

これも不可解。納得がいかない。誰かに説明して欲しい。けれど、誰に聞けばいい？ 自分は殺された筈で、無かった筈の腕が戻っているのはどうしてなのか。まるで気狂いの発言である。それで黄色い救急車に乗せられては適わない。

そうしていると、雨が降ってきた。

感じない。雨が当たる感覚はあるものの、冷たいや寒いという感じが無い。触覚だけは生きている。この現象には心当たりがあった。ブラインドネスのコート姿。夏だというのにあの姿なのは、こういう意味があったのだ。寒さや暑さが解らない。だから問題なく耐性の高いコートを着込めた。

背後で音がした。振り返ると、年配の看護師さんだった。俺の名前を確認してくる。いつ起きたのかを聞かれたので答えると、そのまま病室まで連行された。

大人しくしてて下さい、今すぐご家族に連絡しますので　看護
師さんはそう言い残していったが、俺に家族なんて……ああ、そう
いや爺^{ジジイ}がいたっけか。

あの生塵^{なまこみ}一匹ぐらいのものである。死ねばいいのに。

さておき、保護者を呼ぶとなると問題である。恐らく藤崎氏に連
絡がいくのではないだろうか。俺の爺はあの人に俺含むウチの事を
全て委ねているので、普段からお忙しい身でおられる藤崎氏に要ら
ぬご迷惑をかけてしまうのは申し訳ない心持ちである。

三分ぐらいで詩音が来た。泣きながら抱きつかれる。嗚咽交じり
の話をどうにか解読するに、近くで必要なものを買ひ揃えてからこ
こにお見舞いに来るところだったようだ。背中まである長い髪から
良い匂いがする。よしよしとあやして、離れるように言う。

離れない。両手で引き剥がそうとするが、がちりホールドされ
ていて無理だった。スッポンみたいなヤツである。

「まあいいか。おじさんは？」

幾らか嗚咽も治まった頃、そう声をかけた。

「夕方に来るって。でも良かった、成功して……」

その単語には引つ掛かるものがある。

「成功？　手術か。それにしても平気で動き回れるんだが」

「やっぱり覚えてな　動き回ったの！？　ま、まあでも大丈夫そ
うだし……えっと、手術はしてないけど。あの山火事後、色々あ
ったんだよ」

詩音が離れてくれた。神妙な表情である。

話し出された内容は、こうだ。

詩音の羽根が、龍神湖の水を使って山火事を鎮火させた。その後、
異変に気付いた真白が跳んできては事態の解決に協力し、俺を甦ら
せる方法を伝えてくれた。それというのも。

「私の中にある命みたいなものを、半分こする事だったの」

命の譲渡？　よく解らないが、何故そんな事が出来るのか。そう

いう話になった理由は。

エンフリオ・ブルイ

「蒼の世界卵は、そういう事が出来るんだって。誰かに命を分けてあげる事が出来る。でも欠陥品で、たった一人にしかあげられない迷わなかったけど。でもその後、誠君は暴れちゃって。一生懸命皆で押さえて、話しかけたんだけど反応なくて。あれは無意識だったんだね。痛かった？　つらかった？　ごめんね、苦しい思いさせて。でも私は、私達は誠君に生きていて欲しかった。だから、どんな責めも受けるよ。その覚悟がある。それだけの事をしたから。生きていて欲しいなんて、結局は誠君の意志を無視した我が儘だもん。私の心臓と誠君の心臓は繋がってる。どこにいても相手を感じられるようになったの。それを嫌だと言われたら、私は辛いけど……その代わり、私をどう扱ってもいいから。せめて、死んだ方が良くなんて事だけは、言わないで欲しいの」

彼女の頬を、涙が伝った。心臓が繋がっている　確かにそう言われれば、自分の心臓のすぐ横に俺のとは違う鼓動を感じる。実際、そこに心臓が二つあったりはしないけれど。

感覚の共有。詩音の生きている証明に、いつでも触れる事が出来るのか。

命の分割。こんな事まで出来るとは、やはり彼女は俺の予想を遥かに超える可能性を持っている。けれどそれも確かに詩音の一部で、彼女自身なのだ。

なら、間違ってもそれを否定する事はすまい。

「解った。色々俺の為に骨を折ってくれたみたいだな。ありがとう。でも、自分をどう扱っても良いなんて滅多な事は言うもんじゃない。女だろ。もっと自分を大切にしろ」

詩音は顔を真っ赤にした。

「お、女だから、こういう時にそういう事を言うんでしょ！」

「ん、よく解らんが、どういう意味だ？」

「知らない！」

「あっそう。じゃあいいや」

横になる。藤崎氏が来るまで休んでいようと思ったのだが、それを妨げるべく揺さぶってくる。

「何その対応！ ひどい、今の冷た過ぎますよねえ！」

「うーん、あと五時間……」

「五時間！？ 五分とかそういうレベルじゃないの！？」

話していただけなのに、予想外に体力を使っていたようだ。少しの気怠さを感じる。やはり起きたばかりで歩き回ったり、屋上で雨に当たっていたのも悪かっただろうか。

寝たまま、話を続けた。

「解る範囲で答えてくれ。知りたい事がある」

「う、うん。何かな」

「ブラインドネスはあれからどうなった？」

「あ えっと。あの時逃げて以来だね。そうだ、あれから二日くらい経つけど停死病……じゃなかった、人喰いの結界だっけ？ あの被害者はまだ出てないよ。もう出ないといいんだけど、どうなるだろうね」

油断は出来ない。あれはいつ起こるのが完全に不明だ。苦労して基点を破壊した効果はあったと思いたいが。ランダムな人選に、ランダムな間隔で発生する現象なのだ。警戒するべき事柄である事は変わらない。もしかすると法則性があるのかも知れないが、未だ判然としない。

「真白はどこにいる？」

「解らない。うーん、あの人は神出鬼没だからなあ」

「時雨とシヨリは」

「時雨ちゃんは今から来るよ。今まで誠君ちの掃除とかしてくれてたんだから、感謝しないとね。ヴィクトリアさんも一緒だと思うよ。あ、そういえばあの人の人だけだね。今、誠君ちに住んでるじゃない。帰る家もあのビル爆破事件で無くなったって言ってるし、どうだろう、あのまま置いてあげてくれないかな。幾らなんでも行くところないのに追い出すのは酷いもんね」

「そうだった、シヨリーが家にいるんだよな。まあそれは別に構わないんだけど」

確かに、行く当てもないまま街に放り出すなんて事はするべきではない。ましてや幾度も命を預けた仲間、世話になった恩人である。気が済むまでウチにいればいいのだ。

そんな事を言ったら、詩音が携帯を取り出して打鍵し始めた。

「えーと……」

嫌な予感がする。それにしても女子高生の打鍵速度というのは眼で追うのが難しい程だ。プッシュ音が絶え間ない繋がりで曲になっているようである。

「どうかしたのか」

「いや、今誠君が言った事を一言一句間違えずに送ったところ」

とんでもない事をしてくれた。恥ずかし過ぎるというものである。端的に言って自殺してえ。というかいつの間に番号を交換したのだろう。お化け屋敷に行く前あたりか。

しかし、同棲を呆気なく認可したものだ。普通なら倫理的に阻止してきそうなものなのだが。それを尋ねると。

「あの家を賑やかにするのが私の使命なのです」

それだけ聞けば、彼女が何を考えているのかすぐに解った。ずっと独りでいた俺を気遣っているのだ。常に誰かが居る家　おかえりが言えるように、ただいまが言いたくなる家にしたいと思っているのだろう。俺の家庭環境を慮おもんばつて。

家族の愛をずっと昔に無くしてしまった、俺の為に。

今更、親の愛を欲しいと思わなくなったのは、それがあつたからなのかも知れない。詩音と時雨が疑似家族として傍にいてくれた。いつも俺の事を考えてくれていた。それに勝る愛情はあるまい。全く、出来た幼馴染みだ。俺には勿体ない程である。

それに、と詩音は続けた。

「誠君ならそうすると思ってたし。放っておけないんでしょ、あの人の事」

「まあな。シヨリは色々と危なっかしい。世間知らずなところがある。それに独りだったらいいし、自分の事もよく知らないらしいし……」

虹と、名前。それしかルーツを辿る手がかりは解っていない。いつか家族を見つけられればいいのだが、街を守るという事に命を賭けているアイツが果たしてそれを望むかどうか。

そのうち、二人が来た。シーツを被って亀のように丸まっている俺の上に詩音が馬乗りになった場面を見て、硬直したようだった。何やらそれで一気に氣勢を削がれたらしく、眉をつり上げていた時雨は呆れた溜め息を吐いた。

「連絡もらって急いで来てみれば。何をしてるのよ、二人共」
シーツから頭を出して。

「時雨か？ 心配かけたみたいだな、何とか生きてるぞ」

「そうみたいね。まあ、良かったわ。皆に感謝しなさいよ、あとしーちゃんには、特に」

眼の辺りが赤く、腫れぼったくなっていたのには見て見ぬ振りを決め込んだ。時雨としても触れて欲しくない話題だろう。ただ、泣かせてしまったのはやはり俺であろうという予想は出来た。

「話は終わりがしら？」

シヨリが靴音高く、ベッドの傍まで来た。下をスラックス、上がワイシャツという姿というのもあり、纏う雰囲気 pins と緊張している。体を起こす。

突然、頬を張られた。

「起きて早々、動き回ったらしいわね。今、自分がどんな状態か解っているの？ 軽率に過ぎるわよ」

ぶたれる位は覚悟していたが、時雨あたりだと思っていた。まさかシヨリにされるのは予想外だったので驚きが先に立ち、答えられずにいる。

「今の貴方は人外にかなり近い。霊子を収束させる角を^{ホーン}発現出来る

体になった。それなのに人の容を保っている。それは本来なら人外のステージ？ 幻獣 以上が持つ霊知感覚器官よ。使えば膨大な量の霊子を、術式回路を通じて力に変える事が出来る器官なの。ただ人間でもある貴方は、その行使に耐える事は出来ない。術式回路が焼き切られて命を落とす。術式回路は精神に造られるから、精神を殺されるのと同義。

その右眼、もう以前のものには戻らないわよ。右腕もそう」

そうだ、思い出した。コイツは、人外だけを殺す殺人鬼だったのだ。俺の体が人外に近づいてしまった今、シヨリは敵になるかも知れない、のか。

人外に近づいた事は薄々感付いていた。あの夢の中での体験が真実なのだと、頭の隅で予感していた。

だから今、見極めるべきは眼の前の女が敵であるかどうかなのだ。「俺を殺すのか、シヨリ」

約束がある。俺が最後まで落ちる前に、止める。けれど、もしそれが敵わない時は 悪い予感がしたのだろう、詩音が体を緊張させる。止めさせようと体を乗り出してくるのを、視線と手で抑えた。「お前から見て、今の俺はそれ程に危険なのか？」

少し、シヨリの眼が揺らいだ。

「……ウエンスデイ機関が持っている高性能演算装置ペンデュラムがシミュレートした結果よ。間違いないわ。補足しておくと、ペンデュラムは演算や物理シミュレーションを必要とするもの……例えば飛行機の風洞実験、核兵器や核融合の仮想実験だつて行える。その高い性能を必要とされて国家プロジェクトに参加する事もある、世界最高峰のコンピュータ。」

計算に、ミスは、有り得ない」

最後は一句一句、自分に言い聞かせるようだった。

だがそれは機械が導き出した仮想のデータでしかないだろう。確かにコンピュータが打ち出した情報の信頼性は高く、それを前提とされるのも解らなくない。シヨリの仕事上、こういったデータを

元に動く事も多い筈だ。情報化が日常的に進む社会ではパソコンやその他情報端末の導き出す情報が、今や無くてはならないものになつてしていると聞く。情報がなければ動けず、目的を持って移動出来ず、行動する動機にならず、ひいては人が動かず、流通、経済も成り立たない。それ程に大きな価値を持つのも、また確かな事なのだ。俺一個人がそれに異を唱えて反対しても、只の子供の駄々にしかならない。

「しかし、それは角ホーンを使つてしまつたら、の場合だろ？」

今すぐどうこうなつてしまふ話ではない。少しばかり樂觀的な意見。自分が注意していれば危険はない。だがシヨリはそうは思わなかつたようだ。

「どうなるか解らないのよ！ 何が原因で角が出てきてしまつか解らない！ 今だつて眼に見えない速度で人外への変異が進んでるかも知れない！ 心臓に使われている世界卵エンブリオの片割れが、どう影響するかも解つてない！ 貴方、それでどうして、冷静でいられるの！」

言っている事は最もだ。失つた心臓に代替する部品が、俺の体にどんな影響を齎すかは未知数。けれど、それはもう起きてしまつた事だ。これからどうなるか解らないなんて、どんな事にだつて当てはまる。寧ろ、未来なんて解らなくて当然なのだ、と。

然れど。逆にだ。これからどうなるか解つてゐる事が、どれだけあるというのだろう。

あらゆる出来事は未来へと向かう。その行き先は誰にも解らない。ここで聞かされた、コンピュータが実証する情報は有益で、間違いがなく信頼出来るのは真実。

しかし、それが世界の全てかと言われると、そうではないと思うのだ。

何故なら、その情報も人の意志によつて選別され、使われるだけの道具だから。情報が持つ価値も人が決める。国や流通だつて結局は人が動かす。プログラムが世界を支配している訳じゃない。あくまで、ツールなのだ。

それに縛られて身動きが取れなくなつては、本末転倒というものの道具をどう使うかは人が決める。道具の善悪も人が決める。

「角は使わない。約束する。それに、もし俺がどうにかなくなってしまつても お前が止めてくれるだろ。シヨリ」

彼女ははつとして、泣きそうな顔になった。俯く。

「あ 貴方が血塗れで倒れているのを見た時、胸がとても苦しくて、おかしくなつてしまひそうだった。どうしてこんな事になったんだろう、どうして一緒に行かなかつたんだろうって、この二日間ずっと後悔してた。

もう嫌なの。あんな思いはしたくないの。だからお願い、もう戦わないで」

絞り出すような声が、胸に響く。落ち着け、感情に引き摺られるな。冷静に考えろ。ブラインドネスは、恐らくまだ生きている。逃げたままくたばる程かわいげのあるやつではない。放っておけば再起し、また母を蘇らせるのだと言い出すだろう。それにレイスの仕掛けた人喰いの術式だって完全に潰した訳ではないのだ。再稼働する可能性がある。クドウの件だって残っている。あんな危険な効果を発揮する薬物をばらまく行為、断じて捨て置く訳にはいかないだろう。

「俺は、ブラインドネスを殺す。それだけじゃない。ランツクネヒトの三人はいずれも生かしておける奴らじゃないと解った。奴らは害悪。そして奴らを手にかけようとする俺も、害悪」

善を成したい訳ではない。偽善でさえない。これは悪。故に、揺るがない。

「俺は、俺自身の悪を信じるだけだ。目的を果たすまで止まる気はない」

負けっぱなしだけど 全く、様にならないのは性分であろうか。「私がやるわ。ブラインドネスも他の二人も、私とウェンスデイが倒す。今までそうしてきたように」

「で、今までかかって倒せていないのが現状だろ。俺は一瞬とは言

え、あの男を上回った。証拠はその二人が見ていた。あと少し……あと少しなんだ」

「だから！ 心臓を失ってしまったんでしよう！ そのなりで良く言えるわね、もう戦わせないわ、力尽くでも止めるから！」

まだ、その時ではない。シヨールとの約束が果たされるまでの限界には程遠い。自分の意志で体を動かせるうちは、戦うべきであろう。それに。

あの男を止められるのは、俺にしか出来ないのだから。

「父親の不始末を、他のヤツに任せてられるかよ！」
その言葉にシヨールは眼を細める。

「子供が親を殺すなんて、してはいけないのよ！」

そんな道理は今更だ。二人のどちらかにでも聞いたのか、アイツが俺の父と解った故のこの態度なのだろう。戦いの場に親子の情が入る余地などないのに。

「俺にしか出来ないんだよ！」

「負けてるじゃない！ それに私だってやってみなくちゃ解らない！」

負けが込んでるのは事実である。耳が痛かった。躍起になって反論する。

「ええい、頭の硬い女だな！ お前に燕返しが破れるのかよ！」

「剣ごと叩き斬ってやるわよ！」

そういえばブラインドネスの刀、あの時に折れていた。使っているのは普通のものなのか？ だとしたらそれには可能性があるものの、角を出されては流石のシヨールもまずいのではないか。

「あいつだって角の力を使ってきたぞ！」

「出す暇なんて与えない！」

シヨールには遠距離からの攻撃があつた。剣の冠……十二本もの剣が放たれば、確かにそんな暇はないのかも知れないが。

……あれ？ シヨールのが俺よりも有利に戦えるような気がしてきた。

「認識否定だかつてのはどうする！」
フラインド

「そ、それは……」

言い淀んだ。やはりこれだけはどうしようもないのか。

「何とかするわよ！」

もう反論も何もなかった。ただ言い返したいだけであろう。

「お前じゃ無理だ、殺されちまう。俺とアイツがやりとりしてるのは千分の一秒の世界だぞ。刹那と言われるものだ。その刹那の反応が遅れるだけで、こうなったんだ。認識否定とかいう攪乱をマトモに受けるお前には、到底無理だよ」

真実、俺には認識否定がどういうものかは解らない。逆に理解出来ないのだ。だが他者には恐らく、それがとてつもない驚異なのだろう。特殊な性質を持っていると、それで窺い知るだけである。視えなくなる。故にブラインドネス。

詩音が、何の気なしに言った。

「協力したらいいんじゃないの？」

時雨が続けた。

「二人でやれば負担も半分じゃないの？」

俺は、思わず脱力する。軽い笑いさえ浮かんできた。

「ふ、はは…… あはは、」

次第に堪えきれなくなってくる。だって盲点だったのだ。それこそ、一人でやると盲目的に考え込んでいたのが馬鹿らしくなった。

「ハハハ　その手があった、何で気付かなかったんだろっ、馬鹿だなあ、ははは！」

シヨーリは呆気に取られつつも、俺への言葉を止めない。

「な、何で笑うの！」

俺には仲間がいる、という事を思い出したからだ。独りではないと解ったからだ。ならばその武器、最大限に活かしてこそその人間であろう。人の間で生きるから、そう書くのだから。

俺は人外に近づいたかも知れない。けれど中身は以前のままだ。

この心と意志だけは、他の何かに変わる事はない。

「悪かった、シヨリ。俺を心配してくれたんだよな。守ろうと思ってくれたから、ああ言ったんだろ？ 苦しませて済まなかった。仲直りの握手をしよう」

彼女は戸惑う。いきなり冷静になられて反応に困っているのだろう。しばらく考えてから、考え直したのか、おずおずと手を伸ばしてきた。

その瞬間。いざ触れようという時になって、シヨリは声を上げて倒れてきた。どうやら後頭部に何か当たったらしい。抱えるようにして受け止める。床に何か転がった。

リンゴである。

「焦れたいの。戦わせたくないと言いながらも手を取ろうとする。力尽くで、というのは口だけじゃな。何とも甘ったるいものじゃ。そうは思わんか」

袖口から新しいリンゴを取り出して、時雨に向ける。白い着流しが眼に眩しい。

「食うか？」

「いえ、遠慮しておきます……」

真白である。時雨の血が持つという破邪性だかはいいのだろうか。アイツにも少なからず いや、人外の最上位種だからこそ効果は高いのではないのか。それともそれを無視出来る程、時雨のそれは真白にとって軽いのか。

「ブラインドネスに手傷を負わせたようじゃな。そして人喰いの術式もその数を五つまで減らした。なかなかの功績じゃ。ヴィクトリア、そやつは命を賭して街の驚異を退けたのじゃぞ。もう少し評価してやつても良かるうに」

シヨリとは反対側、窓際に来てはベッドの縁に腰掛ける。

「それとも慕っておるからこそ、かの。まあ何でも構わぬが」

言われて、彼女は顔を真っ赤にした。黙って俯くものの、俺を睨んでくる。何故だ。

「体の調子はどうじゃ」

「え、ああ。まあ普通かな。起きてからすぐ動けたし」

「腹が減ったりは。右腕は痛まぬか。少しでもおかしい所があれば
言え 喉が、乾いたりは」

「何だよ、お前も心配性だな。大丈夫だよ」

真白は身を乗り出してきていた。引き下がり、そうか、と頷く。
リンゴを渡された。何個持っているのだろう。

「ああ、そういえば詩音が俺を助ける事が出来たのも、お前のおかげだってな。助かった、礼を言わせてくれ」

「それには及ばぬ。儂にも未知の事であつたからな、失敗する可能性もあつた。此度がうまく言つたのは、天命かも知れぬ」

真白は、俺の心臓がある あつた場所に手で触れた。

「奇蹟のような体じゃ。人間と人外のバランスが崩れるのを、世界
卵の片割れが辛うじて止めておる。類い稀な術式回路も有する事となつた。だが誤解するでないぞ、お主は強くなつた訳ではない。寧ろ、以前より危うくなつた」

「危うい？」

「ブラインドネスの認識否定にも勝る特異性を持つてしもうた。以
前の儂と同じ力、怪異殺し。万物に宿る靈子を、そのものを殺す黒
い影を生み出す力じゃよ。まあ同じ力とは言つたが、事象改変能力
まあ威力のようなものは古代種のエイヴィヒカイトに比べて程
遠い。劣化が激しく純度も落ちておる。代を重ね過ぎた所為じゃろ
うな。しかし、大きな力じゃ」

「靈子を殺す。結構使えそうじゃないか」

俺の一言に、真白は眼を鋭くした。この甘い認識を正そうとして
いる。

「侮るな。人には過ぎた力じゃ。使う毎に人外側への変質が進むぞ。
じゃが角に比べればまだマシじゃ。いざという時は迷わず使うが良
い。尤も、世界卵が保つておる均衡を破る事になりかねん。頼り過
ぎは良くないがな」

ヴィクトリアが横合いから口を挟んだ。

「使わせないわ、そんなもの」

「やれやれ。恋は盲目とはよく言ったものじゃ」

「私は冷静よ！　ちゃんと物事が見えているわ！」

今日のシヨールはカリカリしている。ともあれ、気になっている事を尋ねた。

「真白。世界卵つてのは何なんだ。詩音が俺と命を共有する事になったそれは、どうしてそんな事が出来るんだ？」

きょうかいれいき
「境界霊基」

端的に。そう答えた。

「人間ならば、知恵の実　　とても言うのかの。古代種の心臓じゃ。その劣化複製品と呼ぶべきじゃろう」

真白は、リングを一囓りした。

「古代種の心臓！？」

「を、人間用にアレンジしたものじゃ。人の技術ではそこまでのものしか造れなかったようだな。それでも藤崎の娘が持つ羽根を使う為の術式回路は、それを基部として強化拡張されておる。もう片割れを失っておるから、右側の羽根は出せぬじゃろう」

「さて、これで解つたろう。お主はこの世でも希少な例となる体を持つ事となった。ペンデュラムでもお主がそうなる事は予測出来ぬものじゃった。どういう事が解るか？」

瞬間、個室のドアが開かれて数人がなだれ込んできた。それら全員が懐から拳銃を取り出して、俺、詩音、時雨に突きつけてくる。

「経過も観察したいしな。調べさせてもらうぞ。もう良からう、ヴィクトリア？」

何故、そこでシヨールに選択を仰ぐのか。

その理由は後に知る事となった。シヨールは、俺や詩音、時雨と一緒に居られる時間をせめて少しでもと、この時まで作ってくれていたのだ。

第六章 ブルー・ハート

高倉市のランドマークとなっているスカイヒルズタワービルは、その地下に広大な空間を有していた。市民が思っているような普通のビルディングとは違ったのだ。俺は病院で拘束された後、そこに連れていかれる事となった。

地下の何階層かは解らないが エレベータ内部のどこにも表記されていない かなり位置が深いという事は解る。背後にいる数人にここは、と尋ねた。

アサイラム。避難所という意味だ。知れたのはそう呼ぶらしいという事のみ。両手を三重の手錠で拘束されて、手が重かった。エレベータが到着を告げる。扉が開く。全体的に白い内部だ。爽やかめの芳香剤の匂いが鼻腔をくすぐった。研究所のようにも思える。ふと空気の流れを肌を感じた。地下だからこそだろう、空調関係はしっかりしているらしい。

出る、と促されて向かった先は 背中には拳銃を突きつけられている 奇妙な部屋だった。丸い環状のものが縦に置かれていて、そこに小さなベッドが頭を突っ込んでいる。病院の機材にもこんなものがあつたような。確か、MRIとかいうものがそうだ。

寝かされて、様々な測定をされた。体に付けられた何本ものケーブルが病的に映り、俺はもう助からない不治の病なのでは とうような想像さえしてしまう。ベッドを前後に移動する環は体の断面図を取るものらしかった。

操作を担当していた研究員が呟く。よれよれの白衣が働き詰めの様子を伺わせる。

「信じられない……」

彼の言葉に耳を傾けた。機器の低い音に混じりそうな小さなものなので、集中する。

精神の神経配置がバラバラ。人間なら体を動かす事も出来ない状態

態で、更にこれでは術式の使用は絶望的。霊子と精神を反応させる事が出来ない。その機能が失われている。よって霊子適正はマイナスの値を差すが、右手からのみ恐ろしく高い数値の霊子適正を検出した。これがプラスとなつて相殺している。しかしこれはある一つの事象改変能力に特化されている。変異的な霊知因子。グノーシス・ファクター前例が無い。そんな独り言をぶつぶつと言っていた

「あの朝霧の巫女もそうだが……」

考えるよりも速く言葉を返していた。

「時雨がどうしたって？」

傍に居た護衛が拳銃を突き付ける。眼の力を弱めない俺を見て折れたのだらう、研究員は機器を操作しながらも暇潰し代わりのように、話し出した。

「本来、人間は主題構造を一つしか保有しない。精神の、それまでの経験によつて得た心象世界はどうやって一つしか存在出来ないからだ。銀髪姫もそう。例外はない。いや、なかった。今までは。あの子は違う。二つの主題構造……いや、もしかしたら四つのそれを保有している可能性がある」

複雑な精神。相反する感情。ダブルバインド。

だが、それでも説明がつかないのではないだろうか。本当にそんな事が有り得るのか？ 四つもの主題構造……精神が四つあるようなものか。確かに驚くべき事態だ。つまり、四系統の術式を扱えるという事になるだろう。

多彩な術式使いとしての、その可能性 想像もつかず、底が知れない。それ程のもの。

「あの子、間違いなく術式の天才だよ。神懸かつてる。意識容量も半端じゃない。今、銀髪姫が術式のレクチャーをしているところだ。もうすぐ結果が出るだろう。もしかしたら彼女をも超える才能だ。ああいうのを言うのかも知れないね。先天的戦闘好適種^{下ミネーター}つて」

それは生まれ付き戦闘に対して好適性を示す、特別な存在だという。しかし、時雨が戦う そんな事は考えた事もなかった。けれ

どせめて自衛の為の力くらいは持つべきなのかも知れない。俺や詩音が傍にいない時、自分の身を自分で守れる程度には。いつ、誰が襲って来ないとも限らない非日常にいるのだ。戦う力を持つて損はない。

その考えは、大きく外れる事となった。

後に、病院の個室に似た場所　ベッド一脚、ソファ一脚の白い部屋。蛍光灯が少し暗めで眼に痛いという事はない　へ案内されて、閉じ込められていた俺に面会してきたショーリは。

「焼け死ぬかと思った」

部屋に入ってきて早々、そんな事を言った。

「一体どうした？」

「あの子、人外を召喚したのよ」

意味がよく解らなかったので、続きを聞く。様子を見るにただ事ではないようだ。銀髪のポニーテールが頼りなく揺れる。

「病院で言ったでしょう、幻獣という人外のステージ？。歴史上から姿を消して長いから既に概念上のものと思っていたけれど、実在していたとはね。神話とかファンタジー童話にも出てくる、ユニコーンとかドラゴンとか。ああいうのよ」

窓の外を見て　実際それは青空の映像を写された擬似的な窓
そんな事を語る。

「突拍子もない話だな。それ、幻覚を見たとかじゃないのか」

あまりの話に、俺はショーリが夢幻でも見たのではないかと危惧したのだが、違うと首を振られた。

「映像記録も確認した。他者に幻影を見せる能力などではないわ。あれは本物。室内の気温もかなり上昇した。つまり虚数言語に干渉して実数化を行った。霊的作用現象を引き起こしたという事。人外の頭に調律震角も確認したわ。間違いない。それで聞きたいのだけど。彼女の家って神社なのよね？」

朝霧神社なのは違いない。何せ生まれてからの付き合いだ、時雨が俺を騙していない限りは　いや、そうだ。それだけではない。

退魔の朝霧。かつて人外を抜い除けていた、人外退治の専門家だった筈ではなかったか。そう話すと、シヨールは頷いた。

「成る程。道理で、あんなものを呼び出せる筈だわ。優れた退魔師の血を引いているとすれば、あの意識容量も術式の才能も納得がい。く。そういえば、安倍春秋が朝臣とか何とか……」

「さつき、焼け死ぬかと思ったとか言ってたよな。時雨は何を呼び出したんだ」

「火の鳥よ。真白が言うには、日本神話に出てくる　四神・朱雀すざく」

炎　命を育み、導き、または殺し、或いは天へと送ってきたもの。人が生きる為に炎の発見は必然だったという。齎された恩恵は計り知れない。その側面では以前の火事のように、あまねく生命を死に追い遣る暴力的な面もある。

熱。生きている証明。あの時の火照りを思い出す。胸の中　蒼い心臓を押さえる。

きっとアイツなら、今の自分に不安がっていると思ったのだ。

「時雨に会いたい。出来るか？」

「無理よ。君はここから出られないわ。前例の無い個体として、これから一週間は拘束される」

「一週間！？　そんなに長い間会えないってのか、あいつが弱っちまうよ！　頼む、時雨は本当は弱いんだ、言葉だけでも　そうだ、電話だけでもいいから」

シヨールは首を振る。俺の首に付けられた輪を見て、眼を逸らした。

「お願い、言う通りにして。でないとその首輪の爆弾が爆発する事になるわ」

脅迫染みた内容だった。あまりの事に声が裏返る。或いはその効果を狙った言葉だったのだろう。

「ば、爆弾！？　これがそうだったのか！？」

あの研究室でベッドから起こされた後、首に付けられたもの黒い環だ。真ん中に赤のラインが一本通っている。首に対して少し

だけの余裕があり、付けていて苦しいという事がないのが幸いだっ
た。

「逃走防止用の枷。彼女達にも同じ物が施されているわ。その、言
いは悪いけれど……」

前例が無い検体として。シヨリはそう言った。俺はどうしてか
裏切られた気持ちになったが、必死に抑える。

「どうしてだ、何故こんな事をする。こんな事をしなくても俺は逃
げない、真白やお前を信じてるからだ。組織なんてものに尽くす義
理はないけど、体を調べられるのも、色々試験されるのも我慢出来
る。でもこれじゃ、ただの実験動物扱いだろう！ そんなに俺達が
信用出来ないのか、お前達は！」

シヨリは真っ直ぐに俺を見た。

「私が決めた訳じゃない！ 私だって、そんなものすぐに外してあ
げたい！ けれどダメなのよ、管轄が違うから……権利がない。組
織は、大人は、そういうもののなの」

「大人って何だよ」

俺の言葉に、シヨリは答えなかった。苦痛を噛み締める表情を
見て、無理矢理感情を飲み下す。燻る憤りを、彼女に向けて吐き出
してしまうのは間違っていると感じた。

深呼吸を一つ。ここでシヨリを傷付けて、どうするというのが。
そんな愚物に成り下がるつもりか。

「まあ、いい。でもこうして言葉を交わす事は出来るんだよな。な
ら頼む、お前が時雨の話し相手になってやってくれ」

「わ、私に頼むものなの、それは。それに話し相手って、何を話し
たらいいのか解らないし」

「お前しかいない。お前になら任せられる。だって、もう時雨とは
友達だろ、お前」

シヨリは息を呑んだ。やはりこれも、彼女にとっては未経験の
事なのだろう。友達ではない、と否定して来ない事に僅かながら安
堵する。

「友達。解らないか？　なら尚更だ、面と向かって腹を割って、話してみるといい。内容は何でも良いんだ。そうだな、例えば……髪の話。服の話。学校での話。仕事の話。それと　恋の話、とか」

コイツにはもっと人と触れ合って欲しい。これは俺の身勝手な願いだが、きっと彼女を大きく成長させてくれると思うのだ。時雨にその強さを少しでも分けてやってもらえたら、と思うところもある。

「恋の、話」

鸚鵡返しに呟くショーリに、頷く。多少なり関心が向いたようだ。良い傾向である。ポジティブな思考をしていた方が、こんな閉鎖的で無機質な場所に閉じ込められている状況でも幾分かの救いにはなるだろう。

「女は好きらしいぞ、そういうの。あと、恋がこういうものか解ったら、俺にも教えてくれ」

「え、ええ……それと、藤崎さんについては、私もまだ知らされていないの。多分明日には博士がここに来ると思うから、その時に聞いてみて」

返事を返すと、ショーリは去っていった。改めて部屋を見回すと、テレビもラジオも新聞もない。時間を潰せるものがないので、少し考える。

やがて出た結論が、この体はどの程度の身体能力を持っているのか、という事への興味だった。筋力トレーニングでもして過ごす事にする。

翌日になつたらしい。体内時計に従って睡眠を取ったところ、やはり悪夢を見ていたようだ。体中が汗まみれだ。最近、眠るのが怖くなってきた。死に苛まれ、死人が俺を殺そうと這い寄ってくる夢を何度も見せられては、こつもなる話であろうが。ここにはないが、今鏡を見たら眼の下に隈でも出来ている事だろう。起き上がって少しした頃、扉が開いた。

ちなみにこの扉、マンシヨンのもののようなオートロック式であ

る。更にタッチオープン式で、この施設のコンピュータが管理しているらしい。出ようと思っても指紋登録をされていなければ許可されず、出られないという理屈である。

部屋に入ってきたのは、少女だった。ぶかぶかの白衣、小学生のように小さな体型、亜麻色の髪にスクエアレンズの眼鏡……この施設には不釣り合いなあどけなさだった。俺を見て微笑を浮かべる。警戒させない為であろう。

「初めまして、西村さん。私はエレハイムと言います。皆からは博士と呼ばれてます」

ショーリの言う博士、で合っているのだろうか。どうにも、そういう人物には見えない。するとその子供博士は眉を吊り上げて。

「あ、疑ってますね！ その眼と表情、馬鹿にされてるのが解ります、君、失礼ですよ！」

胸に抱いたファイルフォルダ、白衣の下に覗く女性もののスーツ姿。そういった部分からも学者らしい装いは窺えるのだが、やはり幼過ぎる。俺の腰程度しかない背丈で博士とは、こちらが馬鹿にされていると受け取っていい材料だろう。

人差し指を突き付けて。

「な、何とか言ったらどうなんですか！ 謝罪もしないなんて、紳士として恥ずかしくないんですか！？」

しかし裾を引き摺っている事と言い、腕のところも捲っている事と言い、サイズが合っていないものを着ているのは何故だろう。亜麻色……明るめの栗色とも言い換える事の出来る髪は、肩を過ぎたあたりで切り揃えられている。見たところ、容貌は整っている。申し分ない。将来が楽しみな逸材である。そう思っていると手を引っ込めて、眼を逸らされた。小さく震え出す。

「くっ……ま、負けないもん、ファーストコンタクトで負けたら、後はそれを引き摺るだけになっちゃうんだから。ここは一発、ガツンと、」

頭に手を置いた。腰を屈めて視線の高さを合わせる。合点の行く

答えを導けたのだ。

「もしかして迷子か？ ご両親とはぐれちゃったんだろ。博士ごっちは面白そうだけど、あんまり人をからかうもんじゃない。俺は人を待っているから、早く出て行った方がいいぞ」

呆然、赤面、そして憤怒という順に表情が変わった。右手を振りかぶってくる。俺は頭に置いてある手に少し力を込めた。少女はその場で手をぶんぶんと振る。何かを喚いていた。

「馬鹿、ばかあ！ こ、子供じゃないもん、もう大人だもん！ それに偉いんだから！ お、思い知らせてやるうゝ！」

後から続いて入ってきた白衣の男性が 時間に遅れていたらしく急ぎ足だった 慌てて仲裁に入った。

「おお！？ 君、博士に何を！ 離れて！」

金髪の蒼眼、顔立ちも良い、細身の青年だった。ボディガードとしては頼り無い体格だが、見ていると立ち振る舞いに隙が無い。俺と少女を引き離す際も、俺に背中を見せながら、下手な動きをすれば容赦はしない、という気配が漂っていた。

どこか英国紳士を思わせる穏やかな、しかし西欧風の生まれを垣間見せる目元だった。

しかし先の言葉に気を取られ、視線は再び亜麻色の髪へ。

「博士？ ああ、保護者の人」

「違います！ 真正正銘、私が博士なんです！ ウェンズデイ機関の霊知学研究部部长！ 偉いんだから！」

男性が事情を察したらしく その早さから、こういった事が多い事を窺わせる 言葉を発した。

「いやあ、クレイン女史は見た目はこんなだけど、海外の一流大学を飛び級で卒業した天才なんだよ。誤解しないでもらいたいね。今は没落したとは言え、オリジナル・セブンの一角、クレイン家の御令嬢なんだから」

天才。この見た目で大学を卒業とは恐れ入る経歴である。実年齢は、と聞くと少女は失礼さに反発したが、青年が答えてくれた。十

二歳だという。小学生である。

目眩^{めまい}がした。あまりのショックに言葉を継げない。少しの後、気を取り直してかかった。

「そうか……それで、アンタは。さっきから随分、隙がないけど。技術屋にしては振る舞いが洗練され過ぎている。武道……いや、実戦を経験してるな」

少女が喫驚の声をあげた。

「体軸がブレない、こっちに体を向けたままだから、俺がどんな行動をしてもすぐに動けるようにしているのが解る。一足の間合いであるこの距離を維持している事からも、警戒しているだけの鈍い技術屋には見えないな。そう、一步で懷まで踏み込めるように揃えた、その体の開き具合、足位置からして。

アンタ、槍使いだろ」

青年は眼を細めた後、面白いものを見つけたとばかりに笑い声を上げた。

「凄いな、一目でそこまで解るのかい。流石は西村源斎のお孫さんだ。良い眼をしている」

「爺を知ってるのか。アンタ、名前は。それと流派」

しかしその答えを待たず、少女が割り入った。

「ストップストップストップ！　ここ、そういう場所じゃないですから！　むさ苦しい話なら訓練場でして下さい！　それと貴方、西村さん！　先に私に言うべき事があるんじゃないんですか？」

得意げに胸を張るが、謝罪するつもりはなかった。

「ああ、そっぴや博士なんだったか。それで、俺に何の用だい、子供博士」

途端に憤慨した。主な原因は、恐らく最後の言葉だろう。

「こ、子供じゃないです！　もうレディなんですから！」

青年に窘められる。折れまくっていた話の腰がようやくそれで戻される事となった。不満そうな表情が名残となって貼り付けられていたが。刺々しい声音で自己紹介がされる。

「私はエレハイム・クレインです。ここの霊知学研究部で部長を勤めています。こっちはフレデリック。私の助手兼ボディガード」

フレデリックという青年が握手を求めてきた。応じる。子供博士の方はと見ると、つんと横を向いたままだった。

「それで。俺に何の用なんだ」

言葉に反応して、再び向き合う。

「単刀直入に申します。貴方達が真白と呼ぶエンハンスコード・エヴァが現在の行動目標としている、マンイーターの術式があります。その基部となっている紋章を、あと一つだけ破壊して欲しいのです。教会、廃屋の地下、そしてブラインドネスの心臓に宿っていた大径が破壊されての三つ。あと一つだけ、お願いします」

ブラインドネスの心臓にあったのか。これについては驚かざるを得ない。体に宿らせる事が出来るものなのか。いや、ブラインドネスは半人半鬼。俺の心臓が世界卵であるように、あの男も何かしら体に秘密があつておかしくはないのだ。成る程、だとしたらあの時の行動は僥倖であつたと言えるだろう。命を賭けて相討ちにした価値はある。最も厄介な敵の心臓なのだ。病院で真白がやけに俺を評価していたのも頷ける。

しかし、術式の破壊については改めて他人に頼まれるでもなくこなすつもりだったが、どうやら今までとは話が違つらしい。

「半数が破壊されれば活動は一時休止状態にまで追い込めます。ここが円卓の中心なので、レイスは大規模な術式行使が今まで出来なかったのです。それに加えて半分が失われたとなると、人間で言えば半身を失つたと同義。彼も諦めるでしょう。」

そして行動時には、必ずあのお二人を同行させて下さい。ガーディアンブレードを持つ藤崎さんと、龍眼の朝霧さん。相手からすれば背水の陣ですから、必ず何かしらの妨害を入れます。良いデータが取れる事でしょう」

「待て、二人を戦わせろって言うのか？ そんなのは拒否させてもらつ、アイツらが戦う必要なんかないだろう」

「それがあるのですよ。以前の爆破事件、覚えてらっしゃいませんか？」

シヨールが住んでいたという最上階付近が、あのアナスタシア・ラウ・キルバインによって爆破された事件だ。それはもう鮮明に覚えている。俺のせいで引き起こされたも同然なのだ。忘れたなどとは口が裂けても言えない。

「エンハンスコード・ダブルトリガーは彼女の妹も同然です。あのガーディアン・ブレードに対抗出来るのは、同じガーディアン・ブレードのみ。あれがどういうものか、その詳細をご説明しましょう」
エレハイム・クレインは手元の書類から一枚抜き取って、俺に手渡した。

「スレイグマ聖痕というものがあれの発動条件に組み込まれています。肉体と精神は同調しているので、体積も同じ。そこで肉体を僅かに削って精神を剥き出しにし、術式回路を外部に露出、そこからあのブレード・エレメントを具現化させる。尚、プロトタイプはその時に空間インフィールド・エフェクト断裂の域内作用現象を発生させますが、これは単なる副次的な効果でしかありません」

あれが主なものでない。では、何を目的とした羽根なのだろう。いや、その答えは前に出ている。レコードの破壊だ。空に浮かぶ巨大な術式の環を断ち切る為のもの。真白が敵対していたという、神になるうとしていた集団が目論んでいた計画の主目的がそれだった筈だ。

「マルチタイプのウエポンデバイス形成による、距離を選ばない戦闘行動です。そして複層型防御術式の常時展開。単独で戦況を変えらるという触れ込みはこれに由来しています」

俺がぼかんとしていると、要約してくれた。

「つまり、変形する武器で戦える。それによって距離を自由に換えられる臨機応変さと変則性、戦車砲の直撃にも耐えられる強力な防御能力があの人に与えられた目的。データの抽出は終わっていますエンブリオが、心臓の代替部品となっている世界卵共々、実働データが欲しい

のです」

「……まるで、モルモットを扱ってるような口振りだ」

態度の硬化に敏感に反応したフレデリックという青年は、子供博士を庇うように立った。

「落ち着いて。君だって彼女の事を知らないだろう。どんな事が出来て、それをどう使えるのかという事を知るのは、どう抑えて生きていくかという事にも繋がる。君達は力をセーブする手段を学ばなきゃなんだ。あの朝霧という少女だってそう。君にも、それは言える」
「だから、モルモットに身を竊せと。何をされても文句を言わず、忠実に従え。自分の役割を果たせ。そう言っただろう、大人つてのは」

「これに対する彼女達の意見を聞きたいか？」

意外な言葉だった。俺のところへ来るまでに、もう二人に話を通していたとようやく気付く。

「彼女達は大人だよ。君よりもずっとね。二人共同じ事を言っていた。君を守る為に、やる、とね。なのに君はどうだ。被害者である事に胡座をかいて、反対の言葉を口にするだけ。確かにそれは一般的な見解に当てはめた場合、正しいだろう。だが、一般的な立場の優劣を持ち出して、被害者で居続ける事を状況が許さないのさ。能力、術式、超常現象や神秘には人権も何もない。人の法律は何の役にも立たない。」

それでも君がやらないというのなら、銀髪鬼と白のエヴァがやる。彼女達を、君の幼馴染み達が補佐する。我々も手助けをする。それだけの話だ」

「俺達を成長させよう、というお題目は一見聞こえが良いがな。結局はそうやって利用したいだけなんだろ。組織つてのは随分悪い事を考える」

「それについては耳が痛いね。しかし西村少年、冷静になって考えてみるといい。君達は力をセーブする方法を学べる。それはこの先、日常に戻れた時に大いに役立つだろう。我々はそれへの協力を惜し

まない。そしてそれはこちらにとっても貴重なサンプルデータを得られる事になる。ギブアンドテイクさ。制御方法の会得と専用に訓練する場を持てるなんて、ここ以外にはないぞ。それとも彼女達諸共、以前のように足元が定まらず、何の背後もない宙ぶらりんの状況がお好みかい？ その所為で今のような状況に転がり込めた君だ、また奇蹟が起きれば、どこかの組織に運良く拾ってもらえるかもね」

最後のは挑発だ。乗ってはいけない。だが言っている事は筋が通っている、最後に皮肉も混ぜてくる程、向こうには余裕がある。解っている、俺にはこの条件を飲むしか方法がない。しかし彼女達を戦わせる事はどうしても避けたいのだ。

「俺が彼女達よりも戦う力が上だと示せば、二人が実戦に巻き込まれる必要はなくなるのか？」

これには子供博士が反論した。

「あくまで汚れ役は自分一人で全て被るという訳ですか。お涙頂戴の良い話ですが、今の貴方にどれだけの事が出来るのでしょうか。生きているだけで精一杯、息をするだけでも辛いのではないですか？」

「憶測やデータだけで判断するのは止めてもらいたいね。言っておくが絶好調だ。自分でも驚く程でな。寝る前まで試していたところだよ。一時的に人間の限界を超える事も出来る。女二人程度の働きは、お釣りもつけて約束するぞ」

子供博士 エレハイム・クレインは満足げに頷いた。俺は続く言葉に憤慨しかける事になったが。

「解りました。そこまで言うのなら相応しい場所を用意しましょう。彼女達を倒して下さい。場所はアサイラム第一訓練場、武器はこちらの指定したものを使ってもらいます。より正確なデータを取りたいので。ルールは相手が戦闘不能になるか、こちらが中止を言い渡すまで。続行不可能な程の怪我を負わせた場合は強制的に中断させてもらいます。」

如何ですか、西村さん。己の存在証明に、これ以上のものはないと思いますか」

二人と戦え、というのは全く以てふざけた内容だが、こちらが啖呵を切って提示されたルールだ、恥知らずに従わないという訳にはいかない。そもそも相手はあの二人、戦う力なんてない少女だ。大丈夫、手加減すれば怪我也負わせずに済む。只の女子高生だった二人に大した戦闘力はない筈だ。殺す危険も有り得ない。

結論として、俺はその先入観を大きく改める事となった。

数時間後に組まれた戦闘訓練という名目の試合は、詩音が相手だった。俺と彼女は方眼上に白いタイルが敷き詰められた訓練場という場所。床、壁、天井全てがそれだ。一つのマス目自体は縦横二メートル程の大きな物。で相対した。同じように片耳に骨伝導マイクフォンというものを付けている。これは壁四方の上部に位置する観察室からの指示を聞き逃さない為である。こちらを覗けるようにガラスで仕切られていた。防弾という話である。

とても地下にあるとは思えない空間だった。高さは目測でおよそ十五メートル、縦横はそれぞれ五十メートルに届くだろうか。能力や術式、銃火器の使用も考慮された広さと聞いている。

マイクフォンから声が届く。あの子供博士のものだ。

『お二人の衣装はこちらで用意させてもらった軍用のブーツとオリブドラブの戦闘服です。まあ頑丈な作業着とも思っして下さい。

周囲も合金製の強化コートに覆われているので気にせず暴れて下さって結構です。西村さん、用意は良いですか？』

「その前に聞きたいんだけど。アイツの武器、何？」

十メートルは離れている詩音が手に持っているのは、今までに見た事もない、斧のようなものだった。

『先日お話した、彼女が自分の精神に組み込まれていたDMコードゴーストを読み取って具現化した兵器です。色々な武器の特性を持ったものだと思っただけだよ』

「オイ。聞いてないよ、それ」

『私達も驚きました、成功したのはつい先程ですから。丁度、私と

西村さんがお話していた最中ですね』

自分で武器を造った、という事になる。しかし、それそのものは全く知らないものでもない。類似している武器にシヨリーの剣ソード・オブ・クラウンがあるが、それと同じ術式兵装という分類だろうか。だが、そんな直前に出来た武器を自在に使いこなせるか疑問だ。見ると、詩音の顔には自信ありげな微笑が浮かんでいた。あまり似合わない。

「ビックリした？ 実はコレ、使い方が頭の中に浮かんでくるんだよ。それにスタンモードって言って、非殺傷 相手を傷付けない攻撃も出来るみたい」

長い柄を持った斧を軽々と振り回す。両刃はどこか機械的な造形をしている。刃の狭間に蒼い宝石のようなものが埋め込まれているのが特徴的だった。あんな物を振り回して非殺傷もないものである。俺が持っているのは二代目春光だ。かつて骨董屋でモデル・ウルフを倒す時に使用した金色の刃を持つ刀である。ここの組織が回収していたらしい。

それにしても、あれだけ大きな斧 全長は彼女の身長を少し上回る を難なく振り回す様子には違和感を禁じ得ない。どうなっているのだろう。彼女自身もアレを形成して間もない為か、独り言を零していた。

「うーん、羽根みたいに軽いなあ。なんか頼りない……でも重量はしっかりあるっぽいし」

子供博士が詩音に話しかける。通信内容は相手にも通るようになっていたようだ。

『そのマルチウェポンデバイスは使えそうですか？ 登録されていたデータによると、形を変えるらしいですが』

「え？ えっと、やってみます！」

詩音が蒼い宝石を覗き込むと、それが起こった。裏刃が起き上がり - 先端側を基部として開いた形 そこから露出した宝石周辺に蒼い粒子が集中、大きく弧を描いて伸長した。その全体像は一見

すると。

「鎌だ。長いな。かなりリーチがある」

アストラル・フィックスド・ブレード

『成る程、ハイペリオンと同じ性質、靈子収束型固定刃ですか。西村さん、その刀で良かったですね。ああいった靈的概念は同じ性質のものでしか受け止められません。物理的に防ぐのは不可能です。』

術式による事象変移を刃に固定したもの、らしい。折れず、欠けず、曲がらない。恒常的に斬り続けられる刃とは、剣士として思わず肝を潰してしまうというものだ。

そして、その鎌は更に変形する。鎌の刃を造っている反対側にある表刃が、長柄の根元付近までスライドし、展開されていた裏刃が回転して 基部は蒼い宝石らしい 表側へと連結される。一本の剣になった。

「こ、今度は剣か。反則的な変則さだな」

詩音も思わずと言った様子で感嘆の声をあげている。新しい玩具を買ってもらった子供のようだ。

これは、確かにとてつもない可能性を持っている武器だ。重い一撃は斧が担当、リーチによって優位を作る鎌、そして羽根のように軽い特性を最大限に生かせる、素早い連撃を担当する剣。上手く立ち回れば戦闘中に正面から奇襲をかける事も出来るだろう。武器そのものが変わるといえるのはそれだけ大きなアドバンテージになる。

正直、刀一本では不利な気が……いやいや、と首を振る。俺は何の為にここにいるのか。

『ルールは先日にお伝えした通り、どちらかが降参するか、戦闘続行が不可能と見なされた場合に勝敗が決まります。時間は無制限。今の自分に何が出来て、何が出来ないのかを知る良いテストになる事でしょう。充分に試して下さい。お互いにとって有意義な時間になる事を祈っています』

詩音が眼鏡を外した。髪と眼が蒼く変色する。

「誠君、今の私、ちょっと強いかもよ！ 女だって戦えるんだから

！

「調子に乗るな、馬鹿。力は人を溺れさせる、危うい面を持つんだ。今のお前は、少し、危険だな」

負ける訳にはいかない。この先詩音が道を違えない為にも、ここで力に吞まれないように叩いておく必要がある。過剰な自信は過信となり、慢心、或いは驕りの原因となるからだ。しかし、詩音の続けた言葉にはその心配を払拭させるものがあつた。

「でも。力があれば、あの子達も守れた、よね」

狐。ライオン。驢馬に蠍、蛇と蟬。無残に殺されていった心優しき人外達の事を言っているのだと、俺にはすぐに解つたのだ。

そうか。だからコイツは、こうして力を求めて、自ら戦う事を選んだのか。

「何も考えず、ここに立つた訳じゃないよ。想いを守る為には戦う力も必要だつて解つたの。大切な人を、守る為にも」

白い長柄を握り締めて、そう語る。

「解つてるのかよ。お前が持つてるのは只の凶器だ。幾ら善の為に使おうと思つても、それには必ず悪の面も内包されている。お前のそれは、偽善だよ」

自分にとって都合の良い命だけを取る。都合の悪いものは切り捨てる。そういう話になる。武器を使うとは、戦うとはそういう事だ。だから、戦うのは俺だけで良かったのだ。

「正義も悪も表裏一体。立場に左右されて流動的に意義を変えるが、しかし個人に定めた話では善悪は等価値なんだ。それなのに盲目的に善のみを求めるお前は偽善者だ。本来ならそういつて否定されるけど、俺は安心したよ。お前らしい答えで」

ならば俺は偽悪者であろう。どちらも本物に成り切れていない部分がある。完全に割り切れていないものがある。

例えば詩音なら、人を殺す覚悟がない。例えば俺なら、二人に嫌われる覚悟がない。

所詮、どちらも子供なのだ。そういう一切を振り切つてまで、貫

き通せる強さがないから。甘過ぎる精神に、苦笑が漏れる。

俺達はまだ幼い。この青さを捨てた時、大人になれるのだろうか。
蒼い心臓が、一度だけ強く、脈打った。

『始めて下さい』

第六章 ブルー・ハート（2）

開始の合図と同時に駆け寄った。ひとまず腕を取って関節を極めれば降参するだろう。そんな甘い認識はすぐに吹き飛ばされる事になった。頭上に振り上げられた剣は再び斧へと姿を変えている。羽根のように軽いというのはどうやら本人がそう感じるだけであり、実際の重量はそれとかけ離れたものらしい。これも知らない話ではない。シヨリーの剣と同じだ。物理法則を無視した事態には舌を巻くが。だが、術式やそれに類する神秘で造られた以上は、そういう物であると思わなければいけないようだった。対応する側としては厄介な事この上ないのだが、恐らく未知という事そのものが大きなアドバンテージであり、^{イニシアチブ}については主導権を取る事の重要性を思い知らされる。

斧がどの程度の威力なのかは気になるところだが、こちらは刀だ。元々刃を受け止めたり、斬り合ったりするような武器ではない。刃毀れや欠損もあれば曲がりもする、只の刃物である。水分が多い人体を斬る事に特化された刀身は鋭いからこそ脆く、強度がないのだ。ましてや斧を受け止めようなどとするのは愚かである。

左に踏み込んで回避する。斧は床に激突する。途端、タイルが炸裂したように破片が飛び散った。斧が床に突き刺さるというだけでは説明出来ない。まるで巨大なハンマーを叩き付けたような、広範囲に向けて衝撃を加えたと思えない状況。腕で庇っていた眼を向けると、頑丈な物であろう床のタイルが円状に窪んでいた。小さなクレーターが出来ている。マトモに受ければただでは済まなかっただろう。詩音も眼を見開いている。本人でさえ予想していなかった威力であるようだ。

「こ、殺す気か！」

「いや、そんなつもりは……まさかこんなに強いなんて」

冗談にもならない。そんな天然ボケで大怪我などさせられては良

い笑い種だ。言葉から察するに、やはり扱い切れていない。そうして詩音が戸惑っている隙に接近し、手を伸ばす。何にせよ掴まえればこちらのもの

視界に星が飛んだ。まるで車にでもぶつかったかの如き衝撃だった。たたらを踏んで尻餅をつく事になり、一体何があったのか、と視線を戻す。

俺と詩音の丁度中間辺りに、半透明な六角形が連なって円状に膜を形成していた。少ししてそれは見えなくなる。あれは、と思っていると耳のマイクフォンが音声を届けてきた。どうやら俺に向けての発信というよりは、常に回線を繋ぎっぱなしにしているようだ。こちらの情報を少しでも回収する為であろう。

『あれが複層型^{ヘルメス・トリス・メギストス}防御障壁ですか。慣性ベクトル、熱量、そして振動に対応するようですが、発動したのは初の確認ですね』

「おい、子供博士。ありや何だ」

『子供じゃないですっ！ まあ、このままでは不公平なのでご説明しましょう。とは言っても先に話していた防御能力という事の補足になります。』

あれは彼女の周囲に常時展開されている防御障壁です。普段はその機能をセーブして本体の消耗を抑えています。ああして発動条件に引っかった物にはピンポイントに起動する。効率と精度、障壁の強度、どれを取っても素晴らしい性能ですね。高い技術力を窺わせます。これで十年前の技術なので、怖いですねえ』

「破る方法は！ 常駐型の術式なら、この刀でも斬れるんじゃないのか！？」

『さあ、彼女は今まで誰とも戦っていませんから。それがどうすれば破られるのか、私には推測でしか答える事は出来ませんよ。西村さんが彼女に行う全ての行動が、現在の彼女に対するファーストインプレッション。貴重な情報なのです。十年前から一度も実戦投入されておらず、情報のみで噂話だけが先行していたガーディアン・ブレードですからね。斬れるかも知れないし、斬れないかも知れな

い』

意地の悪い話だった。子供にしては嫌に根性が曲がった言い方を
する。もしかしてさっきの事を根に持たれているのだろうか。自業
自得だが。

「とにかく、試してみろって事が……」

『そういう事が主眼に置かれていますから、このテストは。西村さ
んも遠慮せず、その右腕を使ってみてはどうですか？ 或いは打開
策が見つかるかも知れませんよ』

言われて、手を握ったり開いたりしてみる。やはり感触は普段の
もの。そういえば人外は人間に擬態するという話が以前にもあった。
つまり、この擬態を解く事で人外の力を使えるようになる、という
理屈になるのではないだろうか。しかしながらその方法が解らない。
赤い眼と同様、想いを力に変えるという話なら楽なのだが。

その時、子供博士のものではない声がマイクロフォンから小さく
聞こえた。真白だ。近くにいらしい。

『クレイン博士、この為に桜吹雪を与えなかったな？ 策士じゃの
う、確かに二代目春光では呪い殺しの純度が落ちる。城塞に近いあ
の盾を破る事は出来まい。だからこそ、誠は怪異殺しを使うしか勝
つ方法がない、と。しかし劣化しているとは言えエイヴィヒカイト
があやつに使えるものかどうか』

真白に対して呼び掛け、どうやれば使えるのかを尋ねると。

『まあ、このままでは結果にも納得がいかなじやろうしな。良かろ
う。使うのは簡単じゃ、右手に集中すれば良い。しかしその際には、
何を、どれだけの力で殺すのかという事を頭で定義するのじゃ。こ
れが式となって自動的に事象変移が起こる。この工程は天恵ギフトに近い
が、霊子マナを用いない点で性質を異にするぞ。

更に言うならば、劣化の激しいソレがどのような副作用を齎すか
も解らぬ。そういった意味では未知の異能じゃ。慎重にな』

要領は得たので、右手に意識を集中させる。あの強固な盾を打ち
破れる力が欲しい、と念じると同時、頭に痛みが走った。意識が歪

む。平衡感覚が曖昧になる。心臓が肥大化したような錯覚。しかしそれも一瞬で過ぎ、次の瞬間には、掌に黒い影が猛々しい姿を晒していた。

人外の影だ。それが炎のように蠢いている。あの時、ブラインドネスの角に集まっていたような　黒い影。霞がそれから煙のように生まれ、漂い、霧散する。まるで怪異そのもの。腕は人間のままであるが　痛感する。自分がもう普通ではないという事を。今まで頭の隅に引っかかっていた、仮初めではあるものの、人間である自分の定義がどこかに飛んでいってしまったかのようにさえ感じるのだ。

右眼が痛んだ。この施設に入ってからには特に意識して瞑る事もなかったが、やはり今も赤く光っているのだろうか。それにしては視界がクリアだ。

眼の痛みが引く。これは、と思い至る。

馴染んでいるのだ。この影を造る事に、これ程の短時間で体が慣れてきている。恐らくは右の眼も同じ。赤いフィルターが外れた視界はそういう意味。

そうしていると、またマイクロフォンから真白の声がした。

『ほう、成る程な。やってみるがいい』

返事も返さず、詩音を見る。おおよそ半径一メートルにあるであろう不可視の防御障壁に近づき　詩音も成り行きが気になるようで、行動を起こさない　思い切り殴りつけた。直前に反応して形成される、小さな六角形の連なる防御障壁は紙を破るような感触と共に、音もなく消えていった。呆気ない、という感想を抱く。

『スロー映像の解析、急いで』

子供博士が指示を出している。慌ただしい観察室の様子がマイクロフォン越しに届く。詩音が口を開いた。

「えーと……防御が出来ないって事だね。それ」

「らしいな。これでこっちにも打開策が出来た。お前ならどう考える？　近づけば俺が有利だぞ」

近接戦闘なら、年季が違う。経験の差はどうやっても埋まらないだろう。ビギナーズラックに期待するのは都合が良すぎるというもの。故にこれは、詩音のこういった場合に対する思考、判断力を試す質問だ。

「その場合は、近づかせないっていうのが模範的解答になるよね」

「賢明だ。しかし、どうやって？」

「やっぱり、鎌かなあ」

手元の武器を上下させて呟く。確かに鎌のリーチなら刀に勝るが大振りなので逆に隙が大きくなるリスクも生じる。しかもそれでは完全に逃げの一手だ。詰められて負ける。

「詩音、それじゃダメだ。通じるのは素人相手だけだぞ。そこはな、罠を張るんだよ」

流石に何も知らないまま、戦わせるのは忍びない。それで負けては彼女としても納得いかないであろう。ヒントを与える俺も大概お節介である。

戦う相手に戦い方を教えるというのも、間抜けであるが。

「罠？」

「そう、懐に入れさせないんじゃなく、入ってきた時に確実に仕留める手段を仕込んでおくんだ。相手を誘い込む、という発想の転換だな」

彼女は合点がいったように何度も頷く。

「鎌は振りが大きい。そこを逆手に取る方法を考える。お前なら変形させて剣にすれば良いが、それも通用するのは一度限りだ。その一度を必ず成功させる手段を構築しろ。また、その場合は鎌を振り抜いた後に体勢を崩さず、瞬時に回避行動にも移れるよう考慮しておく必要がある。一度でもモーションを相手に見せたらタイミングを合わせてくるからな。クロスカウンターというやつだ。これが避けにくい。相手からすれば必殺の手段。これへの対抗策も同時に練る必要がある」

実際に今の俺が詩音に近づくとするなら、そうしようと考えてい

たものである。相手の攻撃そのものを隙と見立てた動作。先日
の秘剣はそれの考え得る最高の形であるが、あれは秘匿性が最大の武器
である。乱用は出来ないし、人に教える事も出来ない。また、人に
教える意味が無い。俺にしか使えないからだ。

「む、難しいんだね。誠君の真似すればいいのかな」

「違う。日本刀と西洋の剣では体の運用方法が異なる。ましてやそ
の武器は変形するのが最大の特徴だろ。戦う間合いを自分で選べる
んだ。だからお前にしか出来ない戦い方というのが絶対にある。そ
れを見つけれ。ただ、そうだな……武器の振り方なら、基本を教え
られるだろう」

マイクロフォンから子供博士の声。

「あの、西村さん。これはテストなんです。続けて下さいません
か」

これには反感を覚えた。今まで その点 につけ込もうとしてい
た俺も俺であるが、それに眼もくれず、ああして頭ごなしに言うて
くる頭デッカチは正直、嫌いなタイプである。

見ているのは武器の性能のみ。彼女自身を見ていない。それが俺
を憤らせる。

「アンタ、詩音がこれだけ凄い武器を持つてるから、誰と戦わせて
も大丈夫って思ってたろ。これを使う詩音自身の事を少しも考えな
かったろう。つい先日まで普通の高校生だったんだぞ。どれだけ強
い武器を持ってるか、それを扱う技量がなければ意味がない。

これじゃ片手落ちだよ。テストの体は成しているが、形になつて
ない。データばかりに気を取られて、それだけで判断するからこう
いう事になる。天才が聞いて呆れる。学者は皆そうなのか？」

「なっ……！ 侮辱するつもりですか！」

「侮辱でも愚弄でも蔑視でもしてやるよ。アンタにとっては実験動
物でも、俺にとっては大切な人間だ。俺共々、危うくアンタに利用
されるところだった」

数字だけを追って考える人間だから、俺達を表面上のスペックで

しか判断しなかったのだ。強い武器があるから大丈夫という地に足がついていない考えをする。武器は凶器だ。只の道具だ。それを扱う為には技量が必須なのだ。そして技量とは、その人間の積み重ねてきた歴史である。都合良くそれがいきなり扱える訳はない。頭の中に使い方が浮かんだとしても、知識は所詮知識でしかなく、経験には勝てないのだ。

「ガーディアン・ブレード。世界卵。エンブリオ アドヴァンスト・ソルジャー A S。確かに詩音は特殊な人間だが、実際はどうだ。武器を振れるというだけで、使いこなしているとは到底言い難い。なのにアンタはそれを一切考慮せず彼女を戦わせた。恐らく、俺がこのテストの話を受けなければそのまま詩音を術式の破壊に向かわせただろう事からも、アンタの人間性を窺い知る事が出来る」

『実験に多少の犠牲は付き物です！それに、その武器がどういうものであるかを知る為には実際に動かしている所を観察するのが当然でしょう！多少楽観的であつたのは認めますが、それだって今の実戦データがなければ解らなかつた筈です！』

「反吐が出る話。それで実験動物が傷付いても当人達の問題ってか。自分はお願ひしただけで責任云々はありません、とか。アンタ、なかなか最低だな」

『ああ もう！ああ言えばこう言う！ だったら貴方はどうしろって言うんですかあ！』

血が上って頭の回転が鈍っているのか、子供のような反論である。しかし言われた事については考えがあつた。普通は無理だが、詩音ならば可能だと見込んだ上での方法である。

「三日……いや、一日くれ。俺がコイツを仕込む。元々、自分の身を自分で守れるだけの力が必要だと思つてたんだ。丁度良い機会だろう」

詩音はきょとんとしている。マイクロフォン越しの子供博士も黙つた。

「木刀を二本持つてきてくれ。基本的な剣の動作を教える」

詩音が木刀を両手で握り、中段に構えた。

「鰐元から拳半個分下を、右手で握る。そこから拳一つ分開けて左手。剣を振る時は左手で振れ。右手の役割はコントロールだ。足は肩幅、右足が一步分ぐらい前。もう少し腰を下げる、重心が高い」

俺は指示に四苦八苦する詩音を木刀でつつきまくる。ダメな部分は徹底的に教え込む。コイツの学習能力なら、恐らく今日中にマトモな素振りぐらいまでは行ける筈である。

「そのまま振り上げて、真っ直ぐ斬れ」

木刀が振り下ろされると、ビュツという風切り音がした。これは剣筋が曲がっている時にする音である。手本として俺がやると、ボツという重い音が聞こえた。剣筋が真っ直ぐなら木刀はこういう音が出るのである。

「一太刀に全ての力を込める。集中して、この一撃で仕留める、という覚悟で振れ。でなければ身に付かない。脇を締めて、顎を引いて。肩が上がってるぞ」

「は、はい」

何度が素振りをさせる。つつき回す。素振りをさせる。つつき回す。やがて音を上げて座り込んだ。

「も、もう無理ですう……」

「相変わらず体力無いな。だったら次は精神鍛錬。つまり瞑想だな。座禅を組め。精神を磨いた場合は、心で描いたイメージ通りに体を動かせるようになるぞ」

要はイメージと体の誤差を減らすのだ。真っ直ぐに打ち下ろしたつもりでも失敗したりする人間がたまにいるが、それはこの作業が足りていないのだというのが俺の持論である。詩音の穿いているブーツを脱がせて、足を座禅の形に組ませる。

「イタタタ！」

「そっぴや体が硬い方だったな。まあ直に慣れる。瞑想で今お前に必要なのは、真っ直ぐな剣筋だ。垂直に打ち下ろすイメージをなぞ

れ。精神がすっかり磨かれれば自ずと体もついてくるようになる」

「スパルタ！ スパルタ過ぎるよ！」

「うるさいな。いいから始めろよ」

両手を足の間で組ませて、眼を瞑るように言う。するとすぐに、

ヨヨヨと涙を湛え始めた。

「痛いよぉ〜集中出来ないよぉ〜」

「お前は俺の話を聞いてたのかよ」

涙腺の弱いヤツである。幼児のようによく泣く様子は弱気な性格に因るものである。クヨクヨするな、と叱咤して、瞑想を続けさせた。

体力が回復した場合に再び素振りをさせると、またすぐに音を上げる。今度は座り込むどころか、倒れ込んだので本当に限界なのだろう。

「……ここまでだな。部屋に運ぶ。後はコイツの学習能力に期待しよう。子供博士、詩音に割り当てられた部屋はどこだ？」

詩音をおぶって、言われた場所へと連れていった。

その途中、白い通路を歩いている途中で彼女が言った。

「私、偽善者なのかな」

俺が言った言葉である。今思うと酷い言葉だ。心に刺さったのだろうか。そう思うと罪悪感が募るが、心を鬼にして。

「戦いというのは人を傷付ける。そんなのはお前が一番嫌うものだろ。それを俺の為にとか時雨の為にとか言い訳をして、責任を転嫁している。自分の行動が何を意味するのか直視していない。それに戦うというのは味方の命と敵の命を天秤にかけて、敵の命を切り捨てる行為だ。情の深いお前に出来る事じゃない。絶対にどこかで甘さが出る。」

お前の甘さが敵を生かし、結果として味方を殺されたら、どうする？ 責任が取れるのか。取れやしないだろ。だって、他人の生を背負う事なんて、誰にも出来ないんだからな」

子供のように、相手に悪戯をして泣かせたから謝って許してもらおうなんて、そういう訳にはいかないのである。ましてや命というのは一度失ったら戻って来ない、唯一無二のものだ。だからこそ貴重で、だからこそ尊く、それを扱う人間社会の法律は厳正に決められている。

罪には罰が必要だ。だがその罰は、一体誰が与えるのだろう。正論で考えるなら遺族であるが、それならそれで双方の遺族が対立し、罪と罰の連鎖が始まる。終わる事無く際限無く、ルーツを辿って拡大していく。そんなものは全くの無益であろう。だから裁判官がいるのだと解るのだが、果たしてそれに納得出来る遺族がいるだろうか。鬱積した恨みがまた新たな火種になる事も 加害者へ直接向けられる事はないとしても 少なくないように思える。

詩音の苦しそうな声が、耳元で囁かれる。

「でも、じゃあ、誰かを守ろうとする戦いは全部、偽善になるね」

「……解らん。そうかも知れないし、そうじゃないかも知れない。多分、そういう時に強さというのが試される。俺やお前が持っていないものだ。他の全てを捨てても、自分が守ると決めたものに対して一直線に行動する。発生する全ての責任を負う覚悟をして、全部終わった後には自ら命を絶てるような強さが必要なんだ。善を貫くという事は」

個人の求める善が、それを含む全体の求める善であるとは限らない。その個人が求める善を拾い上げようとするのが、あのシヨリである。個人や全体が知れば非難され、忌避されるであろう行為を続けて、結果的に双方を守っている。

たった一人でそれを貫いている。それこそ、自分の身を顧みずにだが、と思う。シヨリとて一人の人間だ。個人と全体との善に齟齬が生まれた場合、どちらか選ばなくてはいけない場合、どちらを取るのだろう。いずれその問題にぶつかる気がする。いや、それよりも。善悪の概念は人が生み出したものであり、個人によってさえ立場で流動的に変化するものである。

人間は、人間である限り、その二元論を解く事が出来ないのではないのだろうか。

物事には善悪の両方が内包されている。ならばショーリの行動にも悪が含まれている事になり、それは完全な善でなく、偽善となる。何故なら、完全な善ならば敵さえも救う。

解らない。頭が混乱してくる。もしかしたら俺は夢物語を妄想しているだけなのか。いや、事実そうなのだろう。個人が完全な善が悪かに寄る事など、これではどうやっても無理なのだ。

ならば、諦めるしかない。この命題は今の俺に解けるものではない。それを認めて、絶対の基点を定めなくてはならないのだ。先の思索ではないが、まずは地に足をつけて考えるのが重要であろう。

俺が善とするもの。悪とするもの。一点の曇り無く、それを守る事への嘘偽りがなくなるもの。多分それが、大人になるという事なのだ。

今なら解る。ショーリの強さは、そこから来ている。そしてショーリを手伝うウェンズデイという組織が、それを手伝っている。一人で無理なら皆で守ろうというのだろう。

以前の俺なら鼻で嗤っていたかも知れない。詩音と時雨を守る為なら他がどうなろうと知った事ではなかったのだ。だが今は、二人を守る為に手を貸して欲しいと思えるのだ。

誰かを頼る。絆は一人では結べない。志を一つにする者達　組織として意志を束ねるその意味を、俺はようやく知る事が出来たのである。

邪によつて正を生む。正によつて生まれる邪がある。善と悪は表裏一体。ならば己の信じる意志をその間に真つ直ぐ通せば良い。相克、二元論の中心に、迷い無き一筋の軌跡を引く事を、人生と呼ぶ筈なのだから。

人生。人として生きる。それは体が人外に近づこうと揺らぐような物では無いのだ。俺が生きている証を周囲に知らしめる。深層心理と自我意識の狭間にある意志は、その為のものだと俺は信じる。

詩音を部屋に寝かせて、回復したら勝手に着替えろとばかりに部屋を出て、自分の割り当てられた個室に向かっていると、フレデリック 先日、子供博士の助手兼ボディガードを名乗った金髪蒼眼の伊達男^{だておとこ}が、俺を探していたらしく声をかけてきた。

「ああいたいた、西村少年。ちょっといいかい」

「何だ、伊達男」

実際に口に出してみると、割と語感も語呂も良いのでこれからの呼び名にしよう。すると向こうも気を良くしたようで、髪をかき上げる。

「ン？ いやあ参ったね、やっぱり同性にも解っちゃうかい、隠しきれない俺のフェロモン」

「……何だか女たらしの匂いがするぞ、その言い方」

「いやいや、違うつて。口説きたくて口説くんじゃない。それじゃ相手にも失礼だろ？ 自然と、当然の成り行きのように口説いてしまうのが紳士というものさ」

しかし一気に表情を曇らせて。

「まあ、たまーにね、手厳しい仕打ちも受けたりするんだけど……さつきみたいに」

「な、何があつた？ お前みたいなヤツでも口説けない女とかいるのか」

意外なものである。場に慣れたふうを装っているのですいう口の上手い男かと思っていたのだが、やはり悪い相性だったりすると女も靡かないのだろうか。

「了見が狭いぜ少年。いや、まあ君なら解るかも知れない。あの女の子……シグレちゃんについてなんだけどさ。実は僕が彼女の指導担当になつてさ。色々教えてたんだけど ああほら、そういう流れになつたのは君がシオンちゃんに教え始めた頃からだ。クレイン博士も考え直してさ、女性でも男性に勝てるような戦い方を彼女達に教えてあげて下さいって僕に頼んで来たんだよね。だからさ、ち

よつと酷い扱いされそうになった事も許してやってよ。彼女まだ子供なんだ。本人は背伸びして大人のつもりだけど、あの時みたいに隙が多いのもそのせいでさ。おっと、話が逸れちゃったか。

まあとにかく、君がシオンちゃんに数時間もつきつきりだったから、シグレちゃんの方は僕が引き受けてたって訳」

時雨に戦い方を教えるのを他人に任せるのは正直不安だ。コイツの実力の程もまだ解っていない。今後すぐに機会を作って、訓練を覗くかコイツに挑むかしたいものである。

「それで、時雨が扱う武器は何にしたんだ」

「女性が男性に勝てるとうるとかなり限られるからね、銀髪姫みたいな術式武装も持っていないし。まあ妥当に薙刀なぎなたか棍術こんじゆつだよな」

携帯性と隠密性を考慮しての三節棍さんせつこんにした、とフレデリックは語る。成る程正解であろう、リーチがあるから事を有利に運べるし、節を曲げれば近接時にも対応出来る。防御時には工夫をしなければその脆弱性から難しいものがあるが、そうさせない為の立ち回りも棍術の歴史にはあるだろう。

そしてこのフレデリックは槍使いだ。分類の近い物として教えられる事は多いと見たのであろう。益々手合わせ願いたいところだった。

「それで。時雨の事は解ったけど。アンタは俺に何の用だったんだ？」

「あ、すっかり忘れてた！ いやね、君を連れてくるように言われてさ。このビルのオーナーで外事四課のトップなんだけど。最上階で待つてるって」

「最上階？ ビル爆破事件以降はそれ以上の階層には立ち入り禁止の筈じゃ」

「だから、内緒話には都合が良いんだろ？ どうやら君の家族に関する事らしいぜ。ああその格好じゃ目立つな。僕と同じ夏用のスーツに着替えた方が良さだろう。更衣室はこっちだ、案内するよ」

家族に関する話と聞いては、行かない訳にはいかないだろう。何

よりも先に思い出したのは、真白の言葉である。

ここは俺の両親が関わっていた組織、ウェンズデイ機関の中枢なのだ。

ビル内を滑るように上がっていくエレベータの中で待たされる事数十秒、俺は襟元が苦しくてボタンを外した。礼は失するが、どうにも閉じていられないのである。フレデリックがそれを見て咎めた。「おいおい、失礼のないようにしてくれよ」

「酸欠で死んじまうよ。元々、学校の制服だってそういう場以外では着崩してたほうなんだ。俺らしく行く事にする。どうせ飾り付けたたつてすぐにボロが出るし、暴かれたら目も当てられない醜態を晒す事になるだろ。だったら最初から胸を張っていくさ」

「へえ、なかなか面白い考え方をするね。高校二年生には思えない程度胸もある。なあ君、今日時間あったら飲みにいかないか？ 良いい店知ってるんだけど」

生憎下戸である事を告げると、ソフトドリンクでもいいさと押し切られた。その後にショーリや時雨、詩音の名前を出してきたあたり、恐らく本命はそちなのであろう。伊達男も伊達男、見事な手腕であると言わざるを得ないだろう。

ただ、だからと言って悪い印象は抱かない。話していると楽しい気分になり、まるで学校の友達と久しぶりに会ったような感覚さえ覚えたのだ。こういう場所にも、明るく話せる相手はいるものだった。

エレベータを降りて秘書に話を通すと、すぐに目の前の大きな扉が開いた。赤いカーペットを踏みしめると踝まで埋まるような感覚、豪華な照明、黒檀の戸棚や執務机が漂わせる空気が普通の部屋とはまるで違う。ぴんと張り詰めた緊張感のようなものを感じて、思わず背筋が伸びるような場所だった。

女性の声 真白のものだ。

「良く来たな、こつちに来て座るがよい。春秋、あやつにも茶を」
向かい合わせに置かれたソファに座ってティーカップを傾ける真白と、それに使われるのはがっしりとした体格の中年男性だった。組織のトップだから、夏用のスーツも仕立ての良い物であるように見える。穏やかな目元に微笑を湛えて。

「真白さんの仰せのままに。その前に……君が西村誠君だね」

俺の前に立つと、右手を差し出してきた。握手を求められているようである。応えて口を開く。

「初めまして。父と母がお世話になったようで」

「こちらこそ、ご両親にはお世話になった。私は安倍春秋、あへ・はるあきとある陰陽師の末裔だよ。解るかな、安倍清明あへ・せいめいって」

「昔の陰陽師でしたっけ。申し訳ありませんが、詳しくは」

手を離す。ダンディな髭とそれが強調する見た目に違わず、優雅な物腰の中に男らしさを持った人物のようだ。

「ああ、普通に話してくれて良いよ。安倍清明はかつてこの組織の前身となった陰陽連を造った人だ。私はその末裔なのでね、親の業務を受け継いだだけの、ただの人間さ。特別な力なんて何も無い。それなのにこの人、真白さんやエリイ博士、それにヴィクトリアまでがこんな無能な男を手伝ってくれていると思うと、ありがたい限りだよ」

ソファにかけるように促される。フレデリックと共に従い、暫くして出されてきた紅茶の匂いと味に眉根を寄せた。飲み慣れない味である。俺には高尚過ぎる。

「お口に合わなかったかな。真白さんやヴィクトリアは喜んでくれるのだが」

「俺は日本茶以外、舌が好まないだけなんで」

ぞんざいな口調に切り替えたのは、先に普通に話せと言われた故である。恥じる事は何も無いのだ。向こうが対等を要求してきたのだから。

「覚えておこう」

太い声は温和な性格に沿った、柔らかい印象を与えてくる。成る程、人徳がありそうな人物像だ。俺とは対局に位置した人であろう。「それで、フレデリックを使って俺を呼んだ理由は何だ。こっちからはアンタに聞きたい事が幾つもある」

真白が割って入った。

「恐らくその大部分を解決させるじやろう」

「どういう意味だ」

彼女がティーカップをテーブルの上に置く、カチャンという音が部屋に響いた。

「ビデオテープを見てもらいたくて呼んだ　十年前のものじゃよ」
天之御柱事件が起きる、数日前に記録されたいらしい　ある一人の人間が未来へと宛てたメッセージだという。今まで誰も見た事はなく、ただウェンズデイ機関が最大級の機密として保管していた、古いビデオテープ。VHSと呼ばれるものだ。

安倍春秋が言葉を継ぐ。

「これは遺書らしい。あの人……にしむら・ききょう西村桔梗が君に宛てたという、ね」
母から、俺への遺書。それに心が大きく揺れ動き、呆然と口を半開きにしてしまった。

「おっと」

フレデリックがティーカップを奪わなければ、高そうなカーペツトに染みを造る事になっていただろう。

「母さんから、俺への？　だがどうして、今更になって……？」

「龍眼じゃよ」

未来を視る眼だ。朝霧の特異性である。それこそは時雨にも受け継がれた、朝霧の呪いだった。

真白が続ける。

「現在、ドラゴンズ・ホール龍穴の封印は龍門によって塞がれておる。それは桔梗が命を引き替えにして施した封印じゃ。龍眼を発現させて二年、もう自分に先は無いと、この街の為に犠牲になった。裏山の湖でブラインドネスが言ったらしいな。あの二人に聞いたよ。もっと早くに言う

べきだったかも知れぬが、今それは言うまい。急いては事を仕損じるとも言うしの。

そして、その際にウェンズデイ側に、一つの頼み事をした。それがこのビデオテープじゃ」

何が映っているのかは、誰も知らない。ただ一人、西村桔梗を除いては。

「十年後のお主に見せるよう言われておる。先に言っておくぞ」

龍眼を甘く見るな。

「あれこそは純粹培養の異能。人間の間で育まれた純血種が持つ超常の眼じゃ。お主の母はその事実を受け止め、未来を視るという事の大きな負債を一身に背負って、その力を世界の為に役立てた英雄じゃ。あの神童、クレイン博士を世界再生機構に奪われる前にウェンズデイが保護出来たのも、彼女の功績。天之御柱にて市井の被害者がほぼゼロに近かったのも、桔梗の力によるもの。あやつがいなければ歴史が変わっていた。それだけ、龍眼は凄まじいものじゃと理解しろ」

安倍春秋が内線で何かを一言二言告げると、秘書がすぐに大型液晶テレビと再生機器を室内に運んできた。

いよいよ、という様子に動悸が速まる。何か、俺はとんでもない事態を目撃する事になるのではないか。母は一体どんな人だったのか。今となってはもう、面影さえ浮かばない。まるで画面越しに再会出来るような錯覚さえ、覚えるのである。

用意が調ったらしい。安倍春秋が街を一望出来る壁一面の窓にブラインドを落とし、照明も抑えられた。映画の前のような静けさが場に満ちる。真白がビデオテープを手に持ち、再生機器へと歩いていく。

その時、扉が開いた。姿を見せたのは、ショーリである。

「お、遅れました。まだ、大丈夫？」

俺の驚きを無視して真白が応えた。

「問題無い。そろそろじゃと思っておったよ。さて、では」
「い、いや、しかしショーリまで呼ぶ必要あったのか？ フレデリックもだけど、俺の母が遺したビデオレター、つまり遺書なんて、他人が見るべきものじゃないんじゃないか？」

「龍眼を侮るなど言っただろう。ウェンズデイでも最高機密じゃぞ、それが初めて紐解かれるのじゃ。この秘匿情報は主要人物で共有した方が良い。ああ安心しろ、あの二人は疲れ切って休んでおるから来ぬ。クレイン博士も呼んだのじゃが、どうやらヘソを曲げて部屋に閉じこもってしまったと聞いた」

心当たりがあつたので、黙っておく事にする。とりあえずはこのメンバーで眼を通すようである。真白がビデオテープを、再生機器に押し入れた。

赤ん坊の声がした。炬燵こたつの横を四つん這いになって這ってくる。水色のベビー服を着ていた。手前から女性の声がする。

「まこちゃん、こつちだよー」

その瞬間に理解した。これは

間違いなく、ファミリービデオの類いである。

「お、おい！ 止める！ これはちよつと待て、待ってくれ！」

フレデリックが俺の首を抱え込んで黙らせてきた。強制的に続きを見せられる事になる。

「これがウェンズデイの最高機密とかマジで馬鹿じゃねえのか

！」

後半はモガモガと言葉にならなかった。尚もビデオでは俺の赤ん坊時代の映像が流れている。

壮年の、着流しを纏った男性が胸元まで伸ばした白い顎髭を、赤ん坊に引っ張られていた。眼を閉じてそれに耐えている。

「あー」

「……………」

「お父さん、まこちゃんにお髭抜かれちゃいますよ」

眼を開いて重々しく呟く、昔の祖父。

『これは、抜きたがつているのか？ 接し方が解らん』

『構って欲しいんですよ。抱いてあげて下さいな』

祖父が怖々と、その赤ん坊を抱いた。泣き出す。慌ててカメラの方向　恐らく母が撮っている　を見た。

『あ、多分オムツですねー。大丈夫大丈夫、お父さんが泣かした訳じゃないですよ。じゃあ交換してきますね、カメラお願いします』

一時、暗転。今度は祖父が撮影者になったようで、去って行く母の後ろ姿　黒いＴシャツにジーンズ、長い黒髪　だけが見えた。俺は心中で零す。追いかけるなよ糞爺、オムツ交換の現場まで撮影されては敵わない。

そうすると入れ替わりに、生前の祖母が映った。映像を見ている俺はこの時、思わず涙腺が緩んでしまった。赤茶色の着物に橙の帯結い上げた髪に刺さる簪がトレードマークだ。今あの簪は、俺の部屋のの簞笥の奥に、大切にしまっている。

『あら、また泣かしたの？　いい加減子供の扱い覚えたらどうなの。誠一郎の時もそうだったけど本当、不器用だね』

『ム……済まん』

玄関の開く音がして、声が聞こえてくる。成人女性のもの　俺の記憶に残る、現在病床に伏せる前の、時雨の母だ。

恐らく時期としては俺達が生まれて一年前後。

当時二十五歳の、朝霧菖蒲。あさぎり・あやめ

『こんにちはー。きーちゃんいるー？　あ、靴あるね。お邪魔ー』

季節は夏なのだろう、風鈴の音がした。祖母が好きだったのだ。

菖蒲叔母さんも膝丈までの余裕があるハーフパンツに、七分袖のシヤツというラフな格好だった。胸に赤ん坊を抱いている。こちらは当時の時雨しぐれだろう。菖蒲叔母さんはカメラの方向を見て。

『お？　親父おやじ殿がビデオ撮ってる。あれ、きーちゃんが撮影会やるって言うからてつきりきーちゃんが撮ってるかと思っただけけど、親父殿がカメラマンなの？　ああ、そーいや子供苦手だもんねー。』

それくらいしか出来ないかー、あははー」

『やかましい、小娘が』

祖母が笑う。母が戻ってくる。やがてそのうち、父がたくさんの料理を買って帰ってきた。愛しげに二人の赤ん坊に語りかけ、触れる。暖かい空気が、画面越しに伝わってきた。

「何だよ、これ」

呟きの後少しして、画面が暗転した。今度は昼間の道場を、入り口から映している。水色のベビー服を着た赤ん坊が床板を這って、道場の中心で素振りをしている祖父に近寄っていく様子だ。

『あー』

その声で赤ん坊に気付き、木刀を投げ出して。

『お、おお、誠、危ないからここへ来てはいかんぞ　桔梗！　まだ撮影会の途中じゃろう！』

『だってお父さん途中で抜け出すから。まこちゃんも寂しそうにしていたので、連れて来たんですよ。ほら、喜んでますよ』

戸惑いがちに赤ん坊をあやし、揺する祖父。口元にたつぷりと蓄えた白い髭が、笑みの形に動いた。

『よしよし、よしよし。お爺ちゃんだぞー』

『おお、やれば出来るじゃないですか』

赤ん坊がそれに答えた。

『んーまー』

二人が、笑った。

俺は、同じ問いを繰り返す。

「何だよ、これは」

涙が溢れる。心臓が痛い。喉の奥が熱くて、今にも嗚咽が漏れそうだ。

胸を抉られた気分だった。温かい昔の記録が、今の俺を激しく苛む。こんな日々もあったのか、と。

あの祖父は、俺が嫌いではなかったのか。ヤツは十年前の事件をキツカケに父と母に関する全ての映像記録や写真を捨てて、燃

やしてしまった糞爺なのだ。それなのに、赤ん坊に向けるあの穏やかな笑みは何なのだろう。鬼子、忌み子と嫌われた俺を、アンタも嫌っていた筈じゃなかったのか、と。

画面が、三度暗転する。今度は著しく舞台が変わった。

くすんだ灰色の壁を背に、白装束に身を包んだ母が、椅子に座って映っている。俯きがちに閉じていた眼を開けて、真っ直ぐにこちらを見やると。

『大きくなったわね、まこちゃん。その右眼、やっぱり貴方も混血として苦しんでいるのね。そんな体に生んだ母を、どうか許して頂戴』

心臓が、鷲掴みにされた、気がした。

龍眼は未来を見る。即ちこれは、生前の母が現在の俺を、その力で視ているという事になるのだ。時間の糸を辿って。時空の壁を飛び越えて。

もしかして。もしかして、会話が出来るのでは、と立ち上がる。

「母さん！」

しかし無情にも、映像の母はそれに対して。

『……ああ、ごめんね。何かを口で言っているのは曖昧に解るんだけど、明確な言葉としては解らないの。所詮、私に視えるのは映像だけだから』

黒い前髪が、さらと揺れた。

『この映像はウェンズデイに託しました。この組織は必ずまこちゃんと接触するから。西村はそういう運命だからね。貴方も例外無くそうなるわ。血筋が持つ呪いが、そうさせる。大丈夫、彼らは信じられるよ。あの頑固な親戚達みたいにまこちゃんを虐めたりしないから。ああでも、お父さんは……そっか、酷い目にあつたね。でも、それはまこちゃんが必ずそういう運命に巻き込まれるからって、生き残れるだけの力を与える為だったの。決してまこちゃんが嫌いになつたとかじゃない。家族として生かす為に、敢えて憎まれ役にな

ったの。両親を失って絶望した子供に、そしてお母さん　祖母も失ったまこちゃんに生きる為の力を与えるには、不器用なお父さんにはそうする方法しか思い付かなかったのよ。今までの映像でそれは解ったでしょう？　本当に不器用で、でも本当は、優しい人なの。今のまこちゃんと同じね』

母は、笑った。俺は、泣き出した。声も堪えず、崩れ落ちては溢れる感情に身を任せたのだ。

『今までつらかったね。よく頑張ったね。たくさんの問題を独りで抱え込んで、大切な人達の為に頑張って戦えたね。

泣いていいんだよ。無理しなくていいんだよ。つらかったら、つらいつて言つていいんだよ。まこちゃんは、独りじゃないんだからね。それを忘れないで』

言葉にならない。何かを言いたくしているのに、言葉を発する事が出来ないのだ。嗚咽で喉がひくつき、何も言えずにいるのだ。今しか言えないのに、何か言つたという事を伝えるのは今しかないのに、どうしても俺の体は、言う事を聞いてくれない。

親の愛なんて今更要らないとか、言っていたのはどのどいつだろう。ここまで心に訴えてくる優しさと愛情を与えてくれる母親を、どうしてあの時の俺は否定出来たのだろう。浅はかだ。浅慮に過ぎる。俺は所詮子供なのだ。今も、昔も。

『何があつても、私はまこちゃんの味方だよ。愛してるわ、私のまこちゃん。私がいなくなつた未来で、そこまで大きく育つた貴方を視られて、私は本当に幸せ。だから、何の躊躇いもないわ。生まれてきてくれてありがとう。』

きつと幸せになつてね。母は、それだけを願っています』

真白がビデオを一時停止させた。俺の様子を推し量ってくれたらしい。ありがたい話である。もう心が持たない。

俺は、声を上げて泣いた。

ありがとうございます、お母さん。貴女の子供に産まれた事に、最後まで誇りを持って生きていきます。

どうか見守っていて下さい。最後まで。貴女の子供が、この世に
生きた証明を。

第六章 ブルー・ハート(3)

シヨリが差し出してきたハンカチを使わせてもらった。涙を拭う間、真白や安倍春秋、フレデリックが交わす会話を何とはなしに聞いていた。西村桔梗について知らないらしいフレデリックの質問に、二人が答えていく。この男は話の流れからして子供博士の代理らしい。確かに助手であるし、自然な話だった。

シヨリが傍で覗き込んでくる。長い銀髪を今日は下ろしていた。さらと眩しく揺れるのが、今は眼に痛い。

「大丈夫？ 一度、水で濡らしてくる？」

問題ない、と返して真白を見た。眼の周りが少し腫れぼったい。やはり一度冷やした方が良さだろうか。断ったのを今更後悔するものの。

「真白。お前は知ってるんだよな、母さんの事」

今までは何度聞いても答えなかった。時が来れば話す 真白の回りくどい言葉も秘密主義も、もう悪癖の部類であろう。

だが今なら答える確信があったのだ。そう、時が来れば、とは、こういう状況の事を言っていたのだと今なら解る故である。

「無論。僕は西村の護人^{モウジン}じゃからな」

真実を受け止めるに相応しい土台 真白はこうしてそれが出来るのを待っていたのだ。受け皿が完全でなくては、重くのし掛かる真実の全てを受け止めきれないからだろう。取りこぼしがあつては、先人の想いも無駄になる。だから言えなかった。

今なら、それが解る。回りくどい秘密主義も、事情を考えての事だったのだろう。

「お前の血の所為で混血になった一族だからか。贖罪でもしてるつもりか」

真白は眼を閉じた。想いを噛み締めるように、声には真摯さが込められた。

「そうじゃ。そして儂の願いの為。身勝手は承知しておるよ。じゃが、人間に怪異殺しを授け、あやつらに対抗する為の術を与える為には、そうするしかなかったのじゃ」

白い瞳が俺を視る。

「儂の血が人間にどんな影響を及ぼすかは解らなかったが、古代種を葬るには同等以上の力でしか不可能じゃというのは解っておった。それ以外はどうかやっても、届かぬ。

— 永劫回帰を司る円環楽譜《Ewigkeit》には、な」

「そのエイヴィヒカイトってのは何なんだ。お前の角と力が西村に受け継がれたつてのは解る。多分それが先祖帰りだとか凶祓いの特徴なんだろう。

だが、その力は何を意味する まさか」

大いなる術式。星を巡る巨大な円環とは、何だっただろうか。世界再生機構が自ら神になろうとして破壊を目指したものであり、神に等しい何かが施したという、世界を括る式ではなかったか。

「然り。エイヴィヒカイトとは星を巡る術式の一端を流出させているモノ。永久不変の神の魔法じゃ。アカシック・レコードから分化したという、この星に施された奇蹟 クローズド・レコードを、
ヴィブラ・ホーン 古代種のみがその変移を実行出来る。調律震角とは、その権利のよ
うなもの。世界をより良い方向へと導く力じゃ。

これは霊子や精神といったエネルギー媒体を全く必要としない、完全な形の異能でな。その気になれば大陸を吹き飛ばす事さえ可能。人間が扱う天恵や、オリジナル・セブンが見つけたという術式のシステムは、この源流があるからこそ行使出来る紛い物じゃよ」

いつかの話にあった。源流から湧き出す清水の勢いが強ければ強い程、その流れは裾野に速く多く染み渡る そうやって成長していく、呪いの話だ。

「じゃがそれも万全な状態の古代種に限った話。本来、エイヴィヒカイトは人が使えるものではない。お主のそれも紛い物には違いないが、どうやら儂の知っている既存のエイヴィヒカイトではないよ

うじゃしな」

「どういう事だ。先祖帰りって言うからにはお前のと似たモノじゃないのか」

「儂もそう考えたが、先のデータとクレイン博士の推察から考えるに、どうも食い違う部分が多くての」

聞くに、真白のエイヴィヒカイトは、以前の万全な状態であれば流星雨を地上に降らせたり大洪水といった天変地異を引き起こしたのだという。しかし原因と結果の成立しない自然現象を召喚するのは本来あってはならない事であり、因果が成立しないとならない必然性がレコード側から求められる。大規模な事象変移を誘導するのは難しいのだとか。消耗が増したり、事象変移を起こしていられる効果時間が減少したりといったネガティブな要素が現れるようだ。

ただ、そうやって超常現象や科学的根拠を一切無視した、自らの願いをこの世に適合させる事で現象発露とする、自分なりの法則を造り上げてしまうものである。

それを、エイヴィヒカイトによる異界創造と、真白は言った。

「じゃが、お主のものは違う。儂が知るエイヴィヒカイトによる怪異殺ではない。本来ならそれは桜吹雪の呪い殺しに近いものじゃが、まあ、あれはあれで天恵や術式に対抗するという目的があつて打たれた刀じゃが、ようやく合点がいった。その右腕は、違う」
覚えておくが良い、と。真白は俺を指差した。

「黒い影は虚数による事象変移。現実を虚ろと変え、実数を虚数へと変換する、前代未聞の改変能力じゃ。怪異のみならず、あらゆるモノを零へと還す唯一無二の異能」

チリン、と鈴の音がした。いつの間にか猫がすり寄ってきていたのだ。

「現実を、変える……？」

「天恵や術式が行う事象改変とは異なる。あちらは虚数を実数へと変えて、自らの主題構造を現実にする概念じゃ。お主のものは、そ

の逆に行く」

つまり、解りやすく言えば消しゴムであろうか。

「術式、天恵同士が互いを潰そうとぶつかり合えば対消滅現象が起きて相殺されるが、それさえ起きぬ。一方的に消し去る能力。双方への完全な上位概念じゃよ。」

現実を冒す影、といったところか」

「病院では、霊子を殺すって言うてたやつだよな」

「うむ。じゃが先頃のデータを検証して、それとは違う性質を持つのだと判明した。実際、エクスカリバーが持つ複層型ヘルメス・トリスマギストス防御術式を浸食したのがその証明。あれはあらゆる攻撃を弾くからな。天恵も術式も跳ね返す。正に城塞じゃよ。」

古代種でさえ、アレには手を焼くというのに」

その言葉に、何かが繋がる。今までのコイツの態度、あらゆる行動が一つの結論を導き出すのだ。

そう、コイツは古代種に対する手立てを講じている。人にその為の策を与えようとしているのではないのか。

「お前は、他の古代種を倒したいのか？」

「そうじゃ。儂の目的は他の古代種を殺す事。そうして人類を解き放つ。故に人にもその力を分け与えた。あらゆる艱難辛苦を耐え忍び、理不尽な死も乗り越えてきた、輝かしい歴史を持つ人類にこそ未来は相応しい。古臭い種族がそれを妨げるなぞ、してはならん事。前世のお主は星の海を見上げるのが好きじゃった。儂はそんなお主を守りたいと思った。じゃが、敵わなかった」

真白は右手を己の心臓に当てる。そこに血潮は流れていても、そこにあるモノは人とは違うのだ。俺はその切なげな姿に、あの夕暮れを思い出した。我が主　真白は確かに、そう言ったのだ。

しかし前世と言われても、俺には身に覚えがない。無さ過ぎる。精々がコイツに懐かしさを感じる程度だろう。

「人は自由じゃ。海を渡り、空を飛び、今や星の海にまでその手を伸ばしている。儂は見てみたいのじゃ。この星を括る呪いを振り切

り、与えられた役割を飛び越えて、星の海へと旅立つ人類の未来が。所詮古代種とは大地に縛られ、この星が朽ちるその時まで見守り続ける事を義務づけられた種族。監視者と言えば聞こえは良いが、その実はただ、足枷をはめられた囚人じゃよ」

大地から離れる事の出来ない種　永い時を生きてきた彼女は、一体どれだけの人と、その死を見続けてきたのだろうか、とこの時の俺は思わずにいられない。

そして、思い知らされる。真白が夜に見上げる星空に、どれだけの想いを馳せてきたかという事を。

世界を括る円環は、そのまま彼女を縛る足枷。首輪。牢獄。檻。決して終わらぬ呪いの輪廻であるのだ。

その後、ビデオの続きを見た俺達は、驚愕の事実を叩き付けられる事となる。俺の母の予言だ。恐らく間違いは、有り得ない。

最強の人外種　古代種の中でも至高と称される、虹の古代種がこの街に現れるというのだ。

名を、虹のイリス・ダイヤモンド。大昔、万全の状態だった真白と双壁を成していたという存在らしい。ウェンズデイはそれに備える、という母の警告と、続けられた言葉に、驚きを隠す事は不可能に近かった。

イリス・ダイヤモンド　この場合、姓とされるダイヤモンドは、異国の言葉で、ダイヤモンドという。

この事から導き出される結論は一つ。虹のイリスは、シヨールの母親だという事だ。

地下へと戻るエレベータの中で、俺は母の言葉を思い返していた。特に、最後に言われたものが強く蘇る。あの人を止めてあげて、というものだ。それはやはり、ブラインドネス　西村誠一郎の事であろう。他には考えられない。

だが、止めるというのは、どうやって実行すればよいのだろうか。

桜吹雪の刃が心臓にまで達したあの傷では、動けるようになるまで長い時間が必要になるのは間違いない。

つまり、動きを止める、という概要であれば、現状でも一時的に達成出来ているのである。しかし母が言ったのはそうではないだろう。恐らくは自ら鬼に堕ちて、PMCランツクネヒトの傭兵として活動している事そのものを止めさせる事を言っているのだ。

ならばそれには意識改革が必要である。あの妄執に凝り固まった頭に、ガツンと強い衝撃を与える事実を突き付けてやらなければ、奴は止まらなないと考える。

考える……そういえば以前、八尋殿自然公園にある中央モニュメント、天之岩戸での遭遇時には俺の名前を呟いていた気がする。しかしながら裏山の龍神湖では、俺の事を誰だか解っていない様子だった。

食い違ふ。記憶の齟齬があるのだ。これはつまり、理屈でどうにかなるという固定観念に頼るのは危険という事を意味するのではないだろうか。

ならば、体だ。骨身に刻まれた記憶ならば、恐らく奴の精神に強く訴えかける事が出来る気がする。強烈なエピソードによる長期記憶は、体にも記録される事が以前にも判明している。そこに抜け道があるのではないか。

俺はエレベータ内にいるもう一人の人物、壁に寄りかかって俯いているシヨーリを見た。先程告げられた事実には強いショックを受けているのだ。やはり、母と思われる者が 自分がひたすらに守ってきたこの街を襲う、というのが受け入れられないようである。

然もありなん。今まで独りだと思っていた生い立ちに、突如突き付けられた親の存在。そして自分が守ってきた平和を壊そうとしているというのだ。

けれど、それは俺と同じ境遇でもある。天之岩戸でブラインドネスと遭遇してからというものの、俺の日常は木っ端微塵に壊れてしまった。今や非日常とも言えるこの現実が、俺の日常へと変移してし

まっただのである。

「親、らしいけど。どうするんだ、シヨール」
やや答えに窮するようで。

「解らない。古代種って子を産めない筈なのよ。なのに親って、おかしいわ」

もしかすると嘘かも知れない、と呟くが、それには反論を返さない。

「あのビデオを見ても、そう言えるのか。母の言葉は、過去にありながら未来の俺達を見ていた。嘘や偽りで、あんなビデオが作れるか？」

ウェンズデイ側に俺達を担ぎ上げる理由というのは無い。あれを最高機密にしておく得がないのだ。只のホームビデオ。しかしその実は、古代種の襲来を予言した内容だった。

聞けば、安倍春秋や真白もその事実に驚愕を隠せない様子だった。つまり、である。その二人の反応を証拠に、あのビデオは真実、過去からのメッセージであると認める事が出来るのだ。

あらゆる出来事は未来へと向かう。真白の願う未来も然り、俺が突き進んできた非日常然り。そして今またこのシヨールも、その足を現在から未来へと踏み出す時なのだ。

いつまでも、世間知らずな少女ではいられない。何も知らないまま成長する事など出来る訳がない。

けれど今、俺からコイツにかけられる言葉というのは見つからない。俺は口が上手くない。こういう時、剣術しかなかった人生を恨みたくなる、ものの。

俺に出来る事で、コイツに伝えられる事もあるのではないかと、「シヨール。ちょっと付き合え」

はじめの一步を踏み出す時、人が心に抱くのは恐れではなく、希望であるべきだと思うのだ。

ルールは直当てナシの寸止め。使うのは木刀のみで、体術の類もナシである。突然、第一訓練場　先に詩音と一戦繰り広げた、というか訓練させた場所　に連れて来られた彼女は眼をぱちくりさせていた。

ワイシャツの裾を出し、靴と靴下を脱ぐと、木刀を一本渡した。

「俺は言葉で伝えるのが苦手だ。人より多少理屈っぽいらいが、言いたい事を誤解されて伝わってしまう事が多い。口が下手なんだ」
立ち上がり、構える。

「けれど、お前には誤解されたくない。だから、俺にはこれしかない。自分の思っている事を真っ直ぐ伝えるのに、剣しか手段がないんだよ」

どれだけ言い繕っても、言葉を重ねても、結局はこれが俺の全てなのだ。嘘偽りなく伝えられる、自分をぶつけられる唯一の方法は、剣しかないのである。

実感する。俺は歪である。けれど、コイツなら応えてくれる。そういう確信がある。こんな俺を受け止めてくれる。そしてそれは、逆に俺がコイツを理解してやれる方法でもあるのだ。

悪い男に捕まったと思ってくれ、と言うと、シヨールは苦笑した。
「ある意味では、君はとてつもなく真っ直ぐよ。まるで刀みたい。斬る事に特化された刃は、ただひたすらにそれだけを実行する媒体。君は、そんな印象がある」

褒め言葉では、ない……と思う。だって、それしか出来ないのだ。正鵠を射ているが。

「悪かったな、不器用で」

「怒らないで。悪い意味じゃないの。ただ　それを羨ましいと思うのよ」

「俺は、お前のような迷いの無さが欲しいと思ったよ」

「私は、貴方のような想いの強さが欲しいと思ったわ」

例えばどれだけの苦境でも、迷い、苦悩する事があっても、やがてその果てに自分が正しいと思える答えを導き出し、貫く姿に、お互

い気持ちを寄せたのだろう。

「丁度良かったわ。本来ならすぐにでも貴方を部屋に連れていかなくちゃならないのだけれど、今回は私の我が儘を聞いてもらわね。体を動かしたかったところなの。あんな話を聞いてしまつて、答えの出せない問題にウジウジ考え込むよりも思い切り動いた方が振り切れると思うから」

ならば、問答は既に無用である。

俺に出来る最大のコミュニケーション方法で、コイツを受け止めるのだ。

シヨリは木刀を下げて、自分の右手側に置いている。そこからすくい上げてくる一撃に、こちら側の芯を当てるようにし、両手をぐつと握り込むと、弾かれた衝撃に度肝を抜かれたようだった。シヨリからすれば岩に打ち込んだかのような錯覚を感じただろう。勁を使った防御法である。出来た隙を逃さず、首めがけての突き。直前で止め、まず一本、と宣告した。

仕切り直し、次は切り下ろしが来る。下からぶつけた刀身を絡めるようにし、跳ね上げるとシヨリの手元から木刀が飛び去った。二本目である。彼女の浮かばせる表情が、驚きから勝利への執着に変わる。

三度目の仕切り直し。シヨリの突きを上から押さえて、足で踏みつけて固定する。首への寸止め、二本目を先取した。

いよいよ彼女に焦りが見えてくる。今度はこちらから。右からの横薙ぎに応じてシヨリは剣を立てるが、俺はそのまま押し込んで左手で彼女の腕を押さえると、柄尻での打突を鳩尾に寸止めする。

「成る程な。お前、刀剣戦闘は全部力任せだったクチだろ。俺みたいに柔らかいタイプとはやり慣れてない。剣の硬さに頼ったスタイルだ」

幸いである。もしコイツがブラインドネスとやりあっていたら、とゾツとする。俺でさえ一矢報いるのがやっとだったのだ。コイツ

のように正直な剣では、今のように百式の変則性に翻弄されていただろう。

言わば、汚さが無いのだ。相手の裏をかく方法を知らない。だからこつもやり込められる。実直で好感は持てるが、だからこそ危険なのだ。

今までは術式兵装の性能があつたかも知れない。オールド・ミスティックという術式に助けられていたかも知れない。だがその地力を、誤魔化す事は出来ていない。

「くう、ここまでいいようにされるなんて」

「やりたい事が透けて見えるぞ。基本は出来ているし技術も問題無い。純粋な戦闘なら申し分ないだろうが、刀剣に限定された戦闘なら、お前は向いてない」

侮辱されたと思つたのだろう、にらみつけられる。慌てて手を振つた。

「お前は相手の意表を突く方法を知らないんだ。正面から正々堂々と、というスタイルは個人的にも好感が持てるが、しかしそれだけで勝てるものじゃない。今までは人外が相手だったから良かったものの、お前、純粋に刀剣を使ってやりあつた人間なんて今までいたか？」

シヨーリは一度俯き、首を振つた。やはり、人間と戦うという事は無かつたようである。それに比べて今までの俺は人外相手ばかりだ。剣術に囚われていて勝てる道理がなかつたのである。敗因はそこにこそあつた。常識に囚われていて、非常識に勝てるものではない。

「俺とお前は似ているな。どこがとは言えないが、そう思う」

「誤魔化さないで。私は汚い手段で勝ちたくなかないわ」

「だが市民を守る為に手段を選べる立場か、お前。確かに目的は過程を正当化しないが、それでも勝たなくてはいけない立場にいるんじゃないのか。戦う事で命を守る、というのはそれだけ重い事だろ。汚名を受ける覚悟あつてのものだろ。」

それが嫌なら、医者になれ。あの職業が完全な善だ」

命を助ける、という事に一点の曇りもない。それこそ皆に感謝される、重要な職業だ。だがその医者さえも守る為に、ウェンズデイとそれに関わる立場の者は戦っている。

「まだ吹っ切れてないみたいだな。続けよう。ゴチャゴチャした理屈は必要ない」

ただ、素直に剣を振ればいい。それだけで俺に伝わってくる。

俺も一度、振り切る必要があるのだ。戦う理由、守る理由、そして、生きる理由というものを。それらを受け止めて、前に進む事の意義を、今一度捉え直さなくてはならないのだ。

俺は何の為に戦っている。何の為に人を殺せる。何の為に、生きていける？

彼女達を守りたい、という理由に縋ってはいけない。それは依存であり逃避だ。

青さを捨てろ。俺個人が戦う意味、殺す意味、生きる意味を、何度でも自分に投げかけろ。迷う事を恐れてはいけない、悩む事こそ人間の性である。

そして、俺はお前に問いを投げたい。

ショーリよ。お前は何の為に戦っている。市民や街を守るでなく、お前個人の意志を聞かせてほしい。

— 善悪の彼岸《Jenseits von Gut und Bose》。いつか俺達が、そこに辿り着く為に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0502w/>

虹の見える場所、空に架かる橋

2011年10月14日23時13分発行